一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７

堂ノ上遺跡

２０１１年3月

国土交通省中国地方整備局
島 根 県 教 育 委 員 会

一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７

堂ノ上遺跡

２０１１年3月

国土交通省中国地方整備局
島 根 県 教 育 委 員 会

序

一般国道９号は、京都府京都市を起点として山口県下関市にいたる主要幹線道路であり、山陰地方の諸都市を結び、沿線各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所においては、益田市内における一般国道９号の交通混雑の緩和、安全・円滑な交通を確保及び萩・石見空港へのアクセス強化を図ることを目的として、益田道路の建設を進めています。
道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の協力のもとに平成 13 年度から発掘調査を行なってきました。

本報告書は、平成 21 年度に実施した堂ノ上遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行なわれていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成 23 年３月

国土交通省中国地方整備局
浜田河川国道事務所
所　　長　　安　達　　久　仁　彦

序

島根県教育委員会では、平成 13 年度より、国土交通省浜田河川工事事務所から委託を受けて一般国道９号（益田道路）建設予定地内の発掘調査を行ってきております。この報告書は、平成 21 年度に調査を実施した、堂ノ上遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

堂ノ上遺跡は、益田平野の東側に広がる久城町の台地に立地しています。この地域には、国指定史跡で、県内最大級の前方後円墳の可能性も指摘される、スクモ塚古墳が存在しており、古くから注目されていたところです。

今回の発掘調査では、弥生時代後期を中心とした住居跡や倉庫跡が多数発見されました。堂ノ上遺跡の周辺では、これまでの発掘調査で弥生時代の水田に伴う水路跡や貼石墓が発見されており、当時の集落景観を知るうえで貴重な資料となりました。

本報告書が、この地域の歴史や文化を明らかにするための基礎資料として活用され、地域の人々が自らの土地の下に眠る埋蔵文化財に興味を持っていただくとともに、郷土への誇りを醸成する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本書の刊行にあたりましては、国土交通省浜田河川国道事務所ならびに益田市、益田市教育委員会、地元の方々をはじめとした関係者の皆様にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

平成 23 年３月

島根県教育委員会

教育長　　今　井　康　雄

例　　言

１．本書は島根県教育委員会が平成 21 年度に実施した、一般国道９号（益田道路建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

２．本書で報告する遺跡は、下記のとおりである。

堂ノ上遺跡　　島根県益田市久城町

３．調査組織は以下のとおりである。

調査主体　島根県教育員会

平成 21 年度

（事　務　局）　川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、山根雅之（同総務 G 課長）

（調査担当者）　丹羽野裕（同調査第 4G 課長）、東森　晋（同文化財保護主任）

佐々木誠（同兼文化財保護主任）、渡辺　聡（同補助員）

平成 22 年度

（事　務　局）　川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、山根雅之（同総務 G 課長）

（調査担当者）　東森　晋（同文化財保護主任）、佐々木誠（同兼文化財保護主任）

４．発掘調査作業（発掘作業員、機械による掘削、測量等）については、㈱大畑建設に委託して行った。

５．現地調査及び整理作業において、以下の方々に調査指導いただいた。

田中義昭（島根大学名誉教授）、田畑直之（山口大学助教）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館特別学芸顧問）

６．現地調査及び報告書の作成に際しては、以下の機関、方々にご協力、ご助言いただいた。

益田市教育委員会、NPO 久城伝承文化顕彰会、益田市久城地区各自治会、島根県立益田翔陽高校、森脇義男、家田淳一

７．挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系の X 軸方向を指し、座標系の XY 座標は、世界測地系による。レベル高は海抜を示す。

８．図２は、国土地理院発行の 1/25,000（益田・石見横田）を使用した。

９．本文、図版中に用いた遺構の略号は以下のとおりである。

SA：柱列　SB：掘立柱建物　SD：溝状遺構　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　SX：性格不明遺構

10. 本書の執筆は、担当職員が協議分担して行い、文責は目次に記した。

11. 本書の編集は、各担当者と協議のうえ、東森が行った。

12. 本書に掲載した写真は、調査員が撮影した。

13. 本書に掲載した実測図作成およびトレース･デジタルトレースは、調査員、調査補助員のほか、仁島ゆかり、福田敦之が行った。

14. 本書の編集に当っては DTP 方式を採用し、ソフトは adobe 社　InDesign CS4、Photoshop CS4、Illustrator CS4 を用いて編集作業を行った。

15. 本書掲載の出土遺物や、図面、写真等の記録保存資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33 番地）で保管している。

凡　　例

１．本文中の文献番号は、本文 144 項の参考文献の番号と一致する。

２．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、陶器は断面網掛けにしている。金属器と石器は断面に斜線を入れ、それ以外は白抜きにした。

３．本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。

４．本書で用いた土器・鉄製品の分類及び編年観は基本的に下記の各論文・報告書に依拠している。

(1) 弥生土器

松本岩雄　「石見地域」『弥生土器の様式と編年　－山陰・山陽編－』　木耳社　1992 年

田畑直彦　「周防・長門における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究ＸＸＶ』　庄内式土器研究会　2001 年

田畑直彦　「響灘沿岸の弥生土器」『第 11 回土井ヶ浜シンポジウム発表資料』　2006 年

島根県教育委員会　『堂ノ上遺跡　一般県道久城インター線久城工区地域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　2010 年

(2) 土師器

島根県教育委員会　『久城東遺跡・若葉台遺跡・久代西Ⅰ遺跡・久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』　2010 年

(3) 須恵器

島根県教育委員会　「大溢遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』　1992 年

島根県教育委員会　「久本奥窯跡」『一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』　1995 年

大谷晃二　「原始・古代の石見」『八雲立つ風土記の丘　№147・148・149 合併号』　八雲立つ風土記の丘　1998 年

(4) 陶磁器

太宰府市教育委員会　『太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』　2000 年

大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『北海道から沖縄まで　国内出土の肥前陶磁器』　佐賀県立九州陶磁文化館　1974 年

岩崎仁志　「山陽西部における中世の土製煮炊具－周防・長門を中心に－」『中世土器の基礎的研究』21　日本中世土器研究会　2007 年

(8) 鉄器

千賀　久・村上恭通　『考古資料大観　第７巻　弥生・古墳時代　鉄・金銅製品』　小学館　2003 年

本文目次

第１章　調査に至る経緯　……（丹羽野）1

第２章　位置と環境　……（丹羽野・東森）3
　第１節　遺跡の位置と地理的環境　3
　第２節　歴史的環境　3

第３章　調査の結果　……（東森）8
　第１節　発掘調査の経過と概要　8
　第２節　縄文時代の遺物　13
　第３節　弥生時代の遺構と遺物　14
　第４節　古墳時代の遺構と遺物　86
　第５節　奈良時代の遺物　97
　第６節　中世以降の遺構と遺物　98
　第７節　その他の遺構と遺物　117

第４章　自然科学的分析　……122
　第１節　堂ノ上遺跡で検出した遺構から出土した炭化材の分析　（渡辺）122
　第２節　堂ノ上遺跡で検出した遺構から出土した種実の分析　（渡辺）126
　第３節　堂ノ上遺跡で出土した土器に付着した赤色顔料について　（柴崎）132

第５章　総括　……（東森）136
　第１節　堂ノ上遺跡における人々の活動　136
　第２節　堂ノ上遺跡の弥生集落　138
　第３節　調査のまとめ　144

表目次

第 1 表　縄文時代出土遺物観察表 ……13
第 2 表　SI15 出土遺物観察表 …… 16
第 3 表　SI13 出土遺物観察表 ……24
第 4 表　SI06 出土遺物観察表 …… 28
第 5 表　SI10 出土遺物観察表 …… 36
第 6 表　SI09、SD42 出土遺物観察表 ……38
第 7 表　SI08、SD37 出土遺物観察表 ……39
第 8 表　SI12、SD109 出土遺物観察表 ……43
第 9 表　SI16 出土遺物観察表 ……55
第 10 表　SD95 出土遺物観察表 ……58
第 11 表　SD106・107 出土遺物観察表 ……59
第 12 表　SI07 出土遺物観察表 ……63
第 13 表　SI14 出土遺物観察表 ……67
第 14 表　SB11 出土遺物観察表 ……73
第 15 表　SK40 出土遺物観察表 ……76
第 16 表　SR01 出土遺物観察表 ……77
第 17 表　SR03、東区谷部出土遺物観察表 ……80
第 18 表　SD87 出土遺物観察表 ……81
第 19 表　J6 グリッド出土遺物観察表 ……81
第 20 表　遺構外出土弥生時代の遺物観察表 ……85
第 21 表　SB04（P384）出土遺物観察表 ……87
第 22 表　1 号墳、SD112、集石 1 出土遺物観察表 ……92
第 23 表　遺構外出土古墳時代の遺物観察表 ……94
第 24 表　奈良時代出土遺物観察表 …… 97
第 25 表　SB13 出土遺物観察表 ……101
第 26 表　SK01 ～ 03・11 出土遺物観察表 ……106
第 27 表　SK36 出土遺物観察表 ……108
第 28 表　SK15、SD94 出土遺物観察表 ……109
第 29 表　近世以降の区画 SD46・48・49・70 出土遺物観察表 ……112
第 30 表　集石 1 出土遺物観察表 …… 112
第 31 表　P1044 出土遺物観察表 ……113
第 32 表　中世以降の出土遺物観察表 ……114
第 33 表　段状遺構 9・10 出土遺物観察表 ……119
第 34 表　D10 グリッドピット群、SX02・03 出土遺物観察表 ……121

挿図目次

図 1.　堂ノ上遺跡の位置 ……1
図 2.　堂ノ上遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 ……4
図 3.　久城台地の地形と遺跡分布 ……6
図 4.　堂ノ上遺跡　調査区位置図 ……10
図 5.　堂ノ上遺跡　平成 21 年度調査区全体図 ……11・12
図 6.　縄文時代の石器出土状況図 ……13
図 7.　縄文時代石器実測図 ……13
図 8.　SI15 実測図 ……14
図 9.　SI15 遺物出土状況図 ……16
図 10.　SI15 出土遺物実測図 ……17
図 11.　SI13 実測図 ……19
図 12.　SI13 炭化材・焼土実測図 ……20
図 13.　SI13 遺物出土状況図 ……21
図 14.　SI13 出土遺物実測図 (1) ……22
図 15.　SI13 出土遺物実測図 (2) ……23
図 16.　SI06 実測図 ……25
図 17.　SI06 遺物出土状況図 ……26
図 18.　SI06、SD30 出土遺物実測図 ……27
図 19.　SI10 実測図 (1) ……30
図 20.　SI10 実測図 (2) ……31
図 21.　SI10 遺物出土状況図 ……33
図 22.　SI10 出土遺物実測図 (1) ……34
図 23.　SI10 出土遺物実測図 (2) ……35
図 24.　SI09 実測図 ……37
図 25.　SI09、SD43 出土遺物実測図 ……38
図 26.　SI08 実測図 (1) ……40
図 27.　SI08 実測図 (2) ……41
図 28.　SI08　P331 実測図 ……41
図 29.　SI08、SD37 出土遺物実測図 ……41
図 30.　SI12、SD109 出土遺物実測図 ……43
図 31.　SI12 実測図 (1) ……44
図 32.　SI12 実測図 (2) ……45・46
図 33.　SI16 実測図 (1) ……49・50
図 34.　SI16 実測図 (2) ……51
図 35.　SI16、SD95・106・107 遺物出土状況図 ……53・54
図 36.　SI16 出土遺物実測図 (1)（床面付近出土） ……56
図 37.　SI16 出土遺物実測図 (2)（覆土中出土） ……57
図 38.　SD95 出土遺物実測図 ……58
図 39.　SD106・107 出土遺物実測図 (1) ……60
図 40.　SD106・107 出土遺物実測図 (2) ……61
図 41.　SI07 実測図 ……62
図 42.　SI07 出土遺物実測図 ……63
図 43.　SI14 実測図 ……65
図 44.　SI14 遺物出土状況図 ……66
図 45.　SI14 出土遺物実測図 (1)（床面付近出土） ……68
図 46.　SI14 出土遺物実測図 (2)（覆土中出土） ……69
図 47.　SI11 実測図 ……70
図 48.　SB09・10・16 実測図 ……71
図 49.　SB11 実測図 ……73
図 50.　SB11 出土遺物実測図 ……73
図 51.　SB08 実測図 ……74
図 52.　SK40 実測図 ……75
図 53.　SK40 出土遺物実測図 ……76
図 54.　SR01 出土遺物実測図 ……77
図 55.　SR01 実測図 ……77
図 56.　東区谷部実測図 (1) ……78
図 57.　東区谷部実測図 (2) ……79
図 58.　SR03、東区谷部出土遺物実測図 ……80
図 59.　SD87 出土遺物実測図 ……81
図 60.　SD87、J6 グリッド遺物出土状況図 ……82
図 61.　J6 グリッド出土遺物実測図 ……83

図 62.　遺構外弥生時代の遺物出土状況図 ……84
図 63.　遺構外出土弥生時代の遺物実測図 ……85
図 64.　SB04 実測図 ……86
図 65.　SB04　P384 出土遺物実測図 ……87
図 66.　1 号墳実測図 ……89・90
図 67.　1 号墳遺物出土状況図 ……91
図 68.　1 号墳、SD112、集石 1 出土遺物実測図 ……93
図 69.　遺構外古墳時代の遺物出土状況図 ……95
図 70.　遺構外出土古墳時代の遺物実測図 ……96
図 71.　奈良時代の遺物実測図 ……97
図 72.　奈良時代の遺物出土状況図 ……97
図 73.　SB03 実測図 ……98
図 74.　SB07・13・14、SA01 実測図 ……100
図 75.　SB13 出土遺物実測図 ……101
図 76.　SB15 実測図 ……101
図 77.　SA02 実測図 ……102
図 78.　堂ノ上遺跡　古墓配置図 ……103
図 79.　SK01 ～ 05 実測図 ……104
図 80.　SK06・07・11 ～ 13 実測図 ……105
図 81.　SK01 ～ 03・11 出土遺物実測図 ……107
図 82.　SK14・SD85・86 実測図 ……108
図 83.　SK36 出土遺物実測図 ……108
図 84.　SK15・SD94 実測図 ……109
図 85.　SK15・SD94 出土遺物実測図 ……110
図 86.　近世以降の区画溝実測図 ……111
図 87.　SD46・48・49・70 出土遺物実測図 ……112
図 88.　集石 1 実測図 ……112
図 89.　集石 1 出土遺物実測図 ……112
図 90.　P1044 出土遺物実測図 ……113
図 91.　中世以降の遺物出土状況図 ……113
図 92.　中世以降の出土遺物実測図 (1) ……115
図 93.　中世以降の出土遺物実測図 (2) ……116
図 94.　SD47 実測図 ……117
図 95.　SD52、段状遺構 8 実測図 ……118
図 96.　段状遺構 9・10 実測図 ……119
図 97.　段状遺構 9・10 出土遺物実測図 ……119
図 98.　D10 グリッド　ピット群、SX02・03 実測図 ……120
図 99.　D10 グリッド　ピット群、SX02・03 出土遺物実測図 ……121
図 100. 堂ノ上遺跡と周辺の遺跡で検出された各時代の遺構 ……136
図 101. 堂ノ上遺跡の弥生時代集落の変遷 ……138
図 102. 堂ノ上遺跡の竪穴住居跡と出土遺物 (1) ……140
図 103. 堂ノ上遺跡の竪穴住居跡と出土遺物 (2) ……141
図 104. 堂ノ上遺跡で検出された焼失住居跡 ……142

図版目次

図版１　　堂ノ上遺跡　全景（各調査区の合成）
図版２　　堂ノ上遺跡　東区（北東から）
図版３　上　堂ノ上遺跡　西区全景（北から）
　　下　堂ノ上遺跡　西区全景（西から）
図版４　上　堂ノ上遺跡　東区全景（南東から）
　　下　堂ノ上遺跡　東区全（南西から）
図版５　上　SI13　炭化材・焼土検出状況（南西から）
　　下　SI13　床面検出状況（南西から）
図版６　上　SI13　床上炭化材検出状況（東から）
　　下　SI13　西壁部分（北から）
図版７　上　SI13　北側壁体溝内弥生土器 (14-4) 出土状況
　　下　SI13　西側壁体溝内弥生土器 (15-5) 出土状況
図版８　上左　SI13、SD103　土層断面
　　上右　SI13　P1065　柱穴堀方と柱抜き取り痕
　　中　SB04　P384　遺物・炭・焼土検出状況（北西から）
　　下左　１号墳出土金属器
　　下右　集石１出土ガラス玉
図版９　上　堂ノ上遺跡遠景（南から）
　　下　堂ノ上遺跡東区調査前（西から）
図版 10　上　SI15　（南から）
　　下　SI15　（東から）
図版 11　上　SI15　壁体溝（南東から）
　　下　P1040 内　壺 (10-1) 出土状況
図版 12　上　SI13　検出状況（北西から）
　　下　SI13　炭化材・焼土検出状況（北西から）
図版 13　上　SI13　南東壁面ピット検出状況（北から）
　　下　SI13　完掘後（北西から）
図版 14　上　SI13 南側　弥生土器 (15-3・7・9・10) 出土状況
　　中左　SI13　P923
　　中右　SI13　P1064
　　下左　SI13　P1134（中央ピット）
　　下右　SD103　横断土層
図版 15　上　SI06、SD30・31　検出状況（東から）
　　下　SI06、SD30・31（東から）
図版 16　上　SI06　完掘後（北から）
　　下　SI06　土層断面（東から）
図版 17　上　SI06　P425　炭・焼土塊検出状況
　　中　SD30　調査区南壁付近（北から）
　　下　SD30　調査区西壁土層断面
図版 18　上　SI10　検出状況（南から）
　　下　SI10　床面検出状況（北東から）
図版 19　上　SI10、SB06・12、SD66（北東から）
　　下　SI10、SB06・12、SD66（東から）
図版 20　上　SI10A　南側土層断面（西から）
　　下　SI10　西側壁体溝（北から）
図版 21　上　SI10B　東側壁体溝土層断面（北から）
　　中　SI10B　遺物出土状況
　　下　SI10B　北側壁体溝内の石
図版 22　上　SI10A　P562 検出状況（東から）
　　下　SI10A　遺物出土状況（北東から）
図版 23　１段左　SI10A　P483　土層断面
　　１段右　SI10A　P495　土層断面
　　２段左　SI10A　P552　土層断面
　　２段右　SI10B　P488　土層断面
　　３段左　SI10　P493（右）と SB06　P485（左）
　　３段右　SB06　P502　土層断面
　　４段左　SB12　P566　土層断面
　　４段右　P565　土層断面
図版 24　上　SI09　検出状況（北西から）
　　下　SI09、SD42　（北から）

図版 25　上　SI08　（東から）
　　下　SI08　（南西から）
図版 26　上　SI08　南西側壁体溝（南東から）
　　下　SI08　P331（中央ピット）検出状況
図版 27　上　SI08　P384
　　中　SD37　南側
　　下　SD37　北側土層断面
図版 28　上　SI12　検出状況（北から）
　　下　SI12　（南東から）
図版 29　1段左　SI12　P775
　　1段右　SI12　P807
　　2段左　SI12　P817
　　2段右　SI12　P1018
　　3段左　SI12　P1058（中央ピット）
　　4段左　SD109 弥生土器 (30-8) 出土状況（北から）
　　4段右　SD108・109（北西から）
図版 30　上　SI16　検出状況（東から）
　　下　SI16　床面検出状況（北から）
図版 31　上　SI16　（東から）
　　下　SI16　（北から）
図版 32　上　SI16A　壁体溝内遺物出土状況（北から）
　　下　SI16A　石器・軽石出土状況（南東から）
図版 33　上　SI16　南西側土層断面（南東から）
　　中左　P962　土層断面
　　中右　SI16A・C　壁体溝土層（東から）
　　下左　SI16C　西側壁体溝土層断面（北東から）
　　下右　SD106　土層断面及び遺物出土状況（東から）
図版 34　上　SD105　（北東から）
　　下　SD105　壁面の溝と床面小ピット（東から）
図版 35　上　SD95　検出状況（北西から）
　　下　SD107　遺物出土状況（東から）
図版 36　上　SI07　（南東から）
　　下　SI07　壁体溝内遺物出土状況（南東から）
図版 37　上　SI07　壁体溝
　　中　P393　土層断面
　　下　P396　土層断面
図版 38　上　SI14　検出状況（北西から）
　　下　SI14　完掘後（北西から）
図版 39　上　SI14　南側土層断面（北西から）
　　中　SI14　東側土層断面（北東から）
　　下　SI14　床面検出状況（北西から）
図版 40　上　SI14　中央ピット土層断面（北東から）
　　下　SI14　中央ピットと SD100（北西から）
図版 41　上　SI14　西側床面遺物出土状況（北から）
　　中　SI14　北側壁体溝内高杯 (45-14) 出土状況（西から）
　　下　SI14　中央ピット南西側の砂利の面
図版 42　上　SI11、段状遺構８検出状況（北から）
　　下　SI11　（北から）
図版 43　上　SI11　P451
　　中　SI11　P453
　　下　SI11　P447　土層断面および遺物出土状況
図版 44　上　SB08　南柱列と SD93（西から）
　　下　SB08　南柱列掘完掘後（北東から）
図版 45　上　SB08　P988　土層断面（北西から）
　　中　SB08　P989
　　下　SB08　P828
図版 46　上　SK40　検出状況（北から）
　　下　SK40　東西土層断面（北から）
図版 47　上　SK40　床面検出状況（西から）
　　下　SK40　床面検出状況（北東から）
図版 48　上　SR01　（北から）
　　下　SR01　（南から）
図版 49　上　SR03　土層断面（北西から）
　　下　SR03　上層で出土した石

図版 50　上　SB04 （北から）
　　下左　P384　検出状況（北西から）
　　下右　SD44　土層断面
図版 51　上　１号墳　全景（西から）
　　下　１号墳　横穴式石室（北から）
図版 52　上　１号墳　石室内遺物出土状況（南から）
　　下　１号墳　石室内遺物出土状況（北西から）
図版 53　上　１号墳　遺物出土状況
　　下　１号墳　刀子 (68-11) 出土状況（西から）
図版 54　上　１号墳　石室掘方及び基底部石材抜き取り痕
　　中　１号墳　石室掘方及び基底部石材抜き取り痕
　　下　１号墳　土層断面（南西から）
図版 55　上　SB03 （北西から）
　　下　SB03　現地説明会風景
図版 56　上　SB07・13・14、SA01、SK1 ～３　検出状況（北東から）
　　下　SB07・13・14、SA01、SK1 ～３　完掘後（北東から）
図版 57　上　SK02　遺物出土状況（西から）
　　中　SK02　桶底・人骨出土状況（西から）
　　下　SK4・5　土層断面（西から）
図版 58　上　SK11 （北西から）
　　下　SK15 （西から）
図版 59　上　SK12 （北から）
　　中　SK13 （北から）
　　下　SK36　遺物出土状況
図版 60　上　SD49・51　検出状況（東から）
　　下　SD49・51　完掘後（西から）
図版 61　上　SD77　検出状況（南西から）
　　中　集石１（北西から）
　　下　P1044 内　陶器壺 (90-1・2) 出土状況
図版 62　上　SD47　土層断面（北から）
　　中　SD52　検出状況（南東から）
　　下　SD52　土層断面（南東から）
図版 63　上　SD87　土層断面（南西から）
　　中　段状遺構８　土層断面（東から）
　　下　段状遺構９　土層断面（東から）
図版 64　上　段状遺構 10　検出状況（西から）
　　中　段状遺構 10　土層断面（東から）
　　下　段状遺構 10　完掘後（南東から）
図版 65　上　J6・7 グリッド　調査区南壁土層断面（北西から）
　　中　東区谷部　トレンチ内土層（南西から）
　　下　H7・I7 グリッド　遺構検出状況（南西から）
図版 66　上　D10 グリッド　ピット群と SX02・03（北西から）
　　下　D10 グリッド　ピット群と SX02・03　検出状況（西から）
図版 67　上　SX02 （北から）
　　中　SX02　弥生土器 (99-5) 出土状況
　　下　P342 内　瓦質土器 (99-2) 出土状況
図版 68　　SI15 出土弥生土器
図版 69　　SI13 出土遺物 (1)
図版 70　　SI13 出土遺物 (2)
図版 71　上　SI06 出土遺物
　　下　SI06、遺構外出土石器
図版 72　　SI10 出土弥生土器 (1)
図版 73　　SI10 出土弥生土器 (2)
図版 74　　SI10 出土弥生土器 (3)
図版 75　上　SI10 出土弥生土器 (4)
　　下　SI10 出土石器
図版 76　　SI16 床面出土弥生土器・石器・軽石
図版 77　　SI16 埋土出土弥生土器
図版 78　　SD95・106・107 出土遺物
図版 79　　SD106・107 出土遺物
図版 80　上　SI07・08、SD37、SR01 出土弥生土器
　　下　SI09、SD42、SB11 出土遺物
図版 81　上　SI12、SD109 出土弥生土器
　　下　SK40 出土遺物

図版 82　SX02・03 出土遺物
図版 83　J6 グリッド出土弥生土器・石器
図版 84　東区谷部、遺構外出土弥生土器・石器
図版 85　SI14 出土遺物
図版 86　上　SI14 床面出土遺物 (1)
　下　SI14 床面出土遺物 (2)
図版 87　上　SI14 埋土出土遺物 (1)
　下　SI14 埋土出土遺物 (2)
図版 88　上　SB04 出土遺物
　下　段状遺構 9・10 出土遺物
図版 89　１号墳出土須恵器
図版 90　上　SR03 上層出土須恵器
　中　SD112 出土須恵器
　下左　J6 グリッド出土土師器
　下右　J3 グリッド出土須恵器
図版 91　遺構外出土土師器
図版 92　堂ノ上遺跡出土須恵器
図版 93　SK01・02・03・11 出土遺物
図版 94　上　SK15 出土遺物
　下　SB07、SK15、SD46・48・49・70、集石 1 出土遺物
図版 95　上　SK36 出土遺物
　中左　SD48 出土石器
　中右　P1044 出土陶器
　下　中世以降の硯・砥石
図版 96　陶器・土器・瓦質土器
図版 97　磁器・古銭
図版 98　堂ノ上遺跡出土鉄器

第１章　調査に至る経緯

１．取り巻く情勢と事業の計画

一般国道９号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約 670km の山陰地方の諸都市を結ぶ唯一の幹線道路である。しかし近年は、都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生している。このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は益田市においても例外ではない。さらに益田市においては、一般国道９号と一般国道 191 号が、市内中心部で交差するという地理的要因もあって、交通混雑が慢性的に発生し、都市機能に支障をきたし始めていた。

こうした状況の下、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するために、平成８年度に建設省（現国土交通省）により、益田道路（延長 7.8km、益田市遠田町～益田市須子町）の建設が計画、事業化されることとなった。

2. 文化財保護側との調整

この計画・事業化にあたり、建設省から島根県教育委員会に対して、益田道路建設予定地内の遺跡の存否について、照会があった。これを受けて島根県教育委員会では、益田市教育委員会の協力の下、平成 10 年度に予定地内における遺跡の分布調査を実施した。

分布調査は、平成 11 年３月に行い、その結果、27 か所の調査対象地（最終的にはルート確定により、計画地から外れるものを含んでいたため、24 か所となった）を確認し、建設省に回答している。

３．法的手続き

以後この結果をうけて、建設省と島根県教育委員会の間で適時協議が行われ、予定地内の埋蔵文化財の調査について、具体的に検討が行われた。協議の経過の中で、平成 11 年 11 月 25 日付、建中浜第 1241 号で、文化財保護法第 57 条の３（現第 94 条）第１項の規定による通知が文化庁長官あて提出された。それに対して、平成 12 年３月 31 日付、島教文財第４号の 37 で、島根県教育委員会教育長から 24 遺跡の記録保存のための発掘調査の実施が勧告されている。

その後工程上の協議を経たうえで、平成 13 年度から予定地内の本発掘調査を開始することとな

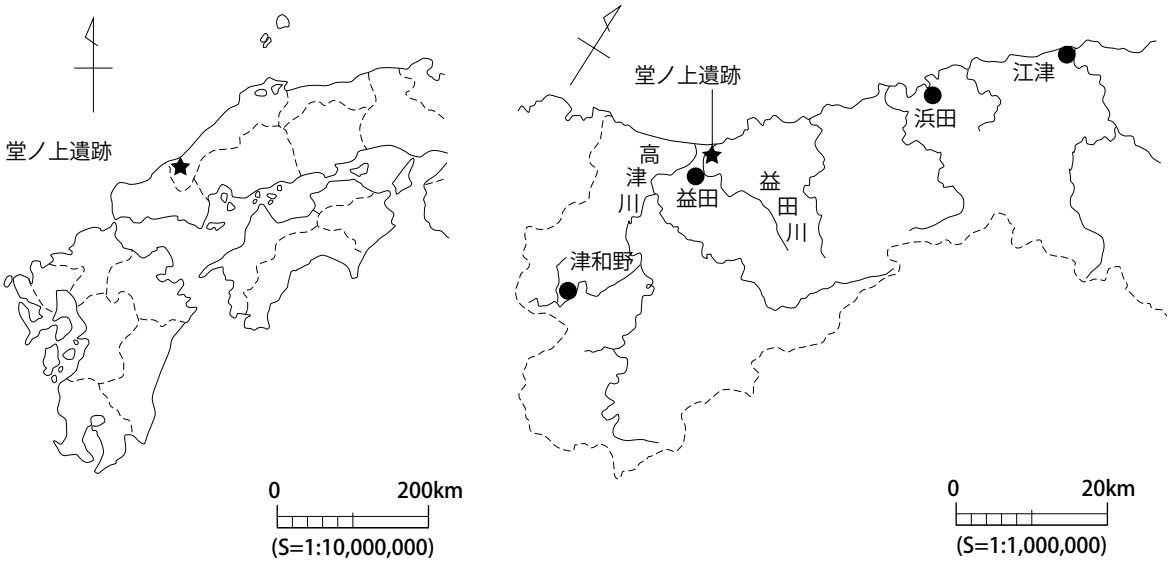


図 1.　　堂ノ上遺跡の位置

り、まずは予定地の西側から着手をすることとなった。

4. 調査の年次的経過と事業計画の変更への対応

平成 13 年から、まずは事業予定地の西端に当たる飯田町の丘陵上 8 遺跡の調査を実施、平成 14 年からは高津町の平野に位置する浜寄・地方遺跡の調査を開始し、平成 16 年に終了した。

この間、バイパス機能の早期実現を目指し、国・県で調整が進められ、益田平野を横断する高津インターチェンジから久城インターチェンジまでの間は、平行して走る県道久城インター線を優先的に施工することとなったが、実態としては本道部分に先行して残土が盛られるなど、事実上施工が進むことから、本道部分も予定通り調査を実施していくこととなった。一方開通を急ぐこととなったインター線部分の調査については、受益が当該市町に偏るという事情もあって、県と市町が協力して行うのが通例であった。当面県では本道部分の調査に追われていたため、インター線部分については平成 16 年から益田市教育委員会が調査を実施している。

平成 16 年度からは益田川の東岸に調査の中心が移って行き、平成 16 ～ 17 年度まで沖手遺跡の調査を実施している。益田市教育委員会も同じ平成 16 年～ 18 年度に、沖手遺跡の県道久城インター線部分の発掘調査を行っている。

平成 18 年度からは久城町の丘陵、段丘上の発掘調査にも着手、県教委では専光寺脇遺跡と久城西Ⅰ遺跡の一部、原浜遺跡の一部の本発掘調査を実施している。平成 19 年からは、久城町の丘陵・台地上の調査に本格的に着手、21 年度までに原浜遺跡、久城西Ⅰ遺跡、久城西Ⅱ遺跡、若葉台遺跡、堂ノ上遺跡の本発掘調査をほぼ完了している。合わせて久城インター線部分は平成 19、20 年度には堂ノ上遺跡を県教委が、久城東遺跡を市教委が受託して実施、終了した。

平成 21 年 12 月 18 日をもって、益田道路及び県道久城インター線にかかわる本発掘調査は一部を残して完了し、平成 22 年 3 月 27 日には、益田市遠田町～益田市須子町間が暫定供用を開始した。

平成 23 年現在の益田道路

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

本報告書に掲載した堂ノ上遺跡は島根県益田市久城町に属し、益田川右岸に広がる標高 30m 前後の段丘上に所在する。

益田市は島根県西部（石見地方）の西端に位置している。北は日本海に面し、西は山口県境と、南側の山間部は広島県境と接している。交通の面ではＪＲ山陰本線と山口線が分岐し、国道９号と 191 号が交差する要衝となっている。このような地理的位置により、古くから山口県・広島県との結びつきが強く、文化・風土・民俗の面でも島根県東部（出雲地方）とは異なった様相を示している。

益田市の地形は、北側の平野部（益田平野）とそれを取り囲む周辺の丘陵部・山間部からなっている。益田平野は、中国山地から北流して日本海に注ぐ２つの河川、益田川と高津川の沖積作用によって形成された複合三角州で、石見地方では最も広い平野である。古地理学的な研究によれば、約 6,000 年前に「古益田湖」と呼ばれる潟湖が形成されたが、両河川の堆積作用により徐々に陸地化し、江戸時代中期以降は「古益田湖」はほぼ消滅したと考えられている。益田平野の周辺部には、中国山地が海岸部へ向かって派生していく支脈に相当する丘陵地帯が広がっており、堂ノ上遺跡ほか益田道路・県道久城インター線事業に伴って発掘調査した遺跡は、その先端部に所在する。

第２節　歴史的環境

益田市は石見地方の中でも数多くの遺跡が存在する地域である。益田平野の東方、益田川右岸に位置する久城地区から遠田地区にかけては、国指定史跡となっているスクモ塚古墳や石見地方最大の前方後円墳である大元一号墳など、著名な遺跡も多い。

以下、時代を追って歴史的環境について触れておきたい。

旧石器時代・縄文時代

久城西Ⅱ遺跡では、後期旧石器時代末期～縄文時代草創期の尖頭器が出土、その南西部に位置する堂ノ上遺跡でも縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土しており、この地域での人類活動が１万年以上前まで遡ることが知られる。

若葉台遺跡では縄文時代中期頃のものとみられる落とし穴が確認された。また益田川右岸の河口近くにある沖手遺跡で丸木舟が２艘出土しており、縄文時代後期末～晩期初頭頃のものと推測されている。この時期に、「古益田湖」が次第に埋まり、この付近が水際になっていたことが知られる。

弥生時代

沖手遺跡では、弥生時代中期に水路とみられる溝が検出されており、陸化された沖積地が次第に水田開発されていく様子が知られる。段丘上では、専光寺脇遺跡において弥生時代中期後半頃とみられる方形貼石墓などが確認されている。また堂ノ上遺跡、久城東遺跡では中期末頃の竪穴住居跡が検出され、中期頃がこの地域の開発の起点となっていることが分かる。

1 堂ノ上遺跡
2 若葉台遺跡　3 久城西Ⅰ遺跡　4 久城西Ⅱ遺跡　5 原浜遺跡　6 大元古墳群　7 木原古墳　8 朶ヶ迫窯跡
9 本片子窯跡　10 大道古墳群　11 鵜ノ鼻古墳群　12 小池古墳群　13 高浜古墳群　14 井元遺跡
15 スクモ塚古墳　16 妙福寺跡　17 櫛代賀姫神社　18 真如坊跡　19 安福寺跡　20 福王寺石造十三重塔
21 中須西原遺跡　22 久城東遺跡　23 専光寺脇遺跡　24 沖手遺跡　25 専福寺遺跡　26 平田遺跡
27 浜寄・地方遺跡　28 長者原遺跡　29 松ヶ丘遺跡　30 サガリ遺跡　31 廿子Ⅲ遺跡　32 廿子Ⅰ遺跡
33 研石遺跡　34 高津城跡　35 須子遺跡　36 大谷土居跡　37 南長迫横穴群　38 日赤裏横穴群
39 北長迫横穴群　40 日赤敷地遺跡　41 中世今市船着場　42 小丸山古墳　43 四塚山古墳群
44 叶屋上山古墳群　45 三宅御土居館跡　46 土井後遺跡　47 万福寺　48 片山横穴群　49 秋葉山古墳群
50 勝達寺跡　51 七尾城跡　52 医光寺　53 大谷土居跡

図 2.　堂ノ上遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

また堂ノ上・久城東・久城西Ⅰ・原浜遺跡で弥生時代の竪穴住居跡等が見つかり、引き続き生活の場だったことが知られる。一方、高津川左岸の丘陵部にあるサガリ遺跡・廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡でも、弥生時代の竪穴住居跡が見つかっている。同じく浜寄・地方遺跡では中期以前の水田跡が発掘され、この地域における稲作の伝播を考える上で注目される。

古墳時代

益田平野東側の地域は、石見地方の中でも数多くの古墳が存在しており、しかも前期から後期を通じて継続的に築造されている点で特徴的である。

前期古墳としては、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳群が久城地区に隣接する下本郷地区にある。また、全長 88 mの前方後円墳である大元 1 号墳が同じく隣接する遠田地区にある。中期古墳としては、久城地区の段丘上にスクモ塚古墳が築造されている。これは埴輪列や葺石を伴い二段築成の墳丘を持つもので、墳形は墳長 57 mの造り出し付き円墳という見方が有力であるが、墳長約 100 mの前方後円墳となる可能性も指摘されている。後期になると、墳長 49 mの前方後円墳で、周囲に壕や外堤を伴う小丸山古墳（6 世紀前半）が下本郷地区にあり、4 基の前方後円墳を含む 50 基以上の古墳で構成された鵜ノ鼻古墳群が遠田地区にある。今回調査を行った久代地区では、そのほかに、詳しい時期は不明だが切石の箱式石棺が確認された小池古墳群や、前方後円墳の可能性のある金山古墳が知られており、高浜古墳群、迫ノ谷古墳群、堂ノ上遺跡などで後期古墳が確認されている。また、北長迫横穴墓群や南長迫横穴墓群、片山横穴墓群など、益田平野南東部の丘陵を中心に横穴墓が造られている。

集落跡は、堂ノ上遺跡で古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されている。若葉台・久城西Ⅰ遺跡では 5 世紀から 6 世紀に至る集落跡が検出され、スクモ塚古墳をはじめとする有力古墳群が築造された背景が明らかになりつつある。一方、高津川左岸の浜寄・地方遺跡でも、古墳時代前期の建物跡が確認され、前期から中期にかけての遺物が多数出土している。

古代

石見国の成立後、その国府は現在の浜田市に置かれたといわれている。益田市内では長い間、目立った奈良時代の遺跡は知られていなかったが、近年高津川をさかのぼった安富町の中小路遺跡で、規則正しく配置された建物群が検出され、久城東遺跡でも相当規模の集落があったことが分かってきた。遠田町の本片子窯跡では、7 世紀から 8 世紀の須恵器が焼かれると同時に、瓦も焼成されており、近辺に寺院もしくは官衙があった可能性が高い。また、久代地区には、式内社である櫛代賀姫神社がある。

中世

平安時代末期に石見国府から移った益田氏が、七尾城・三宅御土居を拠点にし、中世益田を支配する。

益田川の下流域においては、沖手遺跡で平安時代末～近世前半にかけて大規模な集落が営まれており、貿易陶磁などが多数出土している。また、中須西原・中須東原遺跡は中世後半を中心とする集落遺跡で、船着場跡とみられる礫敷き遺構や鍛冶関連遺構などが検出された。これらの遺跡から、益田川下流域が中世の交易・流通に密接に関わる地域であったことが伺われる。

戦国期には、少し遡った益田川支流の今市川沿いに今市船着場が成立し、益田氏の貿易港や市

図 3.　久城台地の地形と遺跡分布

場として機能したと考えられている。

高津川左岸の浜寄地方遺跡でも中世の遺物が出土しており、このうち木造仏手は平安時代末～鎌倉時代のもので、この地における仏師の活動を示すものとして注目される。

近世・近代

益田氏は関ヶ原の戦いに毛利氏に属して西軍側に加わったため、敗戦後に毛利氏が萩へ移封されたのに伴って、長門国須佐へ移ることとなった。その後の益田は高津川を境に、東部が浜田藩、西部が津和野藩に分かれて治められ、商業都市として発展している。また、近世以降は窯業が盛んに行われ、仁右ヱ門山遺跡や相生遺跡など石見焼の窯跡が多く存在し、磁器を焼いた白上焼の窯跡も知られている。今回の調査地の久城町周辺も、近代には数多くの瓦工場があり、粘土が盛んに採掘されたことが知られる。

参考文献

矢富熊一郎 『益田町史　上巻』 益田公民館　1952 年

益田市誌編纂委員会 『益田市誌』上巻　1975 年

島根県教育委員会 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992 年

島根県教育委員会 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』 2002 年

島根県教育委員会 『廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』 2006 年

島根県教育委員会 『浜寄・地方遺跡　－１Ａ・１Ｂ・１Ｃ・１Ｄ・１Ｆ・２Ａ・２Ｃ・２Ｆ・２Ｇ区の調査－　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』 2006 年

島根県教育委員会 『沖手遺跡－１区の調査－　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３』 2007 年

島根県教育委員会 『浜寄･地方遺跡　－１Ｈ･１Ｉ･２Ｂ･２Ｄ･２Ｅ･２Ａ各区の調査－　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書４』 2007 年

島根県教育委員会 『大垣大塚古墳（附編　スクモ塚古墳）－島根県古代文化センター調査研究報告 40』 2008 年

島根県教育委員会 『沖手遺跡・専光寺遺跡　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５』 2009 年

島根県教育委員会 『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書６』 2010 年

島根県教育委員会 『堂ノ上遺跡　一般県道久城インター線久城工区地域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 2010 年

林　正久 「益田平野の成り立ちと沖手遺跡」『沖手遺跡 -1 区の調査成果 -』 島根県教育委員会　2006 年

増野晋次 「益田・鵜ノ鼻古墳群について」『松江考古』第９号　松江考古学談話会　2001 年

益田市教育委員会 『国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書　本片子遺跡・木原古墳』 1982 年

益田市教育委員会 『鵜ノ鼻古墳群発掘調査概報』 1984 年

益田市教育委員会 『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅰ』 1986 年

益田市教育委員会 『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅱ』 1987 年

益田市教育委員会 『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅲ』 1988 年

益田市教育委員会 『小丸山古墳発掘調査報告書』 1990 年

益田市教育委員会 『三宅御土居跡Ⅰ』 1991 年

益田市教育委員会 『中世今市船着場跡文化財調査報告書』 2000 年

第３章　調査の結果

第１節　発掘調査の経過と概要

1．発掘調査の経過

堂ノ上遺跡は、平成 18 年度に確認調査を行い、調査範囲を確定、益田道路に平行して北側に建設される県道久城インター線工事に伴う調査は、平成 19・20 年度に島根県教育委員会が実施し、平成 21 年度に報告書の作成作業を行っている。益田道路本道部分の調査は平成 21 年６月より実施し、12 月に終了している。平成 21 年度の現地での発掘調査作業（機械、人力による掘削、測量作業等）は、一般競争入札により、㈱大畑建設に委託をして行った。また報告書の作成作業は、平成 22 年度に実施している。

１）平成 21 年度の本発掘調査

本発掘調査は、調査対象地の中央を縦断する市道久城上１号線から西側を西区（約 1,500㎡）、東側を東区（約 2,600㎡）と設定して実施した。調査は西区から開始し、まず宅地のコンクリート基礎を重機を使って破砕、搬出し、その後表土をバックホーにより掘削し、さらにその後人力で掘削を進めていった。調査が進むにつれて、複雑な地形、大規模な造成等が明らかになり、その都度重機での掘削を交えて進めた。

西区の調査は６月５日～９月４日の期間行い、竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡５棟、加工段３箇所などの遺構を検出した。７月 22 日には島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏の調査指導を受け、８月 23 日には現地説明会を行ったところ、約 60 名の参加者があった。そして９月２日に完了検査を実施、埋め戻す前の９月３日に空中撮影を行い、翌４日に西区の調査を終了した。

東区の調査は９月５日～ 12 月 18 日の期間行い、竪穴住居跡５棟、古墳１基、掘立柱建物跡８棟、布掘り建物跡１棟、建物の柱穴と考えられるピット群、近世墓などの遺構を検出した。11 月 20 日には田中義昭氏による２回目の調査指導を受け、11 月 28 日には現地説明会を行い約 120 名の参加者があった。12 月 10 日には山口大学埋蔵文化財資料館助教の田畑直彦氏、12 月 11 日には田中義昭氏に３回目の調査指導を受けた。そして 12 月１日に空中撮影を行い、12 月 17 日に完了検査を実施、翌 18 日に現地調査を終了した。

遺構の実測および遺物の取り上げについては、㈱コンピュータ・システムの遺跡調査システム、「SITE5」を利用し、デジタルで実施した。

田中義昭氏による布掘り建物跡 SB08 の調査指導状況

２）整理作業、報告書の作成

整理作業は、現場作業が終了した後の平成 22 年１月から実施している。実測等は調査員が行ったうえで、報告書作成作業はＤＴＰで行った。具体的には、遺物のトレースは実測図からデジタルトレースを行い、遺構は平面図、断面図等の各図を画像上で仮

配置した後にデジタルトレースを行っている。デジタルトレースや図などの加工は、Adobe 社製 Illustrator CS4、Adobe 社製 Photoshop CS4 を用いて行った。遺構写真は、デジタルカメラで撮影したデータを若干のコントラスト調整を行った後にＥＰＳデータ化している。また遺物写真は、デジタルカメラで撮影したのち、遺構写真と同様の処理をしている。最終的な原稿執筆、編集作業は、Adobe 社製 In Design CS4 を用いて行った。

２．発掘調査の概要

１）調査前の状況

堂ノ上遺跡は、益田川右岸の標高約 33 mの丘陵上の緩斜面に位置し、平成 21 年度はその丘陵の南側部分を調査対象とした。

西区については、平成 19・20 年度の調査の結果と同様に、上面が広く削平された宅地、畑、道路になっていた。東区については、市道に近い区域には谷状の地形が見られ、排水処理や市道壁面の保護などに配慮が必要であった。また東区の中央部には約 100㎡の溜め池があり、その周囲は深い竹林となっており、当初遺構は希薄ではないかと考えられていた。

２）発掘調査の概要

西区は表土が比較的薄く、表土を削った段階ですぐに竪穴住居跡が現れた。また、宅地部分は撹乱がひどく、検出できた遺構は一部だったと考えられる。東区は溜め池から低い部分へ湧き出る水の処理や、竹林の根の処理には重機を用い、時間を要したが、溜め池から西側には古墳や掘立柱建物跡などが、東側には何度も建て替えを繰り返した大型の竪穴住居跡や焼失住居跡、掘立柱建物跡が次々に検出された。

本遺跡から発見された遺構は竪穴住居跡 11 棟、古墳 1 基、掘立柱建物跡 14 棟、布掘り建物跡 1 棟、建物の柱穴と考えられるピット群、自然流路 3 箇所、近世から近代の墓 40 基以上などである。

竪穴住居跡と布掘り建物跡、掘立柱建物跡の大部分は、弥生時代中期後葉から古墳時代前期のもので、約 600 基検出されたその他の柱穴も、大部分が同時期の遺構と考えられる。検出された 11 棟の竪穴住居跡のうち 6 棟は床・柱・溝内に炭や焼土が堆積しており、SI13 では特に炭化材が多く検出された。また、竪穴住居群と同時期と判断した掘立柱建物跡は 6 棟で、うち 1 間×２間の 4 棟は倉庫跡と考えられる。古墳は径約 10 mの円墳で、墳丘は後世の開墾によって削平されていたが、石材の抜き取り痕から主体部は横穴式石室と判断した。出土遺物から 7 世紀前半の築造と考えられる。遺物は、竪穴住居跡を中心に弥生土器や石器、鉄器が出土している。また、SI14 の床面や壁体溝から、山陰系や布留系の土器とともに周防系の甕や高坏がまとまって出土した。

３．文化財保護法上の措置の経過

本発掘調査の文化財保護法第 99 条第 1 項にかかる発掘通知は、平成 21 年 6 月 2 日付けで島根県教育委員会教育長から提出した。通知上の調査期間は、6 月 8 日から 12 月 18 日までである。

調査は 12 月 18 に終了、12 月 19 日以降、遺跡の埋め戻しを文化財保護側で実施した。平成 22 年 1 月 6 日付けで国土交通省浜田河川国道事務所長あて終了報告を提出している。記録保存にとどめることが正式に決定したが、平成 23 年 1 月現在、直接の工事執行は行われておらず、ほぼ埋め戻した状況で残されている。

図 4.　堂ノ上遺跡　調査区位置図

図 5.　堂ノ上遺跡　平成 21 年度調査区全体図

第２節　縄文時代の遺物

出土遺物（図６・7、写真図版 71）

形状や石材から、縄文時代のものと考えられる石器が４点出土している。いずれも東区の斜面で出土しており、丘陵上側からの流れ込みと考えられる。今回の調査では他に縄文時代の遺物と判断できるものはなかったが、第３節で弥生時代の石器としたものの中に、縄文時代の石器が含まれる可能性もある。土器については、出土した土器の中から確実に縄文土器と判断できるものは確認できなかった。なお、北西側に隣接する平成 19・20 年度調査区も含め、縄文時代と判断できる遺構は確認されていない。

第1表　縄文時代出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	色調	備考
1	7	71	石器	石鏃	J6	1	(長さ) (2.3)	(幅) (1.5)	(厚さ) 0.3	表面が風化している	灰色(7.5Y5/1)	重さ:0.65g 石材:安山岩
2	7	71	石器	石鏃	K3	不明	(器長) 3.4	(器幅) 1.6	(器厚) 0.2		灰色(7.5Y6/1)	重さ:1.45g 石材:安山岩
3	7	71	石器	石核	N3S	不明	(器長) 3.6	(器幅) 2.8	(器厚) 1.8		黒色(N1.5/0)	重さ:19.29g 石材:黒曜石
4	7	71	石器	石鏃	J6	黒色土					黒色(N1.5/0)	重さ:0.76g 石材:黒曜石

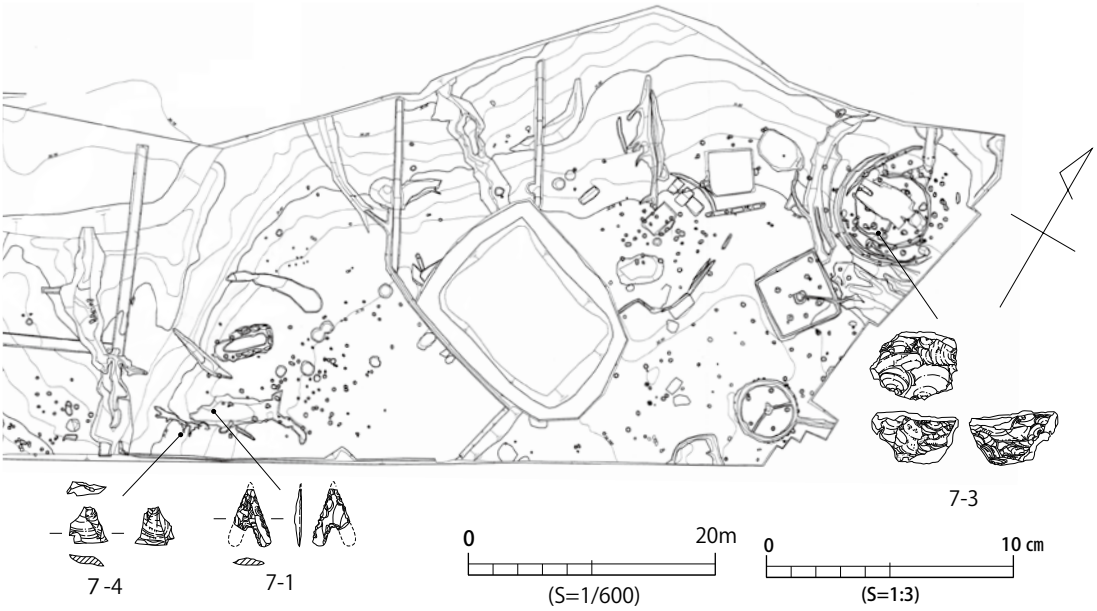


図 6.　　縄文時代の石器出土状況図

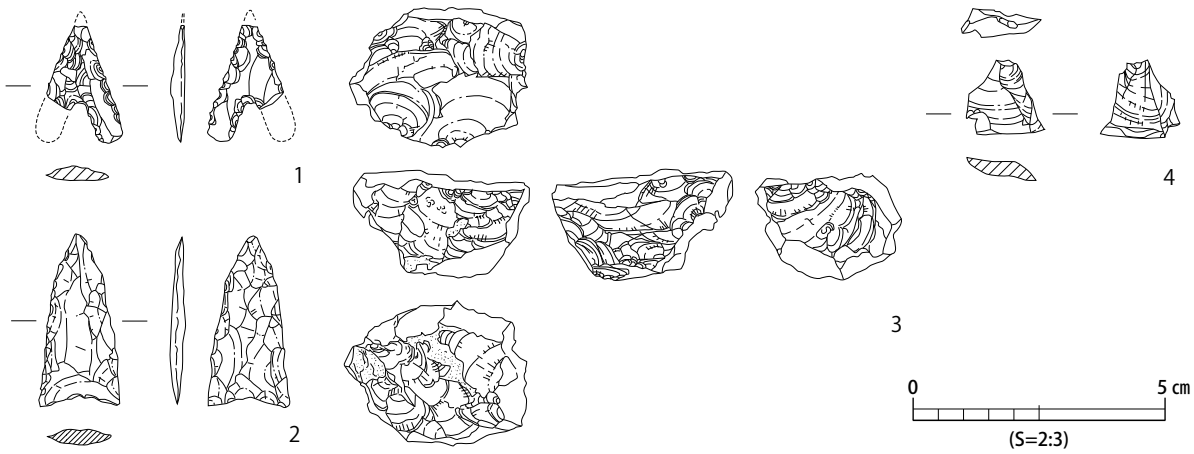


図 7.　　縄文時代石器実測図

第３節　弥生時代の遺構と遺物

平成 21 年度の調査では、弥生時代後期を中心とする集落跡が検出された。主な遺構は竪穴住居 11 棟、掘立柱建物跡６棟で、その他に同時期の自然流路の跡も検出された。

竪穴住居は、弥生時代中期末頃から古墳時代初頭にかけて、堂ノ上遺跡の所在する台地全体に連続して一定棟数が建てられており、集落内での各時期の建物の平面形や規模の変遷を確認することができた。特に後期前半は床面の径が８ mを超える大型の竪穴住居が複数建てられ、このうち最大の SI16 は壁体溝内側の長径が約９ mある。また、竪穴住居の中には、一地点で何度も建て替えを繰り返しているものがあり、中でも SI14 ～ 16 はほぼ同じ場所で５回以上の建て替えを繰り返しており、建て替えが確認できない SI09・13 など径６ m前後の中型以下の竪穴住居跡と対

図 8.　　SI15 実測図

照的である。そのほか、非常に遺構の残りが良かったSI13や、SI07・08・10・11・12のように遺構内の炭・焼土の堆積状況から焼失住居と判断した竪穴住居跡が6棟あった。

掘立柱建物跡は、SB08以外は1間×2間の柱配置が復元でき、平成19･20年度も合わせた9,000㎡以上の調査区の中で、貯蔵穴が1基も確認できなかったことや、他の弥生集落遺跡の類例から、基本的に倉庫の跡と考えられる。SB08は石見地方で初めて確認された布掘り建物跡で、その他の掘立柱建物とは時期や機能が異なる可能性が考えられる。

これらの遺構からは、弥生時代中期後葉から後期末にかけての土器・石器・鉄器が多数出土している。特に土器については、遺構出土資料で弥生時代後期の変遷を検討できる良好な資料を得ることができた。また、鉄器はSI06・10・16といった特定の大型の竪穴住居跡から複数出土し、他では出土しなかった。

なお、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土器が出土した遺構は、明確に時期区分を行うことが困難であるため、遺構の継続性を考慮して便宜上弥生時代終末期の遺構とする。

１）竪穴住居跡

SI15（図８～10、写真図版10・11・68）

東区の平坦地から東斜面へ傾斜が変わるM2グリッドで検出した竪穴住居跡である。SI16とその外周溝であるSD95の完掘後の地山面で検出した。北側と東側をSI16に切られ、後世の削平も受けているため、床面は南西側のみ残存している。残っていた床面の形状と主柱穴、中央ピットの配置から、本来の平面形は円形で、径7ｍ前後の規模だったと考えられる。

SI15の主柱穴と判断したピットは5基で、本来は6本または7本だったと考えられる。床面近くで検出したP1023の状況から本来の主柱穴の規模は、径約40㎝、深さは60㎝前後だったと考えられる。また、主柱穴で囲まれる範囲のほぼ中央で検出されたP1089は、検出した深さが約20㎝と周辺のピットに比べて非常に浅いのでSI15の中央ピットと判断した。さらにP1089の西側のピットP1090は、他の竪穴住居跡の中央ピットに隣接して検出される小ピットに相当する可能性がある。壁体溝は床面が残っていた範囲は全て廻っており、床面では径10～15㎝の小ピットが連続して検出された。そのほか壁体溝の中から長さ10～20㎝の石が間隔を開けて出土した。石の使用目的は不明だが、SI10・13・16では同様の石がさらに多数出土しているので、この集落では一般的な使用状況と見られる。

遺物は床面南側で弥生土器がまとまって出土したほか、P1040とP1079でも弥生土器が出土している（図9）。P1040では完形の壺（1）が柱穴内に据えられたように出土しており、柱穴の床面から20㎝以上高い位置に置かれていることから、住居の廃棄、柱の抜き取り後に意図的に設置された可能性が高いと考えられる。

出土した遺物は弥生土器と石器（図10）である。1は短い口縁がやや直立気味に付く壺で、胴部には内外面とも幅の広いハケ調整が施されている。このため、Ⅳ様式の土器に比べて器壁が厚く形状的にはⅤ-1様式に似ているが、Ⅳ-2様式の壺とする。また、全体で粘土の接合箇所をおよそ確認することができ、幅約5㎝の粘土を6段積み上げて作られていることが分かる。頸部には刺突文が施されている。堂ノ上遺跡で出土した弥生時代中期末から後期前半の土器には、工具や貝殻による刺突文が施された壺・甕が多数出土しているが、ほとんどが垂直から左下がりの角度で施文されており、右下がりの刺突文が施される1は特殊な例である。甕は器壁が薄く口縁端部

に凹線が施される３・４と、器壁が厚く幅の広いハケ調整やヘラケズリ後にナデ調整が行われる５～９の２種類が出土している。前者はⅣ様式の土器と見られるが、後者はあまり例が無い。このうち、７～９は刺突文の様子からⅤ-1 様式併行の土器と判断され、５・６は１と同様にⅣ様式とⅤ様式の中間に位置づけられる土器と考えられる。

以上のように、SI15 は、出土した土器から弥生時代中期末から後期初頭頃に廃棄されたと考えられる住居で、堂ノ上遺跡で確認された竪穴住居跡の中で最も古い住居跡と判断される。

第2表　SI15出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	10	68	弥生土器	壺	SI15 P1040		12.4	7.0	23.7	口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す 頸部に刺突文を施す 底部は平底	内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ユビオサエ 外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	6mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色10YR7/4 外:鈍い黄橙色10YR7/4	Ⅳ－2様式
2	10	68	弥生土器	壺	SI15						内:ナデ、ヘラケズリ 外:ナデ、ハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色10YR8/4 外:鈍い黄橙色10YR7/4	Ⅴ－1様式か
3	10	68	弥生土器	甕	SI15 P1079		(17.5)				内:ナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色7.5YR6/6 外:橙色7.5YR6/8	
4	10	68	弥生土器	甕	SI15 P1040		19.6			口縁端部に2条の凹線文を施す 胴部に刺突文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	Ⅳ－1様式
5	10	68	弥生土器	甕	SI15		14.8			口縁端部は肥厚し、面を持つ	内:ナデ、ヘラケズリ 外:ナデ、ハケメ		内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	Ⅴ－1様式か 中期と後期の両方の特徴がある
6	10	68	弥生土器	甕	SI15		16.8			口縁端部に面を持つ 幅の広いハケメ	内:ナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:鈍い黄色(2.5Y6/4)	Ⅴ－1様式か
7	10	68	弥生土器	甕	SI15					頸部下に2段の直線文を施す	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ		内:黄褐色(2.5Y5/3) 外:鈍い黄色(2.5Y6/3)	Ⅴ－1様式
8	10	68	弥生土器	甕	SI15・SI16 埋土					頸部に直線文を施す	内:ヘラケズリ後ナデ 外:ヨコナデ、ナデ	3mm以下の砂粒(石英)を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	Ⅴ－1様式
9	10	68	弥生土器	甕	SI15					頸部から肩部にかけて直線文を廻らせる	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	Ⅴ－1様式か
10	10	68	石器	砥石	SI15	不明	(器長) 17.2	(器幅) 13.2	(器厚) 10.4		内: 外:		鈍い黄色(2.5Y6/4)	重さ:3.2kg

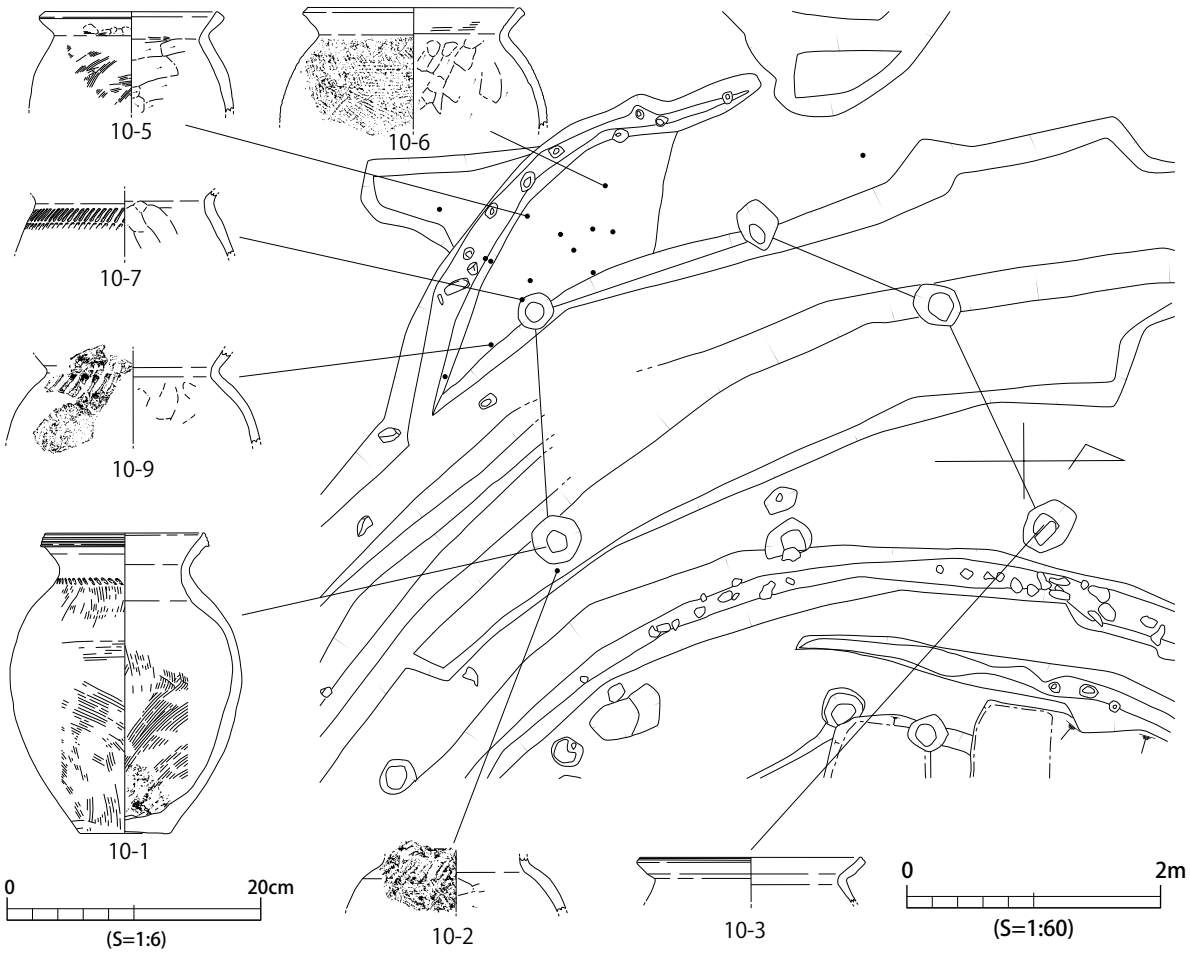


図 9.　SI15 遺物出土状況図

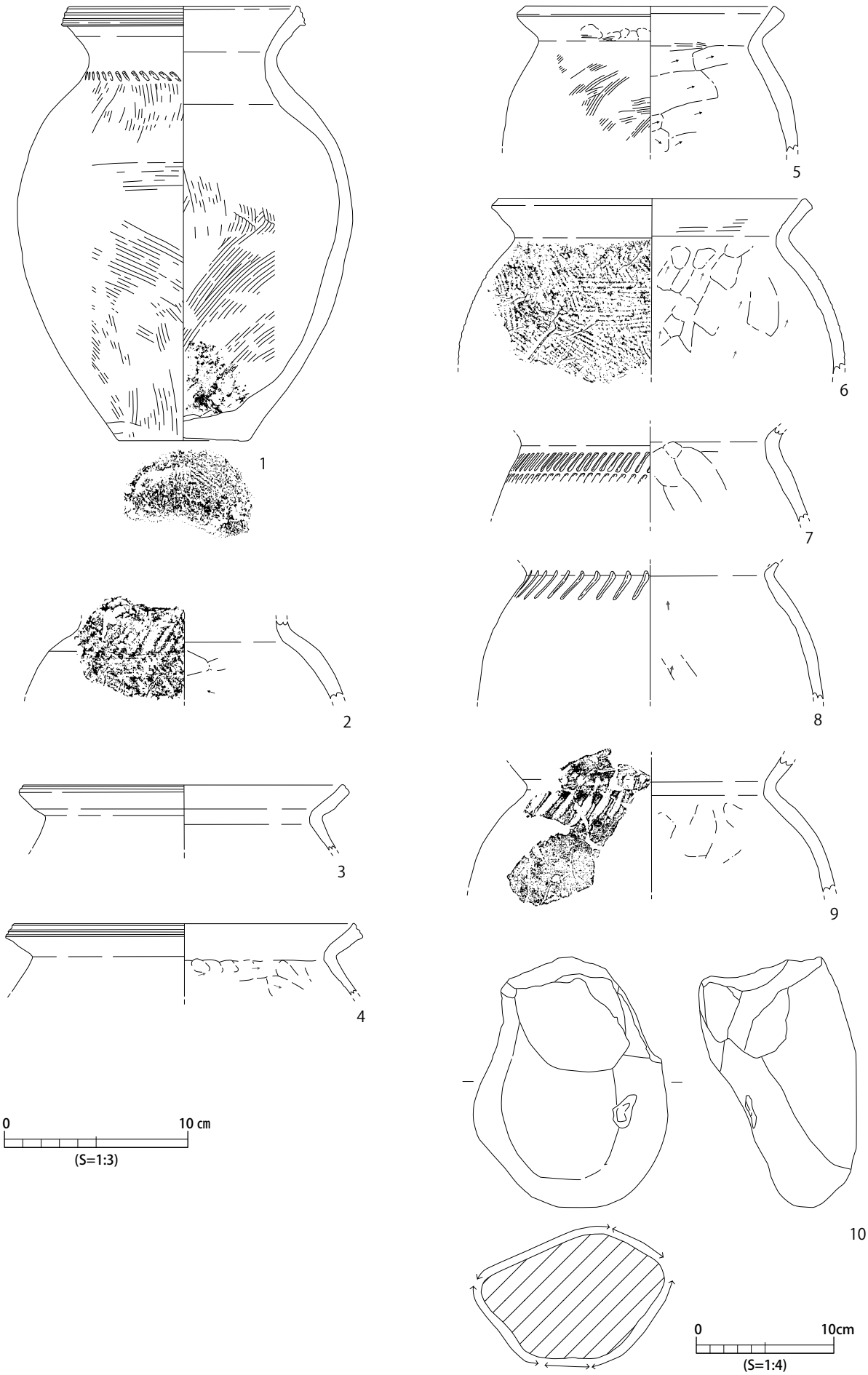


図 10.　SI15 出土遺物実測図

SI13（図 11 ～ 15、写真図版 5 ～ 8・12 ～ 14）

東区の平坦地の東端、N4 グリッドで検出した円形の竪穴住居跡で、床上で炭化材や焼土が大量に出土した所謂焼失住居である。東区平坦面の遺構精査をした際、炭のリングが検出された。形状や規模から弥生時代の焼失住居と判断し、住居の東壁が調査区の外へ続いていたため調査区を東へ 60㎝拡張した。拡張部分の地山面を精査すると、住居のちょうど東端の部分で排水路と考えられる溝状プランが検出されたので、さらに東へ調査区を拡張した。溝は尚東へ伸びていたが、そこから東側は地崩れにより急傾斜の崖面になっているので、調査の安全性を考慮してそれ以上の調査区拡張は行わなかった。

調査は、排水溝の位置に合わせて土層観察用の東西ベルトを、それに直行する位置に南北ベルトを設定して、サブトレンチで焼土と炭化材の堆積状況を確認しながら埋土を掘り下げた。その結果、床上に炭化材や炭を多く含む黒褐色土が堆積し、その上に部分的に焼土が固まって堆積していることが判明したので、それらの上の堆積土を除去し、炭化材と焼土塊の平面検出状況を記録することにした。掘削を進めると当初想定した以上に焼土や炭化材の保存状態が良いことが分かり、最終的に竪穴住居内のほぼ全面で炭化材や焼土塊が検出された（写真図版 5 上）。焼土は住居の中央寄りに多くみられ、後に中央ピットを検出した中心部分は窪んでいた。また、焼土が検出された付近では茶灰色のピットのプランが検出され、この段階では住居跡の埋没後に上面から掘り込まれた後世の柱穴と判断していた。しかし、その後炭化材と焼土の除去後に床面を検出した際、このピットが SI13 の主柱穴の上に位置しており、主柱抜き取り後の穴に炭・焼土が堆積した後、さらにその窪みに上層の土が流入した痕跡を示しているいることが分かった（写真図版 5 下）。炭化材は住居跡の広い範囲で多数検出され、特に板状の垂木が住居の壁面から中央に向かって伸びる状況がよく残っていた。垂木は、壁体溝部分は土圧で溝の床に押し付けられており、住居の中央よりで焼土の下に潜り込んでいた。さらに垂木の検出状況を観察すると、5 本の主柱を結ぶ線に直行するように並んでおり、およそ 5 つの方向にまとまっていることが分かる。また、垂木の上下で垂木と直行する方向の板材が検出された。

焼土と炭化材を除去し、床面の精査を行うと、壁体溝に近い位置で主柱穴が 5 基検出された。主柱穴内には、柱抜き取り後の窪みに床上から黒褐色土が流れ込み、その上に焼土が堆積しているので、主柱抜き取り後に上屋を焼却したことが分かる。柱の配置は整った五角形をしており、その中心で小規模なピット P1128 を検出した。また、小ピットを避けるように、中心から北東にややずれた位置で浅い中央ピット P1134 を検出した。中央ピットからは、ほぼ真南と北東へ向かって直線的に伸びる溝が 2 条された。溝はどちらも壁体溝に繋がっており、床面は壁体溝に向かって緩く傾斜している。壁体溝は、幅約 30㎝の比較的太い溝が住居壁面に沿って全周しており、東側の壁の一画が切られて壁体溝と同じ幅の溝が、緩く東へ傾斜しながら直線的に伸びている。この溝は類例から排水溝と考えられるが、土層断面から溝が埋まった後に炭や焼土が堆積しており、住居焼却時にはすでに機能していなかった可能性がある。このほか、SI13 の壁面では、垂木を受けるために掘られたと考えられる小規模なピットが多数検出された。

SI13 では炭化材・焼土塊の検出作業中に、意図的に住居内に置かれたと考えられる土器が住居の 3 か所で出土した（図 13）。その位置は、住居のほぼ北・南・西の壁際で、北側では底部に穴を開けた大型の壺 4 が、南側では小片になった複数の壺（1 ～ 3）と甕（6 ～ 10）が、西側では完

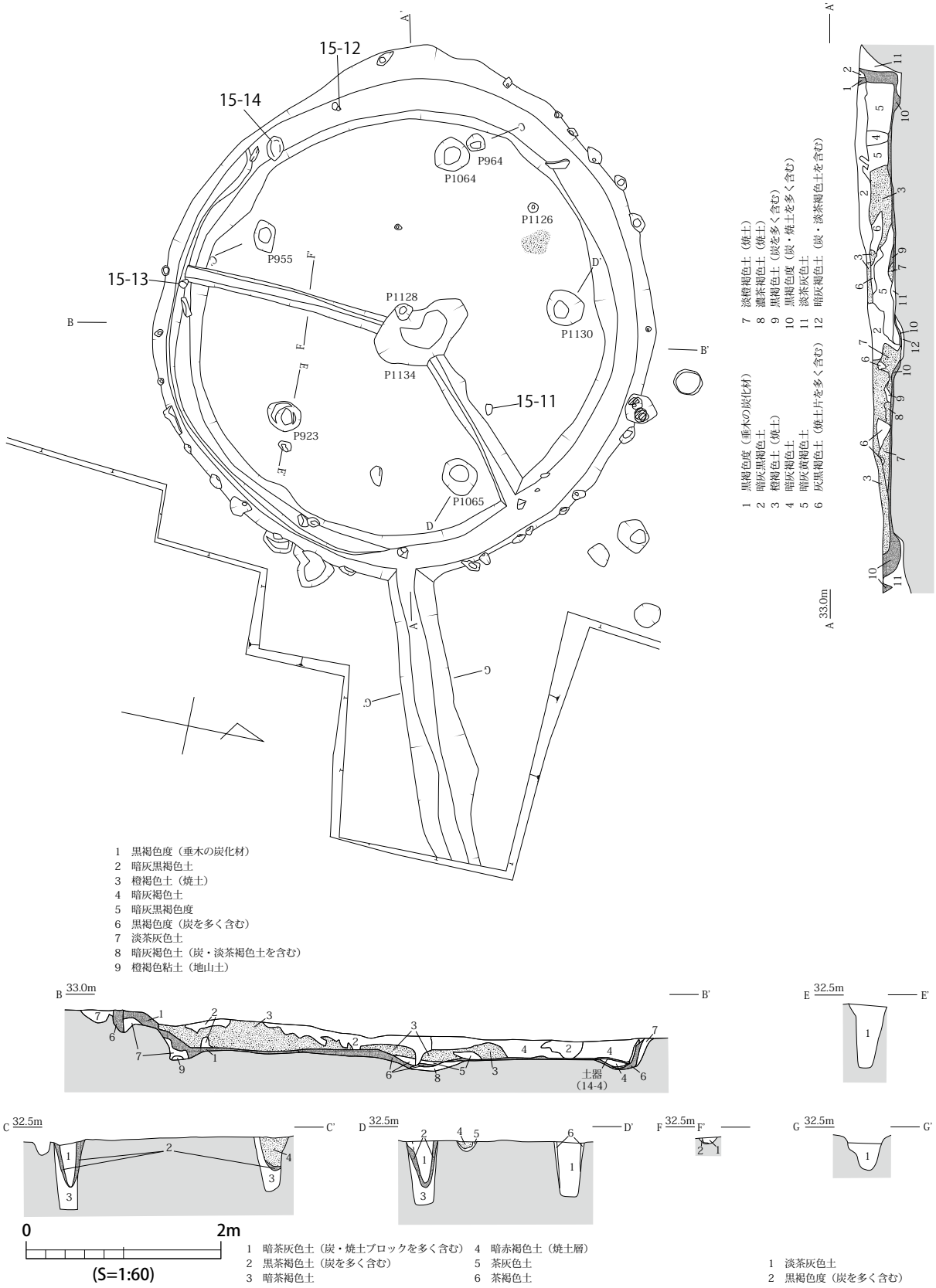

15-12
15-14
15-13
15-11
P964
P1064
P1126
P955
P1128
P1130
P1134
P923
P1065
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
1 黒褐色度（垂木の炭化材）
2 暗灰黒褐色土
3 橙褐色土（焼土）
4 暗灰褐色土
5 暗灰黒褐色度
6 黒褐色度（炭を多く含む）
7 淡茶灰色土
8 暗灰褐色土（炭・淡茶褐色土を含む）
9 橙褐色粘土（地山土）
1 黒褐色度（垂木の炭化材）
2 暗灰黒褐色土
3 橙褐色土（焼土）
4 暗灰褐色土
5 暗灰黄褐色土
6 灰黒褐色土（焼土片を多く含む）
7 淡橙褐色土（焼土）
8 濃茶褐色土（焼土）
9 黒褐色土（炭を多く含む）
10 黒褐色度（炭・焼土を多く含む）
11 淡茶灰色土
12 暗灰褐色土（炭・淡茶褐色土を含む）
33.0m
32.5m
土器
(14-4)
0
2m
(S=1:60)
1 暗茶灰色土（炭・焼土ブロックを多く含む）
2 黒茶褐色土（炭を多く含む）
3 暗茶褐色土
4 暗赤褐色土（焼土層）
5 茶灰色土
6 茶褐色土
1 淡茶灰色土
2 黒褐色度（炭を多く含む）

図 11.　SI13 実測図

形の壺が出土している。これらは、土器の下から炭化材や焼土が検出されたことから、住居の焼却後に置かれたことは明らかである。また、完形で直立した状態で出土した 5 が置かれた場所は、西側の主柱 P1064 に近い位置であることが分かる。横転した状態で出土した 4 も、本来設置された場所と考えられる底部の位置は、北側の主柱 P1130 に近い。南側で出土した壺・甕の破片は完形に復元できる個体が無く、出土した位置も他の 2 か所に比べるとやや高い点が異なるが、やはり南側の主柱 P931 の近くである。このように、住居焼却後に土器が置かれた場所が、いずれも柱抜き取り後の主柱穴の近くであることは注目される。なお、その後検出した床面では、石器が

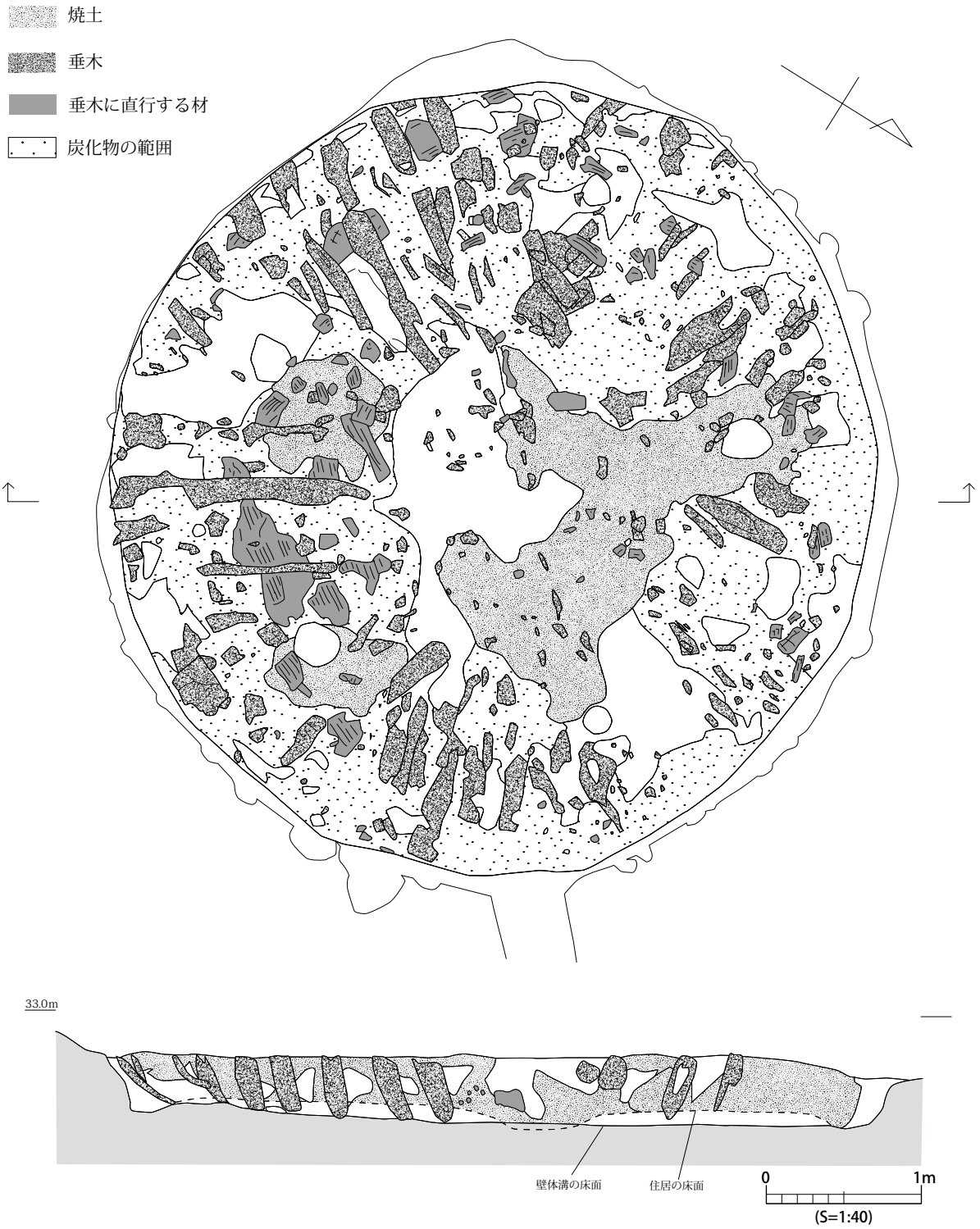


図 12.　SI13 炭化材・焼土実測図

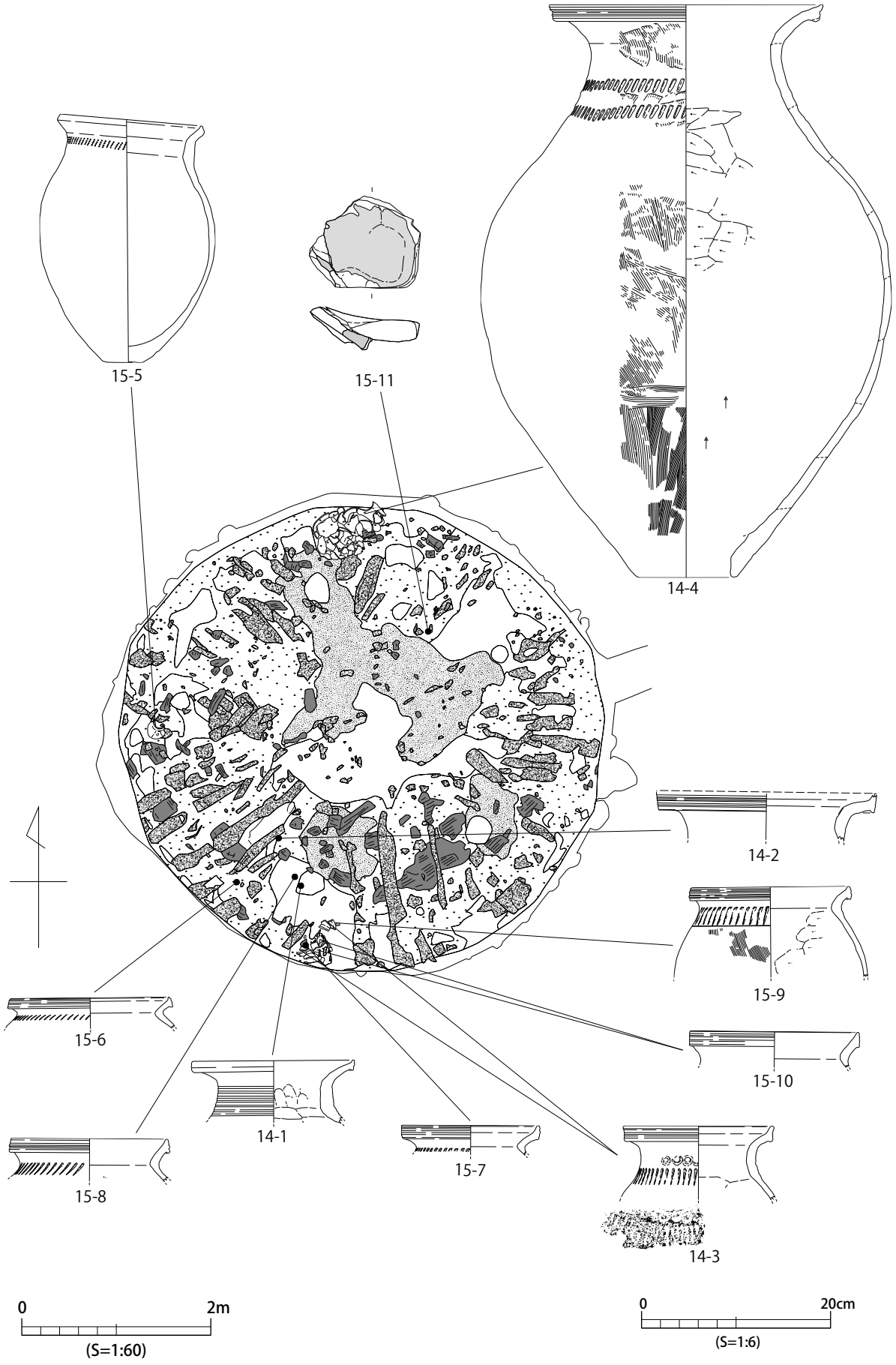


図 13.　SI13 遺物出土状況図

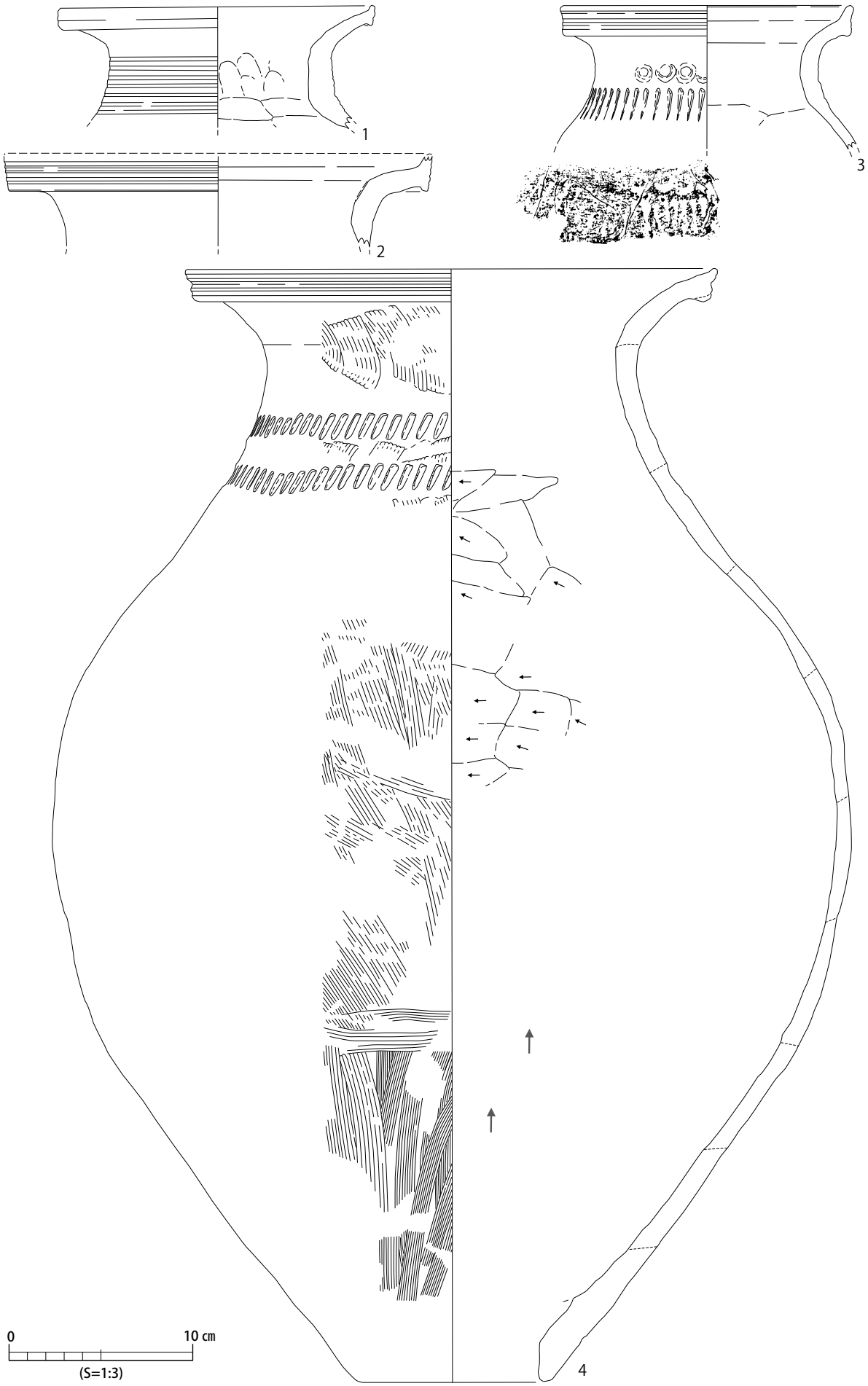


図 14.　SI13 出土遺物実測図 (1)

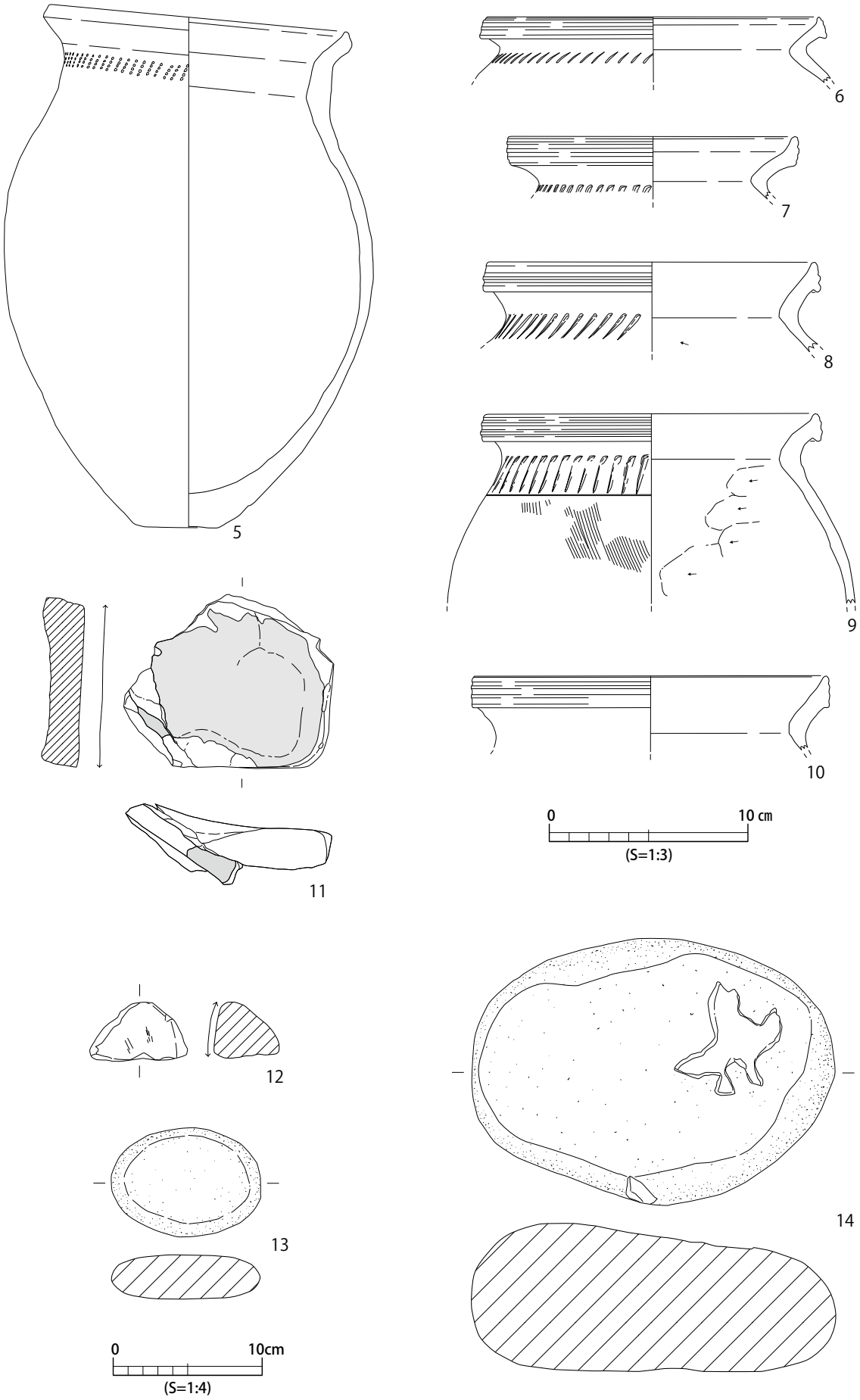


図 15.　SI13 出土遺物実測図 (2)

数点出土したが、土器は 1 点も出土しなかった。以上のように、SI13 の遺物の出土状況は、当地域における弥生時代後期前葉の竪穴住居の廃棄・焼却に伴う祭祀行為を示す例と考えられる。

出土した遺物は弥生土器と石器（図 14・15）である。3 は頸部から肩にかけて竹管文と直線文が施されているが、竹管文は全周していないので正面にのみ施文されたとみられる。4 は大きく口縁が開く大型の壺で、頸部に刺突文を２段廻らせている。調整は、外面が粘土の接合部を中心にハケ調整が施され、内面は胴部上半が横方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラケズリ後にナデを施している。SI15 柱穴内で出土した壺（10-1）と同様粘土の接合部分が明確で、こちらは 7㎝の幅の粘土を 11 段積み上げて作られている。また、この粘土の幅は口縁部の長さとほぼ一致している。5 は直立する頸部に外傾する短い口縁が付く壺で、胴部は張らず細長い器形をしている。遺跡周辺ではあまり例を見ない。土器全体が強い熱を受けたために赤く変色し、表面は調整が判別できないほど荒れているので、住居焼却後間もなく住居内に置かれたとみられる。甕は 7 ～ 10 はⅤ -1 様式で、6 のみⅣ -2 様式とみられる。鉄器は出土していないが、比熱してバラバラになった砥石（11）が出土しているので、使用されていた可能性が高い。14 は磨石と判断した石で、他の石と同様東側の壁体溝内で出土した。

以上のように、SI13 は、出土した土器から弥生時代後期前葉頃に廃棄･焼却されたと考えられる。

第3表　SI13出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態･文様の特徴	調 整	胎 土	色 調	備 考
1	14	69	弥生土器	壺	SI13	埋土	16.8			頸部に7条以上の凹線文を施す	内:ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	Ⅴ－1様式
2	14	70	弥生土器	壺	SI13	埋土	(23.0)			口縁端部は上下に拡張し4条の凹線文を施す	内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/2) 外:鈍い黄橙色(10YR7/2)	Ⅴ－1様式
3	14	70	弥生土器	壺	SI13	埋土	(15.6)			口縁端部を上下に拡張し3条の凹線文を施す。頸部に竹管文と直線文を施す	内:ヘラケズリ 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:灰黄褐色(10YR6/2) 外:灰黄褐色(10YR6/2)	Ⅴ－1様式
4	14	69	弥生土器	壺	SI13	床面	28.8	10.6	61.5	口縁端部は細い粘土を貼り付けて下方に拡張し、3条の凹線文を施す。頸部から肩部にかけて径が広がり、2段の刺突文を施す	内:ヘラケズリ、ナデ 外:ハケメ、ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	口縁部と胴部は図上合成 Ⅴ－1様式
5	15	69	弥生土器	壺	SI13	床面	14.9	3.7	26.3	口縁部はあまり広がらない	内:不明 外:不明	4mm以下の砂粒を多く含む	内:灰褐色(5YR6/2) 外:灰褐色(5YR6/2)	二次的に強く被熱しており、表面が非常に荒れている。
6	15	70	弥生土器	甕	SI13	埋土	(16.7)			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線文を施す 頸部に刺突文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	Ⅳ－2様式
7	15	70	弥生土器	甕	SI13	埋土	(14.4)			口縁部を上方に拡張し4条の凹線文を施す 頸部に直線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰黄褐色(10YR6/2) 外:灰黄褐色(10YR6/2)	
8	15	70	弥生土器	甕	SI13	埋土	(16.4)			口縁端部を上下に拡張し2条の凹線文を施す 頸部に直線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い橙色(2.5YR6/4) 外:鈍い橙色(2.5YR6/4)	Ⅴ－1様式
9	15	70	弥生土器	甕	SI13	埋土	(16.5)			口縁端部は上下に拡張し3条の凹線文を施す 頸部に刺突文、沈線を施す	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ、タテハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:淡橙色(5YR8/4) 外:鈍い橙色(5YR7/4)	Ⅴ－1様式
10	15	70	弥生土器	甕	SI13	埋土	(17.8)			口縁外面に3条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/3) 外:浅黄橙色(10YR8/3)	Ⅴ－1様式
11	15	70	石器	砥石	SI13		(長さ) 10.2	(幅) 9.7	(厚さ) 2.3		内: 外:		褐灰色(10YR5/1)	重さ:286.26g 石材:砂岩
12	15	70		不明	SI13	不明	4.0	6.5	4.4		内: 外:		褐灰色(10YR4/1)	重さ:101.74g 石材:砂岩
13	15	70		磨石か	SI13	不明	(器長) 7.3	(器幅) 10.0	(器厚) 3.0		内: 外:		明褐灰色(7.5YR7/2)	重さ:339.19g 石材:
14	15	70	石器	磨石	SI13	不明	(器長) 17.9	(器幅) 24.4	(器厚) 9.9		内: 外:		灰白色(5Y8/1)	重さ:6.0kg 石材:

SI06（図 16 ～ 18、写真図版 15 ～ 17・71）

西区の西端で検出した竪穴住居跡で、南側は現代の宅地造成によって大きく削り取られ、西側は県道久城インター線によって同様に大きく削り取られている。このため検出した床面は、本来の 10 分の 1 程度と推定される。また、SI06 を検出した場所は、調査前に家屋が建っていた所で、SI06 の上面も大きく平坦に削平され、検出面から床面までの深さは 25㎝だった。

SI06 の平面形は、残存する床面と SI06 の外周溝（SD30）が緩く弧を描くことから、円形または楕円形で、規模は床面の径が 8 ～ 9 mだったと考えられる。SI06 の西側は平成 20 年度に発掘

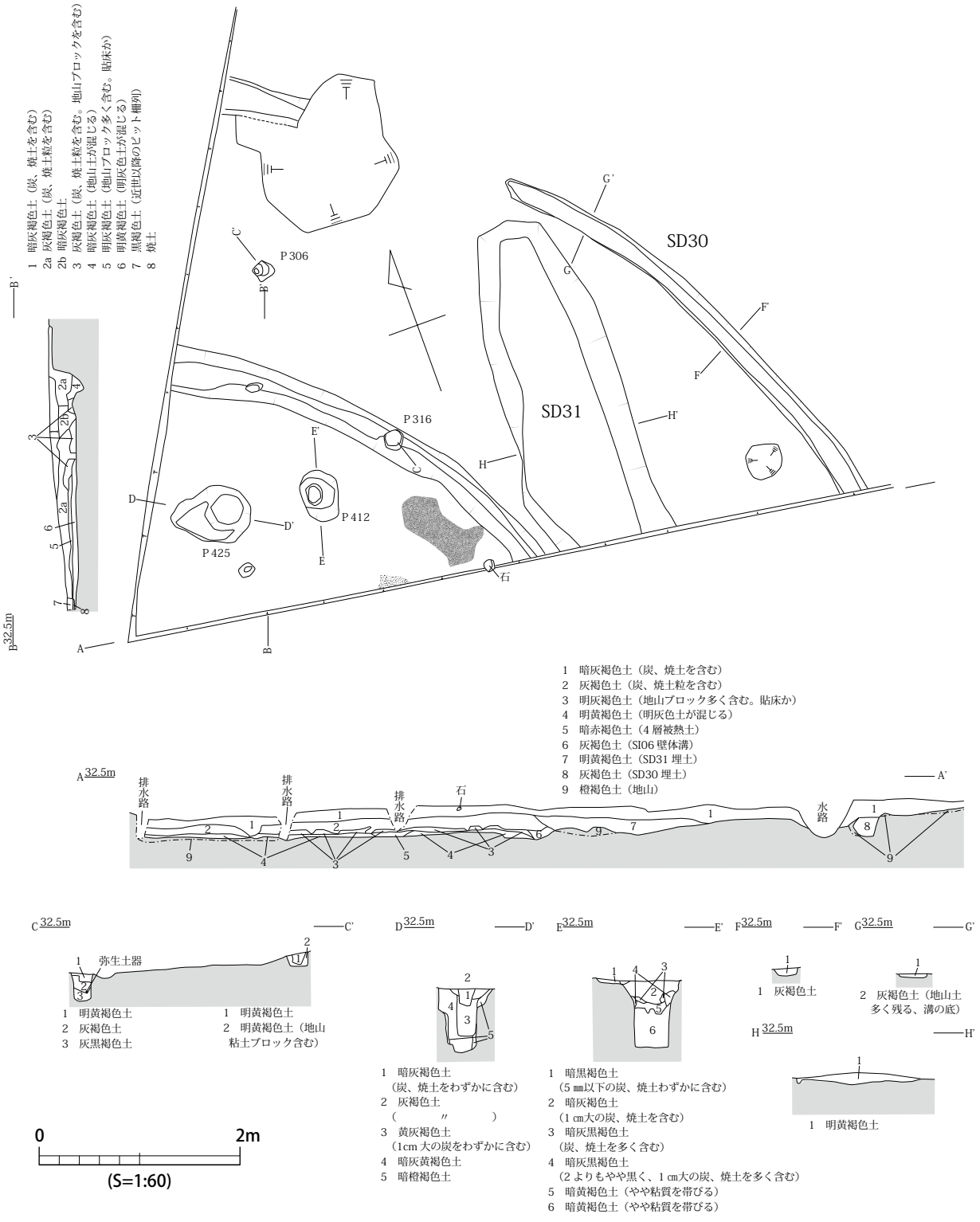


図 16.　SI06 実測図

調査を行っており、住居の床面や柱穴は検出されなかったが、SD30 の続きと見られる大きく弧を描く溝が検出されている。

また、SI06 を検出した範囲内では、浅い溝状遺構 SD31 や小規模なピット P306・316 を検出している。これらの遺構は、どれも明黄褐色の埋土をしており、SI06 の埋土の上から掘りこまれていることから、遺物は出土していないがおよそ近世以降の遺構と判断した。

SI06 の埋土は炭や焼土の粒を含む灰褐色土で、この土を除去すると、地山ブロックを多く含む貼床と考えられる明灰褐色の層が検出された。この面で遺構検出のための床面精査を行ったが、検出したプランが不整系だったため、さらに床面を掘り下げて地山面で柱穴 2 基を検出した。いずれも規模が大きいので、主柱穴と考えられる。壁体溝は幅 20 ～ 45㎝で、壁に沿ってしっかりと掘り込まれている。また、東側の壁体溝近くの床面で炭の堆積が検出され、P425 内でも炭や焼土が出土しているが、出土量が少なく堆積状況も堂ノ上遺跡で検出された他の焼失住居と異なっているので、SI06 が焼失住居かは明確でない。

遺物は壁体溝周辺と調査区西壁付近で弥生土器、石器、鉄器が出土している（図 17）。弥生土器は小片が多く、器形の判断できる物もほとんどが著しく摩滅している。そのうち辛うじて器形や時期を判断できる物を図 17 に図示した。2 は口縁がやや外傾して立ち上がる甕で、頸部から肩

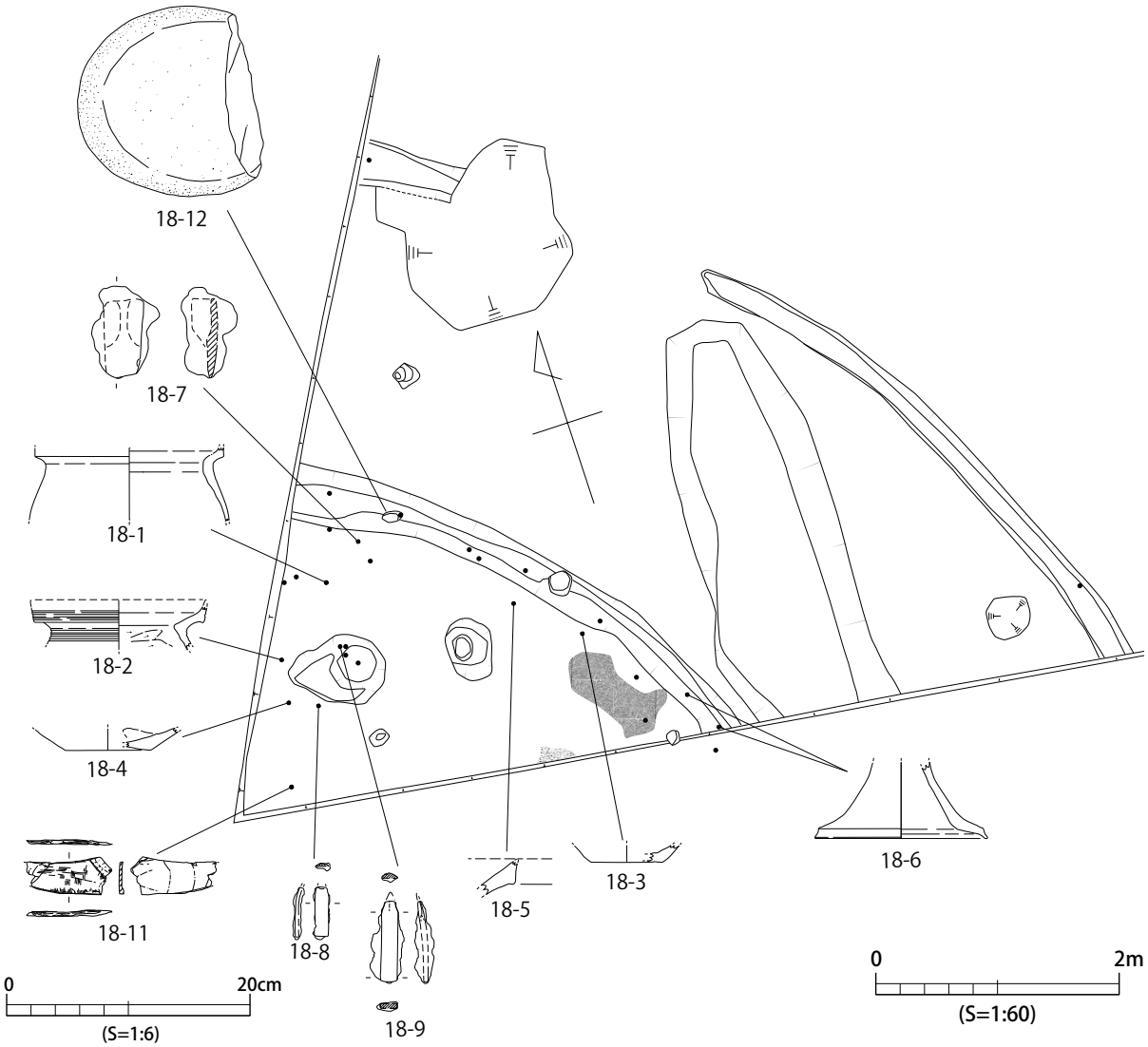


図 17.　SI06 遺物出土状況図

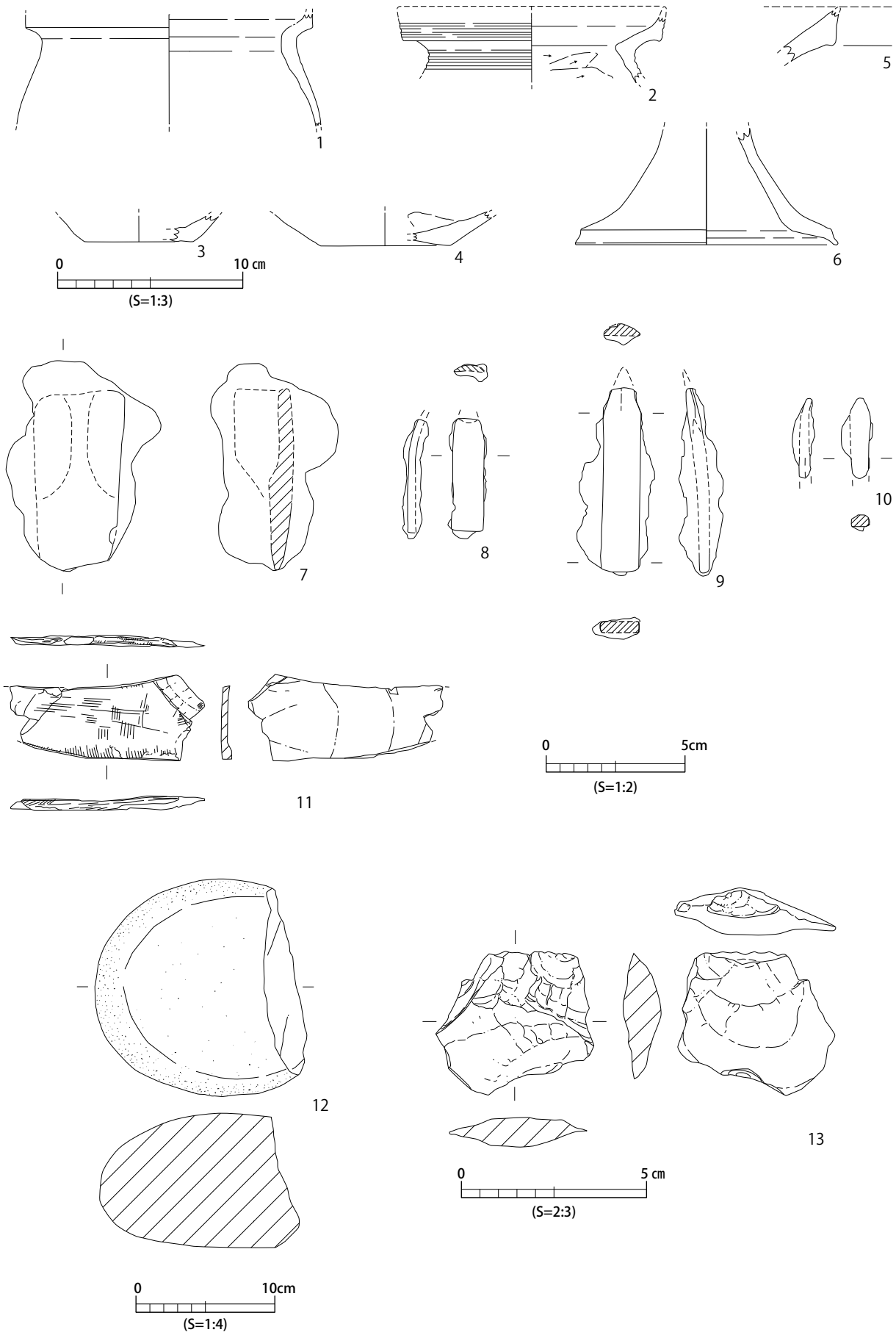


図 18.　SI06、SD30 出土遺物実測図

にかけて沈線が施されている。遺跡内では珍しい施文だが、器形からＶ -2 様式の甕と判断した。5 は器台の器受部と判断したもので、口縁端部を欠損しているがＶ -1 様式のものとみられる。6 もＶ -1 様式の器台と判断した物で、脚端部は斜め下方に拡張している。

鉄器は検出した床面の西側で 4 点出土している。7 は非常にサビが厚く、Ｘ線写真でも詳細は不明だが、辛うじて袋状の鉄斧と判断できる。遺跡内で唯一の出土である。そのほか 8・9 はヤリガンナで、いずれも先端部分を欠損するがそのほかは基部までよく残っている。10 は刺突具である。このほか図示していないが、鉄器の柄と考えられる木質（写真図版 98、18-14）が出土している。近年島根県西部の石見地方では、浜田市道休畑遺跡や津和野町大蔭遺跡といった弥生時代後期の集落遺跡で鉄器の出土が報告されている。これまでに邑智郡や鹿足郡の一部の弥生集落遺跡で鉄器の出土が知られていたが、堂ノ上遺跡でも複数の鉄器を保有する住居跡が確認されたことから、これまで知られていなかったが弥生時代後期には他の山陰地方の弥生集落と同じく石見地方の広い範囲で鉄器が普及していたと考えられる。

SI06 は、出土した土器から弥生時代後期前葉から中葉の大型の竪穴住居跡と考えられる。また、SI06 では狭い範囲で鉄器が 4 点出土した点が注目される。これは遺跡内では、SI16 に次ぐ数で、推定される住居本来の規模と併せて考えると、SI06 が西区南側の住居群の中心的な建物だった可能性が高い。

第4表　SI06、SD30出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm)			形態・文様の特徴	調 整	胎 土	色 調	備 考
							口径	底径	器高					
1	18	71	弥生土器	甕	SI06	2					内:不明 外:ナデか	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(7.5YR8/2) 外:黄橙色(7.5YR7/8)	弥生時代後期
2	18	71	弥生土器	甕	SI06	2				口縁部及び頸部外面に3条以上の沈線が施されている。	内:ヨコナデ、ケズリ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い橙色(7.5YR6/4) 外:鈍い橙色(7.5YR6/4)	V-2様式
3	18	71	弥生土器	甕	SI06	2		6.0			内:不明 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(7.5YR8/4) 外:鈍い橙色(7.5YR6/4)	弥生時代後期
4	18	71	弥生土器	甕	SI06	2		5.0			内:ヘラケズリ 外:不明	3mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y7/2) 外:灰黄色(2.5Y7/2)	弥生時代後期
5	18	71	弥生土器	器台	SI06	2					内:不明 外:不明	1mm以下の砂粒を含む	内:明褐灰色(7.5YR7/2) 外:黄橙色(7.5YR7/8)	弥生時代後期
6	18	71	弥生土器	器台または高坏	SI06			14.4			内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/2) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	V-1～2様式
7	18	98	鉄製品	袋状鉄斧	SI06		(器長)(6.5)	(器幅)(3.3)	(器厚)(0.8)	サビが厚い為、詳しい形状は不明である。	内: 外:			
8	18	98	鉄製品	ヤリガンナ	SI06	2	(器長)4.3	(器幅)1.1	(器厚)0.6	先端をわずかに欠損している。	内: 外:			
9	18	98	鉄製品	ヤリガンナ	SI06 P425		(器長)6.8	(器幅)2.7	(器厚)1.2		内: 外:			
10	18	98	鉄製品	刺突具	SI06	2	(器長)2.9	(器幅)0.75	(器厚)0.4	先端に向かって先細りする。ゆるく反っている。	内: 外:			
11	18	71	不明	不明	SI06	2	(器長)3.1	(器幅)7.0	(器厚)0.4		内: 外:		灰色(5Y5/1)	重さ:9.87g
12	18	71	不明	磨石	SI06 壁体溝	不明	(器長)15.7	(器幅)(15.3)	(器厚)9.6		内: 外:		灰白色(2.5Y8/1)	重さ:3.2kg
13	18	71		剥片	SD30 南壁	不明	(器長)5.1	(器幅)5.6	(器厚)1.4		内: 外:		灰色(10Y5/1)	重さ:28.81g 石材:安山岩

SI10（図 19 ～ 23、写真図版 18 ～ 23・72 ～ 75）

西区の北端で検出した竪穴住居跡で、西区中央の平坦地からやや北側に下った緩斜面に位置している。SI10 を検出した場所は、調査前に家屋が建っていた所で、重機による造成土掘削後、人力で包含層を掘削した際、後で SI10- A を検出した範囲で小片になった弥生時代後期の土器が多数出土した。さらに、南北に３基並んだ大型の撹乱土坑の南側の付近で、炭を多く含む土や焼土の塊が出土したので地山面の精査を行ったところ、直径 8.5 mの円形プランが検出された。一般的な竪穴住居跡の規模よりかなり大きかったので、当初竪穴住居跡の外周溝の可能性を考えたが、床面と柱穴、壁体溝を検出した結果、同じ場所で竪穴住居を建て替えていることが分かった。住居跡の建て替えの順番は、遺構プランの切り合い関係から外側の大型の住居 SI10-A が先行することが明らかだった（写真図版 18）。

SI10-A は、床面の規模が約８mの整った円形で、床面の南側には炭や焼土を多く含む暗灰褐色土が広い範囲で堆積していた。小片となった遺物のほとんどがここの場所で出土している。また、この暗灰褐色土は、建て替え後の SI10B の壁体溝の掘方の埋土になっていた。壁体溝は北側を除く約３分の２が残っていた。壁体溝の床上では拳大前後の小さな石が並ぶようにして出土し、石を取り上げた後床面を精査すると径 10 ～ 20㎝の小規模なピットが連続して検出された。小ピットは壁材の固定にかかわる施設の痕跡と考えられるが、小さい石には石器も混じっており出土の原因は不明である。

壁体溝で囲まれた床面では約 30 基のピットが検出された。このうち弥生時代の掘立柱建物跡 SB06・12 の柱穴を除き、さらに SI16B の主柱となるものを除いた中から、配置を検討した結果、８本の主柱穴を抽出した。西側は調査区外側にさらにもう１本主柱が存在すると考えられるので、全部で９本柱の可能性が高い。大型住居の主柱穴にふさわしく、床面から 80㎝前後の深さまで掘りこまれており、ほとんどが土層断面の状況から建て替えに伴って柱を抜き取ったことが分かる。床面のほぼ中央に、現代の住宅に伴う大型の撹乱土坑が掘りこまれているため、中央ピットは確認できなかった。しかし、撹乱土坑の南側で検出した小ピットは床面のほぼ中央に位置しており、他の竪穴住居跡で確認された中央ピットに付随する小ピットに相当するものであれば、本来は撹乱土坑の範囲内に中央ピットが存在したと推定される。また、床面中央の撹乱土坑から、北側の撹乱土坑の間で南北方向の溝を検出しており、中央ピットから斜面下方の北側へ排水溝が伸びていた可能性が考えられる。

SI10 調査風景

SI10-A は壁体溝内側の面積が約 50㎡で、床面の直径が５～６mの一般的な竪穴住居の約２倍あった。床面で検出された柱穴も通常の竪穴住居跡の約４倍で、調査にも数倍の時間がかかった。

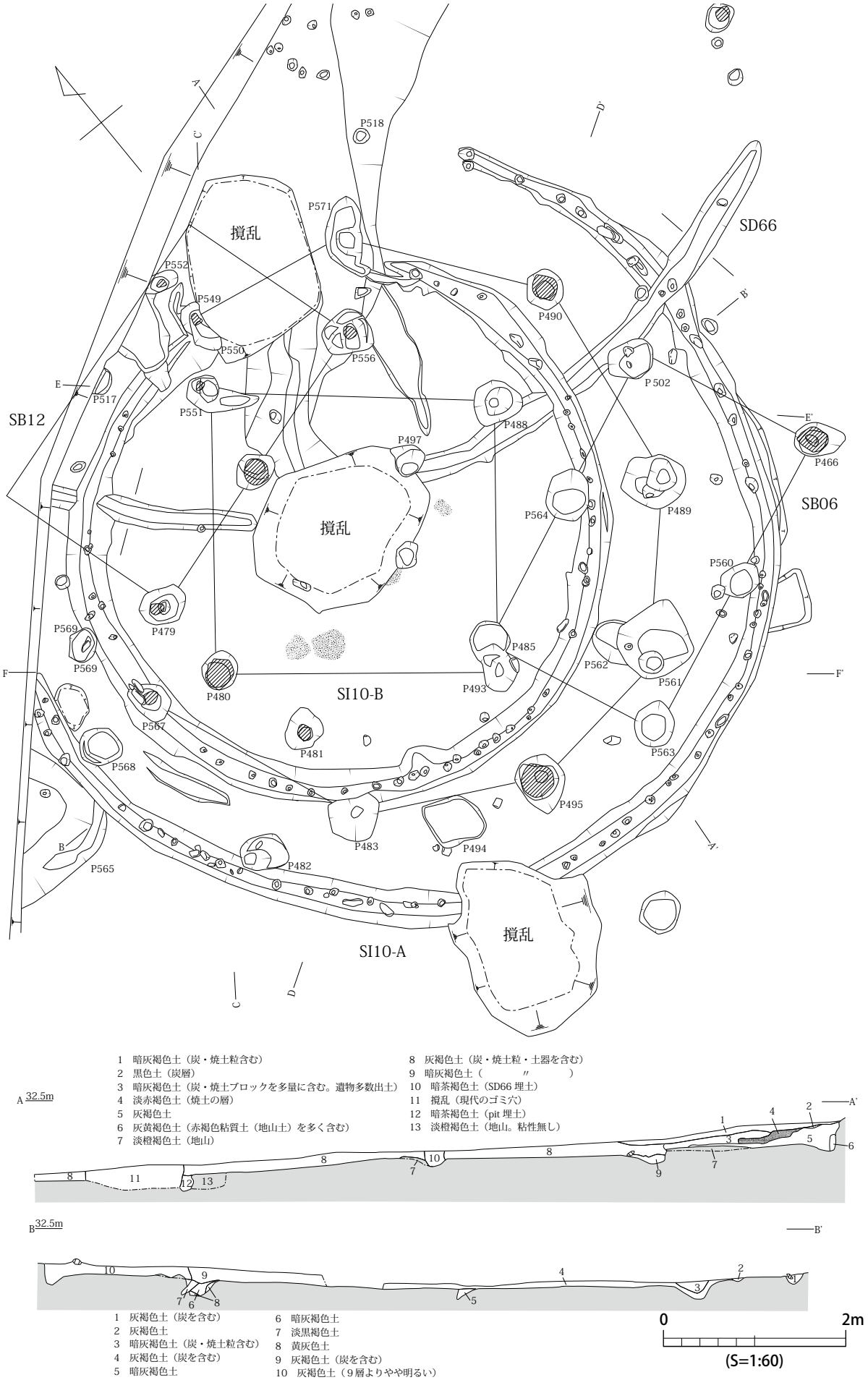


図 19.　SI10 実測図 (1)

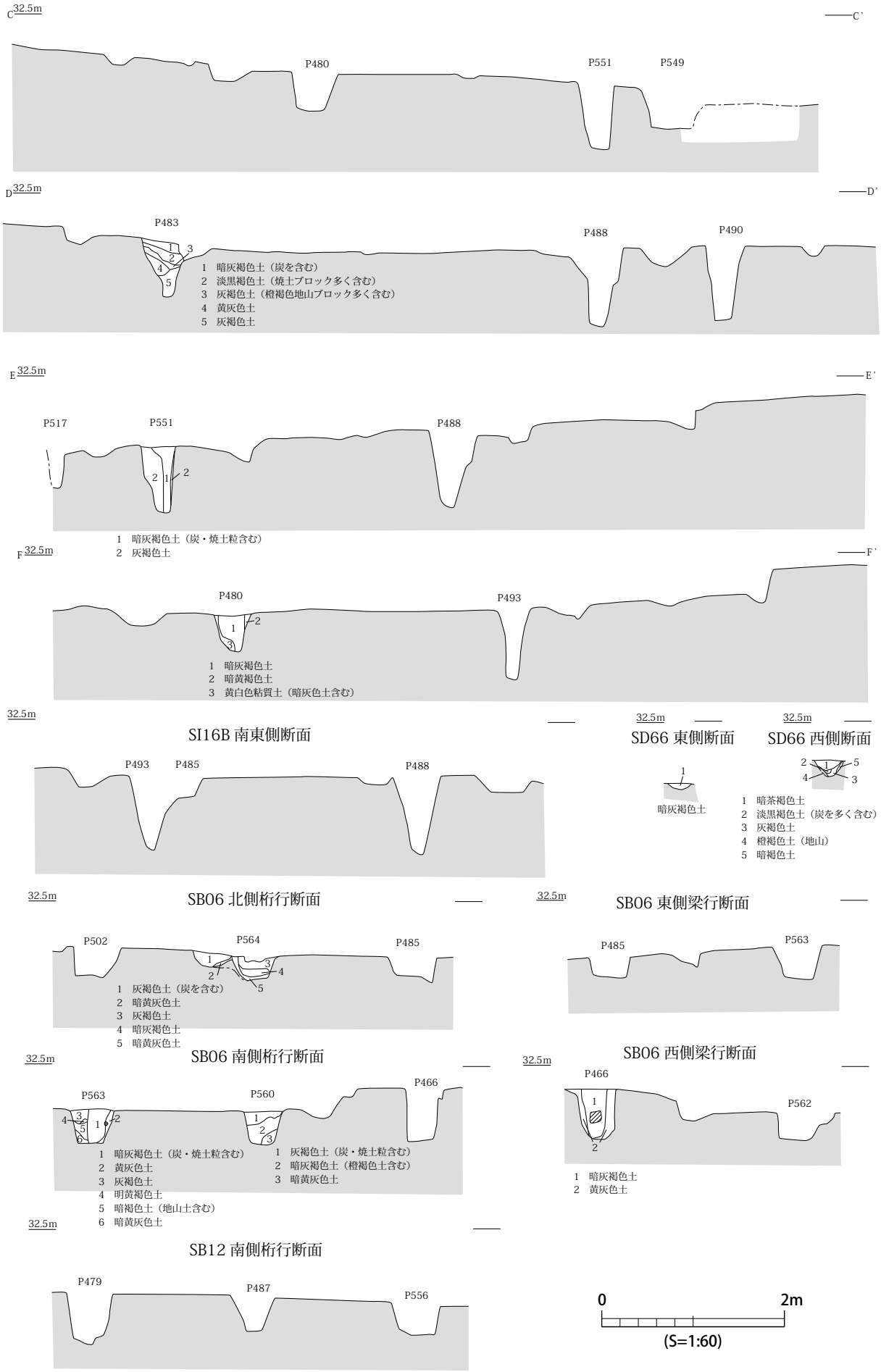


図 20.　SI10 実測図 (2)

SI10-B は、床面の規模が径 5 ～ 5.5 mの円形で、北側の撹乱周辺を除いて、壁体溝がほぼ全周している。集柱穴は壁体溝に近い位置の、P480・488・493・551 の 4 本と判断した。壁体溝内では、SI110-A と同じく小型の石や連続する小ピットが検出された。

このように、遺構の切り合い関係から 1 回の建て替えを確認できたが、SI110-A と B の西側の壁体溝の間で、壁体溝の可能性がある幅 20㎝前後の浅い溝を検出しており、さらに何回かの建て替えが行われた可能性が考えられる。

また、SI10 の床面北寄りでは、緩く弧を描いて調査区外の西側へと続く溝 SD66 が検出された。SI10 の埋土の上から掘り込まれているので、SI10 より後の遺構であることは確かだが、溝の性格や詳しい時期は不明である。この溝の続きと考えられる溝が平成 20 年度調査区で検出されており、溝の全長が 20 m以上あったことが分かっている。

なお、SI10B と SB06 の前後関係は、P485 と 493 の切り合い関係から、SB06 が新しいと判断できる。

遺物は弥生土器、石器、鉄器が出土した。ほとんどの遺物が建て替え前の SI10-A の床面部分で出土し、さらに炭・焼土が厚く堆積した南側での出土がその大部分を占めている（図 21）。この出土状況から、SI10-A 床面南側で出土した遺物は住居の建て替えに伴って廃棄された物で、SI10-A 廃棄の時期を示していると考えられる。

図示した弥生土器のうち、1 ～ 5 は弥生時代中期後葉と判断したものである。2・3 はⅣ -2 様式の甕で、SI10-A が中期後葉にはすでに建てられていたことを示している。

6 ～ 12 がⅤ -1 様式、13 ～ 27 がⅤ -2 様式と判断した土器で、大部分が甕だった。このうち同一個体の可能性が高い 13・14 は SI10-A の南側の主柱穴 P561 周辺の浅い窪みから出土した甕で、出土した時は小片になっていたが、SI10 出土弥生土器の中では唯一全形を復元できる土器である。こうした状況から、SI13・15 でみられるような建物廃棄の祭祀に関わる土器の可能性が考えられる。サイズは二回りほど大きいが、石見Ⅴ -2 様式の指標となっている江津市波来浜遺跡 B-3 号墓の甕とプロポーションが非常によく似ている。35 ～ 38 は後期の底部と判断したもので、36 は底部の中心に径 7㎜の孔が開けられている。小型の鉢 39 の内面にはごくわずかだが、丹塗りの痕跡が残っている。SI10 では遺構内で 2 点、周辺で 2 点鉄器が出土している。いずれも器種不明の小

SI10 周辺の竪穴住居跡

SI10 の周辺では、3 棟の竪穴住居跡が確認されている。出土した遺物や床面の形状から、およそ SI10-A、SI10-B・SI01、SI07、SI11 の順に新築または建て替えられたと考えられる。

遺構の検出されなかった尾根筋の平坦地を挟んだ、南側の住居群の変遷もほぼ対称となる状況だった。

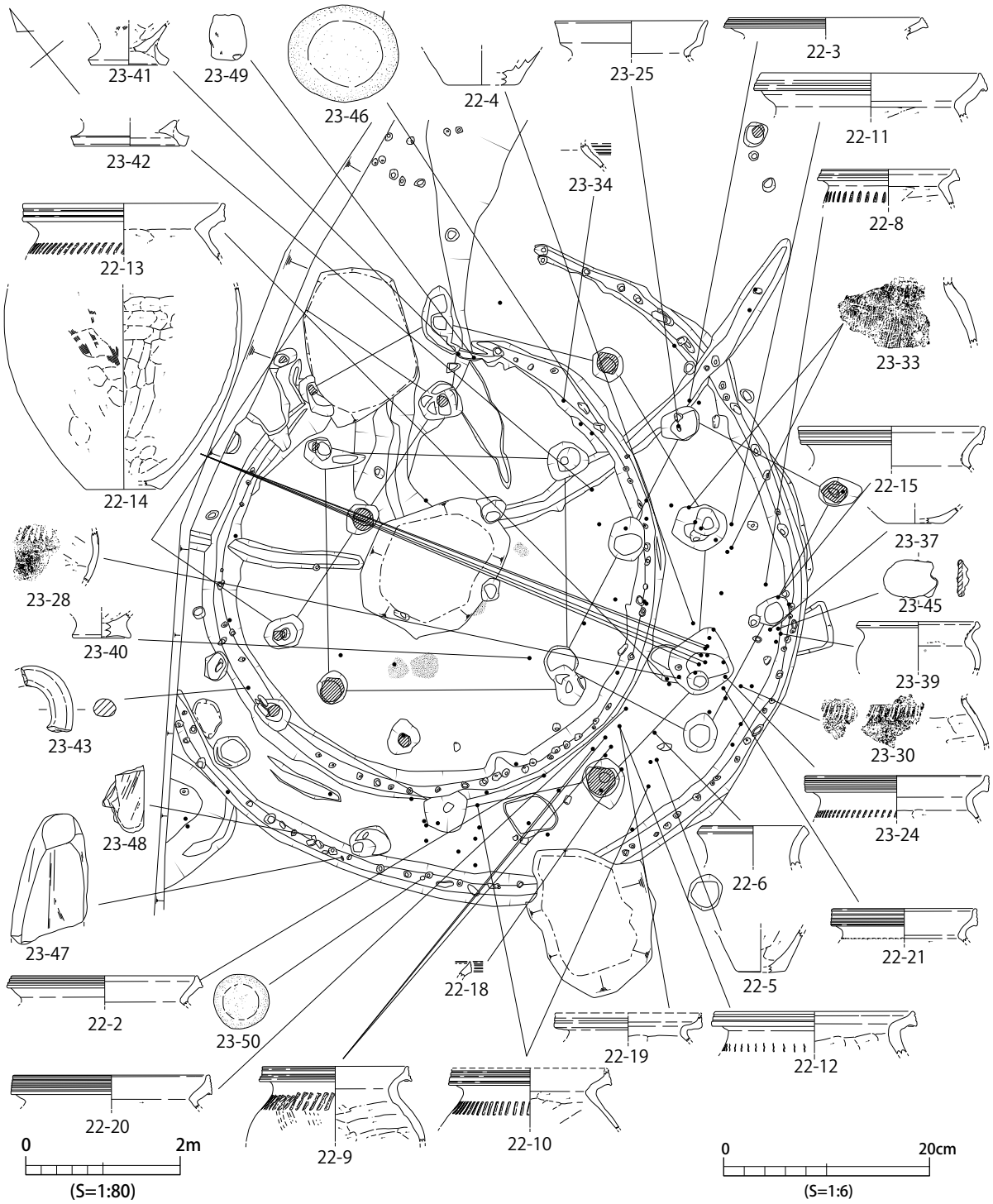


図 21.　SI10 遺物出土状況図

片だが、SI10 を検出した西区北側の竪穴住居群も、複数の鉄器を保有し、その中心が SI10 だったことは注目される。

以上の状況から、SI10-A はおよそ弥生時代後期中葉頃に建て替えを行った竪穴住居跡で、事前に柱を抜き取って上屋を焼却し、炭化材や焼土を南側に片付けたのちに、建物の規模を縮小し SI10-B に建て替えたと考えられる。SI10-B が存続した時期は不明だが、出土遺物の中にⅤ -3 様式と判断できる遺物が含まれていなかったので、後期後葉までに廃棄されたと考えられる。

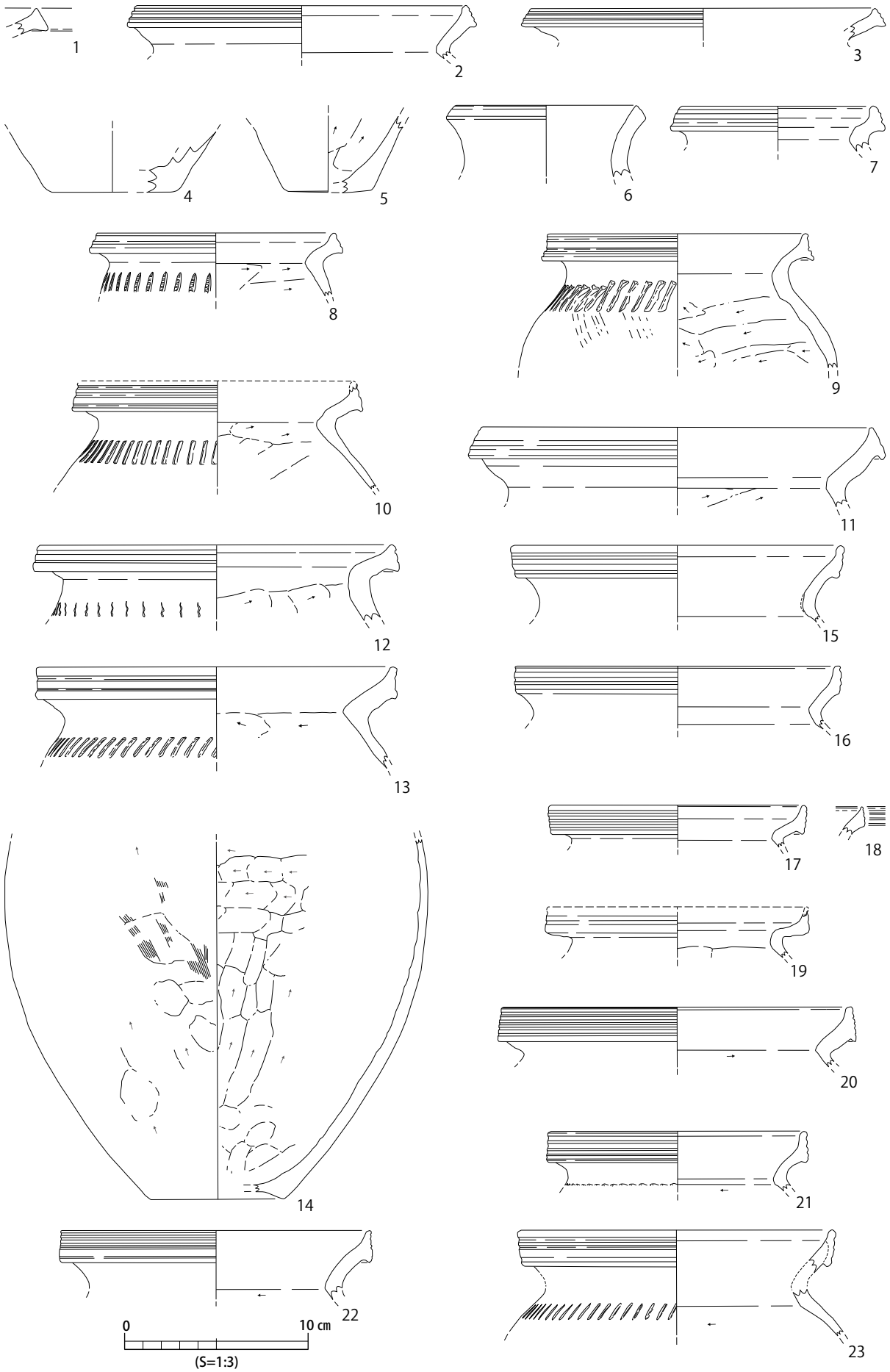


図 22.　SI10 出土遺物実測図 (1)

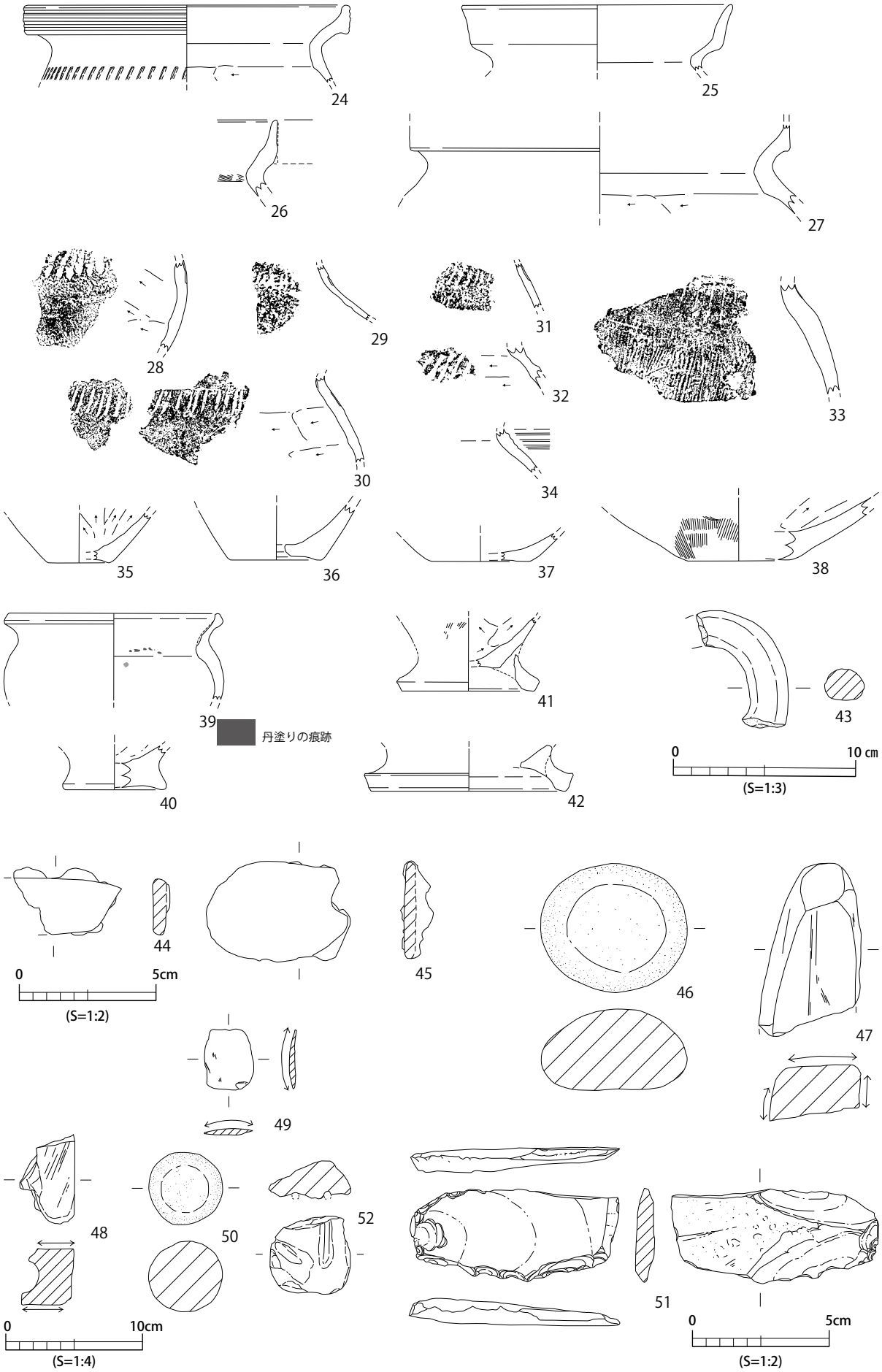


図 23.　SI10 出土遺物実測図 (2)

第5表　SI10出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	22	72	弥生土器	壺か	SI10	不明					内:不明 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	弥生時代中期
2	22	72	弥生土器	甕	SI10	1	(16.4)			口縁端部は上下に拡張し、外面に3条の凹線文を施す	内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	Ⅳ－2様式
3	22	72	弥生土器	甕	SI10	不明	(18.8)			口縁端部はわずかに上下に拡張し、3条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	Ⅳ－2様式
4	22	72	弥生土器		SI10	1		(5.6)		平底	内:不明 外:ナデか	4mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:浅黄橙色(10YR8/3)	弥生時代中期
5	22	72	弥生土器	不明	SI10	1		4.2		やや下にふくらむ　平底	内:ヘラケズリ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:灰白色(10YR8/1)	弥生時代中期
6	22	72	弥生土器	壺	SI10		(12.4)				内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	Ⅴ－1様式
7	22	72	弥生土器	甕または鉢	SI10-A P561		(10.4)			口縁端部上下に拡張し、2条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	Ⅴ－1様式
8	22	72	弥生土器	甕	SI10	1	(12.8)			口縁端部を上下に拡張し2条の凹線文を施す。肩部に二枚貝腹縁による刺突文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	Ⅴ－1様式
9	22	72	弥生土器	甕	SI10	1	(12.8)			口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す。頸部下にヘラによる直線文を施す	内:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄色(2.5Y6/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	Ⅴ－1様式
10	22	72	弥生土器	甕	SI10	1	(15.4)			口縁端部を上下に拡張し3条の凹線文を施す。頸部下に直線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/4) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	
11	22	72	弥生土器	甕	SI10	1	(18.7)			口縁端部を上下に拡張し、2条以上の沈線を廻らせる	内:ナデ、ケズリ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い橙色(5YR6/4) 外:淡橙色(5YR8/3)	Ⅴ－1様式　二次的に火を受けている
12	22	72	弥生土器	甕	SI10	不明	(18.6)			口縁端部を上下に拡張し、2条の沈線を廻らせる	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR7/1)	Ⅴ－1様式
13	22	72	弥生土器	甕	SI10 P562	不明	(19.4)			口縁端部を上下に拡張し、2条の凹線文を施す。頸部下にヘラによる直線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR7/1)	Ⅴ－2様式(古)
14	22	75	弥生土器	甕	SI10 P561-A			(7.3)		上げ底状	内:ヘラケズリ、ナデ、コビオサエ 外:ヘラケズリ、ハトメ、ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/2) 外:鈍い黄橙色(10YR7/2)	Ⅴ－2様式
15	22	73	弥生土器	壺	SI10	1	(20.0)				内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	Ⅴ－2様式
16	22	73	弥生土器	甕	SI10	1	(15.8)				内:ナデ 外:不明	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	Ⅴ－2様式
17	22	73	弥生土器	甕	SI10 トレンチ		15.4				内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/2) 外:灰黄褐色(10YR6/2)	Ⅴ－2様式
18	22	73	弥生土器	甕	SI10	1					内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:褐灰色(10YR6/1) 外:褐灰色(10YR6/1)	Ⅴ－2様式(古)
19	22	73	弥生土器	甕	SI10		15.4				内:ナデか　磨滅している 外:ナデか　磨滅している	2mm以下の砂粒を含む	内:褐灰色(10YR6/1) 外:褐灰色(10YR5/1)	Ⅴ－2様式(古)
20	22	73	弥生土器	甕	SI10		(19.8)				内:ナデ 外:ナデ、ケズリ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	Ⅴ－2様式(古)
21	22	73	弥生土器	甕	SI10		(15.5)				内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	Ⅴ－2様式(古)
22	22	73	弥生土器	壺	SI10 トレンチ		(17.8)			口縁端部を上下に拡張し、5条以上の沈線を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒をやや多く含む	内:明黄褐色(10YR6/6) 外:灰白色(10YR8/2)	Ⅴ－2様式(古)
23	22	73	弥生土器	甕	SI10		(17.6)				内:ナデ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:褐灰色(10YR6/1) 外:褐灰色(10YR6/1)	Ⅴ－2様式(古)
24	23	73	弥生土器	甕	SI10		19.6				内:ナデ 外:ナデ、ケズリ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR7/1) 外:灰白色(10YR7/1)	Ⅴ－2様式(古)
25	23	73	弥生土器	甕	SI10		(13.3)				内:ナデか 外:ナデか	3mm以下の砂粒を含む	内:褐灰色(5YR5/1) 外:褐灰色(5YR5/1)	Ⅴ－2様式(新)
26	23	73	弥生土器	甕	SI10 トレンチ						内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/1)	Ⅴ－2様式(新)
27	23	73	弥生土器	甕	SI10	1	21.4				内:ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ 外:不明	3mm以下の砂粒を含む	内:淡黄橙色(10YR8/4) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－2様式(新)
28	23	74	弥生土器	甕	SI10					列点文	内:ナデ 外:ケズリ	3mm以下の砂粒を含む	内:褐灰色(10YR6/1) 外:灰白色(10YR7/1)	弥生時代後期
29	23	74	弥生土器	甕	SI10 南壁壁体溝					押引文	内:ナデ 外:不明	1mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:浅黄橙色(10YR8/3)	弥生時代後期
30	23	74	弥生土器	甕	SI10 (南西)	1(2)				肩部に直線文を施す	内:ナデ 外:ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	
31	23	74	弥生土器	甕	SI10	1				肩部にシャープな直線文を施す	内:ナデか 外:磨滅のため不明	1mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	弥生時代後期
32	23	74	弥生土器	甕	SI10 南北ベルト	2				肩部に直線文を施す	内:ナデ 外:ケズリ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR7/1) 外:灰白色(10YR8/2)	弥生時代後期
33	23	74	弥生土器	甕	SI10	1				頸部から肩にかけて金属器(？)によるシャープな直線文を施す	内:ナデ、ハケメ 外:ナデ、ケズリ	5mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/3)	弥生時代後期
34	23	74	弥生土器	甕	SI10	1				肩部に4条の凹線文を施す	内:ナデ 外:磨滅のため不明		内:灰黄褐色(10YR6/2) 外:灰黄褐色(10YR7/6)	弥生時代後期
35	23	74	弥生土器	甕	SI10 P483	不明		(3.7)		上げ底	内:ヘラケズリ 外:ヘラケズリ後ナデ		内:褐灰色(10YR4/1) 外:褐灰色(10YR4/1)	弥生時代後期
36	23	74	弥生土器		SI10 南東	1		(4.1)		底部中心に径7mm孔を牙を穿孔している	内:ヘラケズリ後ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黒褐色(10YR3/1) 外:灰白色(10YR8/2)	弥生時代後期
37	23	74	弥生土器	不明	SI10	1		4.6		器壁が薄い	内:不明 外:不明		内:黒褐色(7.5YR3/1) 外:褐色(7.5YR4/4)	弥生時代中期か
38	23	74	弥生土器	不明	SI10	不明		4.8			内:ヘラケズリ 外:ハケメ、ナデ	7mm以下の砂粒を含む	内:黒褐色(10YR3/1) 外:褐灰色(10YR5/1)	弥生時代後期か
39	23	74	弥生土器	鉢	SI10	1	(11.4)				内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:明黄褐色(10YR6/6)	弥生時代後期
40	23	74	弥生土器	台付鉢	SI10			(6.1)			内:ナデ 外:ヘラケズリか	3mm以下の砂粒を含む	内:褐灰色(10YR4/1) 外:褐灰色(10YR4/1)	Ⅴ－1様式
41	23	74	弥生土器	台付鉢	SI10-B 壁体溝			脚台部径 (8.8)			内:ナデ 外:ケズリか	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:灰黄褐色(10YR6/2)	Ⅴ－1様式
42	23	74	弥生土器	台付鉢	SI10			脚台部径 (12.4)			内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR6/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－1様式
43	23	74	弥生土器	把手	SI10	1					内:ナデか 外:ナデか	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/3) 外:鈍い黄橙色(10YR7/3)	Ⅴ－1様式か
44	23	98	鉄製品	不定形の鉄片	SI10-B P488		(器長) 3.0	(器幅) 2.1	(器厚) 0.5		内: 外:		内: 外:	
45	23	98	鉄製品	鏃形鉄製品	SI10-B 壁体溝	1	(器長) 5.3	(器幅) 3.7	(器厚) 0.4	大型の鉄鏃に似ているが、基部等やや不整形である	内: 外:		内: 外:	
46	23	75	石器	磨石	SI10	不明	(器長) 9.4	(器幅) 10.7	(器厚) 6.0		内: 外:		灰白色(5Y7/2)	重さ:880.19g
47	23	75	石器	砥石	SI10	不明	(器長) 12.7	(器幅) 7.4	(器厚) 4.7		内: 外:		暗灰黄色(2.5Y5/2)	重さ:520.19g
48	23	75	石器	砥石	SI10	不明	(器長) 6.5	(器幅) 4.0	(器厚) 4.1		内: 外:		灰オリーブ色(5Y5/2)	重さ:114.36g
49	23	75	石器	磨製石斧	SI10	1	(器長) 4.5	(器幅) 3.6	(器厚) 0.5		内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:10.54g
50	23	75		不明	SI10	不明	(器長) 5.3	(器幅) 5.4	(器厚) 5.1		内: 外:		オリーブ灰色(10Y6/2)	重さ:222.41g
51	23	75	石器		E6	1					内: 外:		灰色(10Y6/1)	重さ:23.94g
52	23	74	土壁		SI10	2層茶褐色土					内: 外:		橙色(7.5YR6/8)	

SI09（図 24・25、写真図版 24）

西区の南側の D9 グリッドで検出した竪穴住居跡である。この辺りも現代の宅地造成によって、旧地形を大きく削り取られていた。検出された遺構は上面を削られているため浅いものが多かったが、その中で規模の大きい柱穴がほぼ正方形に並び、その中央付近にやや浅いピットのある場所を確認した。そして、各柱間の距離が 2.7 ～ 2.8 m と、遺跡の所在する益田市周辺で確認され

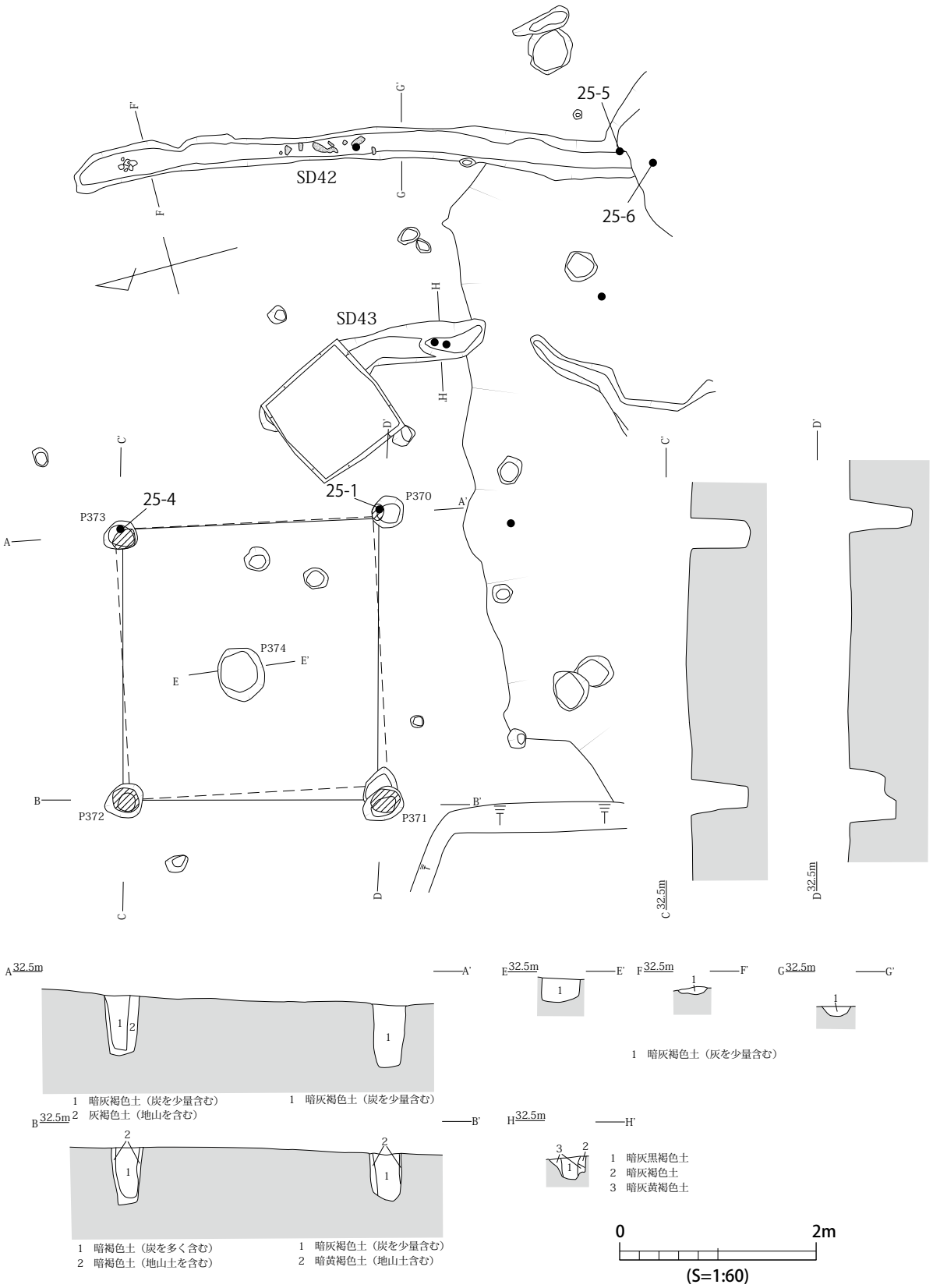


図 24.　SI09 実測図

た主柱穴が 4 本の竪穴住居の例と比較して矛盾しないことから、床面も壁体溝も全て削平された弥生時代の竪穴住居跡と判断し、SI09 とした。堂ノ上遺跡で検出された竪穴住居跡の壁体溝の標準的な深さは約 15㎝で、本来の主柱穴の深さは約 80㎝だったとみられる。SI09 の南西の主柱穴 P371 は、東側で一段浅くなる柱穴と切り合っている。さらに、P370 の柱痕が柱穴内の北側にかなり寄っていることを考慮すると、当初は浅い方の柱穴で建てられていた住居（図 24 破線の柱配置）を、時計回りに僅かに回転させて建て直したと考えられる。

SI09 では主柱穴の柱痕（抜き取り痕）部分で、弥生時代後期前葉（1・2）から中葉（4）の土器が出土している。SD42 では北側で弥生時代後期の甕の胴部が出土したほか、南端で後期前葉の台付鉢（5）と器台または高坏（6）の脚部が出土している。また、SI09 を検出した D9 グリッドの南側の D10 グリッドで、弥生時代後期前葉の土器が最も多く出土していることから、SI09 は弥生時代後期前葉を中心に建てられていた竪穴住居の跡と判断される。

SI09 の 4 本の柱から約 3.6 m東側で、検出面の幅が 30 ～ 40㎝の溝状遺構 SD42 が検出されている。ほぼ直線に南北に伸びているが、わずかに弧を描き、溝の中から弥生土器や焼土が出土したことから、SI09 の外周溝である可能性が考えられる。この場合、出土遺物の時期や遺跡内の他の竪穴住居跡の例から、周堤の幅が 2 m前後はあると考えられ、同じく標準的な壁体溝の幅 40 ～ 50㎝を考慮すると、SI09 の床面の規模は径約 5 mの円形だったと推測される。

以上の調査成果の検討結果から、SI09 では、大きく柱の配置を変更する建て替えが見られず、弥生時代後期前葉から中葉の一時期に建てられた標準的な竪穴住居と位置づけられる。

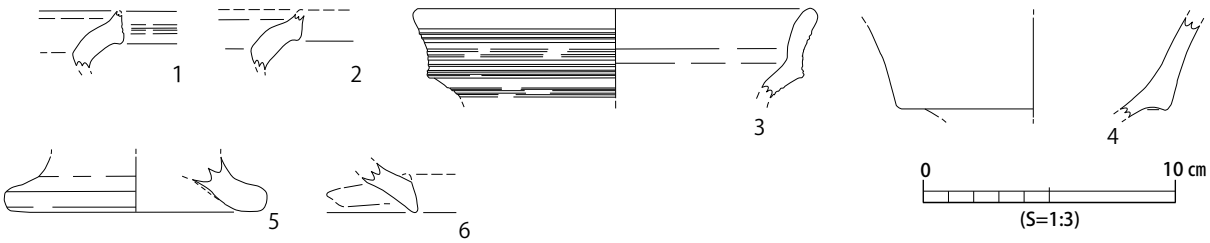


図 25.　SI09、SD43 出土遺物実測図

第6表　SI09、SD42出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	25	80	弥生土器	甕	SI09 P370	不明				口縁外面に2条以上の沈線を廻らせる	内:磨滅のため不明 外:磨滅のため不明	4mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/4) 外:淡黄色(2.5Y8/4)	弥生時代後期
2	25	80	弥生土器	甕	SI09 P372	不明					内:不明 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:黄橙色(10YR7/8)	弥生時代後期
3	25	80	弥生土器	甕	SI09	不明	13.2			貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:不明 外:ヨコナデ、ハケメ		内:橙色(7.5YR6/8) 外:橙色(7.5YR6/8)	
4	25	80	弥生土器	器台	SI09 P373	不明					内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:黄橙色(10YR7/8)	弥生時代後期
5	25	80	弥生土器	台付鉢	SD42	1		9.8			内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	V－1様式
6	25	80	弥生土器	器台か	SD42	1					内:ヘラケズリ 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:灰褐色(7.5YR6/2) 外:橙色(7.5YR7/6)	弥生時代後期

SI08（図 26 ～ 29、写真図版 25 ～ 27・80）

西区の南側の C9 グリッドで検出した竪穴住居跡で、床面から上を削平されているため、柱穴の配置と南側の壁体溝から住居の規模を復元した。復元にあたって、住居の中心となる中央ピットは、ピットの規模や、遺跡内の他の竪穴住居跡でも見られた住居跡中心の小ピットが複数確認できることから、P331 とした。

竪穴住居の主柱穴の配置は、現地で確認した 5 本柱の配置（P314 ‐ 434 ‐ 424 ‐ 335 ‐ 328）が南側の壁体溝との関係も最も妥当と考えられる。この時の床面の規模は、中央ピットの東寄りに掘られた小ピットが床面の中心であると仮定して、直径約 6 mの円形だったと推定される。その他に 4 本柱の配置も復元したが、他にも竪穴住居の柱穴と見られるピットがあり、南側で検出された壁体溝が 4 本あることから、少なくとも同じ場所で 3 回の建て替えが行われたと考えられる。また、検出した柱穴には、柱痕部分に炭や焼土を多く含むものが複数あり（写真図版 27 上）、SI08 が焼失住居である可能性を示している。

SI08 は床面が失われているため、住居の時期を示す遺物はほとんど出土していない。P424 で出土した弥生土器の底部（1）は後期の土器と判断されるが、詳しい年代は不明である。

SD37（図 26・29、写真図版 27・80）

SI08 の東側で検出した幅約 30㎝の溝状遺構で、北西から南東に緩くカーブしている。検出した長さは約 4.7 mで、中央部分で後世の撹乱によって分断されている。

溝の東側は地形に沿って傾斜しており、床面に焼土塊が堆積していた。また、土器が数点出土し、このうち図示した鼓形器台（2）は、石見Ⅴ -4 様式、弥生時代終末期のものである。

一方、溝の西側は、溝の床上に幅 10㎝前後の灰白色の粘土のかたまりが堆積していた。遺跡内でこのような遺構は確認されておらず、溝の機能については判断できなかった。ただし、SD37 を検出した北東側では、全く遺構が検出されなかったので、SD37 から西側で検出した遺構に関係する施設と考えられる。

第7表　SI08、SD37出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm)			形態・文様の特徴	調 整	胎 土	色 調	備 考
							口径	底径	器高					
1	29	80	弥生土器	甕	SI08 P424	不明		4.2		底部接地部に段がある	内:ヘラケズリ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:黒褐色(7.5YR2/1) 外:黒色(7.5YR1.7/1)	弥生時代後期
2	29	80	弥生土器	鼓形器台	SD37B						内:ナデ 外:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－4様式

SB05（図 26・27、写真図版 25）

SI08 の北側で検出した P468 ‐ 474 は、検出した場所のほかに、他のピットと比較して床面の標高が 20㎝前後高い。SI08 と重複する建物の柱穴と考え、周辺を精査し遺構検出を行ったが、P468 の北側では柱穴が 1 基も検出されなかった。そこで、1 間× 1 間の建物を想定し、SB05 とした。SB05 は遺構の西側が大規模に撹乱されており、柱穴の存在が予想される箇所をピンポイントで掘り下げたが、対応する柱は確認できなかった。

P468 ‐ 474 を結ぶ線と、SD37 西側の方向がほぼ一致するので、関連する遺構の可能性がある。さらに、竪穴住居の可能性も考えられるが、柱穴間の間隔が 2.3 mと狭いことから、古墳時代の住居跡の可能性も考えられる。

図 26.　SI08 実測図 (1)

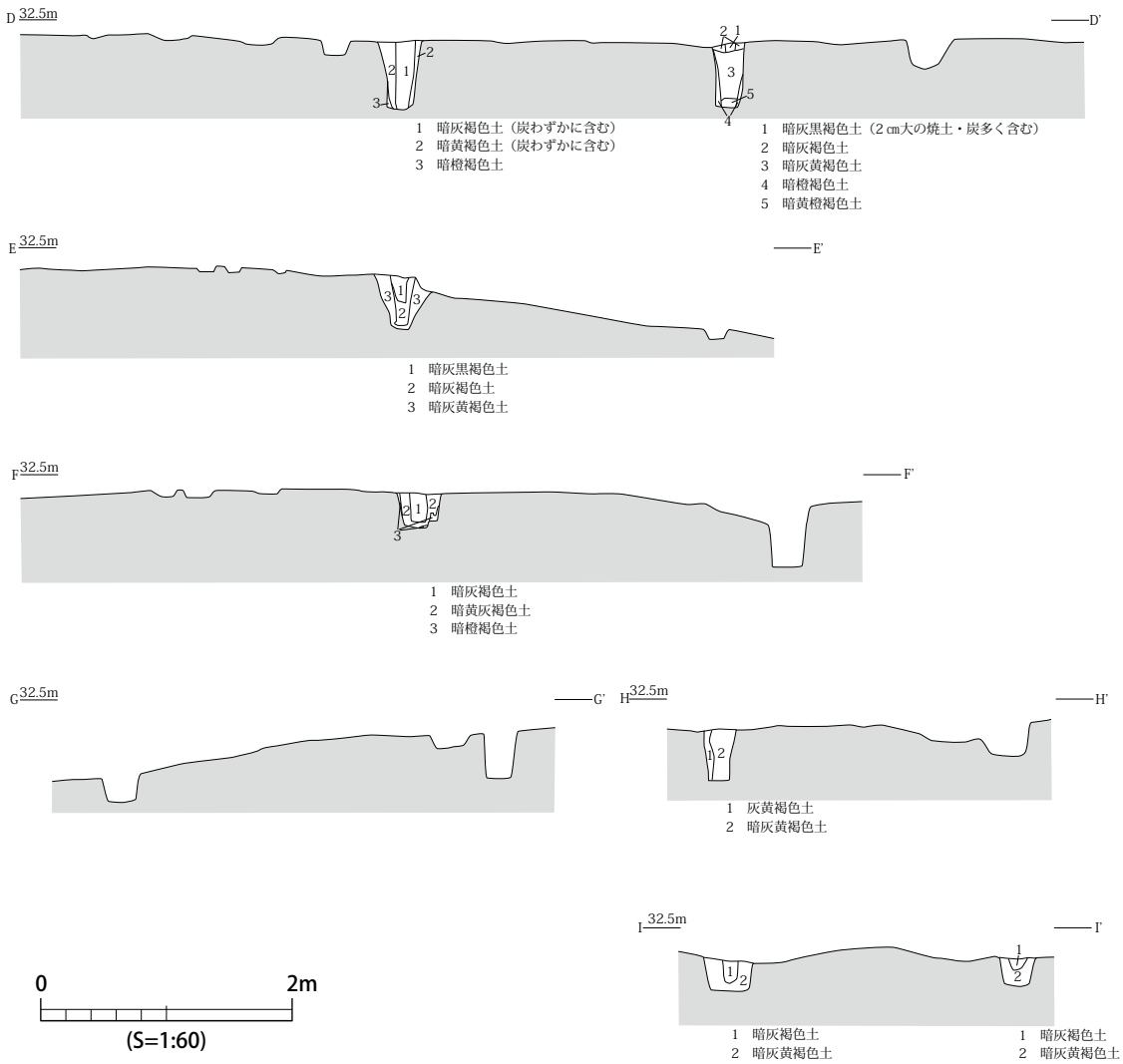


図 27.　SI08 実測図 (2)

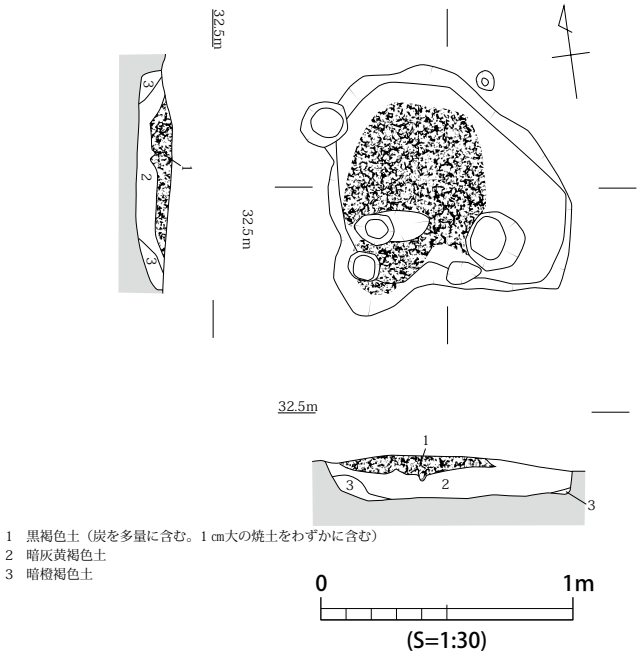


図 28.　SI08　P331 実測図

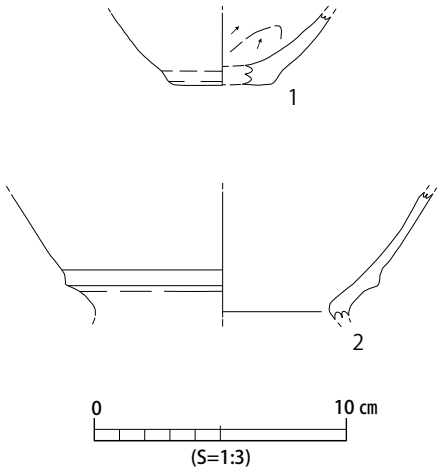


図 29.　SI08、SD37 出土遺物実測図

SI12（図 30 ～ 32、写真図版 28・29・81）

東区の溜池の北側では、表土掘削後の地山面で多数の柱穴や土坑、溝状遺構が検出された。このうち、柱痕部分に炭や焼土が多く含まれる柱穴は、床面を削平された焼失住居の柱穴と考えられ、柱穴の配置と北側の外周溝（SD93）から竪穴住居の規模を復元した。復元にあたって、住居の中心となる中央ピットは、ピットの規模や、住居跡中心の小ピットが確認できることから、P1058 とした。

SI12 の主柱穴の配置は、柱穴の深さや柱痕の状況から、柱間が 3 m前後の 4 本柱の建て替えと判断した。床面の規模は、SI09 同様周堤の幅を 2 m前後とみて、同じく標準的な壁体溝の幅 40 ～ 50㎝を考慮し、中央ピットの西寄りに掘られた小ピットが床面の中心であると仮定して、直径約 6 mの円形だったと推定される。

その他にも大小のピットを検出しているが、ここで検出されたピットは全て弥生時代の物ではなく、P1044（図版 61）のように近世のピットが含まれている可能性がある。

また、すでに述べたように中央ピット P1058 をはじめ、SI12 の柱穴としたピットには、柱痕部分に炭や焼土を多く含むものがいくつもあった(写真図版 29)。もとは SI13 のような焼失住居だったと考えられる。

SI12 の床面範囲から、北側へ斜面を下る溝状遺構が 2 条（SD108・109）検出されている。溝

SI12 の調査風景

10 月に遺構検出を行った段階では、約半数の柱穴しか確認できなかった。冬になり地面が乾燥しなくなると、続々と遺構が検出され、調査の最終盤になって降雪の中遺構精査を実施した。

は平行して検出され、規模はSD108が幅0.8 m、SD109が幅1.2 mで、長さは11 mである。いずれもSI12の中央ピットの方向から直線的に伸びており、本来は中央ピットとつながっていた可能性が考えられる。溝の中からは弥生土器が出土しており、この２条の溝はSI12の排水溝と考えられる。

SI12は床面が失われているため、住居の時期を示す遺物はほとんど出土していない。しかし、中央ピットから出土した2・5やその周辺の出土遺物をみると、概ね弥生時代後期中葉から後葉頃の土器である。また、8は円形のスカシ穴が4方向に入れられた土器で、周防系土器の器台か高坏の脚とみられる。

以上の状況から、SI12は、約10 m東側に位置するSI16とほぼ同時期に建てられていた、標準的な大きさの竪穴住居の跡で、同一の場所で２回以上建て替えを行っている点は注目される。

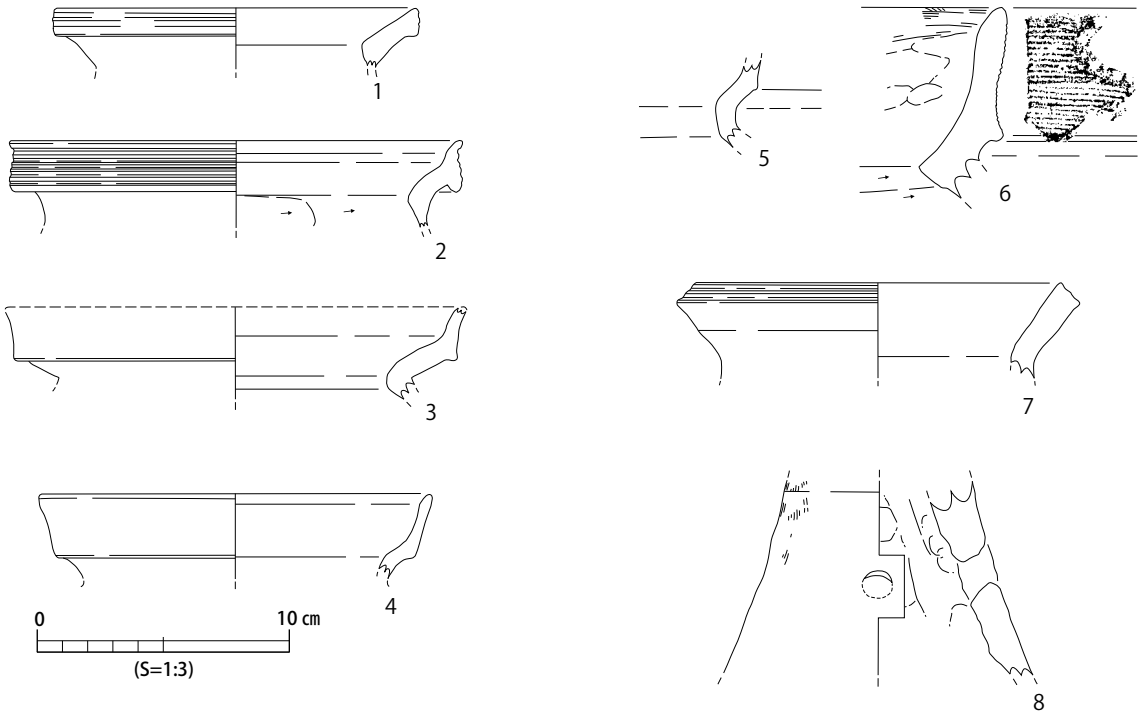
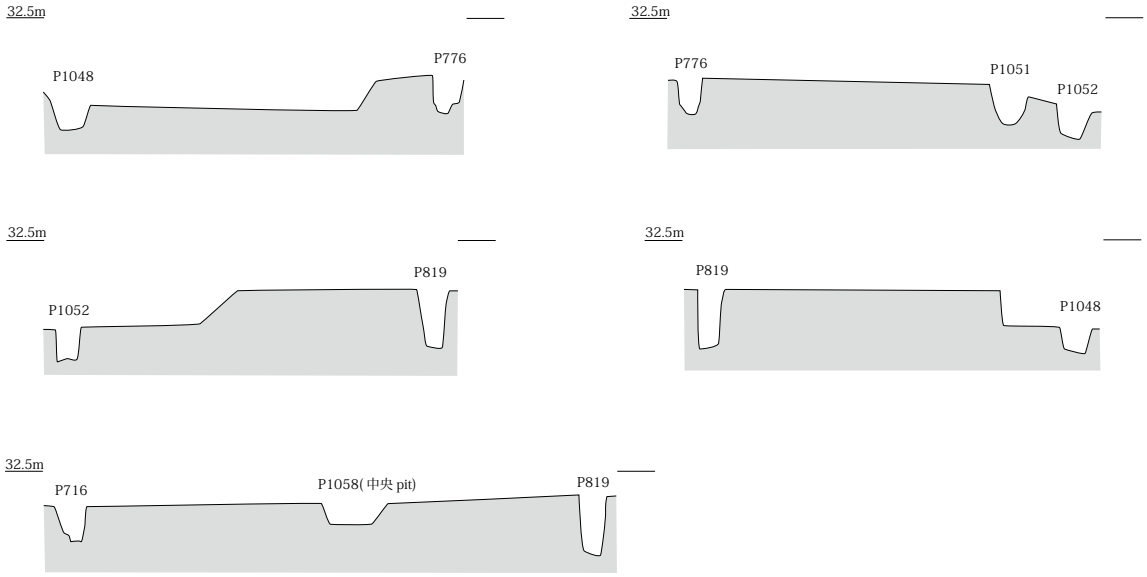


図 30.　SI12、SD109 出土遺物実測図

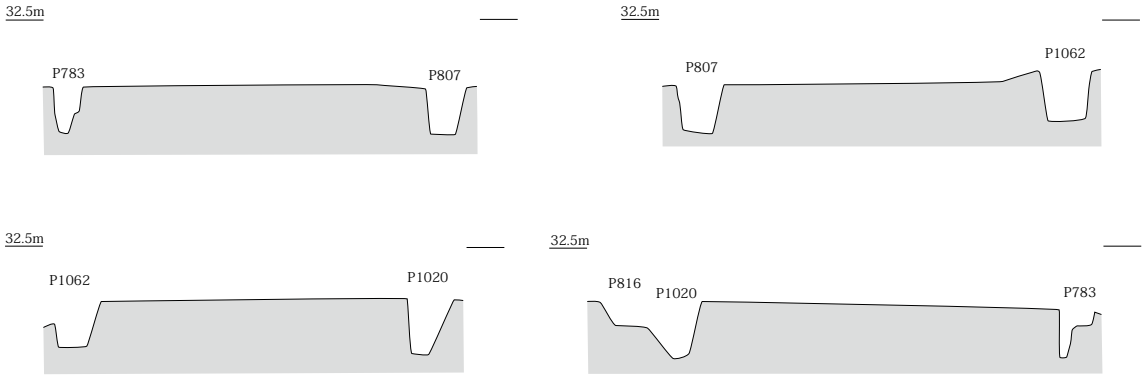
第8表　SI12出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	30	81	弥生土器	甕	SI12 中央ベルト	不明	(14.2)			口縁端部に凹線を2条廻らせる	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:不明	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄褐色(10YR5/3) 外:鈍い黄褐色(10YR5/3)	V－1様式
2	30	81	弥生土器	甕	SI12 P1058 (中央ピット)		(17.8)			口縁端部は上下に拡張し、外面に5条の凹線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	V-2様式
3	30	81	弥生土器	甕	SI12		(18.0)			口縁外面は無文	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V-2様式か
4	30	81	弥生土器	甕	SI12 中央ベルト	不明	(15.5)				内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－3様式
5	30	81	弥生土器	甕	SI12 中央ピット	不明					内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	弥生時代後期
6	30	81	弥生土器	甕	SI12					口縁部外面に貝殻による擬凹線文を施す	内:ハケメ、ユビオサエ、ナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	V-3様式
7	30	81	弥生土器	壺	SD109	1	(14.4)			口縁端部に2条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒(石英)を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:浅黄橙色(7.5YR8/4)	Ⅳ－2様式
8	30	81	弥生土器	高坏か器台	SD109					径約1.2cmのスカシ穴を4方向に入れる	内:ナデ、ユビオサエ 外:タテ方向のハケメ後ナデ	6mm以下の砂粒(石英)を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	周防系 弥生時代後期

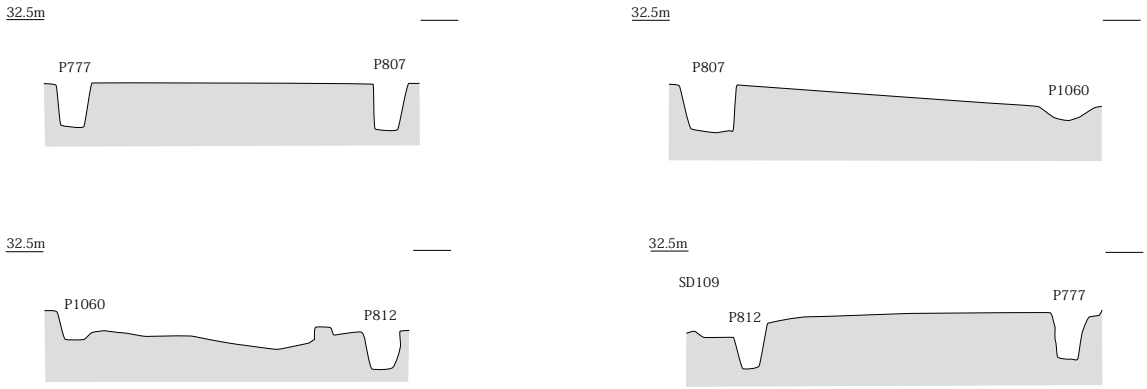
SI12-A



SI12-B



SI12-C



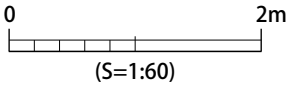


図 31.　SI12 実測図 (1)

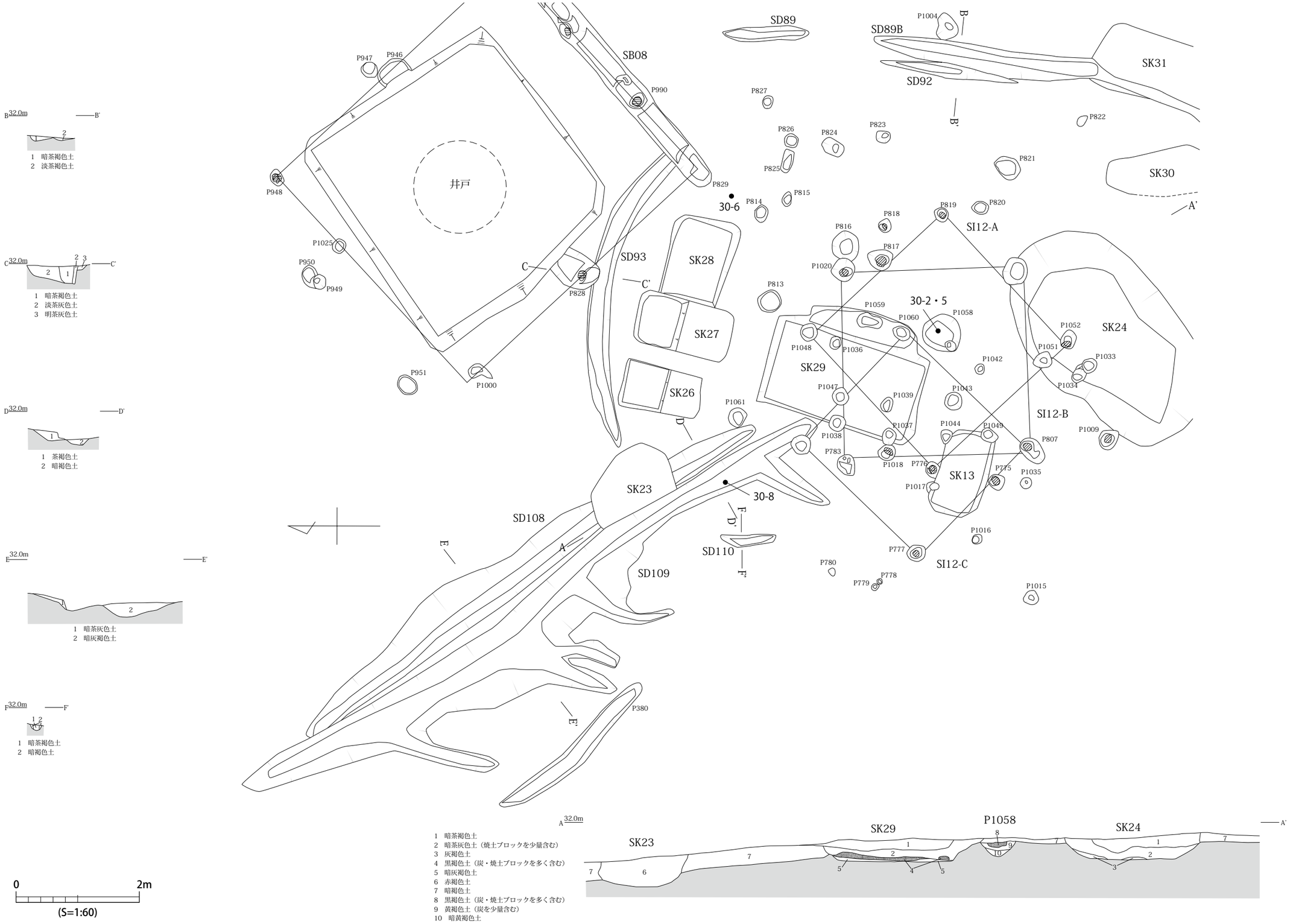


図 32.　SI12 実測図 (2)

SI16（図 33 ～ 35、写真図版 30 ～ 34）

東区東端の緩斜面で検出した竪穴住居跡で、外周溝である SD95・107 を含めた範囲は、M1・2、N1 ～ 3 グリッドにまたがり、遺跡内だけでなく島根県内でも最大規模の竪穴住居跡である。

SI16 を検出した場所は、調査前は墓地になっていた場所で、墓地の移転に伴い住居床面のほぼ中央に長方形の穴が開けられていた。重機による表土掘削後、人力で遺物包含層を掘削した際、後で SI16-A と SD95・107 を検出した範囲で小片になった弥生時代後期の土器が多数出土した。地山面まで掘り下げて遺構検出を行ったところ、直径 9.3 mのという非常に大型の円形プラン（SI16A）と直径約 6 mの円形プラン（SI16B）が検出された（図版 30）。SI16A は一般的な竪穴住居跡の規模をはるかに凌ぐ大きさだったが、すでに西区で大型の竪穴住居跡 SI10 を調査していたこともあり、当初から同心円上に建て替えが行われた竪穴住居跡として発掘調査を行った。床面まで掘り下げて遺構検出作業を行うと、床面の北西で円形にならずに緩い弧を描く壁体溝（SI16C）や隅丸方形状に強く屈曲する壁体溝（SI16D）、約 60 基のピットが検出された。

住居跡の建て替えの順番は、土層断面の状況（図 33）から SI16B を埋めて床面を同心円状に拡大し SI16 A に建て替えていることは明らかである。その他の建て替えについては、土層観察や遺物の出土状況では判断できなかった。しかし、床面が楕円形の SI16C は、同じく楕円形の SI07 の壁体溝からⅤ -4 様式の壺が出土していることや、石見地方の楕円形プランの住居跡の例を参考にすると、後期後葉から終末ごろの住居跡と考えられる。また、膨らんだ隅丸方形ともいえる SI16D は、SI16 に続いて建てられる非常に整った方形の竪穴住居跡 SI14 と SI16C の間を埋める可能性が考えられるが、時期については不明と言わざるを得ない。以上の検討から、SI16 建て替えは、B ‐ A ‐ C ‐ D（？）の順に少なくとも 3 回は行われたと推測される。

各時期の概要

SI16-A　床面の規模が径約 8.6 mの整った円形で、西区で検出した SI10 を超える規模である。床面は SI16B を埋めた後、地山土で床面を整えている。壁体溝は地形が高くなっている南西側の約半分が残っていた。床面と壁体溝の東側が当初予定した調査区からはみ出すことが分かったため、調査区を 80㎝東へ拡張した。西側の壁体溝の床上では、SI10 と同様に拳大前後の小さな石が並ぶようにして出土した。しかし、石を取り上げた後床面を精査したが、SI10 や SI15 のような小規模なピットは連続して検出されなかった。一方で、出土した石には多数の軽石が混じっていた（写真図版 76 右下）。遺跡や近隣では軽石は見られず、何か目的を持って住居に運び込まれたと考えられるが、用途が全く分からなかった。今後の類例増加が待たれる。

SI16 の床面で検出されたピットは約 60 基で、そのほとんどが深さ 50㎝以上の柱穴だった。この中から他の住居跡を参考にして配置を検討した結果、P1057 ‐ 974 ‐ 869 ‐ 997 ‐ 985 ‐ 962 ‐ 930 ‐ 972 ‐ SK42 の 9 本の主柱穴を抽出した。柱穴の規模は大きく大型住居の主柱穴にふさわしく、床面から 70㎝前後の深さまで掘りこまれており、土層断面で建て替えに伴う柱の抜き取りが確認できるものもあった。床面のほぼ中央には、古墓の移転に伴う大型の土坑が掘りこまれているため、中央ピットは確認できなかった。

SI16-B　床面の規模が径 5.5 mの円形で、西側を除いて壁体溝がほぼ全周している。主柱穴は、壁体溝で囲まれた範囲内で規模の大きかった P959 ‐ 969 ‐ 952 ‐ 956 ‐ 1050 の 5 本を抽出し、さらに P1050 北側にもう 1 本あり、6 本だったと判断した。壁体溝内では、小型の石や連続する

小ピットは検出されなかった。

SI16-C　壁体溝が西側と南側しか確認できないため、床面の正確な規模は不明である。ただし、西側で検出した壁体溝があまり弧を描かず、南北方向に長い楕円形であることはわかる。南側の壁体溝は円形の住居のように丸く弧を描いている。南北の長径は、SI16 Aの径より長い可能性もある。主柱穴の配置の復元は、推定される壁体溝で囲まれた範囲内で、SI16A・Bと重複せず、かつ極端に柱間が長くなりすぎないものを抽出した。SI16Cの主柱穴と判断したのは、P976 - 975 - 868 - 1031 - 969 - 928 - 1032の7本で、さらにP976と1032の間にもう1本あり、全部で8本だったと考えられる。また、西側の壁体溝内では、小型のピットが連続して検出された。

SI16-D　SI16A・Cの東側の壁体溝と重複する位置で、住居の南東隅の壁体溝と柱穴を検出した。SI16がある時期に建て替えられた姿で間違いないと判断したが、確認した壁体溝が僅か4m程度だったので、床面の形や主柱の数などほとんど分からない。検出した位置からP932は主柱で良いと考えられ、P956を再利用すれば柱間約3mの4本柱の建物の可能性も考えられる。

SD105　このほか、SI16の床面北側では、幅0.8～1mの断面がコの字状の溝、SD105が検出された。遺構内には良くしまった土が水平に堆積し、最下層には地山土と炭を含む茶灰色土が堆積していた。地山をしっかりと掘りこんであり、壁面も丁寧に仕上げられている。床面は北側へ緩く下り、調査区外へと続いている。SD105の南端から約1mの位置の床面には径約10㎝の小ピットが掘られ、その場所の両壁には幅約10㎝の溝が掘りこんであった。一見この溝に板状の物を固定する

SI16と周辺の竪穴住居跡

SI16の周辺では、5棟の竪穴住居跡が確認されている。このうち直接SI16と建て替えの関係にあると推測されるのは、写真右から2つ目の切り株の位置で検出したSI15と写真左上の方形の住居跡SI14である。この範囲で弥生時代中期末から古墳時代初めまで約200年間建て替えを行いながら住み続けている。このうち最も大型化したSI16Aは、壁体溝内の床面積が約58㎡と推定される。およそ畳38畳分の広さである。

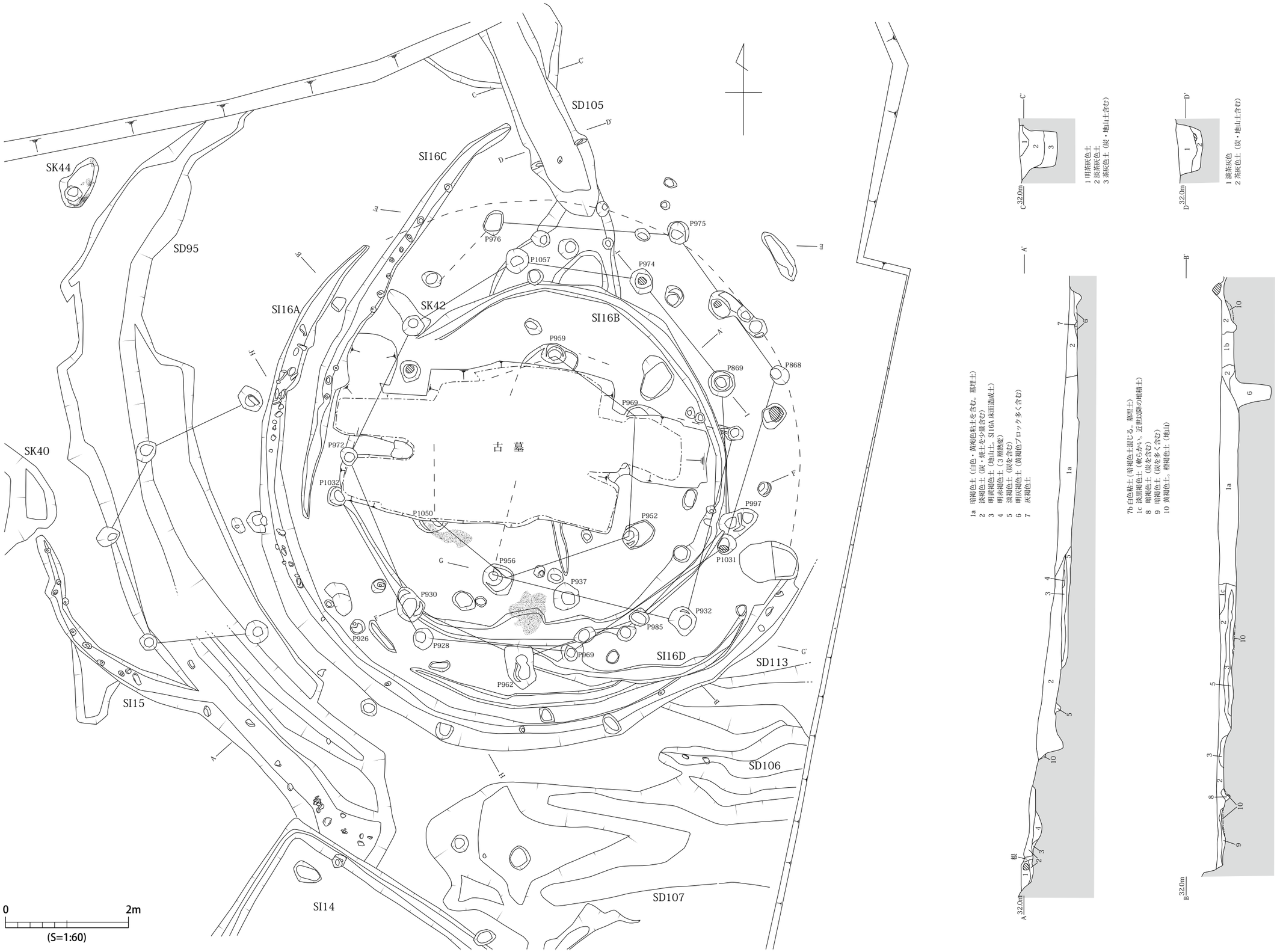


図 33.　SI16 実測図 (1)

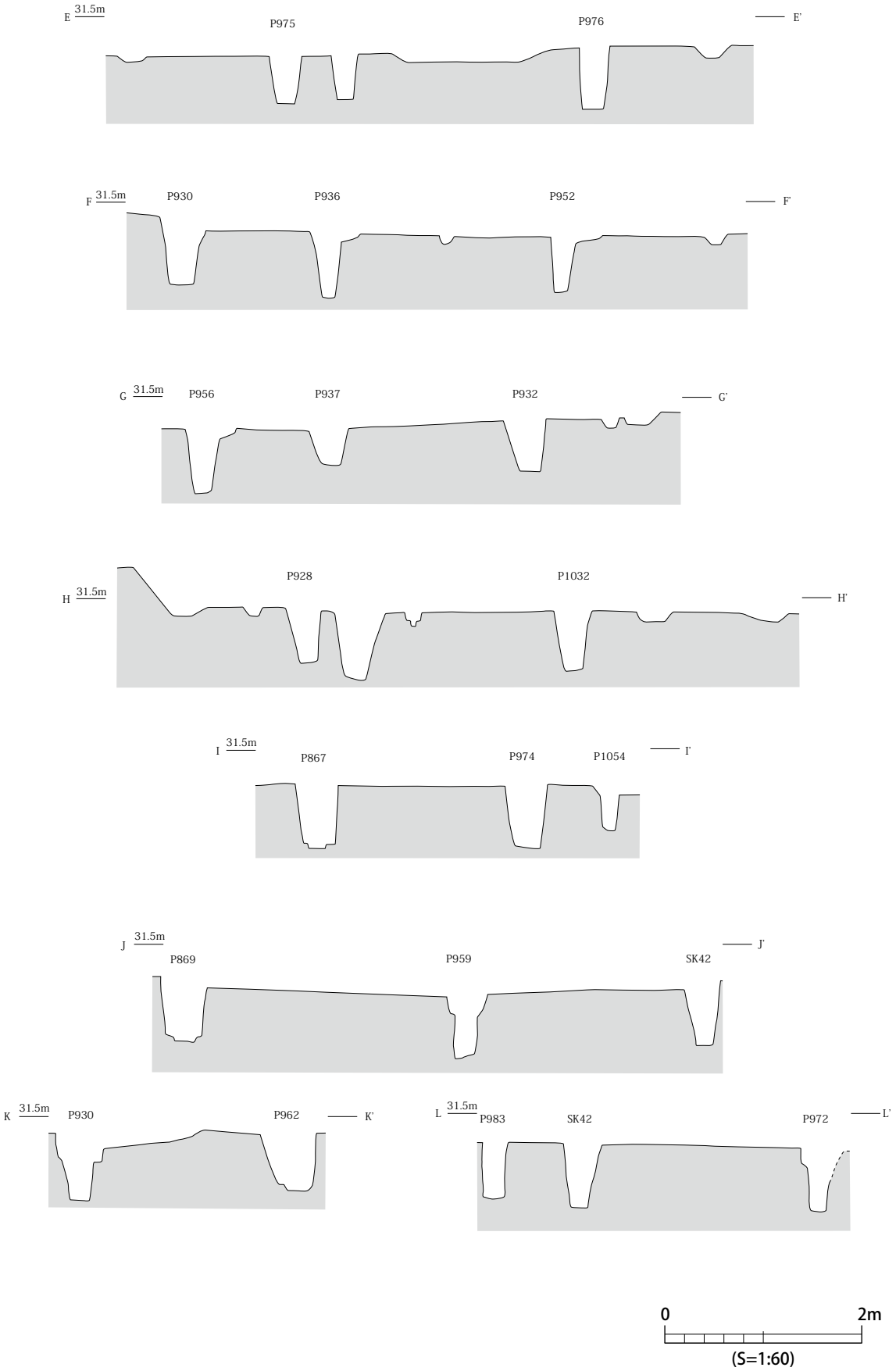


図 34.　SI16 実測図 (2)

施設に見えるが、どのような機能の施設か判断できなかった。SD105 の南端は二股に分かれた浅い段になって SI16B の北側の壁体溝に接続している。埋土の様子から弥生時代の遺構と判断され、出土した弥生土器（37-29）から SI16B に関係する施設と推測されるが、詳しい機能については不明である。

出土遺物（図 36・37、写真図版 77・76・98）

遺物は弥生土器、石器、鉄器が出土した。このうち床面付近で出土した遺物は図 36 で示した土器と石器である。ほとんどが SI16A 及び C の床面部分で出土している（図 35）。出土した土器の時期を見ると、1 以外はほぼⅤ -3 ～ 4 様式の土器である。また、SI16C の主柱穴 P928 の近くで出土した 8 は、県内ではあまり見ない器形で、詳しい時期も不明である。接合できなかったが底部以外のほとんどの破片が出土しており、住居の建て替え、廃棄に伴ってこの位置に置かれた可能性が高いと考えられる。SI16C が廃棄された時期は、床面で出土した土器の年代から弥生時代後期後葉から末頃と考えられる。

10 ～ 12 は砥石で金属器に使用したとみられる。14 は良く使い込まれて上面の中央が浅く窪んでいる。これらの石器は SI16A の西側の壁体溝内でまとまって出土した（写真図版 32 上）。西区で検出した SI10 でも石器が同様の状態で出土したが、住居の壁の一画に石器が整理して置かれていた様子がうかがえる。

覆土中で出土した遺物は図 37 に示した。SI16 では基本的に住居の廃棄時期に近い弥生時代後期後葉以降の土器がまとまって出土している。17 ～ 24 は当該期の甕で、山陰の他の地域の土器と良く似たつくりをしている。山陰地方の土器として特徴的な鼓形器台（27・28）もほぼ他の山陰地域と同様である。

こうした中で、高坏は今回の調査で最も他の山陰の各地域との違いが感じられた器種だった。後述する遺構でも高坏が一定量出土しているが、坏部が 25 のように椀状に丸くなるものや、26 のように脚の内部に粘土が充填されたものが多数を占める。こうした高坏は、隣接する山口県の出土資料の中に見られる。一方で、SI14 で出土した高坏（45-13）のような、中心に小さな穴が開いた底部に筒状の脚が付けられる高坏は、今回の調査ではほとんど出土しなかった。SI12 で出土した周防系の器台（30-8）も含め、同じ時期の土器のセット内で、器種によって異なる地域の特徴が見られる点は、弥生時代の堂ノ上遺跡の地理的環境を考える上で重要である。

SI16 では、遺構内で鉄器が 5 点出土している。内訳は鎌が 1 点、ヤリガンナが 3 点、種不明の小片が 1 点で、遺跡内で最も多い出土数である。周辺で検出した竪穴住居跡から 1 点も鉄器が出土していないことを踏まえると、堂ノ上遺跡東区では、鉄器は SI16 で独占的に保有された可能性が考えられる。

以上の遺物の出土状況から、SI16B はおよそ弥生時代後期前葉頃に SI15 を建て替えた竪穴住居跡で、後期中葉から後葉頃に SI16A に規模を拡張し、その後建て替えられた SI16C（D）が弥生時代後期後葉から末頃に SI14 に建て替えられ、廃棄されたと考えられる。また、この SI16 という大型で長期間存続した竪穴住居（の住人）は、以下の点で他の住居と大きく異なっていると言える。

①遺跡内で最初に建てられたとみられる SI15 から数えて、約 200 年間にわたって遺跡東側の緩斜面を占有し続けた

②最大時の床面積が約 58㎡あったと推定され、遺跡内で突出した規模である

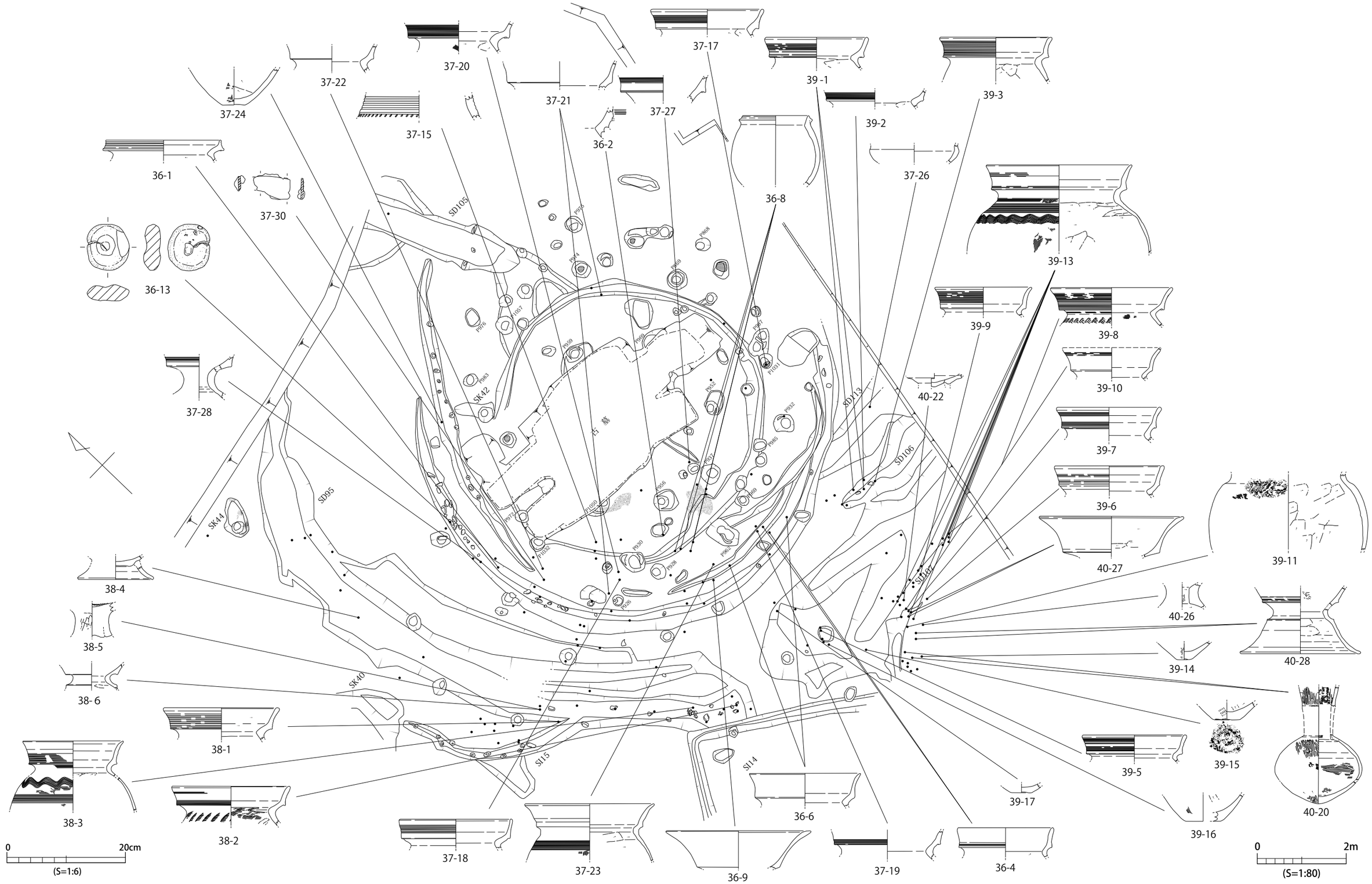


図 35.　SI16、SD95・106・107 遺物出土状況図

③東区で唯一、遺跡内で最多の鉄器を保有していた

④円形を主体とする益田市内の弥生時代の竪穴住居の中で、SI16 は後に非常に整った方形の竪穴住居である SI14 に建て替えられている

⑤現在石見地方で唯一確認されている布掘り建物跡 SB08 が、SI16 を中心とする一連の竪穴住居群に隣接して建てられる

以上の点から、SI16 の住人は集落内で特別な存在だった可能性が考えられる。

また、こうした集落内での大型住居の存在や、特定の住居による土地の占有、鉄器保有量の差は、益田市が隣接する山口県内に例 (1) がある。今後、堂ノ上遺跡周辺の集落遺跡についても、同様の状況が存在していないか検討を要する事象と考えられる。

第9表　SI16出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	36	76	弥生土器	甕	SI16A 壁体溝		19.4			口縁端部を上下に拡張し、3条の擬凹線文を施す	内:ナデ、ケズリ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/3) 外:浅黄橙色(10YR8/3)	V－1様式
2	36	76	弥生土器	甕	SI16B	床面				口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:橙色(5YR6/6) 外:橙色(5YR6/6)	弥生時代後期
3	36	76	弥生土器	甕	SI16C 壁体溝						内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/3) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－3様式
4	36	76	弥生土器	甕	SI16A	床面	16.2			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施した後、上半はナデ消す	内:ナデ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(7.5YR8/4) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－3様式
5	36	76	弥生土器	甕	SI16A 西側壁体溝					口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR6/6)	V－3様式(新)
6	36	76	弥生土器	甕	SI16A	床面	(18.7)			口縁は外反し端部は先細りする	内:ヨコナデ 外:不明	6mm以下の砂粒含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－3(新) ～V－4様式
7	36	76	弥生土器		SI16B 壁体溝			4.4			内:ケズリ 外:ナデ	7mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:明褐色(7.5YR5/8)	弥生時代後期
8	36	76	弥生土器	壺	SI16B	埋土・床	11.0			口縁部は短く直立し、外面に断面三角形の突帯を貼り付ける	内:ナデ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄褐色(10YR5/4) 外:鈍い赤褐色(5YR5/4)	弥生時代後期
9	36	76	弥生土器	器台	SI16A 南壁際	埋土	(24.5)				内:ヘラケズリ後ナデ 外:不明	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－4様式
10	36	76	石器	砥石	SI16 壁体溝		(器長)10.0	(器幅)3.7	(器厚)2.3		内: 外:		灰白色(5Y7/2)	重さ:111.86g 石材:
11	36	76	石器	砥石	SI16	床面	(器長)12.3	(器幅)12.7	(器厚)10.7		内: 外:		灰白色(5Y7/2)	重さ:1205.31g 石材:砂岩
12	36	76	石器	砥石	SI16	床面	(器長)16.0	(器幅)16.2	(器厚)9.5		内: 外:		淡黄色(2.5Y8/2)	重さ:2.2kg 石材:砂岩
13	36	76	石器	凹石	SI16A 壁体溝		(器長)7.8	(器幅)7.1	(器厚)2.9		内: 外:		明黄褐色(2.5Y6/6)	重さ:212.30g 石材:
14	36	76	石器	石皿	SI16	底面	(器長)26.9	(器幅)(22.4)	(器厚)11.8		内: 外:		灰白色(2.5Y7/1)	重さ:11.7kg 石材:
15	37	77	弥生土器	壺	SI16	埋土				頸部に凹線文を施す	内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	V－1様式
16	37	77	弥生土器	甕	SI16B	埋土	9.0			口縁端部は短く直立する	内:不明 外:不明	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:明褐色(7.5YR5/6)	V－1様式か
17	37	77	弥生土器	甕	SI16A		(18.6)			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:橙色(7.5YR6/6)	V－3様式
18	37	77	弥生土器	甕	SI16	1	(19.0)			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	V－3様式
19	37	77	弥生土器	甕	SI16A	埋土					内:不明 外:ヨコナデ	9mm以下の砂粒を含む	内:明褐色(7.5YR5/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	V－3様式
20	37	77	弥生土器	甕	SI16	1				口縁部は外反し、擬凹線文を施す	内:ナデ、ケズリ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR6/6) 外:明黄褐色(10YR6/6)	V－3様式
21	37	77	弥生土器	甕	SI16	1					内:不明 外:不明	5mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	V－3様式
22	37	77	弥生土器	甕	SI16	1					内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－4様式
23	37	77	弥生土器	甕	SI16	埋土	(21.8)			口縁端部は外反し、丸く収める　肩部に擬凹線文を施す	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ハケメ	6mm以下の砂粒含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－4様式
24	37	77	弥生土器	甕	SI16A	埋土		3.9			内:ヘラケズリ 外:ハケメ		内:浅黄橙色(7.5YR8/4) 外:橙色(7.5YR6/8)	弥生時代後期
25	37	77	弥生土器か	鉢か高坏の杯部	SI16 拡張区						内:ナデ 外:ナデか	2mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:鈍い褐色(7.5YR5/4)	周防系の弥生土器か
26	37	77	弥生土器	高坏	SI16北東						内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	弥生時代後期
27	37	77	弥生土器	器台	SI16B	埋土				擬凹線文を施す	内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	V－3様式
28	37	77	弥生土器	鼓形器台	SI16					器受部外面に擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒含む	内:橙色(7.5YR8/6) 外:橙色(7.5YR8/6)	V－3様式
29	37	77	弥生土器	壺	SD105		(16.6)			口縁端部を上下に拡張し、4条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y5/1)	V－1様式か
30	37	98	鉄製品	鎌	SI16A		(長さ)6.2	(幅)4.3	(厚さ)1.9	基部は折り返していない	内: 外:			
31	37	98	鉄製品	不明(板状)	SI16	埋土	(長さ)2.8	(幅)2.0	(厚さ)0.7		内: 外:			
32	37	98	鉄製品	ヤリガンナ	SI16	埋土	(長さ)3.6	(幅)1.7	(厚さ)0.5		内: 外:			
33	37	98	鉄製品	ヤリガンナ	SI16	埋土	(長さ)2.8	(幅)1.0	(厚さ)0.5		内: 外:			
34	37	98	鉄製品	ヤリガンナ	SI16	埋土	(長さ)4.2	(幅)1.2	(厚さ)0.4		内: 外:			

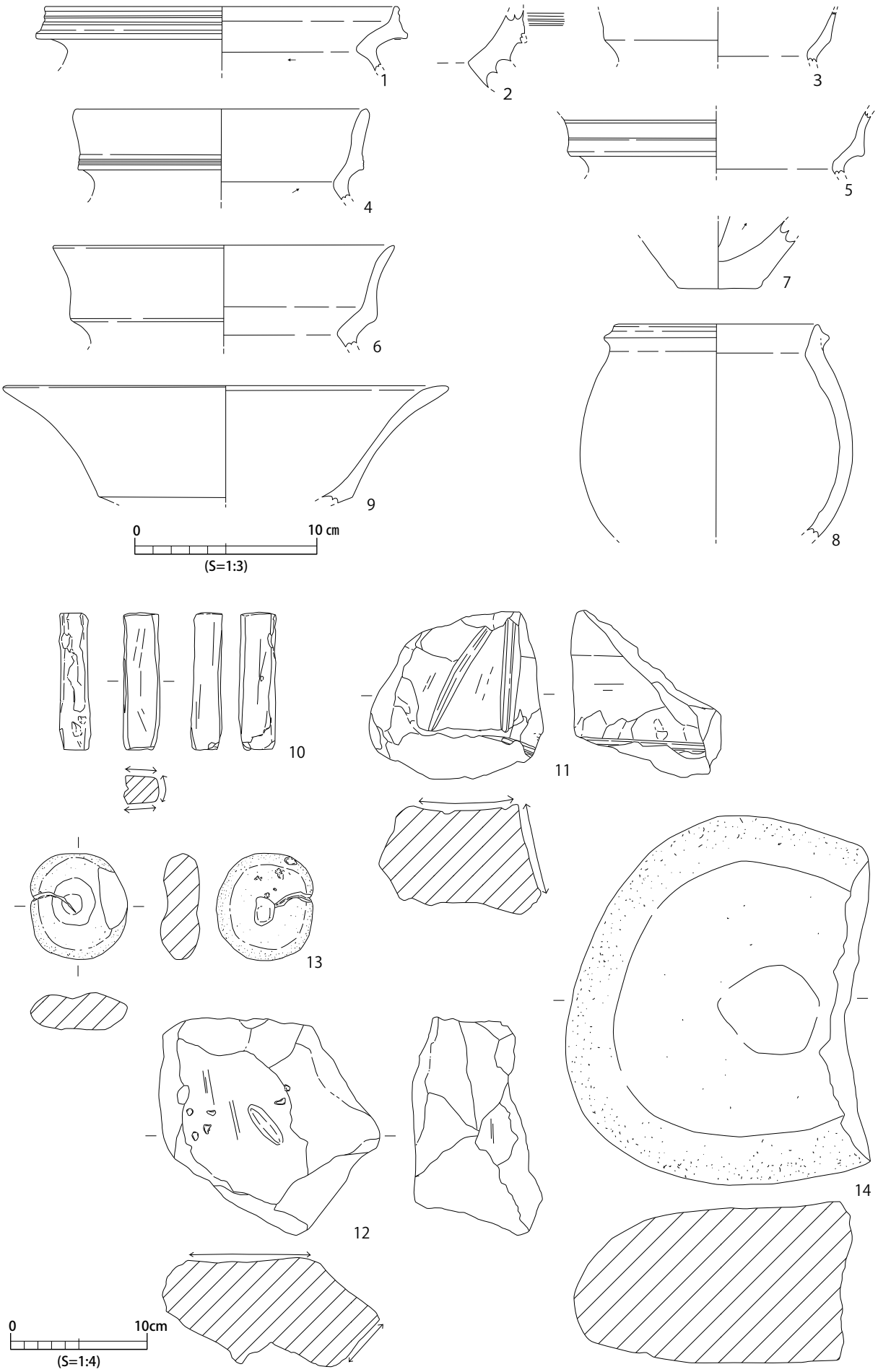


図 36.　SI16 出土遺物実測図 (1)（床面付近出土）

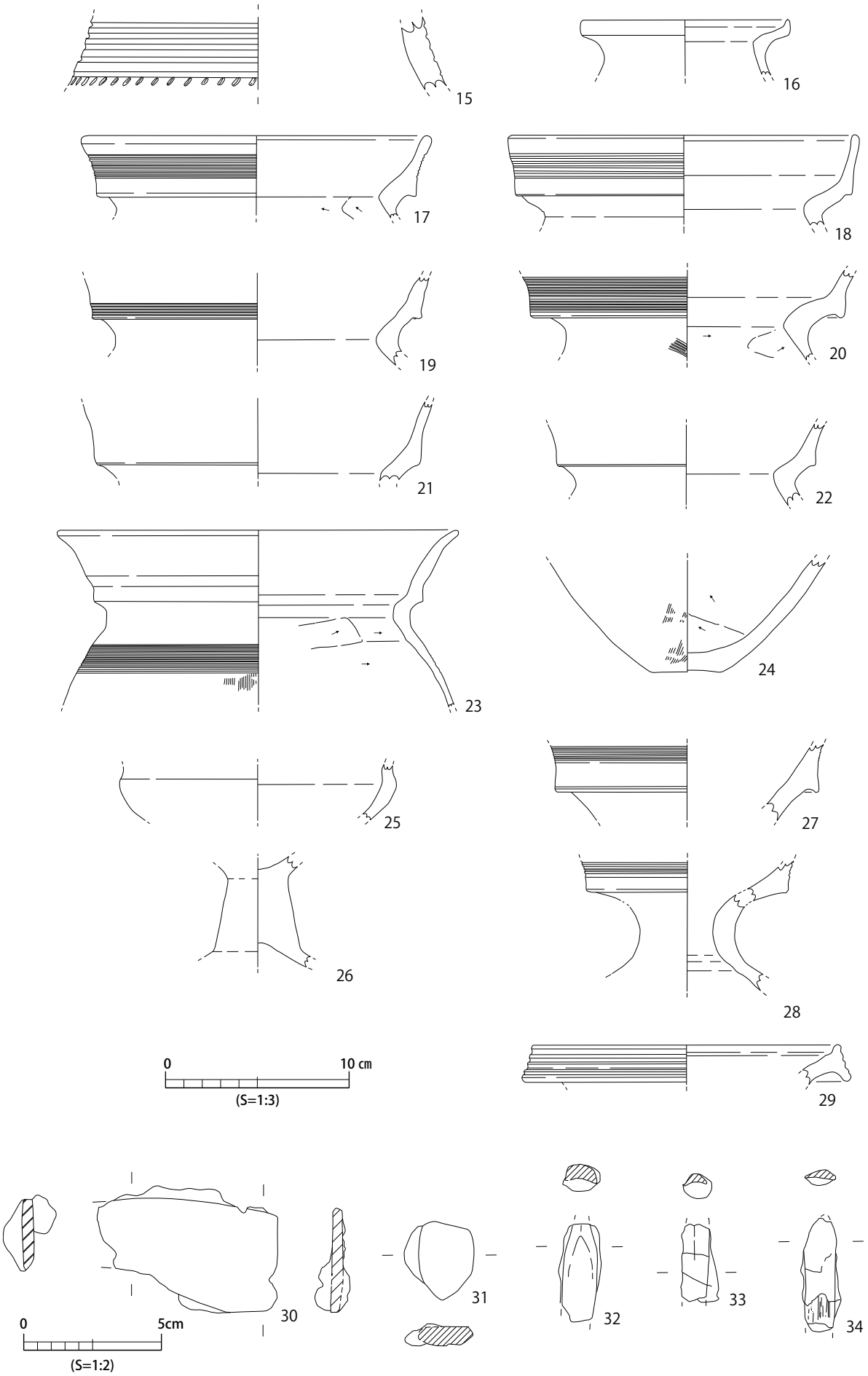


図 37.　SI16 出土遺物実測図 (2)（覆土中出土）

SD95（図 33・35・38、写真図版 35、78）

SI16 の西側の外周溝で、SI16 の南側から大きくカーブを描いて調査区北壁まで続いている。検出した長さは約 14.5 mで、幅は基本 1.1 ～ 1.3 m、溝の東側にテラス状の段が付く部分の幅は、約２mである。溝の床面は北側へ緩やかに傾斜している。溝の南側では２条の溝が重複していることが分かり、SI16 の建て替えに合わせて SD95 も掘り直されていることが分かる。また、SI16 の南側で SD95 は途切れている。対になる SI16 の東側の外周溝 SD107 との間には、最小で 50㎝の幅の空間がある。この空間部分の SI16 壁面には、幅 30㎝のピットが切り欠き状に掘られており（写真図版 31 下）、出入り口の存在をうかがわせる。

遺物は覆土中から弥生土器と石器が出土している。出土した弥生土器で時期を判断できるものは、弥生時代後期後葉から終末頃のものだった。2･3 は外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施した後、上半はナデ消すものである。5 は脚部の中に粘土が充填される高坏で、重量感がある。外面にはミガキ、内面にはハケ調整後にナデが施される。県内ではあまり例を見ない器形で、周防系の土器とみられる。

第10表　SD95出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	38	78	弥生土器	甕	SD95		19.2			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ナデ、ケズリ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－3様式
2	38	78	弥生土器	甕	SD95		19.8			口縁部に貝殻腹縁による擬凹線文を施した後にナデ消している。 頸部に貝殻腹縁による押引き文を施す	内:ハケメ、ナデ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(7.5YR8/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	Ⅴ－3様式(新)
3	38	78	弥生土器	甕	SD95		16.9			口縁端部は外反し、先細りする 口縁部の稜はシャープで斜め下方に突出する	内:ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ 外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	Ⅴ－4様式
4	38	78	弥生土器	鉢か	SD95			(5.4)	脚端部径(12.8)		内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	
5	38	78	弥生土器	高坏	SD95					脚部は粘土が充填されている	内:ハケメ後ナデ 外:ヘラミガキ	4mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	周防系の高坏
6	38	78	弥生土器	鼓形器台	SD95						内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	Ⅴ－4様式
7	38	78	石器	敲石か	SD95		(器長)9.2	(器幅)7.1	(器厚)2.1		内: 外:		灰白色(5Y7/2)	

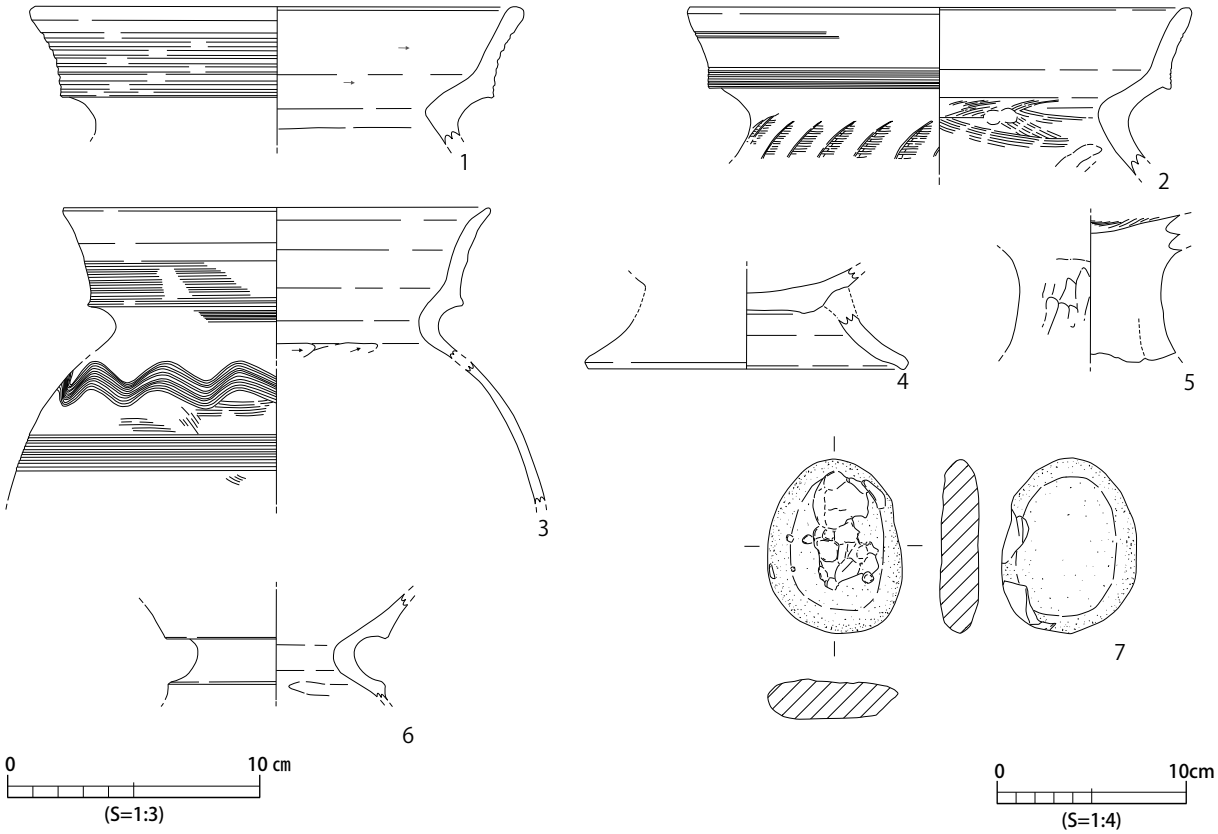


図 38.　SD95 出土遺物実測図

SD95 の時期は、弥生時代中期末から後期初頭に廃棄された SI15 の床面を大規模に破壊して造られており、弥生時代後期初頭以降に整備されたことが分かる。溝が廃棄された時期は、出土遺物に古墳時代初頭の土器が無いことから、弥生時代終末頃と考えられる。

SD106（図 33・35・39、写真図版 35・78・79）

SI16 の東側の外周溝は 4 条検出された。SD106 はそのひとつで、SD107 と 113 の間に位置している。調査区内で検出した長さは約 2 m、幅は 90㎝である。Ⅴ -3 様式の甕（1 ～ 3）が出土している。溝の方向は SI16B と SI16D の何れかに対応すると考えられる。

第11表　SD106･107出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	39	79	弥生土器	甕	SD106		17.2			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ、ケズリ 外:ヨコナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/8) 外:橙色(7.5YR6/8)	Ⅴ－3様式
2	39	78	弥生土器	甕	SD106					口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/8) 外:明褐色(7.5YR5/6)	Ⅴ－3様式
3	39	78	弥生土器	甕	SD106		19.0			口縁外面に貝殻による平行沈線を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	石英・金ウンモ・角閃石を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－3様式
4	39	78	弥生土器	甕	SD107		(17.8)			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す 頸部に段がある	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒をやや多く含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/3) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	Ⅴ－3様式か
5	39	78	弥生土器	甕	SD107	1	17.6			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	Ⅴ－3様式
6	39	78	弥生土器	甕	SD107	1	(18.4)			貝殻腹縁による擬凹線文が施されるが、風化の為、詳細は不明	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	Ⅴ－3様式
7	39	78	弥生土器	甕	SD107		(17.4)			口縁端部は丸い 貝殻腹縁による擬凹線文を施す 稜はシャープで下方に突出	内:不明 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:鈍い橙色(7.5YR7/4)	Ⅴ－3様式
8	39	78	弥生土器	甕	SD107		(20.4)			口縁部は外反し、外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す(上半分はその後ナデを施される) 肩部に貝殻腹縁による押し引き文を施す	内:ヨコナデ、ハケメ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒、石英を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:鈍い橙色(7.5YR7/4)	Ⅴ－3様式
9	39	78	弥生土器	甕	SD107		(16.1)			口縁部は外反し、外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ	7mmの長石を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	Ⅴ－3様式
10	39	78	弥生土器	甕	SD107		(16.4)			口縁部は外反し、外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明赤褐色(5YR5/8)	Ⅴ－3様式
11	39	79	弥生土器	甕	SD107	1				肩部に貝殻腹縁による押引き文を施す	内:ナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－3様式か
12	39	79	弥生土器	甕	SD107 (北側)						内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ナデ	5mm以下の砂粒をやや多く含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	Ⅴ－3～4様式
13	39	79	弥生土器	甕	SD107		24.4			口縁外面に擬凹線文を施した後ナデ消す 肩部に直線文と波状文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ハケメ	1mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y7/4) 外:淡黄色(2.5Y7/4)	Ⅴ－4様式
14	39	79	弥生土器	甕	SD107	1		1.9		底径が小さく上げ底	内:ヘラケズリ後ナデ 外:ナデ、ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR6/6) 外:明黄褐色(10YR6/6)	Ⅴ－3様式か 内面にススが付着
15	39	79	弥生土器	甕	SD107			4.3		底部外面は渦巻き状にナデを施す	内:ヘラケズリ 外:ナデ、ハケメ	5mm以下の砂粒・石英を多く含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	
16	39	79	弥生土器	甕	SD107			(5.7)		平底	内:ヘラケズリ 外:ハケメ、ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明赤褐色(2.5YR5/6)	
17	39	79	弥生土器	甕	SD107	1		3.4		上げ底	内:不明 外:不明	3mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y7/2) 外:鈍い黄橙色(10YR6/3)	内面にはススが付着し、断面半分ほど黒褐色に変色している
18	39	79	弥生土器		SD107			4.3		底部はやや上げ底気味	内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	
19	39	79	弥生土器	甕	SD107	1		(6.7)		平底	内:ケズリ 外:ナデ、ハケメ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/3)	
20	40	78	弥生土器	長頸壺	SD107	1				胴部はややつぶれた球形で、底部は円すい状に尖る	内:ハケメ 外:ヘラミガキ、ナデ、ハケメ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:橙色(7.5YR6/6)	山口県西部に類例がある 弥生時代後期末
21	40	79	弥生土器	壺	SD107					頸部に突帯を貼り付け刺突文を廻らせる	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ、ナデ	2mm以下の白色砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	弥生時代後期末頃、周防系の壺に似る
22	40	79	弥生土器	高坏	SD107					杯底部の中央に円板を充填する	内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:橙色(5YR7/6) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	
23	40	79	弥生土器	高坏	SD107	暗褐色土				杯体部は、底部から直線的に立ち上がる	内:不明 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:橙色(5YR7/6)	
24	40	79	弥生土器	高坏	SD107					杯部は埦状に丸くなる	内: 外:	4mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:橙色(5YR7/6)	
25	40	79	弥生土器	鼓形器台	SD107					外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:不明 外:ナデ	5mm以下の砂粒を多く含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	Ⅴ－3様式
26	40	79	弥生土器	鼓形器台	SD107						内:ヘラケズリ、ナデ 外:不明	7mm以下の砂粒を多く含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	Ⅴ－3様式
27	40	79	弥生土器	鼓形器台	SD107		(24.5)				内:ヘラケズリ後ナデ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:橙色(5YR7/6) 外:橙色(5YR7/6)	Ⅴ－4様式
28	40	79	弥生土器	鼓形器台	SD107	1		(20.4)		稜はシャープで斜めに突出する	内:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	Ⅴ－4様式

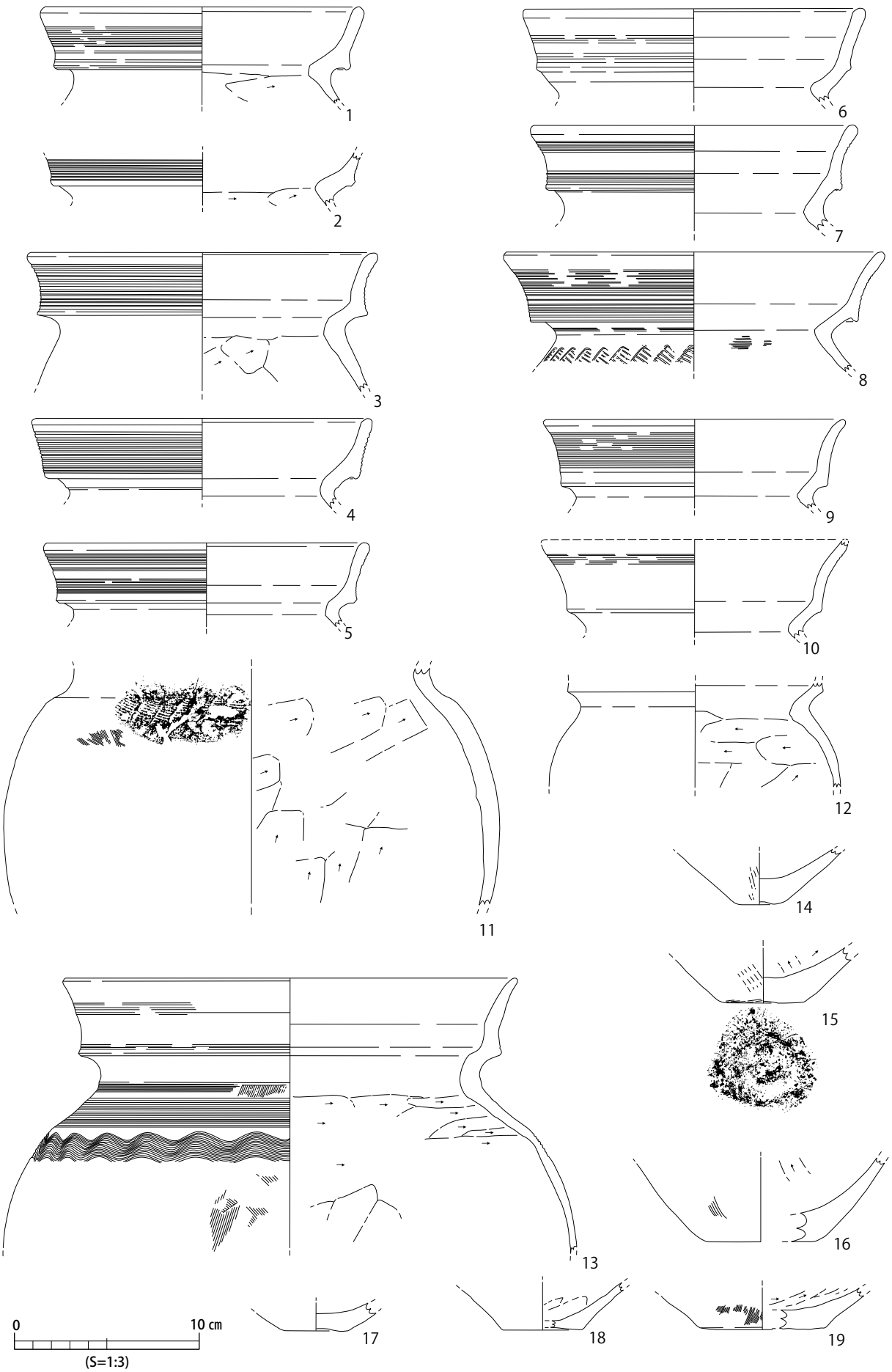


図 39.　SD106・107 出土遺物実測図 (1)

SD107（図 33・35・39・40、写真図版 35・78・79）

SI16 の西側の外周溝で、1 条の溝として検出したが、実際は 2 条の溝が重複している。調査区東側の外へ続いていることは確実だったが、すぐ近くが崖面であるため調査区の拡張は行わなかった。検出した長さは約 6 mで、幅は約 3 m、単独の溝の幅は 0.7 ～ 1.5 mである。SD95 同様、SI16 の建て替えに合わせて SD107 も掘り直されている。また、溝の南側が SI14 に接しており、SI14 から伸びる排水溝 SD100 が、SD107 の東肩と重複している。このため、溝の重複する部分で出土した土器は、本来どちらの遺構に伴うものか、判断が難しいものもある（図 35）。

遺物は弥生時代後期後葉頃の土器がまとまって出土している。8・11 は頸部付近に貝殻腹縁による押し引き文が施されている。遺跡内の弥生時代後期の甕には、Ⅴ -1 様式では頸部付近に直線文を施す個体がほとんどで、Ⅴ -2 様式では貝殻腹縁による刺突文が目立った。同様に頸部付近の押し引き文はⅤ -3 様式の特徴である。13 は胎土が白っぽく、口縁外面に 2 段に貝殻腹縁による擬凹線文（調整）を施した後、ナデ消している。肩には直線文と波状文が施され、Ⅴ -4 様式の特徴がみられる。15 の底部には、中世土器のように渦巻状にナデが施されている。

20・21 は周防系の壺で、弥生時代後期末頃の山口県出土資料に類例がある。22 ～ 24 は高坏と判断した個体で、やはり山陰系の高坏とは器形も胎土も異なっている。これらの遺物は SD100 と重複する位置で出土しており、SI14 に伴う遺物の可能性もある。

また、上記の遺物出土状況から、SD107 は西側の SD95 と異なり、後に SD100 と接続する排水溝として使用された可能性が考えられる。

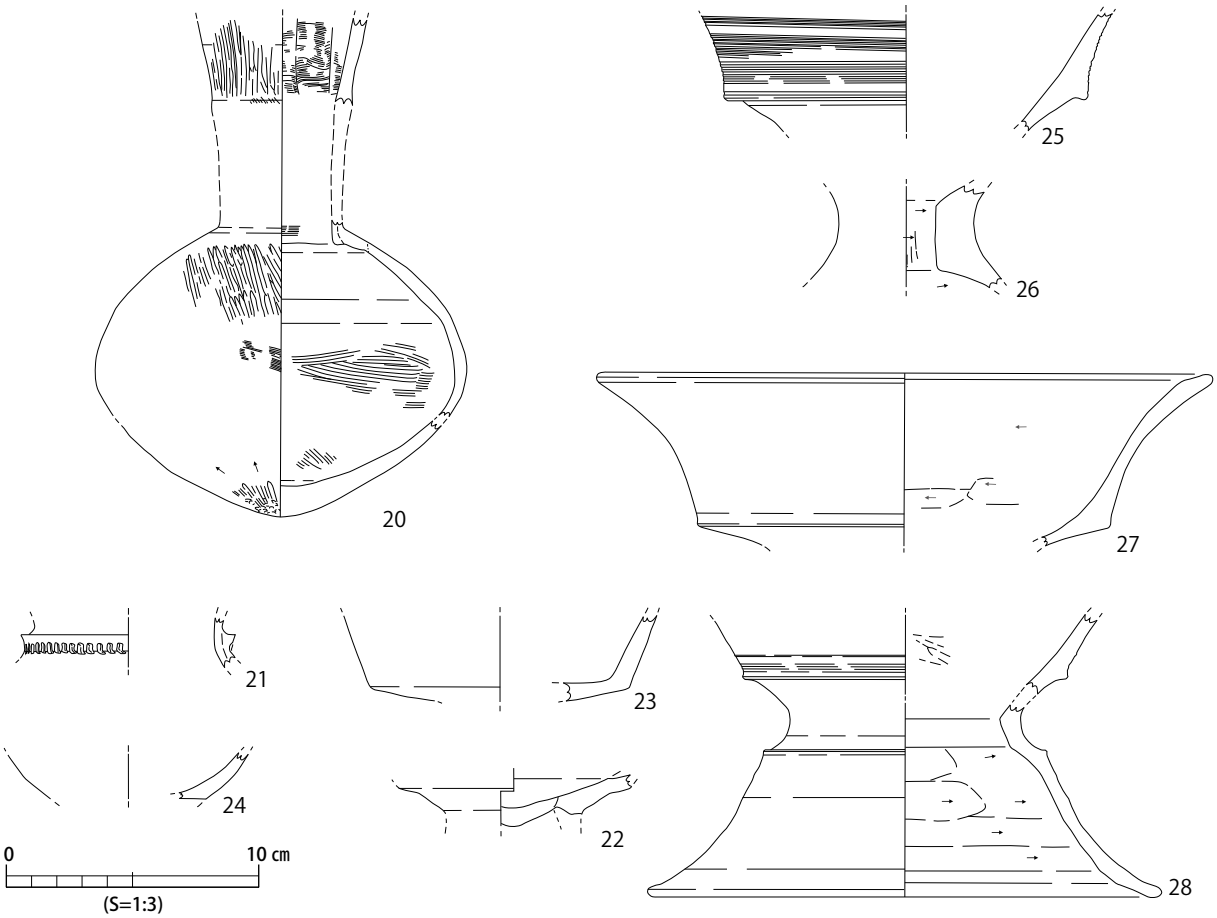


図 40.　SD106・107 出土遺物実測図 (2)

SI07（図 41・42、写真図版 36・37・80）

西区北側の D6・7 グリッドで検出した竪穴住居跡で、床面と壁は削平され、住居跡の北側と西側はすでに県道久城インター線の工事で失われていた。しかし、東側と南側の一部の壁体溝と主柱穴 2 基が残っており、平面楕円形の竪穴住居跡であることが分かる。これだけで住居の全体像を復元することは困難だが、柱穴の配置と南側の壁体溝のカーブから、SI16C より一回り小さい、長径 8 m、短径 6 m前後の楕円形の住居跡と推定される。主柱穴の配置は不明だが、主柱穴と判断した P393-396 の柱間の距離は 2.5 mで、おそらく 6 本前後だったと推定される。また、このほかにやや小規模なピット P394 を検出している。

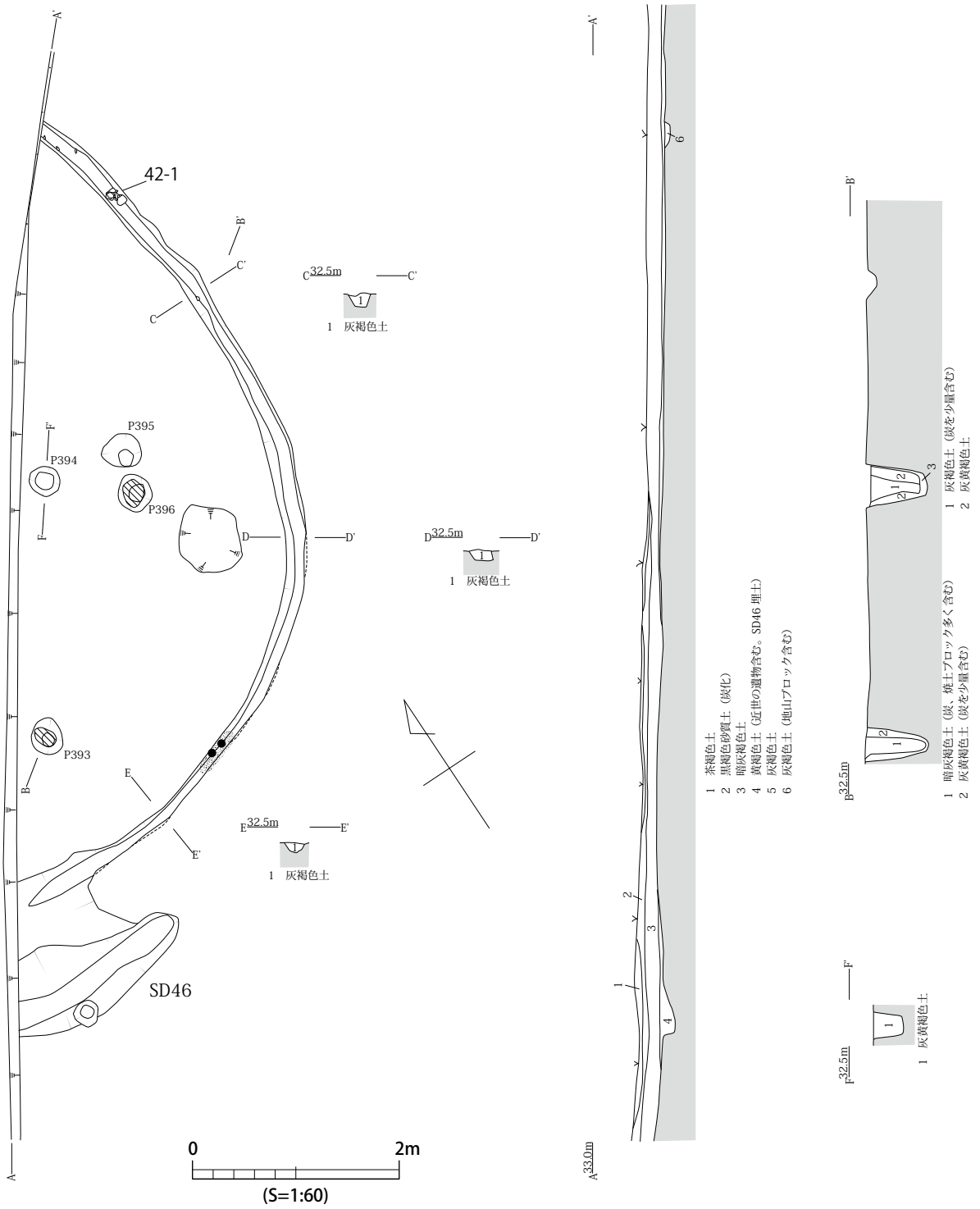


図 41.　SI07 実測図

主柱穴はどちらも柱痕が確認でき、土層断面で柱痕部分に炭・焼土を含む土が堆積していた。

SI07 の壁体溝は床面付近が住居の外側に張り出しており、壁面がオーバーハングしていた（写真図版 37 上）。壁体溝の北側では床面で弥生土器の壺 1 が出土した。南側では壁体溝内で焼土の塊を検出している。P396 では柱の抜き取りが確認できるので、SI08 同様、床面以上を削平された焼失住居の可能性がある。

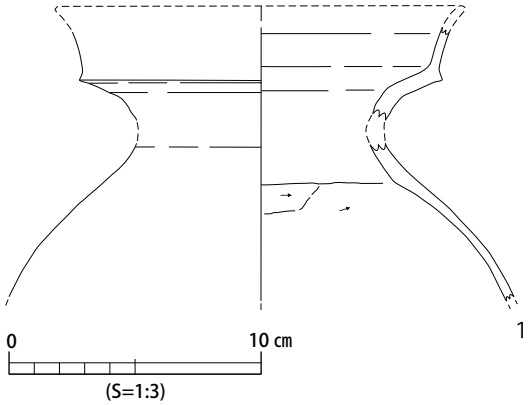


図 42.　SI07 出土遺物実測図

SI07 は、床面以上を失っているため、住居跡の時期を判断できる遺物はほとんど出土していない。1 は壁体溝の床面出土資料で口縁端部を欠損するが、ほぼ全形を復元できる資料である。複合口縁段部の稜は丁寧に造られ白っぽい胎土である。弥生時代末頃の壺とみられ、小片になっているが、住居が廃棄された時期を示す資料である。

以上の状況から、SI07 は弥生時代末頃に廃棄された竪穴住居跡で、廃棄に伴い焼却された可能性があると判断される。また、東区の SI16 の建て替えの状況を参考にすると、SI10 が弥生時代後期後葉頃に建て替えられた建物の可能性が考えられる。

第12表　SI07出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	42	80	弥生土器	壺	SI07 壁体溝	1	(16.0)				内：ナデ 外：ヨコナデ、ハケ調整	2mm以下の砂粒を含む	内：浅黄橙色(10YR8/3) 外：鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－4様式

SI14（図 43・44、写真図版 38 ～ 41）

東区東側の平坦面から緩斜面に傾斜が変化するところで検出した竪穴住居跡で、弥生時代中期末に SI15 から始まった、調査区東側の竪穴住居群建設の最後に建てられた竪穴住居跡である。

SI14 を検出した場所は、調査前に宅地や墓地になっていなかったため、本遺跡で検出された竪穴住居跡の中では、SI13 と並んでもっとも遺構の保存状態が良かった。重機による表土掘削後、人力で遺構検出を行うと、地山面で他の住居跡と異なる非常に整った方形のプランが検出された。

その後、ベルトを残して住居内を掘り下げたところ、住居の掘りこみは浅く、北側では検出面から約 15㎝の深さで床面が検出された。南側ではやや壁が高かったが、それでも約 25㎝しかない。

住居内の埋土は単純で、基本的に住居周辺に堆積していた灰茶褐色土が流入しており、床上には淡茶褐色土が堆積していた。この上層の灰茶褐色土からは、周辺の竪穴住居跡で廃棄されたとみられる弥生時代後期の土器や長さ 25㎝以下の石が床面から浮いた状態で多数出土した。この灰褐色土と床上の淡茶褐色土を除去すると床面や壁体溝、中央ピットから完形に近い土器を含む多数の土器が出土した（図 44）。特に西側の主柱穴 P938 と壁体溝の間では、複合口縁の甕 1 個と、周防系の甕 3 個がまとまって出土した（写真図版 41 上）。このうち周防系の 2 個体は、ほぼ完形

に復元できるもので、後述するように住居の形態は大きく異なるが、引き続き住居廃棄に伴う祭祀が行われていた可能性を想起させる。

検出された床面は、非常に整った正方形に近い平面形をしているが、良く見ると北側の角がやや張り出し、上底 4.8 m、下底 5.3 m、高さ 5.2 mの台形であることが分かる。北側の隅近くには、50 × 30㎝の浅いピットが掘られており、北側のコーナーを意図的に張り出していると考えられる。この床面の周囲には幅 25㎝前後の整った壁体溝が全周していた。

主柱は 4 本で、これ以前の床面が円形の竪穴住居とは、かなり異なる位置に配置されている。まず、それまでの住居跡の主柱の位置を確認すると、壁体溝に近い位置に配置されていたことがわかる（図 102・103）。 4 本柱の SI10-B もかなり壁に寄っている。これに対し、SI14 の主柱は住居の床面を 4 等分した中のほぼ中心部分に柱を配置されている。これは、同じく方形の竪穴住居である SI11 にも見られる配置である。

床面の中央には中央ピットが配置されているが、それ以前の住居と異なり整った二段掘りの方形土坑である。この中央ピットの検出時には、中央ピットを含むその東側の 1.3 × 2 mの範囲で約 10㎝の厚さの炭が堆積していた。今回の調査で確認したその他の竪穴住居跡では見られなかった特徴である。中央ピット本来の使用状況を示しているのか、他の住居跡と形態の異なる SI14 の中央ピット独自のものなのか、判断することはできなかった。なお、この炭の中に、イネとアワが含まれていたことが種実分析の結果明らかになっている。

中央ピットのすぐ南西側の床面では、砂利を敷いた面が 20 × 25㎝の範囲で検出された。砂利は 1 ㎝以下の細かい石を含んでいるが、しっかりと敷かれていた。そのほか床面では、20 × 40 ㎝以下の大きさの焼土面を 9 箇所確認している。地山の焼け方が弱いので、灯りとりの痕跡の可能性が考えられる。

また、中央ピットからは東へ、幅 20 ～ 30㎝の溝 SD100 が伸びている。SD100 は東側の壁を切って住居のさらに外へ続いており、住居壁面の位置で角度を北東に振ったあと、約 2m 北東へ伸びたところで SD107 にすりついている。住居の壁の外に出た部分では、溝の東側で土器がまとまって出土している。

このほか床面では、中央ピットの南東と北東側では、主柱穴間のほぼ中間の位置で、やや小型のピット P940 と 1055 が検出された。ピットの規模から上屋を支える柱でないと考えられる。

出土遺物（図 45・46、写真図版 85 ～ 87）

まず、弥生時代終末期の竪穴住居跡として報告する SI14 出土遺物の中に、弥生土器と通常古墳時代前期の土師器とされる土器が混在することを断わっておく。これは SI14 が当初建てられた時期が弥生時代終末期頃と判断されることによるものである。また、竪穴住居跡から一括で出土した資料を、後世の時代的・形式的区分で分割することは好ましくないと判断したことにもよる。以下土器について述べたい。

床面で出土した土器は図 45 に示した土器である。1 ～ 5 は形状から益田平野の土師器編年 1 期（古墳時代前期前半頃）に位置づけられるものである。このうち 1 ～ 4 は明るい色調の胎土で作られており、島根県内の古墳時代前期の遺跡から出土する資料と良く似ている。これに対し、布留系の甕のうち、5 は器壁がやや厚く後述する周防系の土器の胎土で作られている点が注目される。布留系については、山陰系・周防系両方で製作されたとみられる。

6～9は周防系とした甕で、口縁部の作りや調整にバリエーションがある。6・7は口縁がやや外傾し、端部には面がある。8は口縁部がやや長く、外反気味で先細りし端部は丸く収めている。いずれも同じ調整が施され、内面はヘラケズリ後ナデ調整、外面と口縁部はハケ調整後にナデ調整を施している。9は内外面とも幅の広い荒々しいハケ調整が施される。6～9は器壁厚く重みのある土器だが、丁寧に調整が施されており、あたかもSI15出土遺物のような弥生時代後期初頭の土器を彷彿とさせる。胎土は赤味の強い色調で、前述の1～4とは大きく異なっている。また、7・8の胴部内面の下半には煮炊きの痕跡が明確に残されている。これらの土器の年代については、山口大学の田畑直彦氏から弥生時代終末期頃の土器との指導を得ている。

高坏は包含層も含めると8点以上出土しているが、山陰系の高坏は13のみで、その他は山口県出土資料に近い形状のものである。壁体溝内で出土した14は完形に復元できた資料で、丸みのある坏部に短い脚部が付く珍しい器形をしている。全体にヘラケズリによって形状を整えた後、細かい単位の丁寧なヘラミガキが全体に施されている。

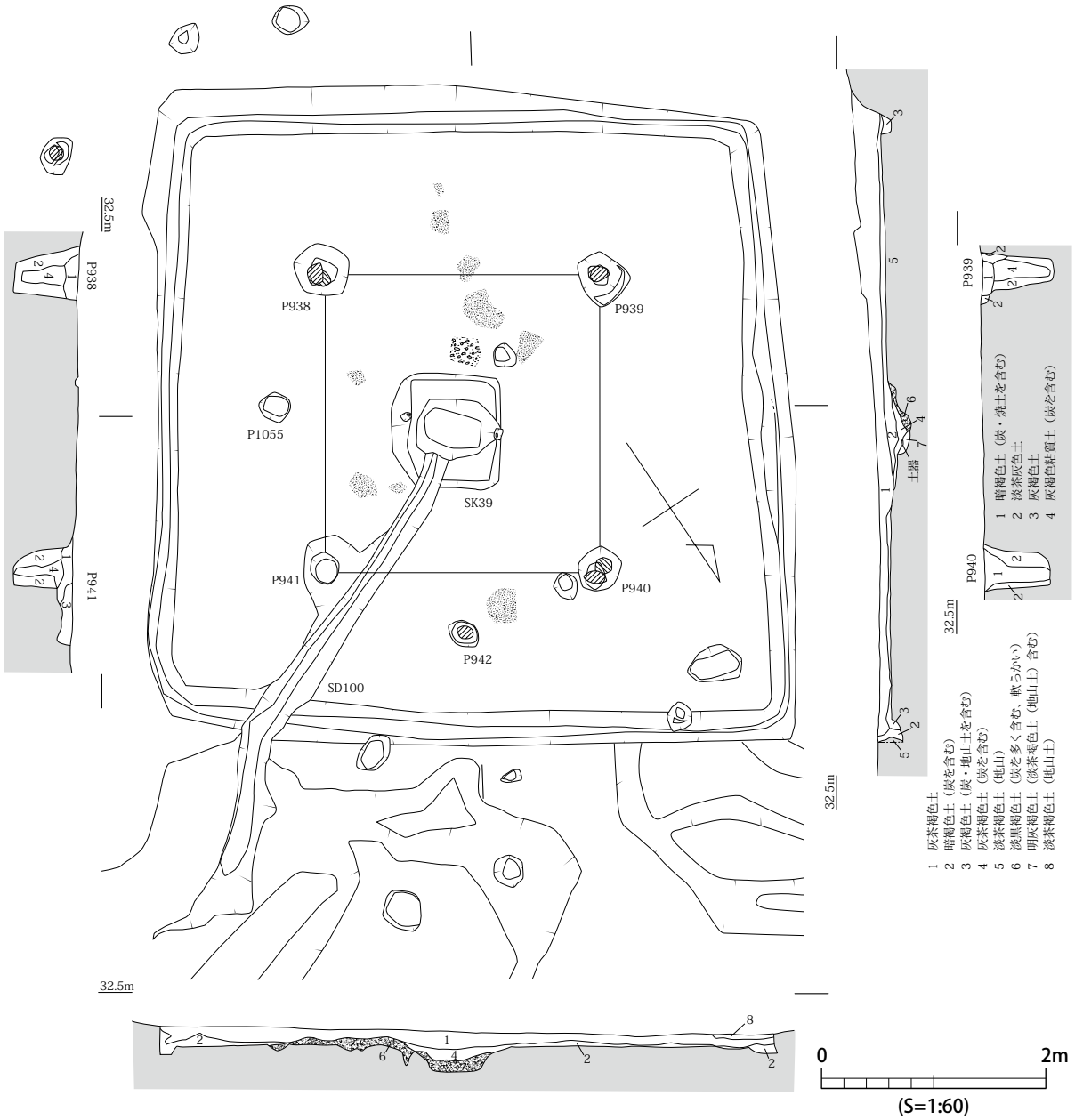


図43.　SI14実測図

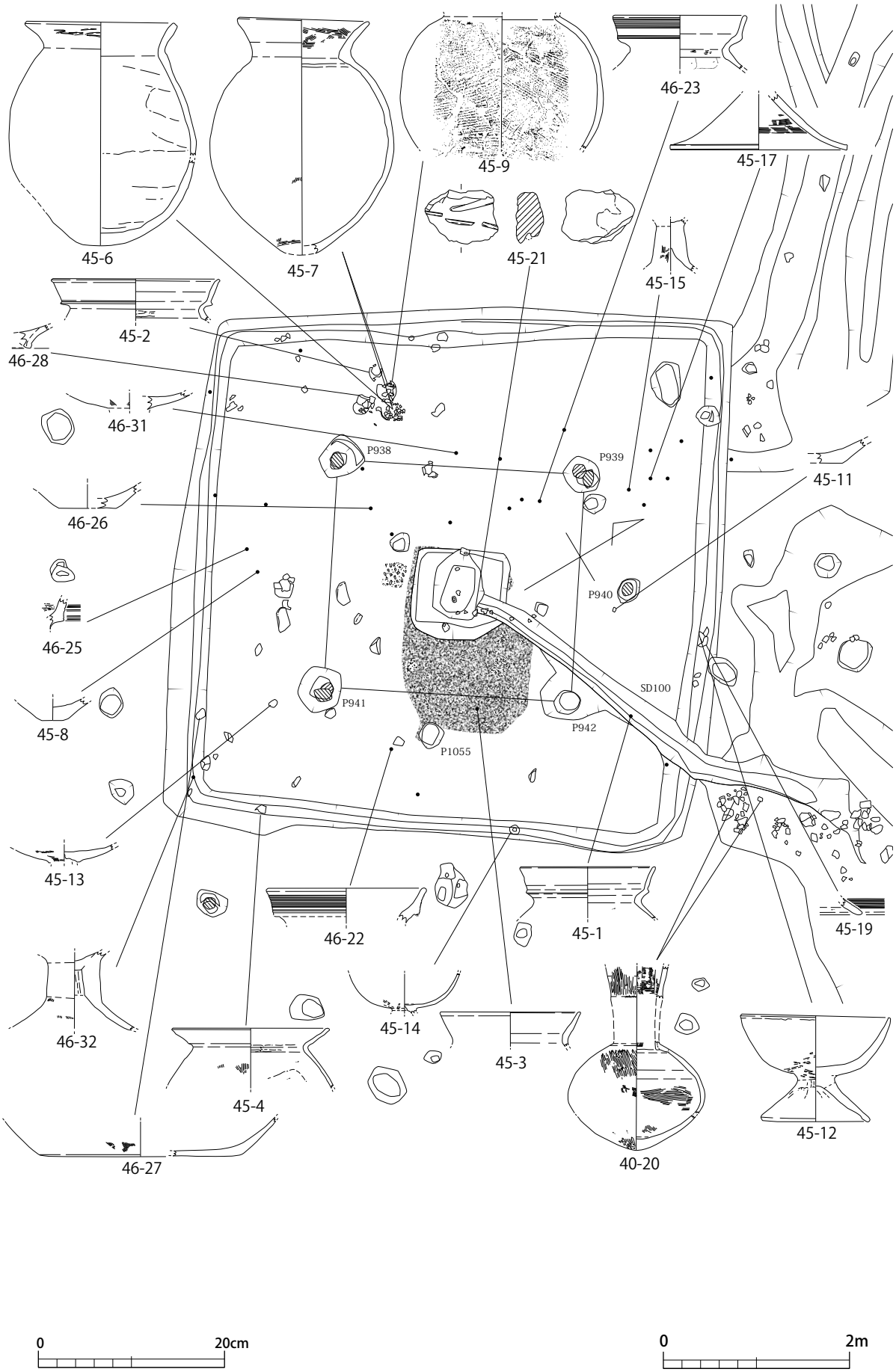


図 44.　SI14 遺物出土状況図

そのほか 20 は丸い形状の不明土製品で一方に平坦な面がある。ツマミまたは装飾が剥離したものか。21 は炉壁状の物で、管状の物の痕跡が側面と断面に見られる。東区では溜め池の東側で検出した遺構から出土している。37 は砥石である。

SI14 で出土した土器のうち、今回周防系と報告した資料は、これまでにも島根県西部の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡で出土していた、所謂「単純口縁甕」の一種だと考えられる。島根県内におけるこの種の甕についての検討は、年代観が掴みにくいこともあり、これまでは困難な状況だったが、今回山陰系や布留系の土器と一括して出土したことにより、一つの足がかりになると考えられる。

第13表　SI14出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	45	86	土師器	甕	SI14 SK36	床面	14.8				内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/2)	益田平野Ⅰ期
2	45	85	土師器	甕	SI14	床面	17.8			口縁部は外反する　段部の稜はシャープで横に突出する	内:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ハケメ	0.5mm以下の砂粒含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/2) 外:鈍い黄橙色(10YR7/2)	益田平野Ⅰ期
3	45	86	土師器	甕	SI14 SK39		(15.0)			口縁端部は外側に肥厚する	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:明黄褐色(2.5Y7/6)	益田平野Ⅰ期か
4	45	86	土師器	甕	SI14 壁体溝		(16.7)			口縁部はゆるく内湾する	内:ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	0.5mm以下の砂粒含む	内:鈍い褐色(7.5YR5/4) 外:褐色(7.5YR3/3)	益田平野Ⅰ期 布留系
5	45	86	土師器	甕	SI14	床面	18.6				内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い褐色(7.5YR4/3) 外:橙色(2.5YR6/6)	益田平野Ⅰ期 布留系
6	45	86	弥生土器	甕	SI14	床面	(15.0)			粗いつくりで、表面に凸凹が目立つ	内:ナデ、ヘラケズリ後ナデ 外:ナデ		内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	周防系
7	45	85	弥生土器	甕	SI14	床面	15.8	3.9	24.1	口縁部は外傾し端部は面を持つ	内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	周防系　胴部内面の下半にはススが付着し、断面まで暗茶褐色に変色している
8	45	85	弥生土器	甕	SI14	床面	15.0	(3.8)	25.5		内:ヨコナデ、ハケメ後ナデ 外:ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い橙色(7.5YR6/4) 外:鈍い橙色(7.5YR6/4)	周防系 弥生時代終末期 胴部内面の下半は煮炊きにより表面が荒れている
9	45	85	弥生土器	甕	SI14	床面	21.5		12.5	胴部は球形に近い	内:ハケメ 外:ハケメ	1mm以下の砂粒含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	周防系 弥生時代終末期
10	45	86	弥生土器	甕	SI14	床面		2.4		平底	内:ナデ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR6/8) 外:明黄褐色(10YR7/8)	
11	45	86	弥生土器	壺か	SI14	床面				径が大きい平底	内:ナデ 外:ハケメ後ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/4) 外:淡黄色(2.5Y8/4)	
12	45	86	弥生土器		SD100			5.3		平底	内:ナデ 外:ナデ		内:黒褐色(10YR2/2) 外:鈍い黄褐色(10YR5/4)	
13	45	86	土師器	高坏	SI14床面	床面					内:ヘラミガキ 外:ハケメ、ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR6/8) 外:黄橙色(7.5YR6/8)	山陰系
14	45	85	弥生土器	高坏	SI14 壁体溝		15.8	(脚端部径) 11．7	11.6	杯部が塊状に丸い　脚や端部の内側に段がある	内:ヘラケズリ後ヘラミガキ 外:ヘラケズリ後ヘラミガキ、ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	周防系 弥生時代終末期
15	45	86	弥生土器	高坏	SI14	床面					内:ナデ 外:ハケメ、ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(5YR6/6) 外:橙色(5YR6/8)	弥生時代後期
16	45	86	土師器	高坏	SI14 壁体溝						内:ナデ 外:ナデ、ハケメ	4mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	
17	45	86	土師器	高坏か	SI14	床面		(脚径) (19.1)			内:ナデ、ハケメ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	弥生時代後期 ～古墳時代前期
18	45	86	土師器	低脚杯	SI14	床面		5.7			内:不明 外:ナデ	1mm以下の砂粒含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:明赤褐色(2.5YR5/6)	
19	45	86	弥生土器	鼓形器台	SI14 壁体溝					外面に擬凹線文	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:鈍い黄褐色(10YR4/3)	
20	45	86	土製品	不明	SI14 P						内:不明 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	
21	45	86		炉壁か	SD100	床面					内:ナデ 外:ナデ	10mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	
22	46	87	弥生土器	甕	SI14	埋土	(16.1)			口縁端部を上方に拡張し4条の凹線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y7/2) 外:灰黄色(2.5Y7/2)	V－2様式
23	46	87	弥生土器	甕	SI14		(14.0)			口縁外面に擬凹線文を施す	内:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR6/6)	V－3様式
24	46	87	弥生土器	甕	SI14	埋土	(16.8)			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰黄褐色(10YR5/2) 外:灰黄褐色(10YR5/2)	V－2様式
25	46	87	弥生土器	甕	SI14					口縁外面に擬凹線文を施す	内:ヘラミガキ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:淡黄色(2.5Y8/4) 外:淡黄色(2.5Y8/4)	弥生時代後期
26	46	87	弥生土器	壺	SI14					複合口縁壺	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:橙色(7.5YR6/6)	周防系か
27	46	87	弥生土器	壺	SI14					沈線と三角文　上下2点の刺突文を施す	内:不明 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:黄橙色(10YR8/6)	弥生時代後期
28	46	87	弥生土器		SI14	埋土		(6.2)			内:ナデ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄褐色(10YR5/4) 外:鈍い黄褐色(10YR5/4)	
29	46	87	土師器	壺か	SI14	埋土		(21.6)		径の大きい平底	内:ヘラケズリ後ナデ 外:ハケメ後ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:淡黄色(2.5Y8/4)	
30	46	87	弥生土器	台付鉢	SI14	埋土					内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄色(2.5Y6/4) 外:鈍い黄色(2.5Y6/4)	弥生時代後期
31	46	87	弥生土器	鉢	SI14		13.2				内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR6/6) 外:明褐色(7.5YR5/6)	
32	46	87	土師器	鉢	SI14	埋土				体部は内湾する	内:不明 外:ナデ	0.5mm以下の砂粒含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:橙色(7.5YR6/8)	
33	46	87	土師器	高坏	SI14	埋土					内:ナデ 外:ナデ、ハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(5YR6/6) 外:明赤褐色(5YR5/6)	
34	46	85	弥生土器	高坏	SI14	埋土				脚部は大きく広がる	内:不明 外:ナデ、ハケメ	5mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	弥生時代後期か
35	46	87	弥生土器	高坏	SI14	埋土		18.5			内:不明 外:不明		内:明黄褐色(10YR7/6) 外:鈍い黄橙色(10YR6/4)	
36	46	87	土師器	低脚杯	SI14	埋土	5.2				内:ナデ 外:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(2.5Y7/6) 外:明黄褐色(2.5Y7/6)	
37	46	85	石器	砥石	SI14	不明	(器長) 8.3	(器幅) 3.5	(器厚) 1.5		内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:40.50g 石材:

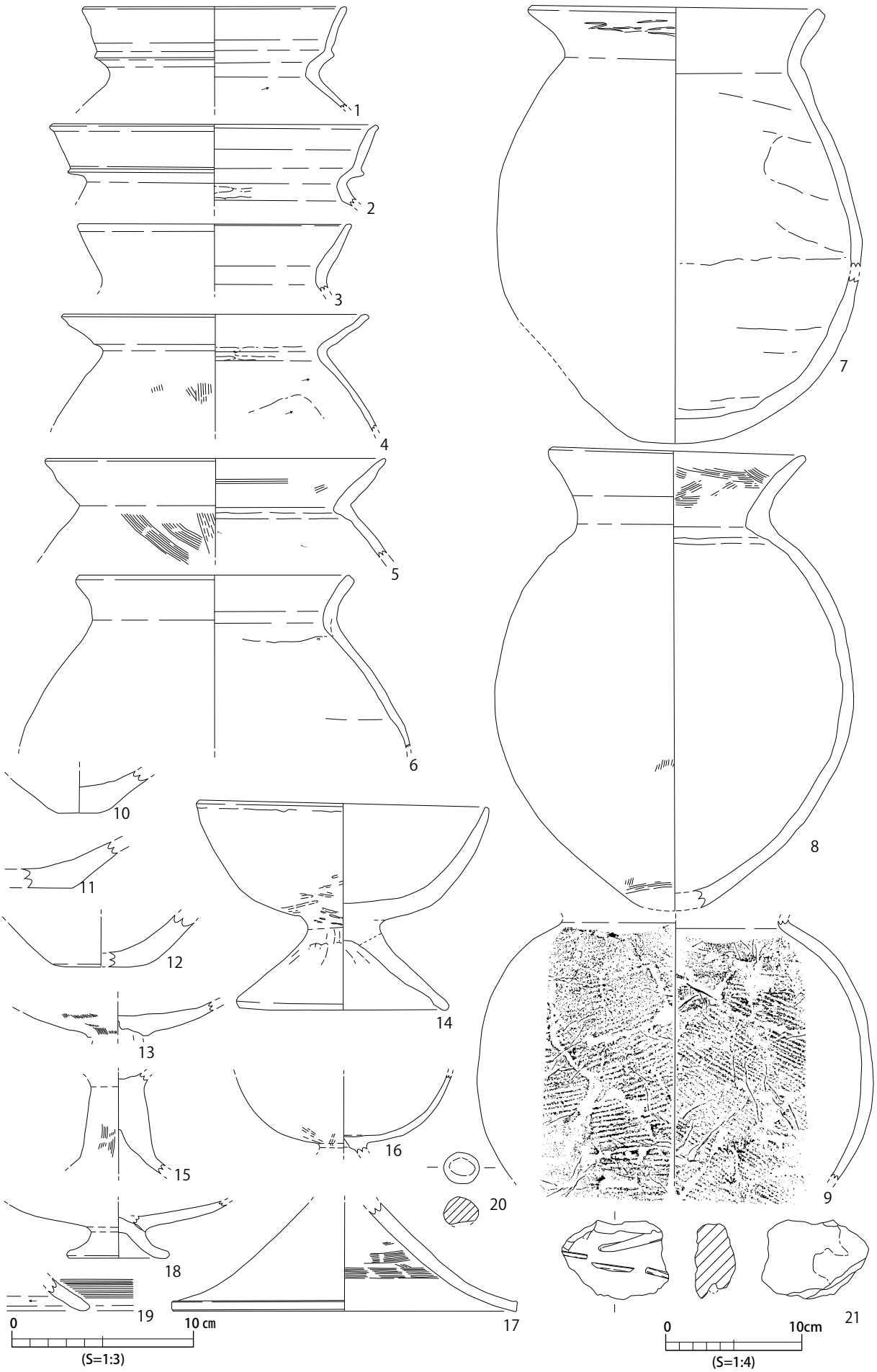


図 45.　SI14 出土遺物実測図 (1)（床面付近出土）

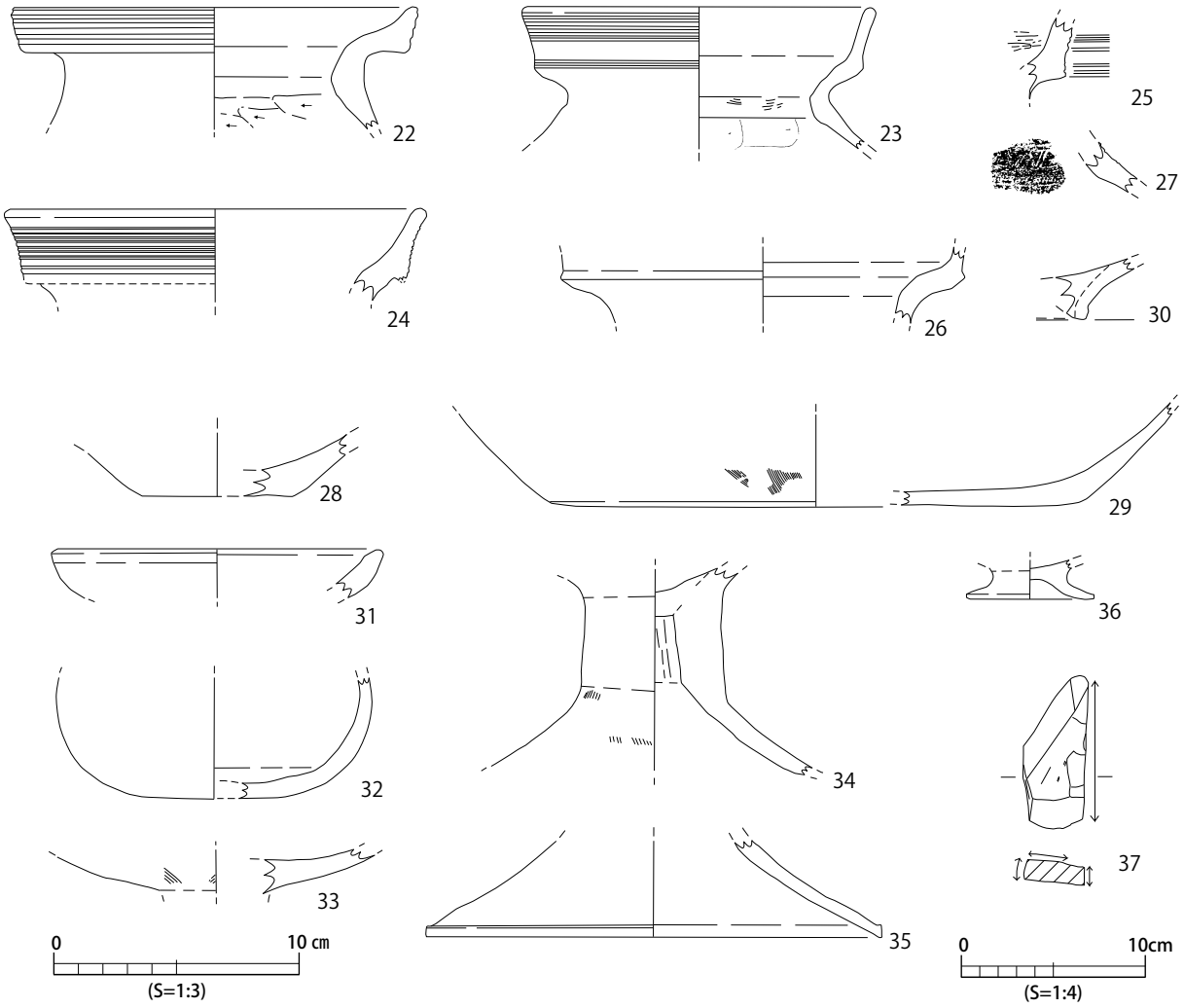


図 46.　SI14 出土遺物実測図 (2)（覆土中出土）

以上のように、SI14 では、本遺跡内でそれ以前に建てられた弥生時代の竪穴住居跡と、様々な違いが確認できた。これは、出土遺物の違いが示すように、明らかに地元以外の文化が影響を与えた結果だと考えられる。それが具体的にどの地方であるかは、さらに周辺の遺跡の調査成果も合わせた上で検討しなければならない。しかし、本遺跡が所在する益田市の南に位置する島根県鹿足郡の弥生時代後期の集落遺跡 (2) で、同様の方形の住居跡と単純口縁甕の検出例が複数確認されていることは注目すべき事実である。

竪穴住居跡の変遷についての詳細は第 5 章で述べるが、古墳時代前期以降、それまで長く造られ続けた円形の竪穴住居が姿を消すことを考えると、この SI14 は大きな画期を示す重要な資料と位置づけられる。

SI11（図 47、写真図版 42・43）

西区の北東で検出された竪穴住居跡で、SI10 の南東側に隣接して建てられている。SI11 が検出された場所は、調査前に宅地となっていた所で、旧地形が大規模に削平されていた。このため、住居の床面のうち、南西側だけが残っていたが、主柱穴 4 本と中央ピットが検出されたことから、竪穴住居の本来の規模や形状を復元することができる。

床面の形状は住居跡南西で検出された壁体溝の形状から、各辺がやや膨らんだ方形または隅丸方形と推定される。床面の規模はおよそ 5.3 m四方で、主柱穴の配置から東西にやや長かった可能性が考えられる。主柱穴の配置は SI14 に似ているが、中央ピットが中心から東へ僅かにずれている点が注目される。また、各柱穴の柱痕部分と中央ピットには、炭と焼土を多く含む土が堆積しており、焼失住居である可能性が高い。

図示できる遺物は出土していないが、中央ピットから弥生時代終末期から古墳時代初頭と見られる土器片が出土しており、SI14 に近く SB04 より古い時期の建物跡と判断した。

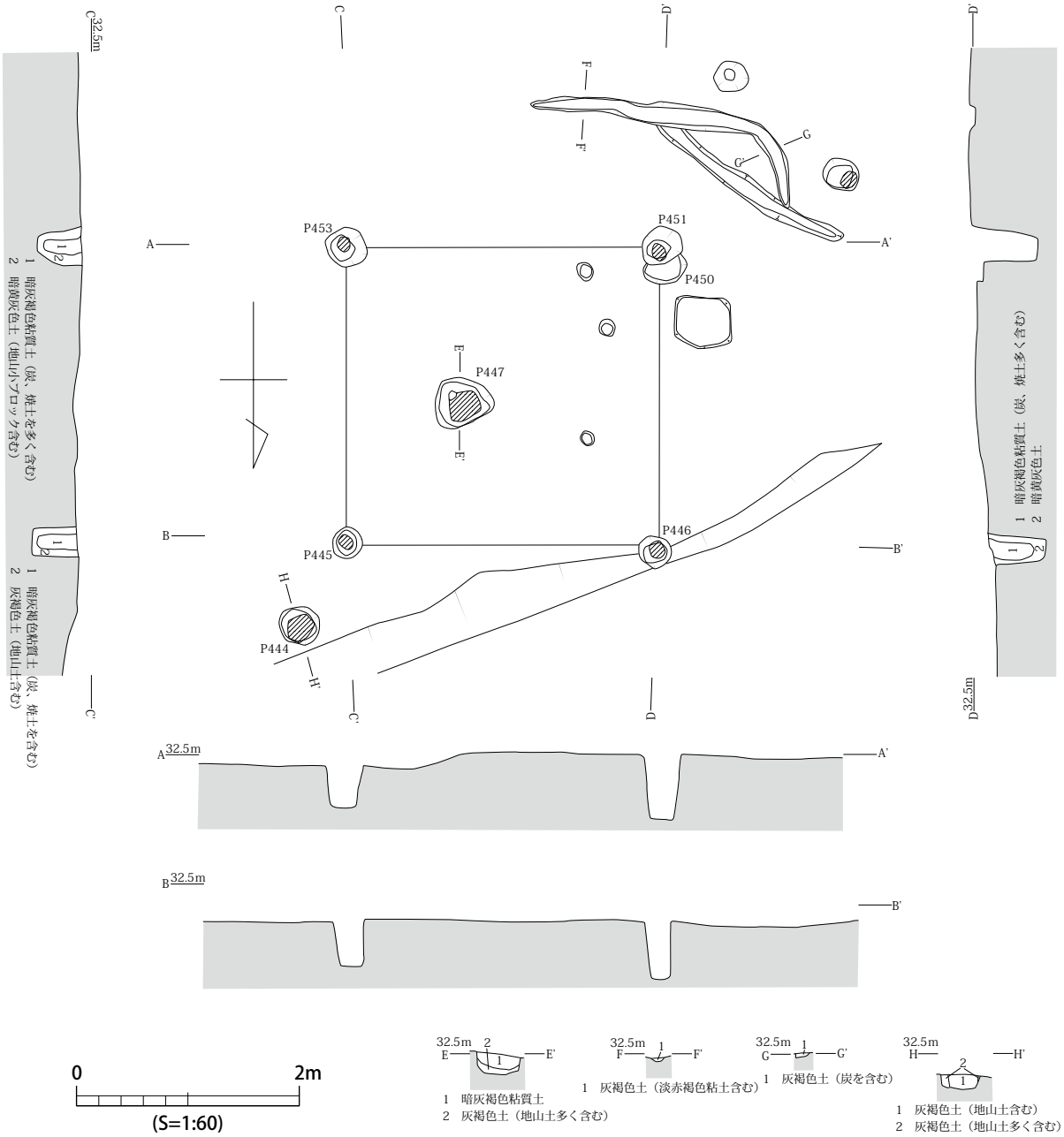


図 47.　SI11 実測図

２）掘立柱建物跡

SB06・12（図 19、写真図版 19）

SI10 と重複する位置で検出した掘立柱建物跡で、１間×２間の柱配置を復元した。土層の切り合い関係から SI10 より新しい時期の建物であることが分かっている。ほぼ同じ規模、方向で建てられている。県内の調査例から、周辺で検出された竪穴住居跡に伴う倉庫の跡と考えられる。

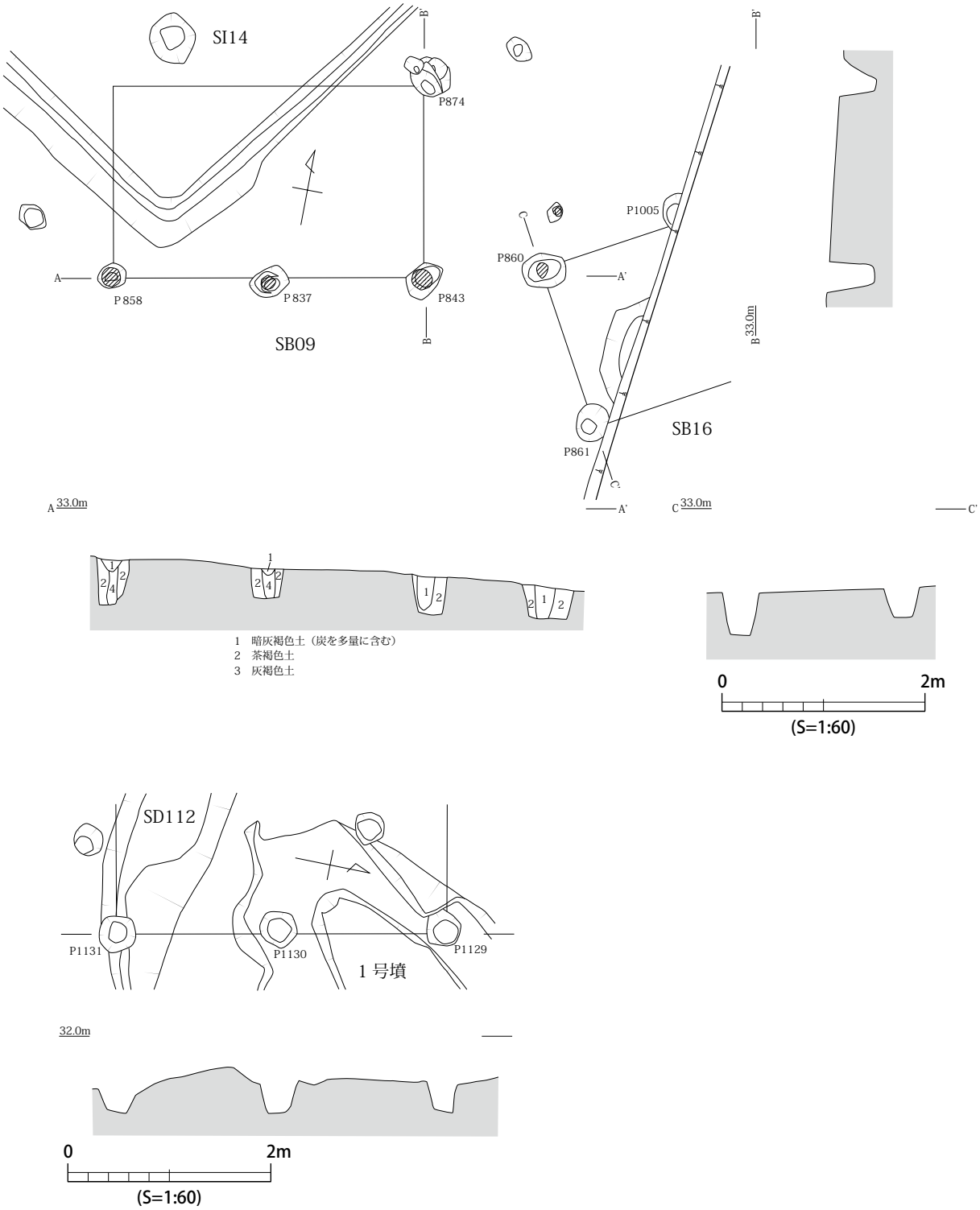


図 48.　SB09・10・16 実測図

SB09・16（図 48）

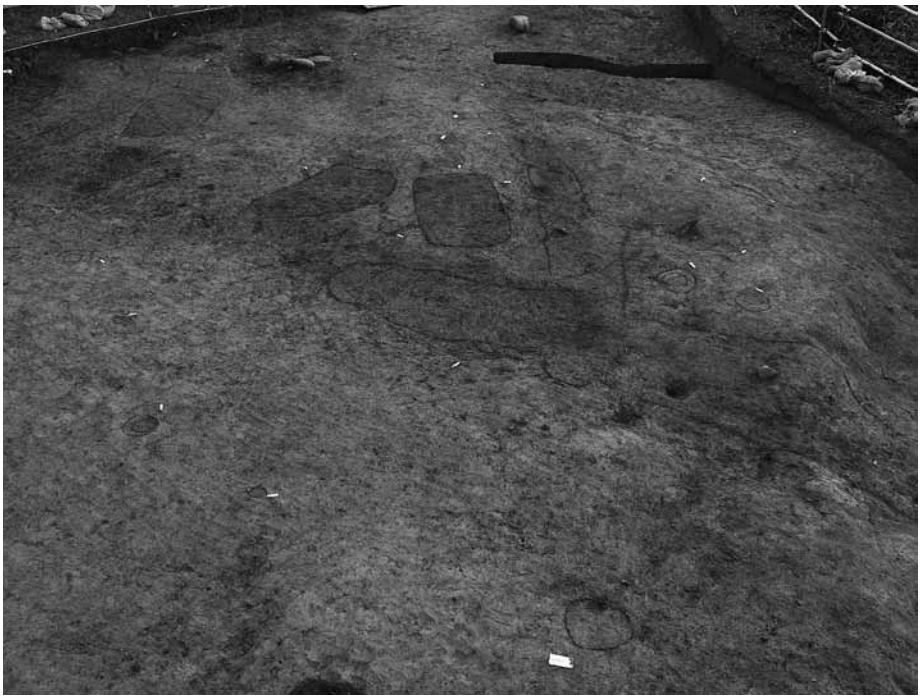
SI14 と重複する位置で検出した掘立柱建物跡で、4 基の柱穴を検出し、1 間× 2 間の柱配置を復元した。SI14 の時期や遺構内の埋土の堆積状況から、SI14 に先行する時期の建物であると判断される。SB09 の東側で同様の規模の柱穴を 3 基検出し、ほぼ同じ規模の建物の柱配置を復元して SB16 とした。この 2 棟の掘立柱建物跡も、周辺で検出された竪穴住居跡に伴う倉庫の跡と考えられる。

SB10（図 48）

1 号墳と重複する位置で検出した掘立柱建物跡で、桁行き 2 間以上の柱配置を復元した。1 号墳完掘後に検出しているので、1 号墳に先行する時期の建物であることが分かっている。SB09 など他の 1 間× 2 間の掘立柱建物とほぼ同じ規模と考えられるので、弥生時代の倉庫跡の可能性が考えられるが、周辺で竪穴住居跡は検出されていない。

SB11（図 49）

東区東側の M4 グリッドで検出した掘立柱建物跡であるこのグリッドでは掘立柱建物の柱穴と判断される規模のピットを複数検出しており、そのうち柱痕を確認したものや、遺物が出土した物を抽出して、1 間× 2 間の柱配置を復元した。東側の桁行きの主柱穴のうち、2 基は古墓 SK33･34 に切られていると判断した。また、P799 と 831 から弥生後期後葉の甕が出土している。周辺で検出された遺物の時期から、SI12 に伴う倉庫の跡と考えられる。



SB11 検出状況

古墓や近世以降の溝と重複する位置で検出した。

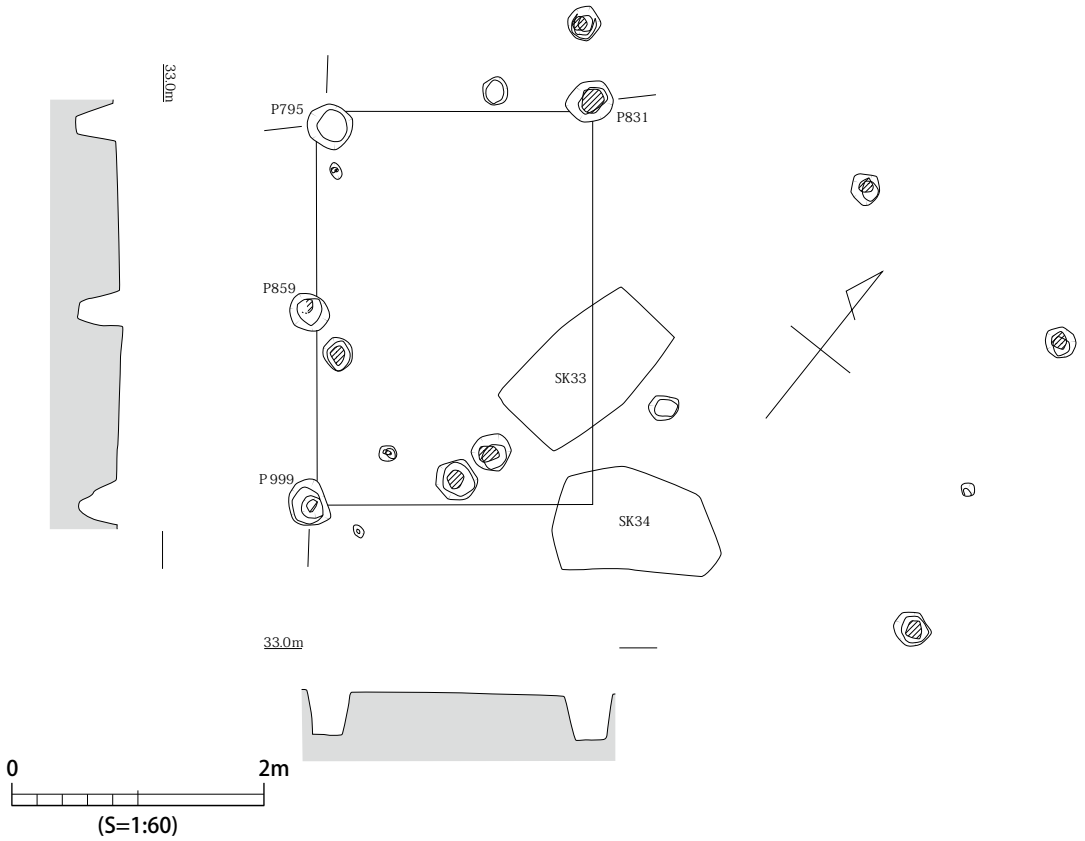


図 49.　SB11 実測図

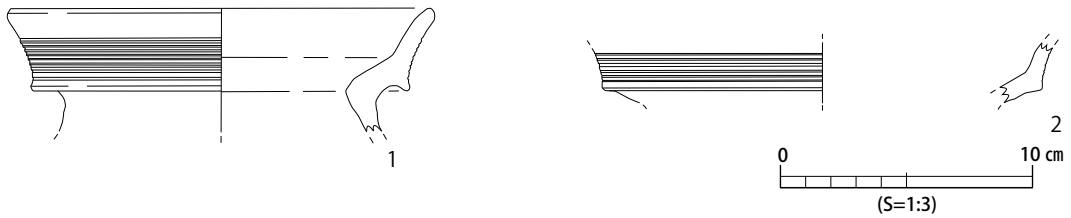


図 50.　SB11 出土遺物実測図

第14表　SB11出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	50	80	弥生土器	甕	SB11 P831		(16.6)			口縁は外反し、貝殻による擬凹線文を施す	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:黄橙色(10YR8/6)	V－3様式
2	50	80	弥生土器	甕	SB11 P799					口縁は外反し、貝殻による擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	弥生時代後期

SB08（図 51、写真図版 44・45）

SI12 の北側で検出した布掘り建物跡で、東区の東側に広がる平坦地から、北側の斜面に下っていく傾斜の変換点に位置している。隣接する SI12 の外周溝と接していることから、当初は SI12 の排水溝と認識していた。その後、調査を進める中で、溝の断面で柱痕が確認され、石見地方では調査例が無い弥生時代後期の布掘り建物跡であることが判明した。

対応する柱列の確認作業を行ったところ、柱列の北側に隣接する井戸の東西で、溝よりもやや大きい柱穴プランが検出された。さらに、この柱穴の位置を中軸にして北側の対応する位置で遺構検出を行うと、2 基の柱穴が確認され、やや南北方向に長い建物であることが明らかになった。

検出された建物の規模は、柱の中心で 5.1 × 4.6 mである。遺構は南側の溝が良好に残存しており、溝の中で約 1.5 m間隔で 4 基の柱痕が確認された。確認された柱痕は、溝の主軸方向からや

やずれた位置で並んでおり、P989 で柱を受けた窪みが他に 2 つ確認されたことから、何回か建て替えが行われていることが分かった。北側の柱列は残存状態が悪かったが、検出できた 2 基は南側の柱とほぼ完全に対応していた。また、北側の柱の並びからややずれた位置で検出した P1000 は、規模や深さは SB08 の柱穴とみて矛盾しない。井戸の東西で検出した棟持ち柱は、南北の柱より規模が大きく、20㎝前後の柱が使われたとみられる。

遺物は弥生土器が出土しているが、全て細片で遺構の年代は不明である。SI12 の外周溝を棟持ち柱が切っていることから、弥生時代後期後葉以降の建物と考えられる。

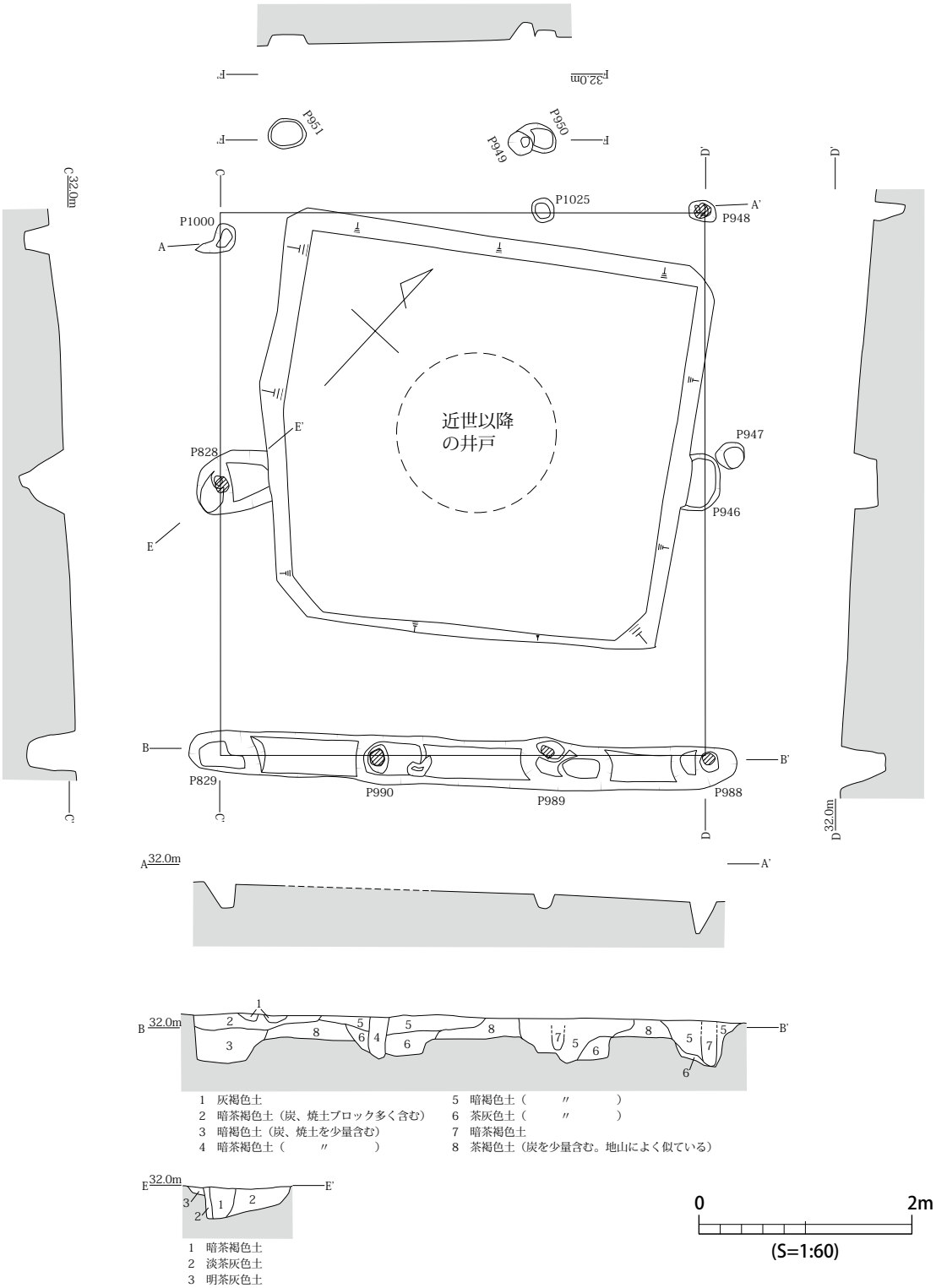


図 51.　SB08 実測図

3）その他の遺構

SK40（図 52・53、写真図版 46・47・81）

東区の M2 グリッドで検出した大型の土坑で、SI16 の外周溝である SD95 と布掘り建物跡 SB08 の間に位置している。床面は 3.4 × 2.6 mの楕円形で、中央に向かって僅かに窪んでいる。床面の

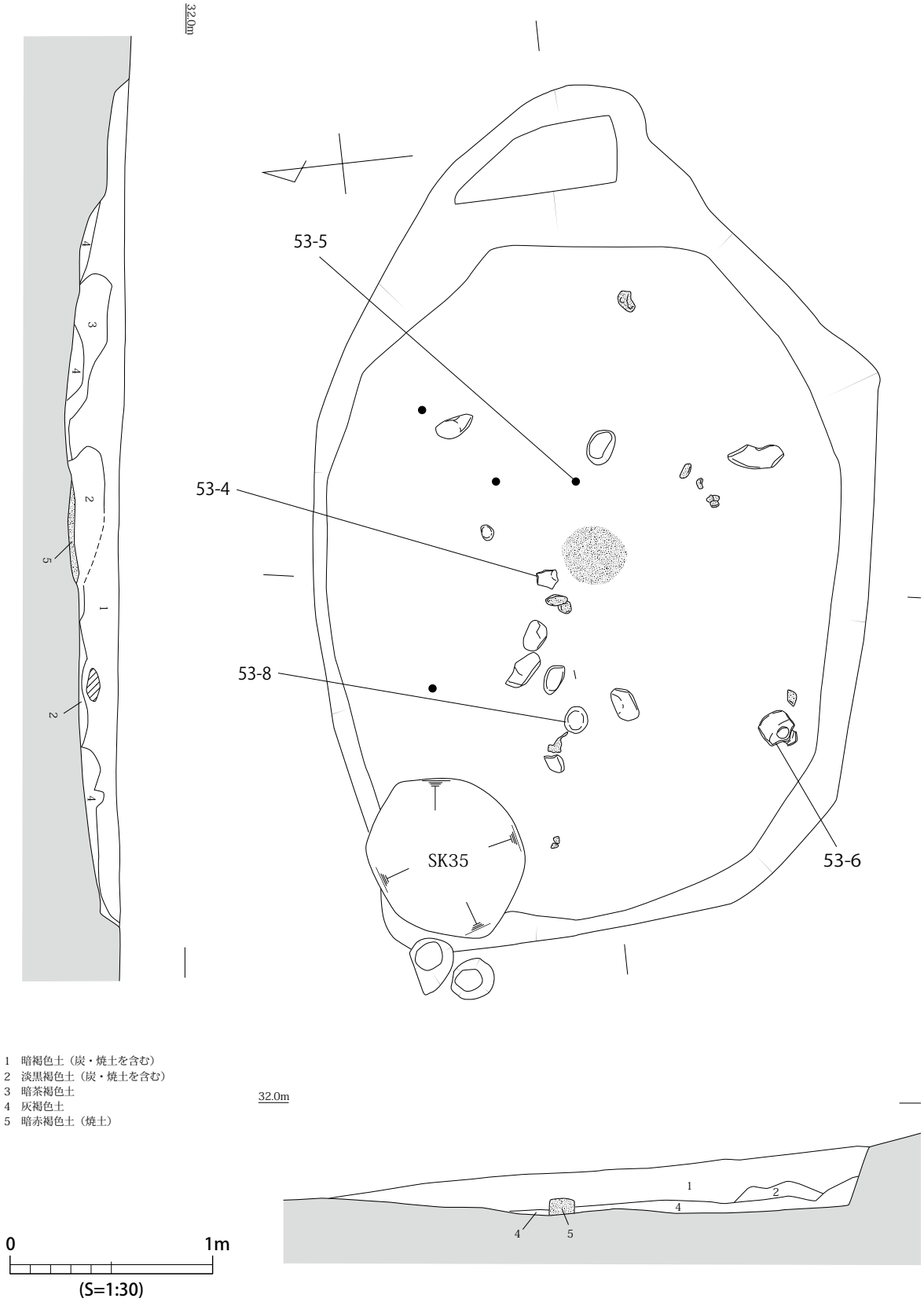


図 52.　SK40 実測図

東側には 80 × 32㎝の平坦面が、階段状に付属している。遺構内には、炭や焼土を含む土が堆積し、床上の薄い灰褐色土の堆積の上で、弥生土器や石、炉壁状の焼けた粘土塊が出土した。これらの遺物は、斜面上方からの流れ込みと見られる鼓形器台（6）が、壁際の床面から高い位置で出土したことを除けば、床上の中央寄りの位置で出土している。また、床面中央では焼土の塊が検出された。このように、SK40 は床面で柱穴と壁体溝が検出されなかったこと以外は、竪穴住居跡に近い検出状況だった。

出土した遺物は、弥生時代後期前葉から終末期までの弥生土器と土壁片、石器である。弥生土器は時期幅が大きいが、このうち 4 が床面の中央付近で出土し、年代が最も新しいので、遺構の時期を示すものと考えられる。7 は建物の土壁と判断したもので、芯に使われた棒状の植物の痕跡がある。8 は床面で出土した石の中で磨石と判断した球状の石である。このほか、図示していないが炉壁状の粘土塊がまとまって出土している [(3)]。炉壁状の粘土塊は、SI14（45-21）など東区東側の他の遺構でも出土したが、出土点数は SK40 が最も多かった。

SK40 は出土した遺物から弥生時代終末期頃の作業場と考えられる。また、遺構の時期や検出された場所から SI16 に付随する施設の可能性が高いと判断される。このような作業場は、西区の SI10 の西側にも見られ、中核的な竪穴住居には一般的に付随すると考えられる。

第15表　SK40出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	53	81	弥生土器	甕	SK40						内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄色(2.5Y6/3) 外:鈍い黄色(2.5Y6/3)	V－1様式
2	53	81	弥生土器	台付鉢	SK40	1					内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄色(2.5Y6/3) 外:鈍い黄色(2.5Y6/3)	
3	53	81	弥生土器	甕	SK40						内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:橙色(7.5YR6/6)	V－4様式か
4	53	81	弥生土器	甕	SK40			9.4			内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:浅黄色(2.5Y7/4)	
5	53	81	弥生土器	高坏	SK40						内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
6	53	81	弥生土器	鼓形器台	SK40	埋土	(16.8)				内: 外:		内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－3様式
7	53	81	土壁		SK40	1				表面に植物の痕跡あり	内: 外:	4mm以下の砂粒を含む	橙色(7.5YR6/8)	
8	53	81	石器	磨石	SK40	不明	(器長) 12.6	(器幅) 13.2	(器厚) 12.6		内: 外:		灰白色(7.5Y7/1)	重さ:3.3kg

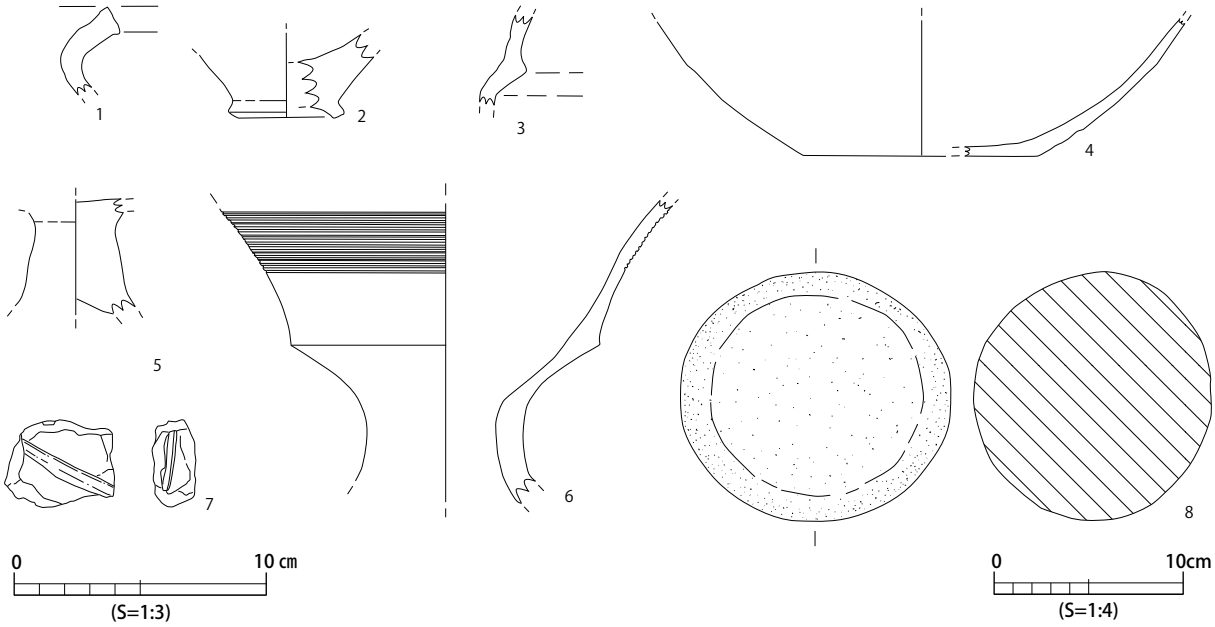


図 53.　SK40 出土遺物実測図

SR01（図 54・55、写真図版 48・80）

東区北側斜面の J3・K3 グリッドで検出した溝状の遺構で、検出状況や遺構内で出土した遺物から弥生時代後期の自然流路と判断した。流路の起点は南東の溜池の範囲内で確認できなかった。

遺構内で出土した遺物はほとんどが小片で、図化できたのは 1 のみである。弥生時代後期の台付鉢の脚部と判断した。

また、SR01 の西側では、弥生時代後期前葉から中葉の土器（63-3・4・6）やヤリガンナ（63-12・13）が出土している。

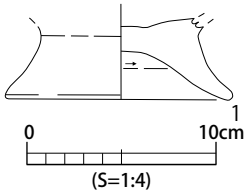


図 54.　SR01 出土遺物実測図

SR01　54-1 出土状況

調査区北側は近世以降の造成土が約 1 m盛られていた。その下に古代以降の旧表土の黒茶褐色土が約 40㎝堆積し、さらにその下で弥生時代の遺物包含層と SR01 を検出した。

第16表　SR01出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	54	80	弥生土器	鉢	J3			8.6			内:ナデ、ヘラケズリ 外:ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	内:黄橙色(10YR7/8) 外:橙色(7.5YR6/6)	

図 55.　SR01 実測図

SR03・東区谷部（図 56・57・58、写真図版 49・84）

東区の西側は、北に向かって開ける谷地形になっている。今回調査を実施した西区と東区は、この谷を挟んだ 2 つの台地上の居住域と言える（図 100 参照）。

調査前のこの谷地形は、近代以降の造成によって埋め立てられ宅地となっていた（写真図版 9 下）。重機を使ってこの造成土を掘削すると、その下から段状の耕作地が現れ、さらに耕作土を除去した下で、古墳時代以降の遺物包含層を検出した。

上層の黒茶褐色の包含層では、弥生土器のほか古墳時代の土師器や須恵器が出土し、その下で検出した茶褐色の層から弥生土器が多数出土した。さらに遺物包含層を掘削すると、谷の中央部分で不整形な溝状の遺構が検出された。調査区南東から流れる自然流路と判断し、SR03 とした。

SR03 と東区谷部の下層では弥生時代後期前葉から後葉の土器がまとまって出土している。甕の量が多いが、3・4 のように頸部が長く壺と判断したものも出土している。8 は鼓形器台の筒部と判断した。そのほか穂摘み具と見られる薄い板状の石器（12）も出土している。

このような遺物の出土状況から調査区内で、弥生時代の遺構を確認できなかった谷の南西側にも、

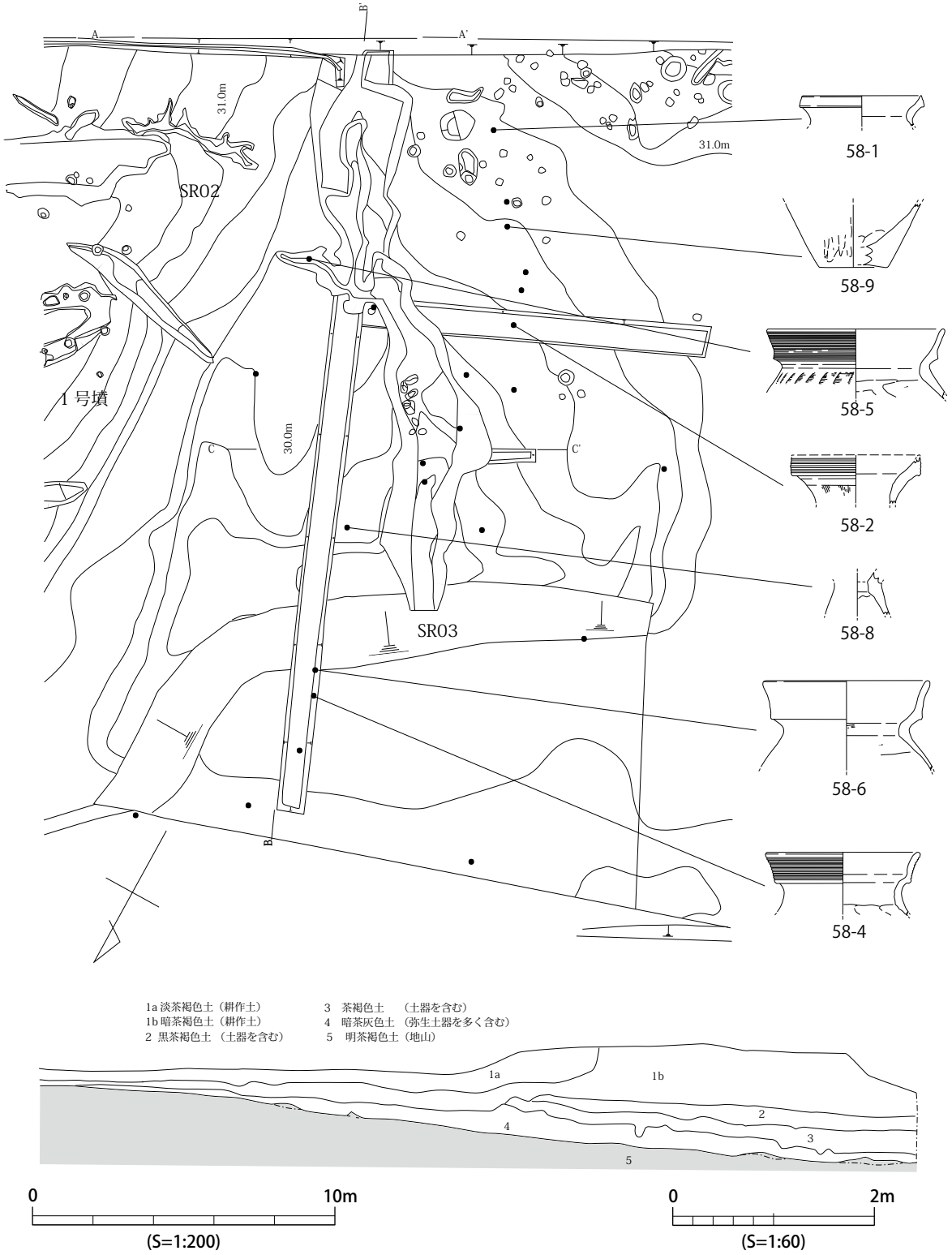


図 56.　東区谷部実測図 (1)

図 57.　東区谷部実測図 (2)

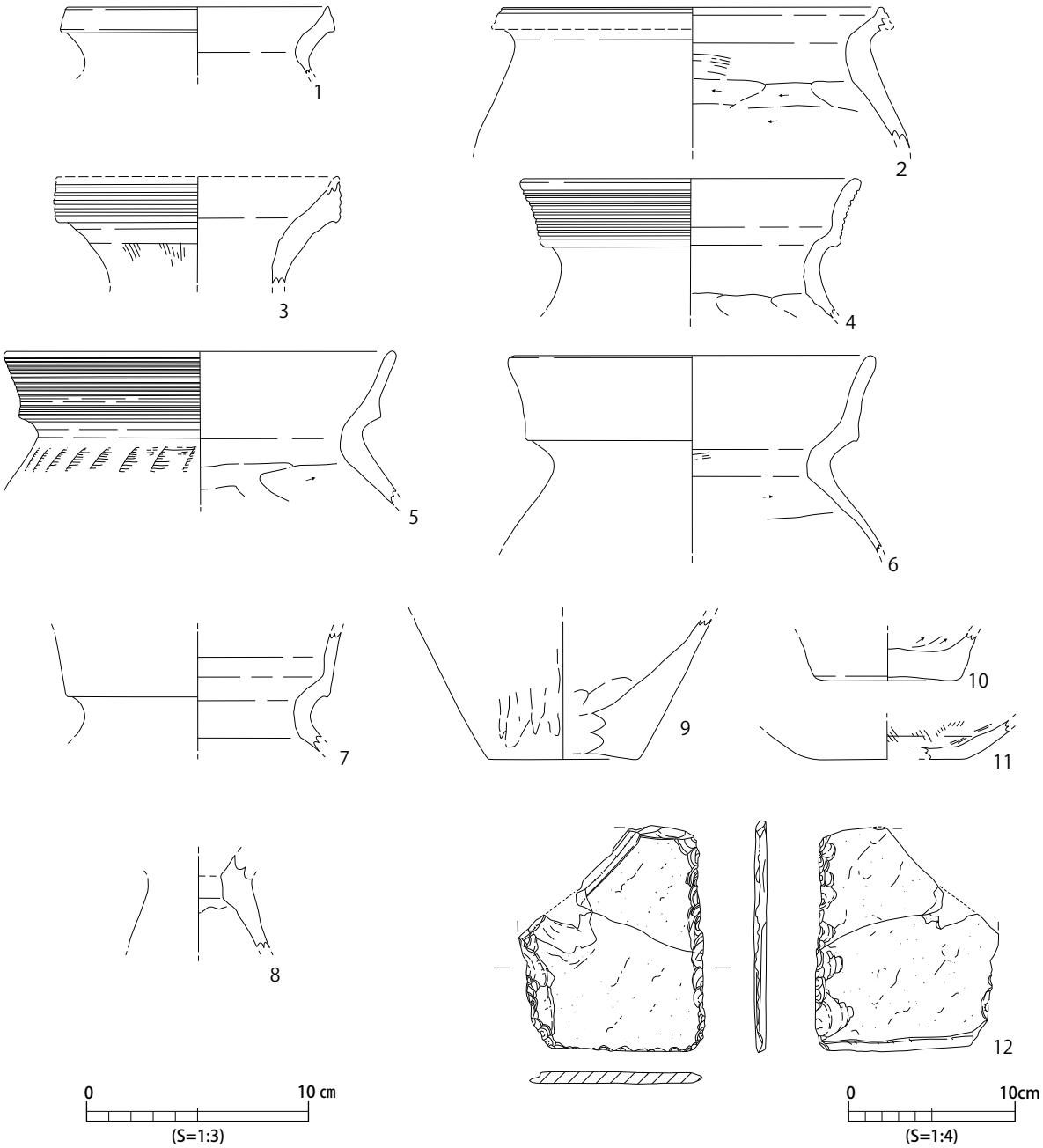


図 58.　SR03、東区谷部出土遺物実測図

第17表　SR03、東区谷部出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	58	84	弥生土器	甕	東区谷部		11.8			口縁端部を上下に拡張している	内:不明 外:不明		内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－1様式
2	58	84	弥生土器	甕	東区谷部	黒色土	(16.6)			口縁端部に1条以上の凹線文を施す	内:ヨコナデ、ヨコハケメ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を多く含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－1様式
3	58	84	弥生土器	壺	東区谷部		12.6			口縁端部を上下に拡張し、5条の凹線文を施す	内:不明 外:ヨコナデ、タテハケメ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－1様式
4	58	84	弥生土器	壺	H5 南北トレンチ		(14.8)			口縁部は外反し、貝殻腹縁による擬凹線文を9条施す	内:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒をやや多く含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－2様式
5	58	84	弥生土器	甕	SR03		(17.4)			口縁外面に貝殻腹縁による15条の擬凹線文を施す 頸部下に貝殻腹縁による押印文を施す	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ	5mm以下の砂粒を多く含む	内:橙色(7.5YR6/8) 外:橙色(7.5YR6/8)	V－2様式
6	58	84	弥生土器	甕	東区谷部 南北トレンチ		16.0				内:ヨコナデ、ヨコハケメ、ヘラケズリ 外:不明	2mm以下の砂粒を多く含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－3様式
7	58	84	弥生土器	甕	東区谷部 南北トレンチ 北側						内:回転ナデ 外:回転ナデ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－4様式
8	58	84	弥生土器	鼓形器台	東区谷部						内:ヘラケズリ 外:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－2様式
9	58	84	弥生土器		東区谷部			6.6			内:ヘラケズリ後ナデ 外:ヘラケズリ後ナデ、ヘラミガキ	4mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:浅黄橙色(10YR8/3)	
10	58	84	弥生土器	甕	東区谷部			9.0		底部は平坦でやや上げ底気味	内:ヘラケズリ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を多く含む	内:鈍い黄(2.5Y6/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	
11	58	84	弥生土器		東区谷部			(7.0)			内:ハケメ 外:不明	0.5mm以下の砂粒を多く含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
12	58	71	石器		東区谷部		(長さ) 6.7	(幅) 5.5	(厚さ) 0.4		内: 外:		灰色(N5/0)	重さ:21.16g

弥生時代後期の居住域が広がっていたと考えられる。

SD87・J6 グリッド出土遺物（図 59 ～ 61、写真図版 63・65・83・84）

東区谷部の東側の平坦地から斜面に傾斜が変わる場所に設定した J6 グリッドでは、1 号墳や中世以降の掘立柱建物跡、古墓などの遺構が検出されたが、それらの遺構の下層で、南東から南西に緩くカーブする溝状遺構 SD87 が検出された。溝の中から出土した遺物では、磨石と判断した石器 1 が出土したほか、遺構の時期を判断できるものは無かった。

SD87 の周辺では、弥生時代から近世に至る多様な遺物が出土している。このうち、遺構を確認していない弥生時代後期から、古墳時代前期の遺物の出土量が最も多く、この時期に長期間にわたって谷部の周辺で生活していた様子がうかがえる。特に SD87 南東側の調査区南端付近では地山上で多数の弥生土器が出土した（図 60）。このため、中世以前の遺構である SD87 は、弥生時代後期の溝状遺構の可能性が高く、さらに周辺の遺物の出土状況を考慮すると、竪穴住居の外周溝である可能性が考えられる。

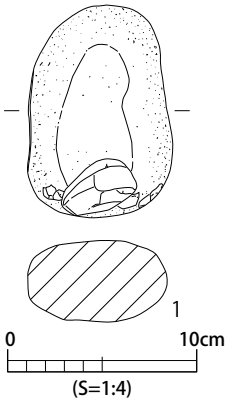


図 59.　SD87 出土遺物実測図

また、J6 グリッド及び周辺のグリッドでは、多数のピットが検出された。そのうちの一部は中世以降の建物の柱穴と判断したが、

第18表　SD87出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調 整	胎 土	色 調	備 考
1	59	84	石器	磨石	SD87						内: 外:		明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	重さ:649.17g

第19表　J6グリッド出土　弥生時代遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調 整	胎 土	色 調	備 考
1	61	83	弥生土器	壺	J6	1	(16.0)			口縁端部を上下に拡張し、2条の凹線を施す 頸部に3条以上の凹線を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－1様式
2	61	83	弥生土器	壺	J6	4	(9.0)				内:不明 外:ナデか	4mm以下の砂粒を含む	内:黄灰色(2.5Y6/1) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	V－1様式
3	61	83	弥生土器	甕	J6		(17.1)			口縁端部は肥厚し沈線を1条施す	内:ナデ、ケズリ 外:ナデ、ヨコナデ	1mm程度の石英、長石を含む	内:黄灰色(2.5Y6/1) 外:灰黄色(2.5Y6/2)	V－1様式
4	61	83	弥生土器	甕	J6	法面	(14.4)			口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す	内:ナデ 外:ヨコナデ	0.5mm以下の白色砂粒含む	内:黄灰色(2.5Y6/1) 外:灰黄色(2.5Y6/2)	V－1様式
5	61	83	弥生土器	甕	J6	4	(21.2)			口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－1様式
6	61	83	弥生土器	甕	J6	4	(12.4)			口縁端部はやや外反する	内:不明 外:不明	2mm以下の砂粒を含む	内:黄灰色(2.5Y6/1) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	V－2様式
7	61	83	弥生土器	甕	J6	1	(14.8)			口縁外面に2条の凹線文を施す	内:ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:黄褐色(2.5Y5/4) 外:黄褐色(2.5Y5/4)	V－2様式
8	61	83	弥生土器	甕	J6	4	(16.6)			口縁外面及び頸部に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ヘラケズリ後ナデ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:黄灰色(2.5Y6/1) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－2様式
9	61	83	弥生土器	甕	J6		(16.6)			口縁外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:不明 外:不明	2mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:黄橙色(7.5YR7/8)	V－2様式
10	61	83	弥生土器	甕	J6	4	(18.5)			口縁端部に面がある 器壁は薄い	内:不明 外:不明	1mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(2.5Y8/2) 外:灰白色(2.5Y8/2)	V－4様式
11	61	83	弥生土器	甕	J6			(4.8)		やや上げ底気味	内:ヘラケズリ 外:ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:黄灰色(2.5Y6/1) 外:灰黄色(2.5Y6/2)	
12	61	83	弥生土器	壺か	J6	4	9.0			平底	内:ヘラミガキ 外:ナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	水銀朱貯蔵容器
13	61	83	弥生土器	甕	J6	3		(8.7)			内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	
14	61	83	弥生土器	壺か	J6			10.5		底部中心に径約6cmの穴をあけている	内:不明 外:不明		内:黄褐色(2.5Y5/4) 外:黄褐色(2.5Y5/4)	
15	61	83	弥生土器	甕	J6			(6.6)			内:不明 外:ハケメ	2mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/2) 外:鈍い黄橙色(10YR7/3)	
16	61	83	弥生土器	小型の壺か鉢	J6					丸底	内:ハケメ 外:ハケメ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	
17	61	83	弥生土器	台付鉢	J6	4					内:ナデ、ハケメ 外:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	弥生時代終末か
18	61	83	弥生土器	鼓形器台	J6		(21.6)				内:ヘラミガキか 外:ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:黄褐色(2.5Y5/4) 外:黄褐色(2.5Y5/4)	V－4様式
19	61	83	弥生土器	鼓形器台	J6					シャープな稜が斜め下方に突出する	内:不明 外:不明	1mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－4様式
20	61	83	弥生土器	把手	J6	4					内:ヘラケズリ 外:ナデ		内:浅黄橙色(7.5YR8/6) 外:浅黄橙色(7.5YR8/6)	
21	61	83	石器	剥片	J6	4					内: 外:		灰色(N5/10)	重さ:22.33g
22	61	83	石器	磨石	J6	2					内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:1282.94g

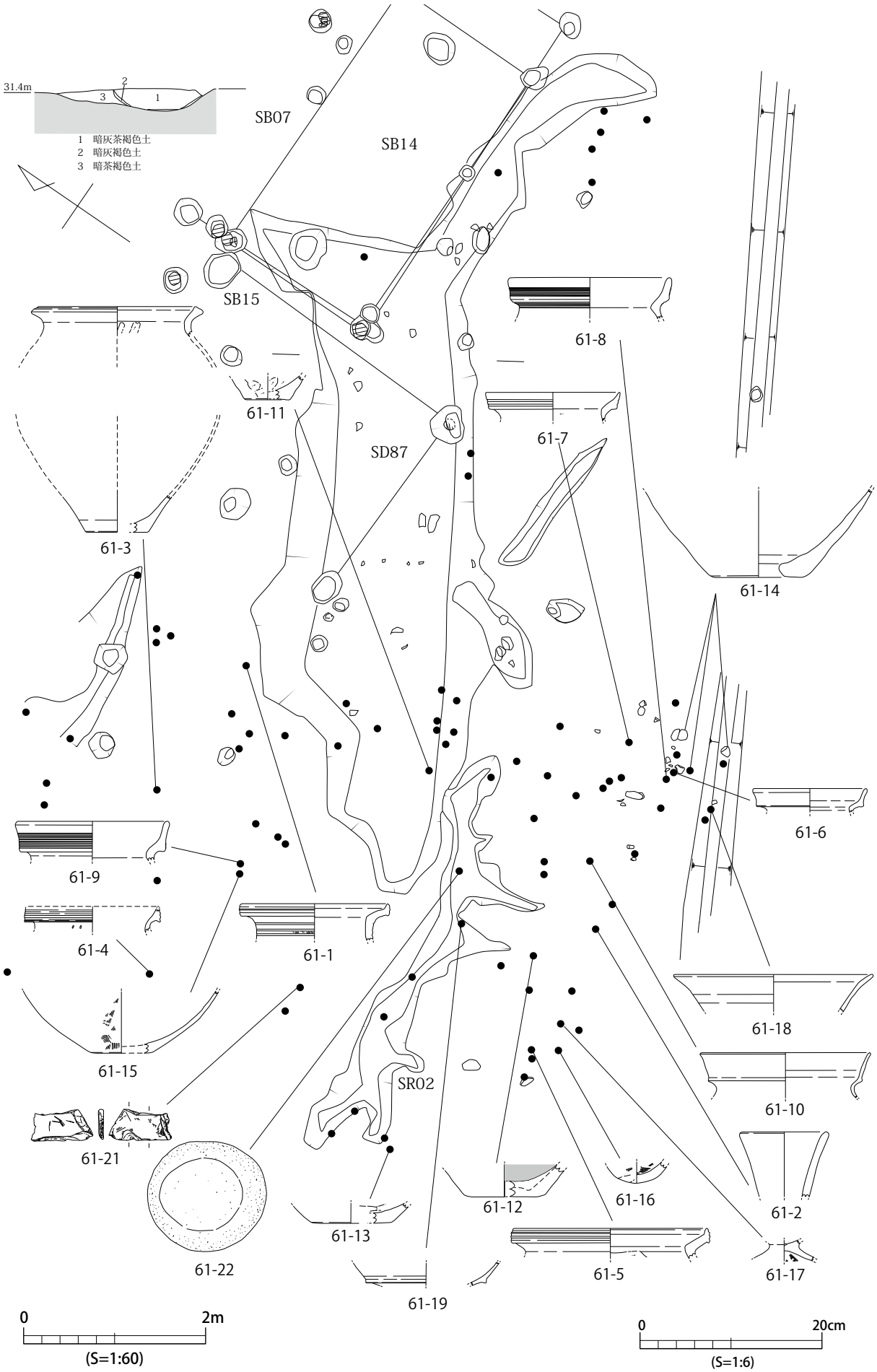


図 60.　SD87、J6 グリッド遺物出土状況図

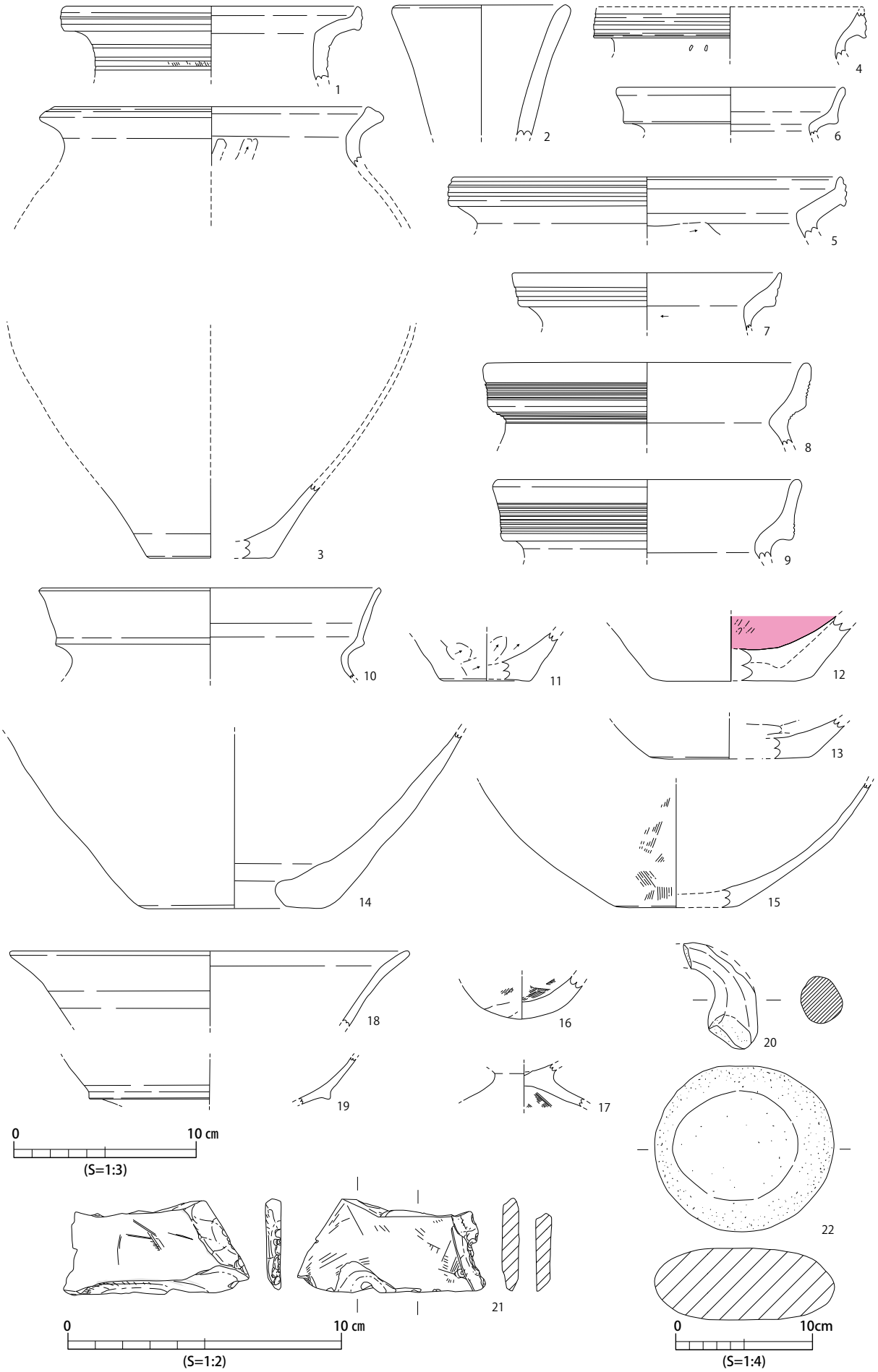


図 61.　J6 グリッド出土遺物実測図

その他にも柱痕が確認できるものや、規模が大きいものがある。弥生時代の遺物の出土量を考慮すると、これらの柱穴の中には弥生時代後期の住居の柱穴が含まれる可能性は十分考えられる。J6 グリッドの北東では、1 号墳の横穴式石室下層で弥生時代後期の倉庫跡と考えられる、SB10 が検出されている。このことから J6 グリッドとその周辺に弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が存在した可能性が高いと考えられる。

なお、J6 グリッドでは通常の弥生土器のほかに水銀朱を貯蔵したと考えられる土器の底部（12）が出土している。詳しくは第 4 章第 3 節で述べるが、土器の特徴から石見地方で最も古い時期の出土例になると考えられ注目される。

遺構外出土弥生時代遺物（図 62・63、写真図版 84）

今回の調査では、弥生時代後期の集落跡を中心に遺構が確認された。比較的旧地形の残っていた東区では、当該期の遺物が遺構外からも多数出土している。そのうち、主なものを図 63 に示した。2 は口縁部が短く外反する小型の甕または鉢で、全面にハケ調整が施されている。類例を見な土器である。12・13 は刀子のようにも見えるが断面の形状からヤリガンナと判断した。接点が無いため別々に図示したが、同地点で出土しており、同一個体の可能性が高い。

注

1　追迫遺跡、天王遺跡など島田川流域の集落遺跡でみられる。山口大学田畑氏の教示による。
2　島根県津和野町大蔭遺跡、吉賀町前立山遺跡などがある。
3　島根県松江市宍道町の野津原Ⅱ遺跡東区第 2 加工段で、類似する弥生時代後期の例が報告されている。

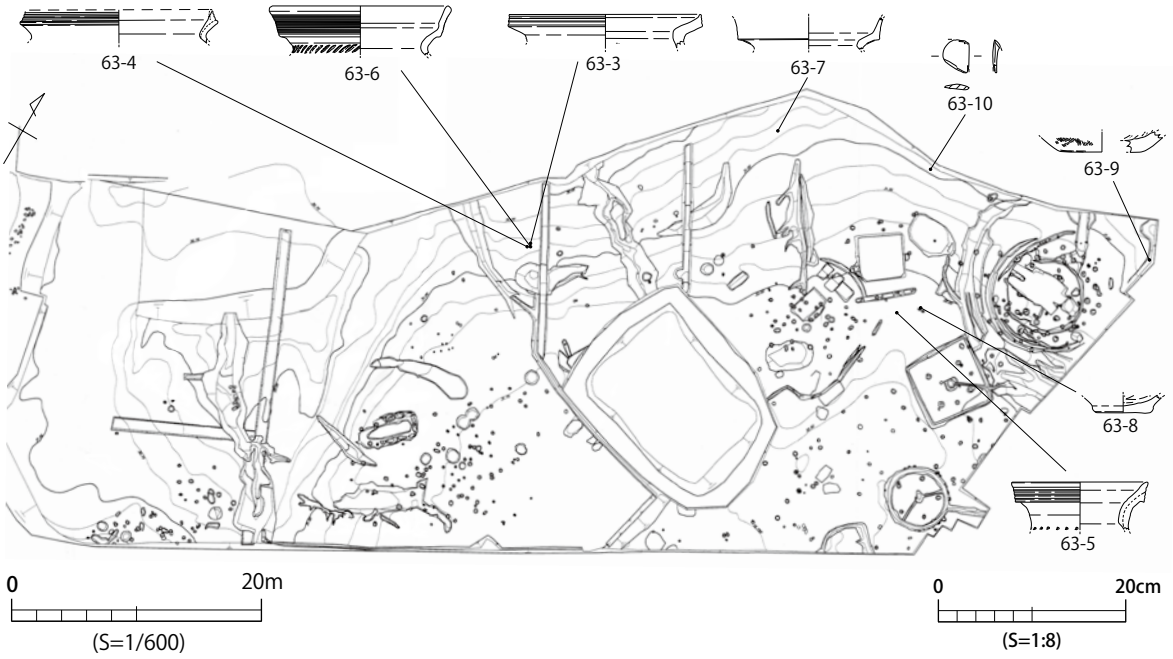


図 62.　遺構外弥生時代の遺物出土状況図

第20表　遺構外出土　弥生時代遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	63	84	弥生土器	甕	M2		17．3			口縁端部を上下に拡張し、2条の凹線文を施す 頸部に直線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:明黄褐色(2.5Y7/6) 外:明黄褐色(2.5Y7/6)	V－1様式 SI15に伴うものか
2	63	84	弥生土器	小型の甕か鉢	J4		(11.6)			口縁部は外反する 雑なつくりで厚さは不均等	内:ハケメ、ナデ 外:ハケメ	3mm以下の砂粒を多く含む	内:鈍い赤褐色(5YR5/4) 外:明赤褐色(5YR5/6)	
3	63	84	弥生土器	甕	J4		(20.4)			端部は上方に拡張 3条の凹線文を施す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:灰黄褐色(10YR6/2) 外:灰黄褐色(10YR6/2)	V－1様式
4	63	84	弥生土器	甕	J4		(20.2)			口縁外面に3条の凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－1様式
5	63	84	弥生土器	甕	M3		(14.5)			口縁端部は上下に拡張し、わずかに外反する 4条の凹線文を施す 頸部に刺突文を施す	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:褐灰色(10YR6/1)	V－2様式
6	63	84	弥生土器	甕	J4		(18.8)			口縁外面に貝殻腹縁による13条の擬凹線文を施す	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	2mm以下の砂粒を多く含む	内:明黄褐色(10YR8/6) 外:黄橙色(10YR7/8)	V－3様式
7	63	84	弥生土器	甕	K2						内:不明 外:ヨコナデ		内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	V－4様式
8	63	84	弥生土器	壺または鉢	M3			(5.7)		平底	内:ナデ 外:ヨコナデ、ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:黒褐色(10YR3/1) 外:浅黄色(2.5Y8/4)	弥生時代中期か
9	63	84	弥生土器	(底部)	N1			(8.2)		平底	内:ヘラケズリ 外:ハケメ、ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR6/6)	
10	63	71	石器	磨製石斧	M1	不明	(器長)3.5	(器幅)2.8	(器厚)0.7		内: 外:		灰色(7.5Y6/1)	重さ:6.68g
11	63	84	石器	磨石	F6	1	(器長)10.5	(器幅)10.1	(器厚)5.6		内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:857.63g
12	63	98	鉄製品	ヤリガンナ	J3		(器長)4.1	(器幅)1.8	(器厚)0.5	あまり反りが見られない	内: 外:			
13	63	98	鉄製品	ヤリガンナ	J3		(器長)3.8	(器幅)2.0	(器厚)0.45	基部に円形の穴を開ける	内: 外:			12と同一個体か

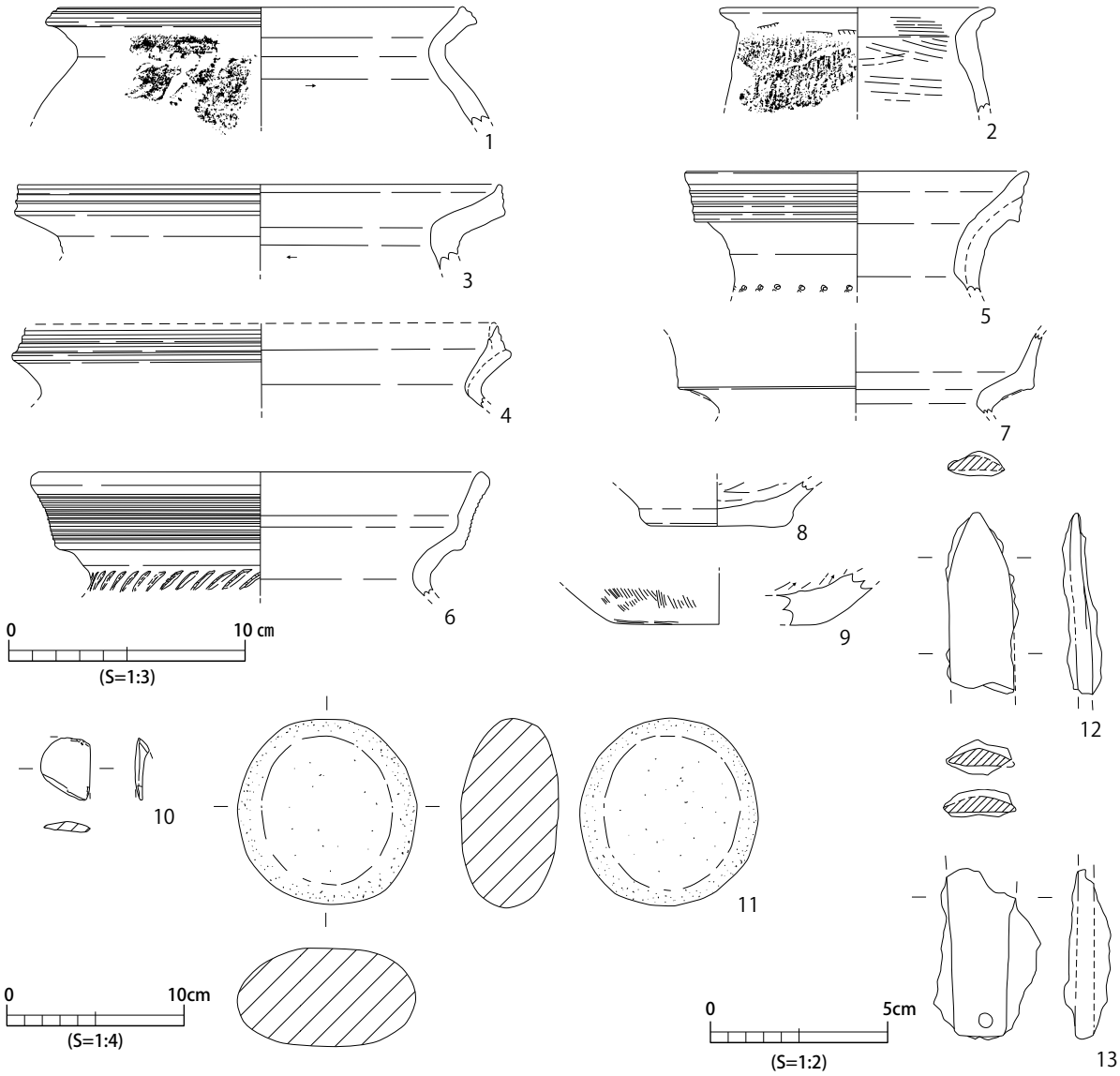


図 63.　遺構外出土弥生時代の遺物実測図

第 4 節　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代前期の建物跡 1 棟、後期古墳 1 基を検出した。前期の建物跡である SB04 は弥生時代後期から引き続き集落が存続していたことを示している。このほか西区南側斜面や東区の谷部、北側斜面でも、同時期の土器が出土しており、弥生時代から引き続き集落の居住域だったことが分かる。

古墳時代中期は前半頃の土器がわずかに出土したが、建物等の遺構は確認されなかった。後期の遺構は 1 号墳のみだが、西区遺構外で須恵器の蓋坏や壺の小片が出土している。出土遺物で土師器の煮炊き具は確認できなかった。

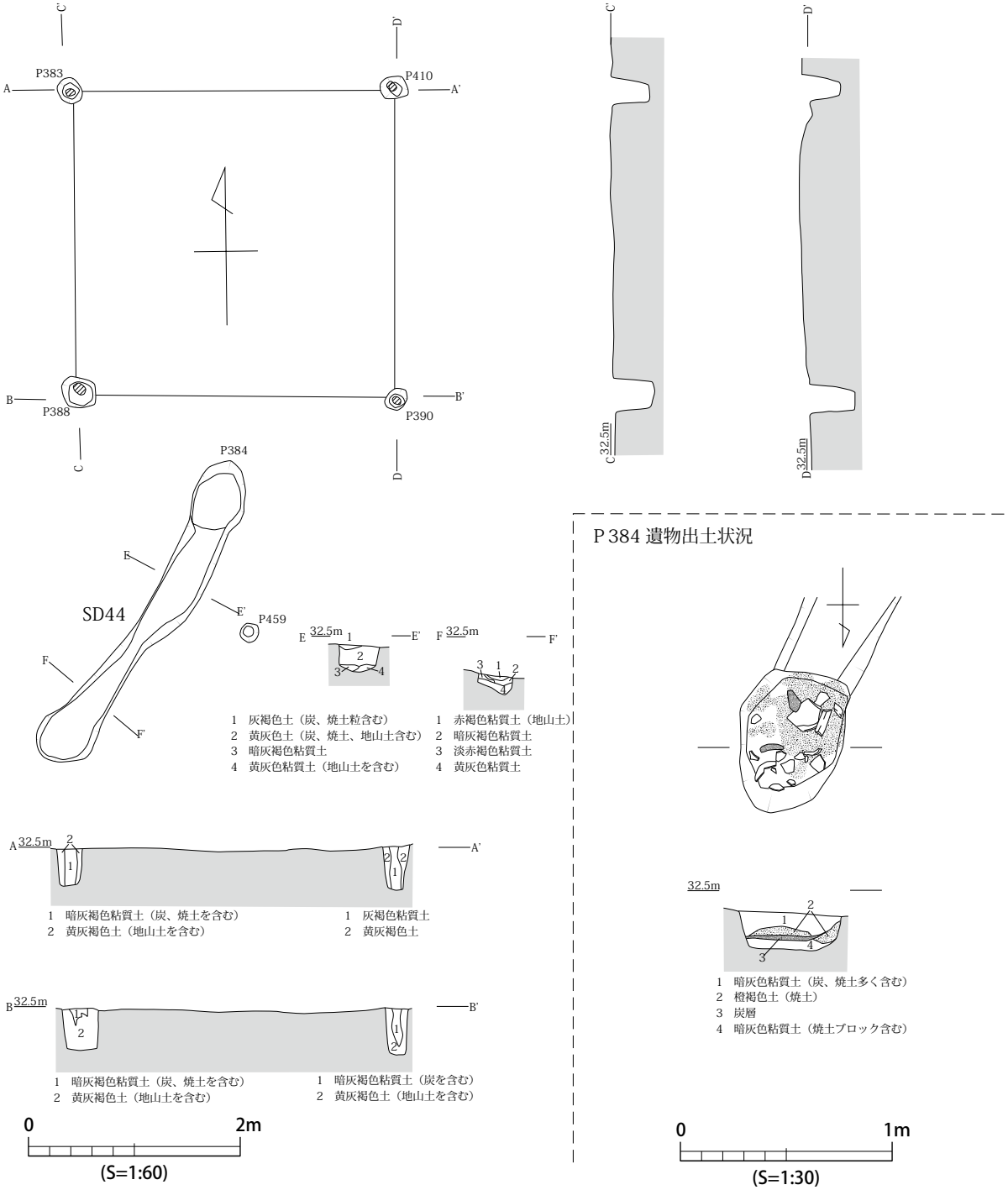


図 64.　SB04 実測図

1）SB04（図 64・65、写真図版 8・50・88）

西区南東の E8・9 グリッドで検出した 1 間× 1 間の柱配置の建物跡で、柱間の距離はほぼ 3 m である。また、4 本の柱を結んだ建物の方向が、ほぼ方位と一致することから、当初は古代以降の建物跡の可能性を考えていた。

全ての柱穴で柱痕が確認でき、土層断面を観察すると、柱痕部分には炭・焼土を含む粘質土が堆積していた。このような柱穴の土層断面は、上面を削平された焼失住居 SI08・12 と良く似ている。

この建物跡の南側の柱間のちょうど中間付近では、平面の規模が 70 × 50㎝の楕円形のピット（P384）が検出された。P384 は下層で炭と焼土が多数出土し、それに混じって土師器の甕が出土した。P384 には、幅 25 ～ 40㎝、長さ 2.7 mの溝 SD44 が繋がっている。ピットの床面は平坦になっており、そのまま SD44 の床面にすりついている。SD44 は、P384 に近い側の埋土に炭や焼土を含んでおり、同時期の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

これらの遺構は個別に検出したものだが、周辺でほかに近世以前の遺構が検出されず、埋土に炭・焼土が混じっているなど関連をうかがわせる状況だったので、本来一体の遺構と考えられた。このため、P384 内で出土した遺物の年代から、SB04 は、建物の中央から壁際に炉跡が移動した古墳時代前期の竪穴住居が、床面を全て削平された状態である可能性が高いといえる。さらに、SD44 は、弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡である SI14 にみられた、中央ピット（炉跡）から建物外に伸びる溝の可能性が考えられる。

遺物は複合口縁の甕 1 と外反する口縁を持つ甕 2 が出土している。1 は口縁端部を内側に僅かにつまんでおり、口縁段部の稜は退化している。2 は器壁が薄く、口縁端部に面を持つ。

SB04 は出土した遺物の時期から古墳時代前期中頃以降の建物跡と考えられ、調査区内では弥生時代後期から続く集落の最後の建物とみられる。

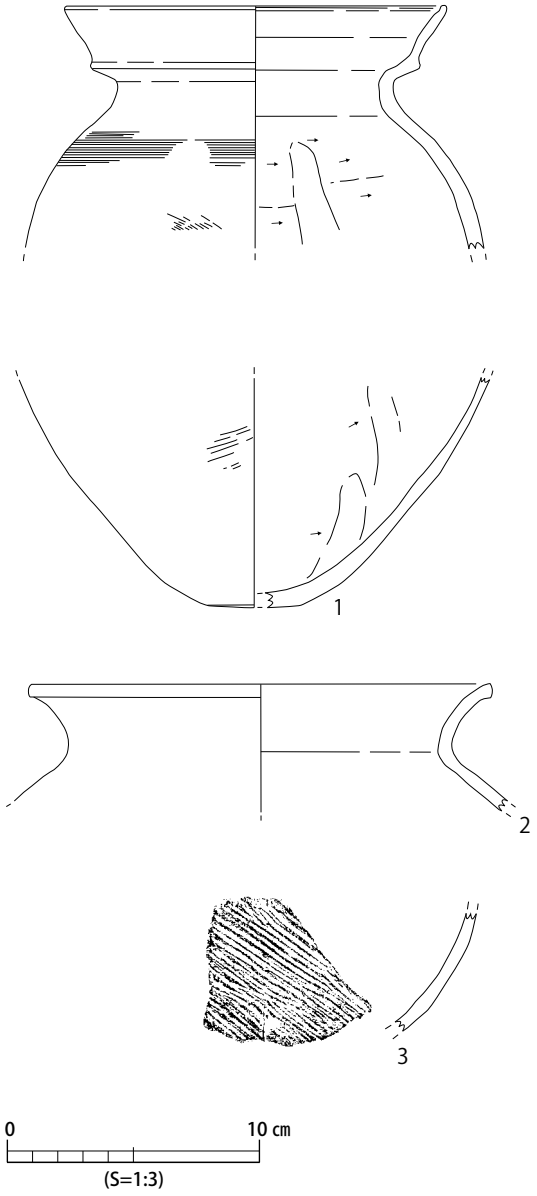


図 65.　SB04　P384 出土遺物実測図

第21表　SB04 (P384) 出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	65	88	土師器	甕	P384	1	(15.0)	(3.8)		口縁端部は丸く内側につまみ出す	内:ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	古墳時代前期後半
2	65	88	土師器	甕	P384		18.2			口縁は外反し端部に面がある	内:不明 外:不明	5mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR6/6) 外:明黄褐色(10YR6/6)	
3	65	88	土師器	壺	P384						内:ハケメ 外:ヘラミガキ	1mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/3) 外:鈍い黄橙色(10YR6/3)	古墳時代前期

２）１号墳

東区の谷に面したJ5・6グリッドで検出した径約10ｍの円墳である。今回の発掘調査で確認された古墳は1基だが、調査当時、当地域に多くみられる例から、他にも同様の古墳が存在する可能性が考えられ、「1号墳」として発掘調査を実施した。その後混乱を避けるため名称の変更を行わなかったものである。

調査前の状況（図4、写真図版9）

墳丘が後世の開墾によって削平され、完全な平坦地になっており、調査前の地表観察では全く古墳を認識できなかった。その後、表土掘削後の荒掘り中に石室床上の須恵器が出土し、遺構検出を行った結果、古墳主体部のプランが検出され、小規模な横穴式石室であることが分かった。

周溝（図66、写真図版51）

周溝は古墳の北側では明確で、幅1～1.5ｍの浅い溝が、緩く弧を描く平面プランで検出された。旧地形の標高が高くなっている東側は、後世の農地造成により墳丘・周溝ともに完全に削平されていた。南側は弥生時代の溝SD87や自然流路と重複して明確でない。周溝内で古墳に伴う遺物は出土していない。

横穴式石室（図67、写真図版51・54）

横穴式石室の開口方向はS49°‐Ｗで、南西方向に開口している。主体部内には長さ10～30㎝の石が数多く入っており、検出面から15～20㎝掘り下げたところで床面を確認した。床面では石室基底部の石の抜き取り痕が確認され、さらにその周りでは、０字状の石室掘り形のラインが検出された。基底部の石の抜取り痕跡から、左肩袖式の横穴式石室で、床面の規模は4.2ｍ×1.5ｍと推定される。

また、奥壁には長さ約60㎝の石を２枚並べていたことがわかる。右側壁も長さ約40～60㎝の石が使用され、石室中央部分には長さ約１ｍのやや大型の石を使用している。その次には石室内で多数見られた小型の石が丸く並べられていた（写真図版52上）。益田市内の古墳でこのように石を並べた例は無く、これが本来古墳に伴うものかは不明である。左側壁も石の抜き取り痕を確認した石室中央部までは右側壁とほぼ同じ状況だった。

石室内から出土した小型の石の中には、基底部の石の抜き取り痕の間に壁面に直行するように置かれたものが見られる。基底部の石を固定するために置かれたと考えられる。

遺物出土状況（図67、写真図版52・53）

石室の奥壁から２～３ｍのところで須恵器の坏蓋３点、坏身６点、壺１点、耳環１点、刀子１点が出土した。これらの遺物には、蓋坏や刀子で明らかに原位置を保っていないものもあるが、ほぼ本来の位置に近いものとみられる。この遺物出土状況から、ここから奥が玄室と認識されていたと考えられる。また、耳環（12）は床面付近で出土し、保存状態からほぼ原位置とみられるので、被葬者は開口方向に頭を向けていたと考えられる。

このほか、右側の奥壁付近で、撹乱により原位置から大きく動かされ、激しく劣化した耳環が１点出土している。また、弥生時代後期の自然流路SR03が埋没した窪地で長さ40～50㎝の石が検出された。付近で須恵器壺（70-19･20）が出土しており、１号墳の石室石材の可能性がある。

１号墳は、石室内で出土した遺物から、７世紀前半頃に築造された古墳と考えられる。また、遅くとも中世末頃には、墳丘を削平されて耕作地になっていたと推測される。

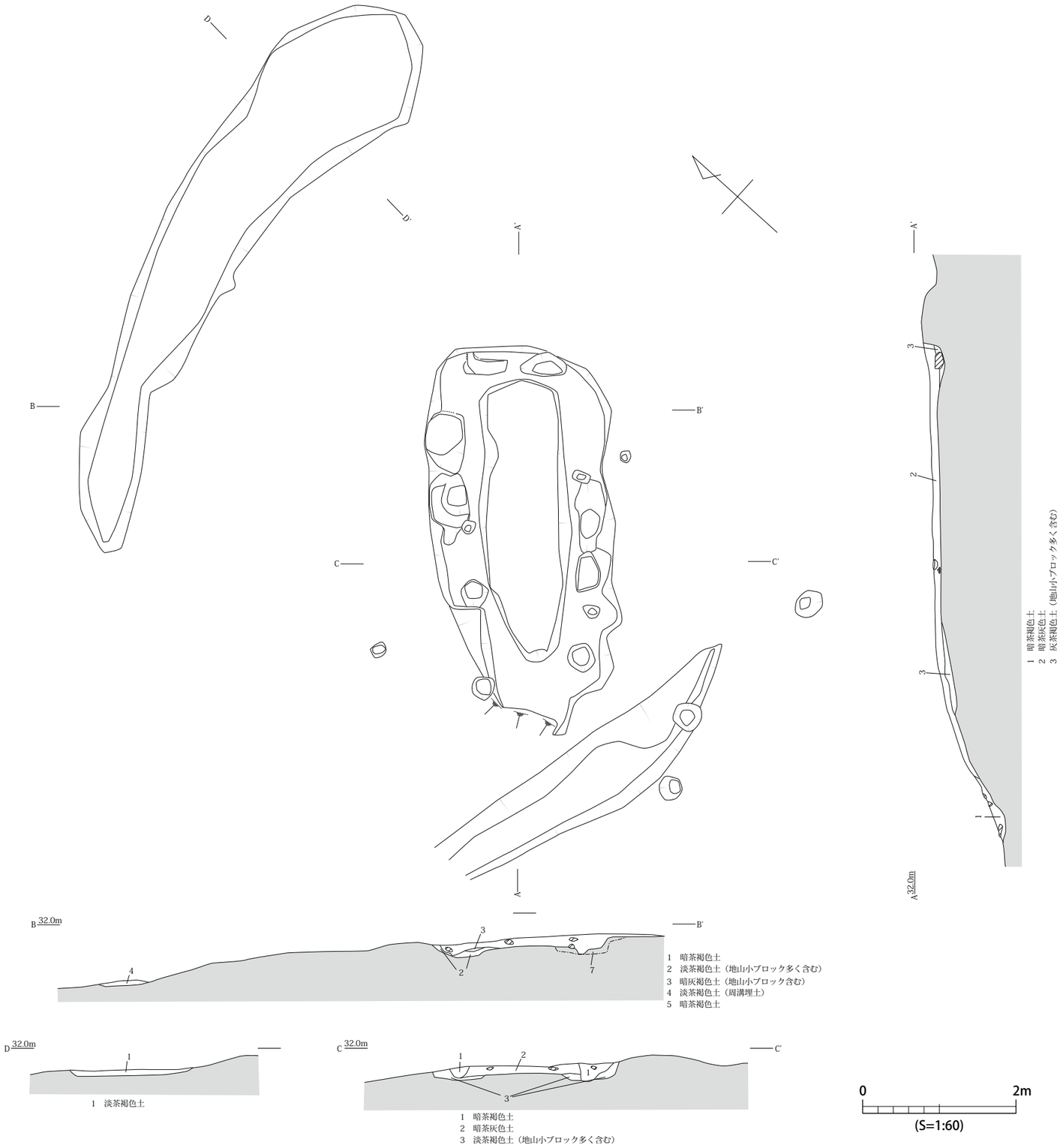

A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
A 32.0m
1 暗茶褐色土
2 暗茶灰色土
3 灰茶褐色土（地山小ブロック多く含む）
B 32.0m
1 暗茶褐色土
2 淡茶褐色土（地山小ブロック多く含む）
3 暗灰褐色土（地山小ブロック含む）
4 淡茶褐色土（周溝埋土）
5 暗茶褐色土
D 32.0m
1 淡茶褐色土
C 32.0m
1 暗茶褐色土
2 暗茶灰色土
3 淡茶褐色土（地山小ブロック多く含む）
0
2m
(S=1:60)

図 66.　1 号墳実測図

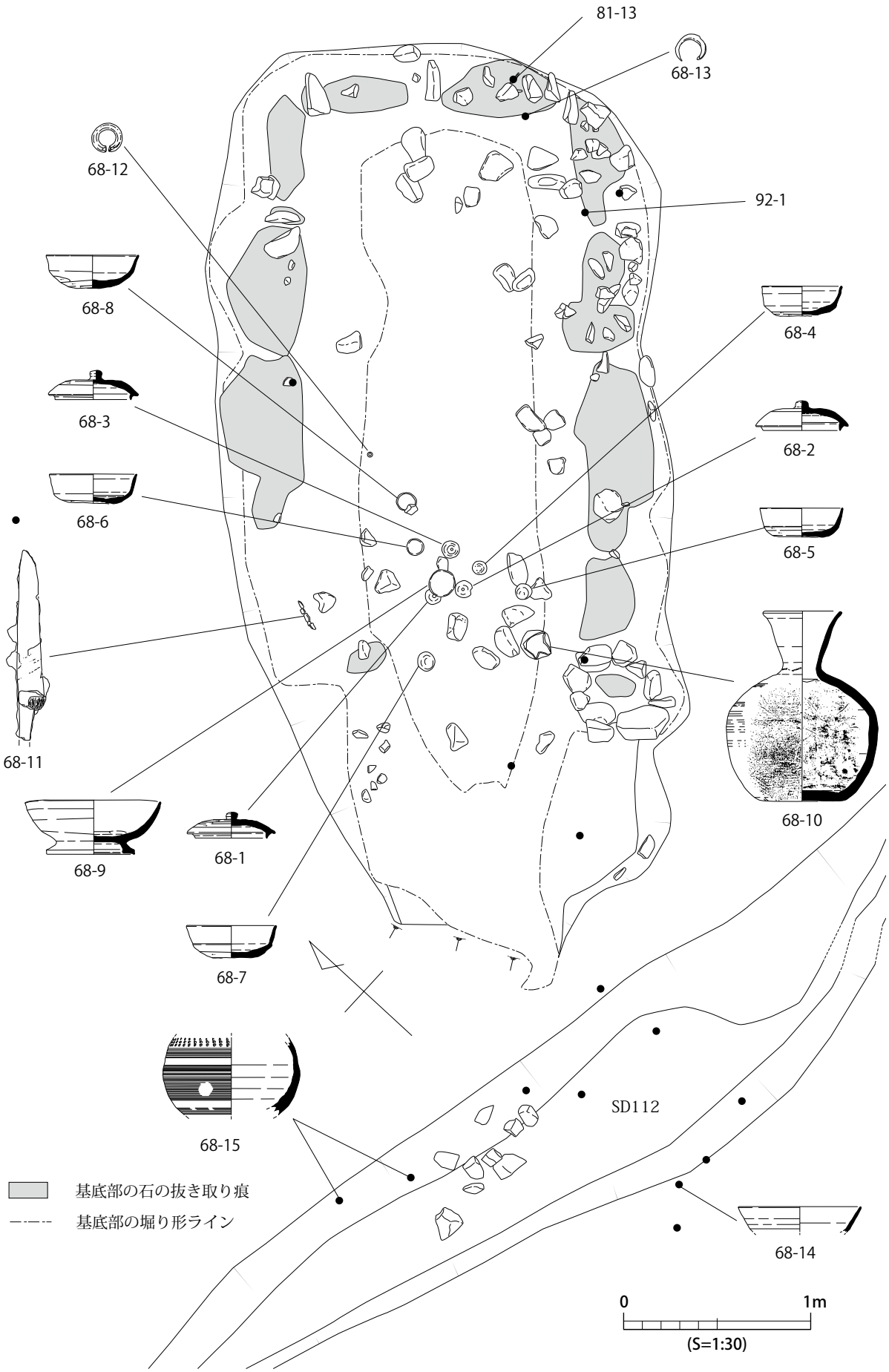


図 67.　1 号墳遺物出土状況図

1号墳出土遺物（図68、写真図版89）

1～13は石室内で出土した遺物である。須恵器はすべてほぼ完形である。蓋（1～3）みな同じつくりで、径1.2～1.3㎝のつまみが付き天井部に回転ケズリが施される。蓋は器壁が厚く、坏の方が薄い。坏は4と5、6と7が大きさや調整が似たつくりで、8のみ一回り大きく丸みのある器形をしている。9は底部の高台内側に、金属器による線刻がみられる。線刻は合計6回行われ、土器の中心を示そうとするようである。高台貼り付け時の目印にした可能性がある。10は石見型の壺で、肩から胴部上半にかけてカキメの後ナデを施し仕上げている。底部と胴部下半にはタタキの痕跡が残り、その後ハケ調整、ナデ調整の順に仕上げている。11は石室の床面から浮いた状態で出土した（写真図版53下）刀子で、切先から6.5㎝の部分から刀身に斜めに布を巻いたとみられる痕跡が確認できる。耳環は2点出土している。12は床面で出土し（写真図版53上）、土の中に完全に埋蔵されていたとみられ、ほぼ全面に金が残っている。一方、石室奥壁近くで出土した13は、中世以降と見られる石室破壊後の層から出土しているため、表面の金メッキは全く残っておらず錆びた芯だけになっている。

14・15はSD112から出土した須恵器で、出土した位置が石室の正面であるため、1号墳に伴う遺物と判断した。このほか集石1では青いガラス製の小玉（写真図版8）が出土している。石室から約5m離れた場所での出土だが、集石1で使われている石は1号墳石室の石材を転用したものと考えられるので、このガラス小玉は1号墳に伴う遺物と判断した。

なお、石室の石材抜き取り痕では白磁の碗（92-1）や近世初頭の陶器壺（81-13）が出土しているが、これらは石室解体後に混入した遺物なので、本章第6節で他の中世以降の遺物とまとめて報告する。

第22表　1号墳出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	68	89	須恵器	杯蓋	1号墳石室	床上	7.6		2.8		内:回転ケズリ、ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(5Y7/1) 外:浅黄色(5Y7/3)	
2	68	89	須恵器	杯蓋	1号墳石室	床上	8.2		3.2		内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	1mm以下の砂粒を含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰オリーブ色(5Y7/3)	
3	68	89	須恵器	杯蓋	1号墳石室	床上	8.2		3.1		内:回転ケズリ、ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(5Y7/3) 外:浅黄色(5Y7/3)	
4	68	89	須恵器	杯身	1号墳石室	床上	8.8		3.2		内:回転ナデ、横方向のナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、横方向のケズリのちナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y6/1)	
5	68	89	須恵器	杯身	1号墳石室	床上	8.9		3.1		内:回転ナデ、横方向のナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、指頭によるナデ(圧痕あり)	4mm以下の砂粒を含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y6/1)	
6	68	89	須恵器	杯身	1号墳石室	床上	9.4		3.2		内:回転ナデ、横方向のナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、横方向のナデ、横方向のケズリ	7mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(5Y7/1) 外:灰色(5Y5/1)	
7	68	89	須恵器	杯身	1号墳石室	床上	9.6		3.5	体部と底部の境に明確な稜がある。	内:回転ナデ、横方向のナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、横方向のナデ	6mm以下の砂粒を含む	内:灰色(10Y6/1) 外:灰色(10Y6/1)	
8	68	89	須恵器	杯身	1号墳石室	床上	10.2		3.7		内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ、横方向のナデ	6mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10Y7/1) 外:灰白色(10Y6/1)	
9	68	89	須恵器	杯	1号墳	不明	14.6	9.4	4.8		内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ、カキメ	6mm以下の砂粒を含む	内:灰色(7.5Y6/1) 外:灰色(7.5Y6/1)	
10	68	89	須恵器	壺	1号墳		16.2	8.8	20.3		内:回転ナデ、タタキ、ナデ、ハケメ 外:回転ナデ、ナデ 胴部は①タタキ、②回転ナデの順で調整	4mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:暗灰黄色(2.5Y5/2)	
11	68	8	鉄製品	刀子	1号墳	1	(長さ)13.6	(幅)2.0	(厚さ)1.6		内: 外:			刀身部は長さ10.1cm厚さ0.8cm
12	68	8	金銅製品	耳環	1号墳石室	床上	(器長)2.1	(器幅)2.2	(器厚)0.8		内: 外:			
13	68	8	銅製品	耳環	1号墳石室		(器長)1.9	(器幅)2.2	(器厚)0.3		内: 外:			金メッキは全く残っていない
14	68	90	須恵器	杯	SD112		(13.0)				内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y6/1)	
15	68	90	須恵器	壺	SD112					肩部に刺突文を施す	内:回転ナデ 外:カキメ、ナデ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y6/1)	1号墳に伴う遺物
16	68	8	小玉	ガラス製品	集石1	1	(長径)0.5	(穿孔)0.15	(厚さ)0.4		内: 外:		淡青色	重さ0.12g

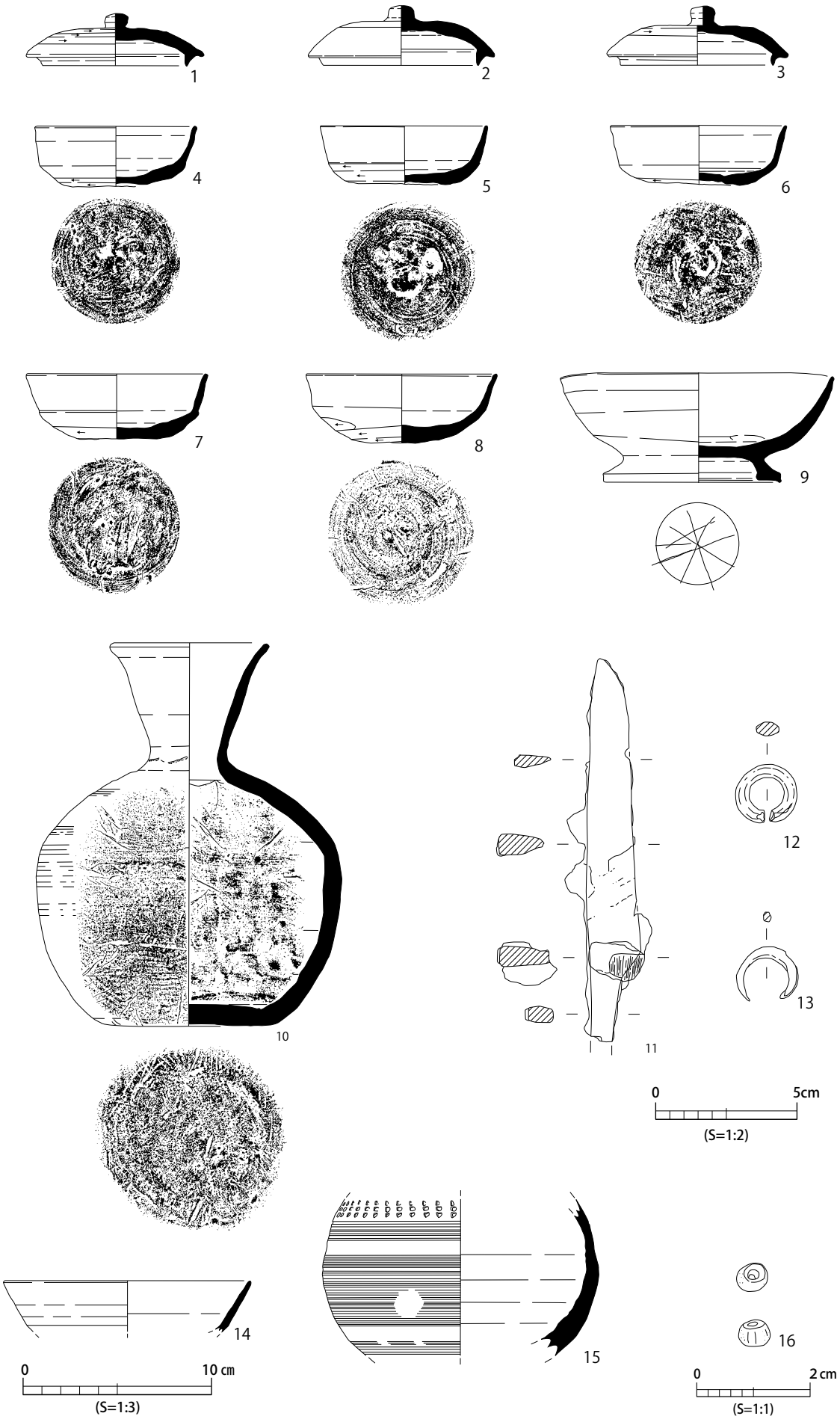


図 68.　1 号墳、SD112、集石 1 出土遺物実測図

3）遺構外出土遺物

遺構外でも古墳時代前期と後期の土器が出土しているが、出土した場所はそれぞれ限られている。また、古墳時代前期は弥生時代に比べて土器の出土量は大幅に減少し、鉄器が出土していない点が特徴的である。

古墳時代前期の遺物（図 69・70、写真図版 90・91）

前期の土師器は、東区の谷に面した J6 グリッド（3 ～ 5・7 ～ 9・12）と北側斜面（1・6・10）、それに東側斜面（2・11）にほぼ出土範囲が限られている。J6 グリッドと SI14 周辺の東側斜面は、一時期前の弥生終末の遺物が出土している場所でもあり、弥生集落からのつながりで捉えられる出土状況である。特に J6 グリッド出土遺物については、おそらく調査区南側の隣接地、市道久城上 1 号線北側の緩斜面に、当該期の集落遺構が存在すると推測される。北側斜面についても、調査区内で古墳時代前期の遺構を確認していないので、J6 グリッドと同じく弥生時代よりもやや標高が低い場所に遺構が存在する可能性が考えられる。

1・2 は益田平野 1 期（古墳時代前期前半頃）の甕で、島根県東部で出土する甕とほとんど違いがみられない。3・4 はこれに比べて器壁が厚くなり、口縁段部の稜の作りもあまくなる。また、4 は赤く塗られている。1・2 より新しい時期の土器とみられる。益田平野の土師器編年では、古墳時代前期になると、山陰系の複合口縁甕が減少し、変わって外傾する口縁を持ち長胴気味の在

第23表　古墳時代出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	70	91	土師器	甕	K2		(14.6)			口縁端部は面があり、外側に肥厚する	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ、ハケメ	1mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	益田平野1期
2	70	91	土師器	甕	N2		(20.3)			口縁端部は面があり、外側に肥厚する	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	益田平野1期
3	70	91	土師器	甕	J6	1					内:不明 外:不明	6mm以下の砂粒含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	古墳時代前期後半頃
4	70	91	土師器	甕	J6					厚く退化した復合口縁	内:ヘラミガキ、ヘラケズリ 外:ヘラミガキ、ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:明赤褐色(5YR5/6) 外:橙色(5YR6/6)	古墳時代前期後半頃
5	70	91	土師器	壺	J6	4	(16.8)			口縁端部を上下に拡張し、2個1組の円形浮文を貼り付ける	内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:橙色(5YR7/6) 外:橙色(5YR7/6)	胎土を赤くしている 4の甕とよく似ている
6	70	91	土師器	高坏	K2	2				脚内部は粘土が充填されている	内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:明褐色(7.5YR5/6) 外:明褐色(7.5YR5/6)	弥生土器か？
7	70	91	土師器	高坏	J6						内:不明 外:ハケメ	1mm以下の砂粒含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:黄橙色(7.5YR8/8)	
8	70	91	土師器	高坏	J6	4					内:ナデ 外:ヘラミガキ	1mm以下の砂粒含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	
9	70	91	土師器	高坏	J6			15.0		接地部は平坦にしている	内:ナデ、ハケメ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒含む	内:灰褐色(7.5YR5/2) 外:灰褐色(7.5YR4/2)	
10	70	91	土師器	高坏	J3					円形のスカシ穴を4方向に入れる	内:ナデ 外:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:橙色(5YR7/8) 外:黄橙色(10YR8/6)	
11	70	91	土師器	高坏	N4					円形のスカシ穴を4方向に入れる	内:不明 外:不明	1mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR6/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
12	70	90	土師器	ミニチュア土器	J6	4	4.6	2.2	3.7	平底	内:ナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	
13	70	92	須恵器	杯蓋	東区谷部					天井部と体部の境に沈線を1条廻らせる	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	1.5mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(7.5Y7/1) 外:灰色(7.5Y6/1)	2個体を合成
14	70	92	須恵器	杯蓋	東区谷部	黒色土	8.0				内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰色(7.5Y6/1) 外:灰白色(5Y7/2)	
15	70	92	須恵器	杯蓋	東区谷部		8.0				内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(5Y7/2) 外:灰白色(5Y7/2)	2個体を合成
16	70	92	須恵器	杯身	東区谷部	黒色土					内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(5Y7/2) 外:灰白色(5Y7/2)	
17	70	92	須恵器	杯身	SR03						内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y5/1)	
18	70	92	須恵器	高坏	SR03		(15.7)			外面全体にカキメを施す	内:回転ナデ 外:カキメ	0.5mm以下の砂粒を僅かに含む	内:灰白色(5Y7/2) 外:灰白色(5Y7/2)	
19	70	92	須恵器	短頸壺	SR03		(6.8)				内:回転ナデ 外:カキメ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y5/1)	1号墳に伴う可能性が高い
20	70	90	須恵器	壺	SR03		(10.5)				内:口縁:回転ナデ、 胴部:タタキの後、回転ナデ 外:口縁:回転ナデ、 胴部:タタキの後、カキメ		内:灰色(7.5Y5/1) 外:灰色(7.5Y5/1)	
21	70	92	須恵器	壺	東区谷部	黒色土	(11.8)			口縁端部に面がある	内:回転ナデ 外:回転ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:黄灰色(2.5Y6/1)	1号墳に伴う可能性あり
22	70	92	須恵器	壺	L2		7.5				内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y7/2) 外:灰黄色(2.5Y7/2)	
23	70	92	須恵器	壺	D9						内:回転ナデ 外:ヘラケズリ、カキメ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(7.5Y7/2) 外:灰色(7.5Y6/1)	
24	70	92	須恵器	壺	東区谷部						内:回転ナデ、タタキ、カキメ 外:タタキ、ナデ	0.5mm以下の白色粒を含む	内:灰白色(7.5Y7/2) 外:灰色(7.5Y6/1)	

地系の甕が増加するとされるが、今回の調査では SI14 以外で在地系の甕や布留系の甕が出土せず、高津川流域の集落遺跡と堂ノ上遺跡ではやや様相が異なるようである。5 は口縁端部を上下に拡張し、2 個 1 組の円形浮文を貼る外来系の壺で、詳しい時期は不明だが、胎土の様子から古墳時代前期の壺と判断した。図化した以外にも器壁の厚い胴部の破片が出土している。そのほか高坏やミニチュア土器など前期後半から中期初め頃と思われる土師器が出土している。

古墳時代前期の遺物（図 69・70、写真図版 90・92）

古墳時代後期の遺物は、前期よりもさらに器種や出土地点が限定され、須恵器の坏類と壺類のみ東区谷部と西区の南斜面で出土している。同時期の土師器煮炊具が 1 点も出土していないことから、基本的に古墳に伴う遺物と判断される。ただし、 1 号墳の削平の状況を見ると、他にも古墳が存在した可能性は否定できず、全てを 1 号墳に伴う遺物とするには躊躇される。また、23 は D9 グリッドで出土した壺で、同じ西区南斜面で壺（97-1）や、坏蓋（99-13）が 出土していることから、ここにも後世の造成により破壊された当該期の遺構が存在した可能性が考えられる。

13 は天井部と体部の境に沈線が 1 条廻る蓋で、 6 世紀後半頃のものと見られる。また、出土した須恵器壺類には、カキメ調整が目立ったが、高坏（18）と短頸壺（19）は特に顕著だった。

20 はほぼ 1 個体分の破片が細片で出土した壺で、底部の内外面には黒ずんだ染みが水平についている。

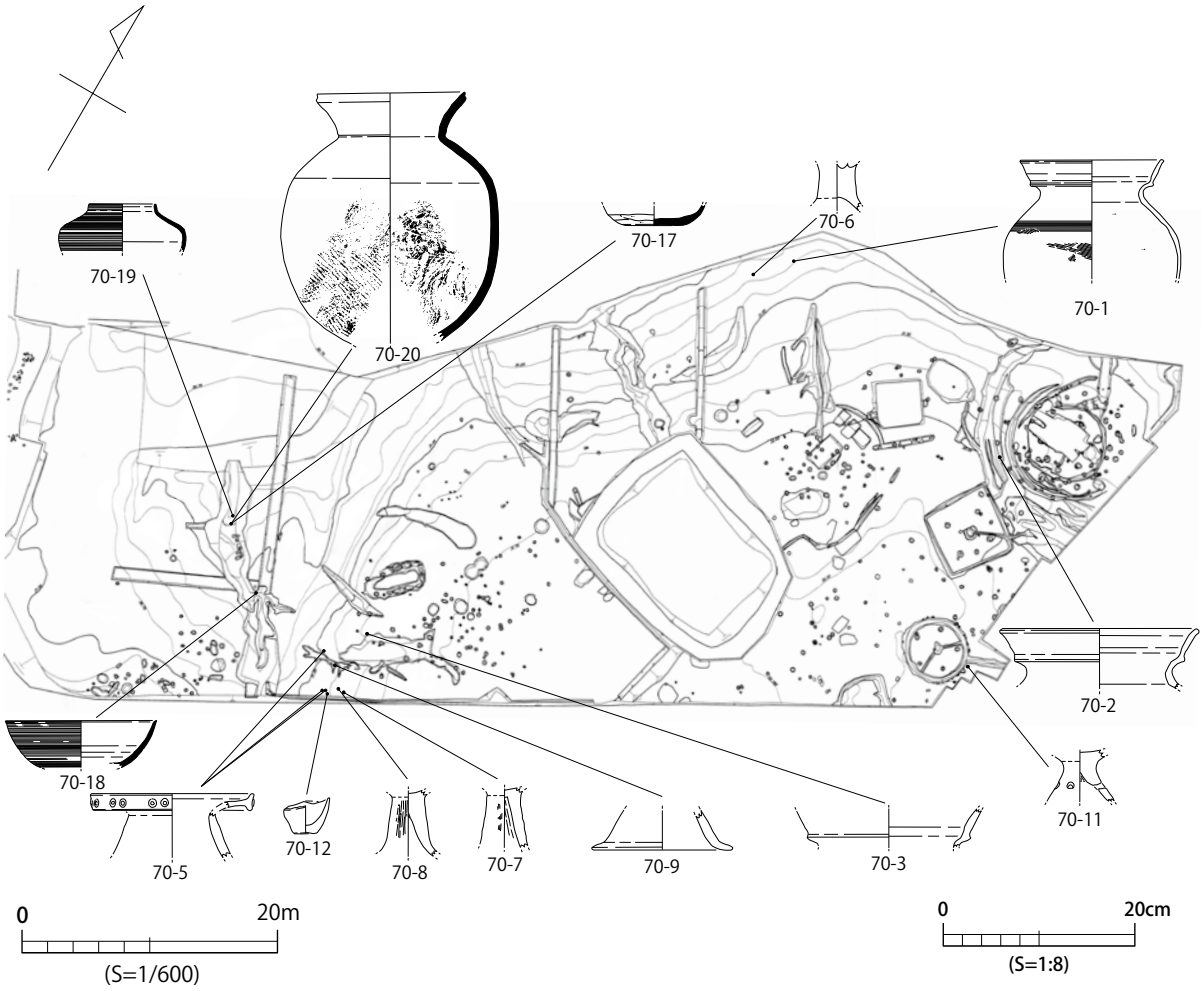


図 69.　遺構外古墳時代の遺物出土状況図

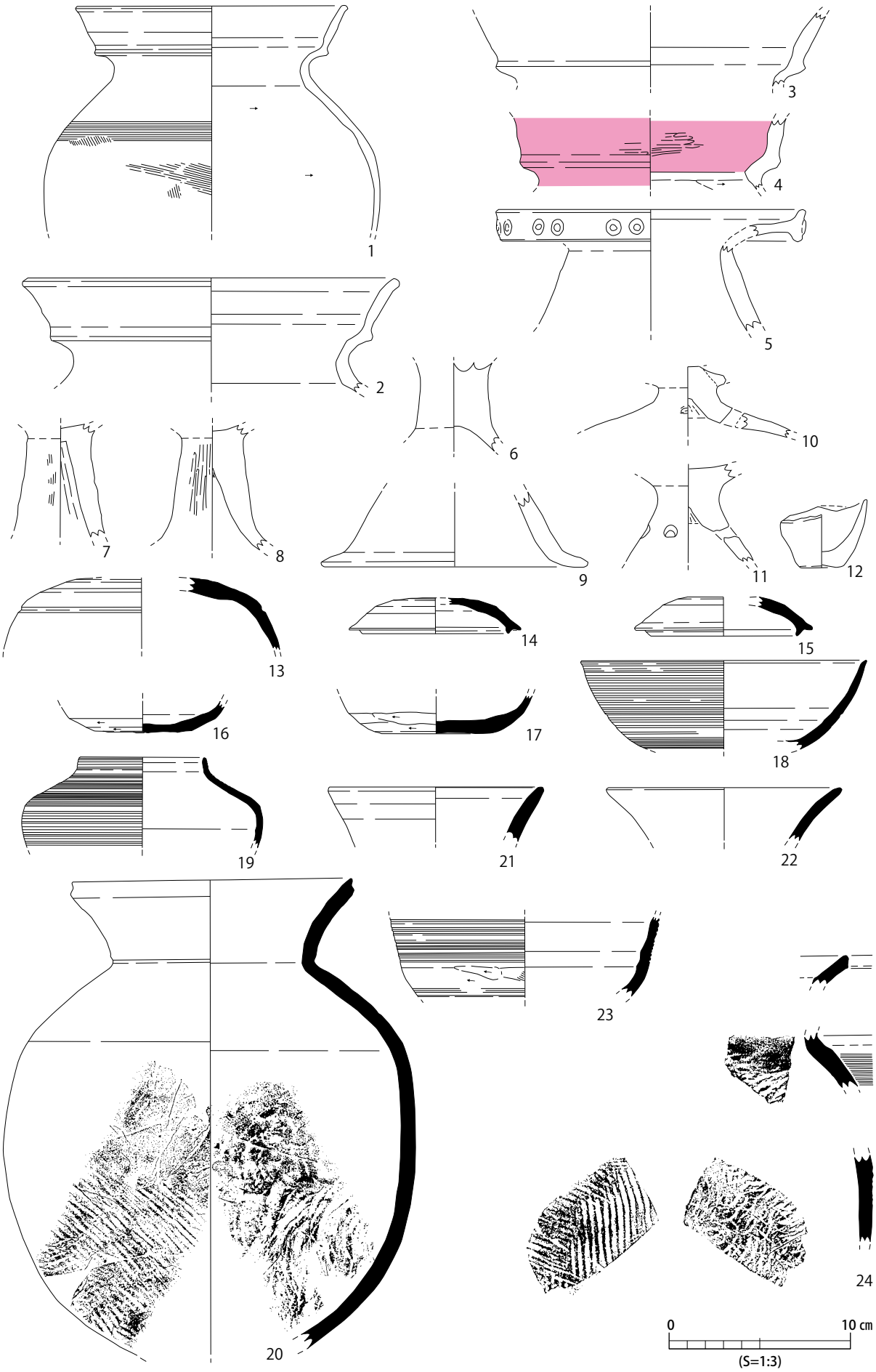


図 70.　遺構外出土古墳時代の遺物実測図

第５節　奈良時代の遺物

出土遺物（図 71・72、写真図版 90）

奈良時代の遺物は全て東区の北側斜面で出土した。須恵器の蓋坏（1・2）と壺類の破片（3・4）が出土している。蓋坏はいずれも小片だが、８世紀後半頃のものと考えられる。壺 3・4 は J3 グリッド斜面の旧表土中から、小片に砕けた状態で出土した。3 は回転ナデ調整で仕上げている。4 は外面は回転ナデ調整だが、肩部と胴部の内面に同心円のタタキ痕がある。肩にはシャープな稜があり、沈線が 1 条廻る。今回の調査では奈良・平安時代と判断できる土師器は出土しなかった。

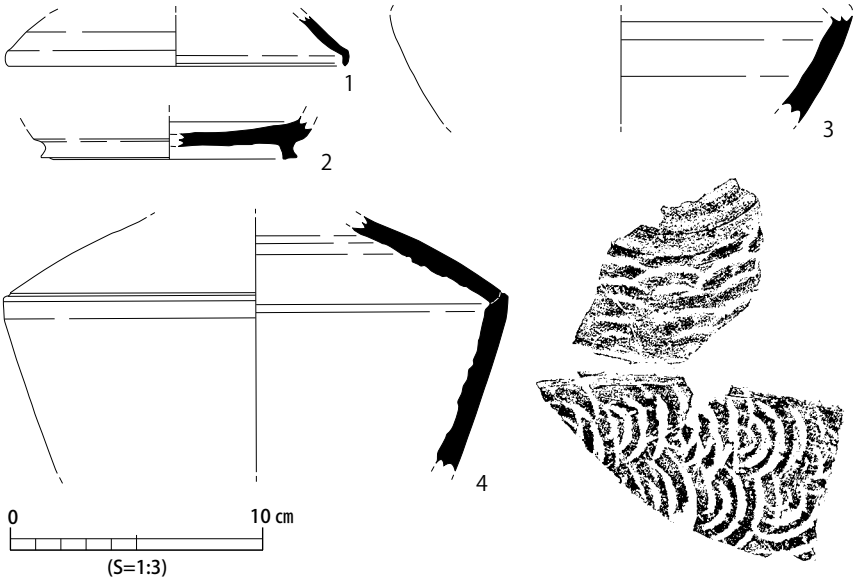


図 71.　奈良時代の遺物実測図

第24表　古代出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	71	90	須恵器	蓋	K3		(6.0)			口縁端部は下方に折り曲げる	内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR7/1) 外:褐灰色(10YR5/1)	8C
2	71	90	須恵器	杯身	L3			(9.3)			内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰色(7.5Y6/1) 外:灰色(7.5Y5/1)	8C後半
3	71	90	須恵器	壺	J3	2				肩部は強く屈曲する	内: 外:		内:灰色(7.5Y6/1) 外:灰色(7.5Y5/1)	
4	71	90	須恵器	壺	J3					肩部は強く屈曲し、シャープな稜をもつ	内:回転ナデ、タタキ 外:回転ナデ、タタキ	2mm以下の砂粒を含む	内:灰色(10Y6/1) 外:灰色(10Y4/1)	

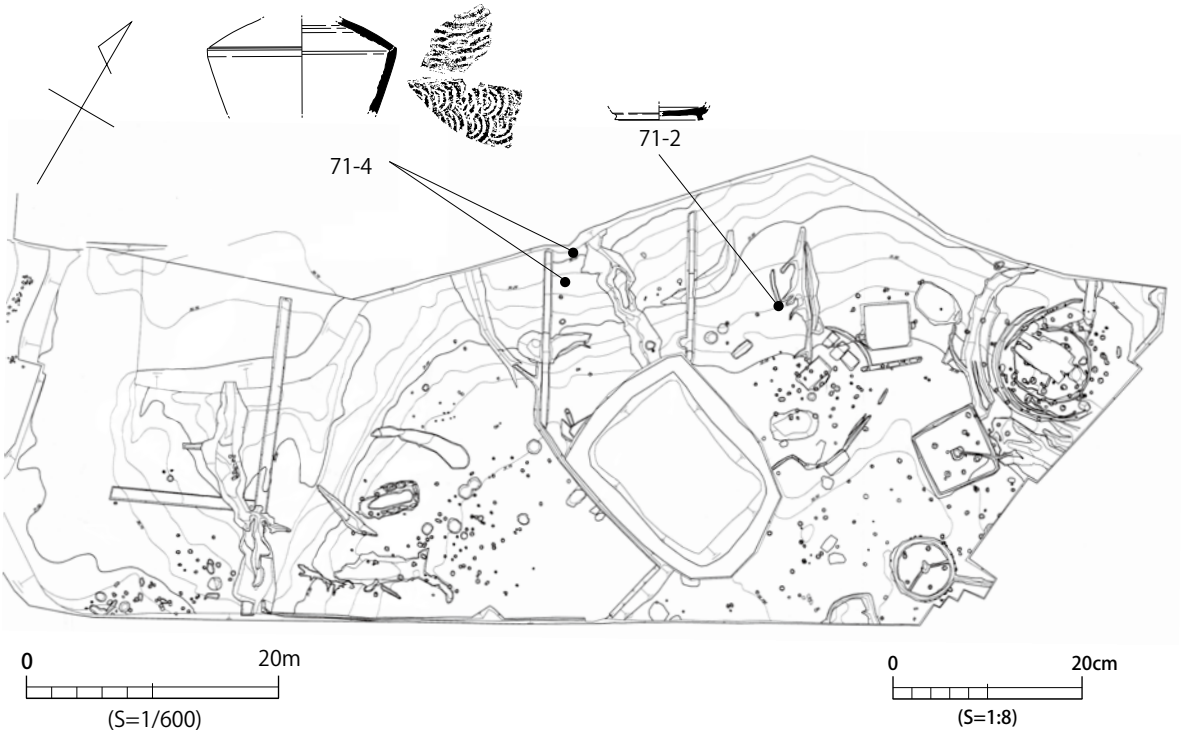


図 72.　奈良時代の遺物出土状況図

第６節　中世以降の遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡に伴うもの以外で、600 基以上のピットを検出している。その多くは柱痕が確認できるので建物や柵列等の柱穴と考えられる。これらの柱穴は、遺物がほとんど出土していないので時期は明確でないが、堂ノ上遺跡と同じ久城町の平野部に所在する沖手遺跡の調査成果から、柱穴規模の小さいものは中世以降の柱穴と判断した。これらの柱穴から、西区で１棟、東区で４棟の掘立柱建物の柱配置を復元した。

また、近世を中心とする古墓を約 40 基以上確認しており、時期の確認のために一部を調査している。そのほか、中世末から近世にかけて整備されたと考えられる、ほぼ方位に合わせた掘られた区画溝が西区で検出された。

１）掘立柱建物跡

SB03（図 73、写真図版 55）

西区の調査区西端で検出した１間×２間以上の掘立柱建物跡である。建物の南側が宅地造成に伴って大きく削られており、さらに１間南へ建物が続いていた可能性もある。全ての柱穴で柱痕が確認でき、柱の径は 10㎝前後とみられる。遺物が出土していないため詳しい時期は不明だが、遺跡内の弥生時代の掘立柱建物跡と比べて梁行の柱間が 3.3 ｍと長く、桁行の柱間もほぼ 2.1m に整っているので、中世以降の建物と判断した。

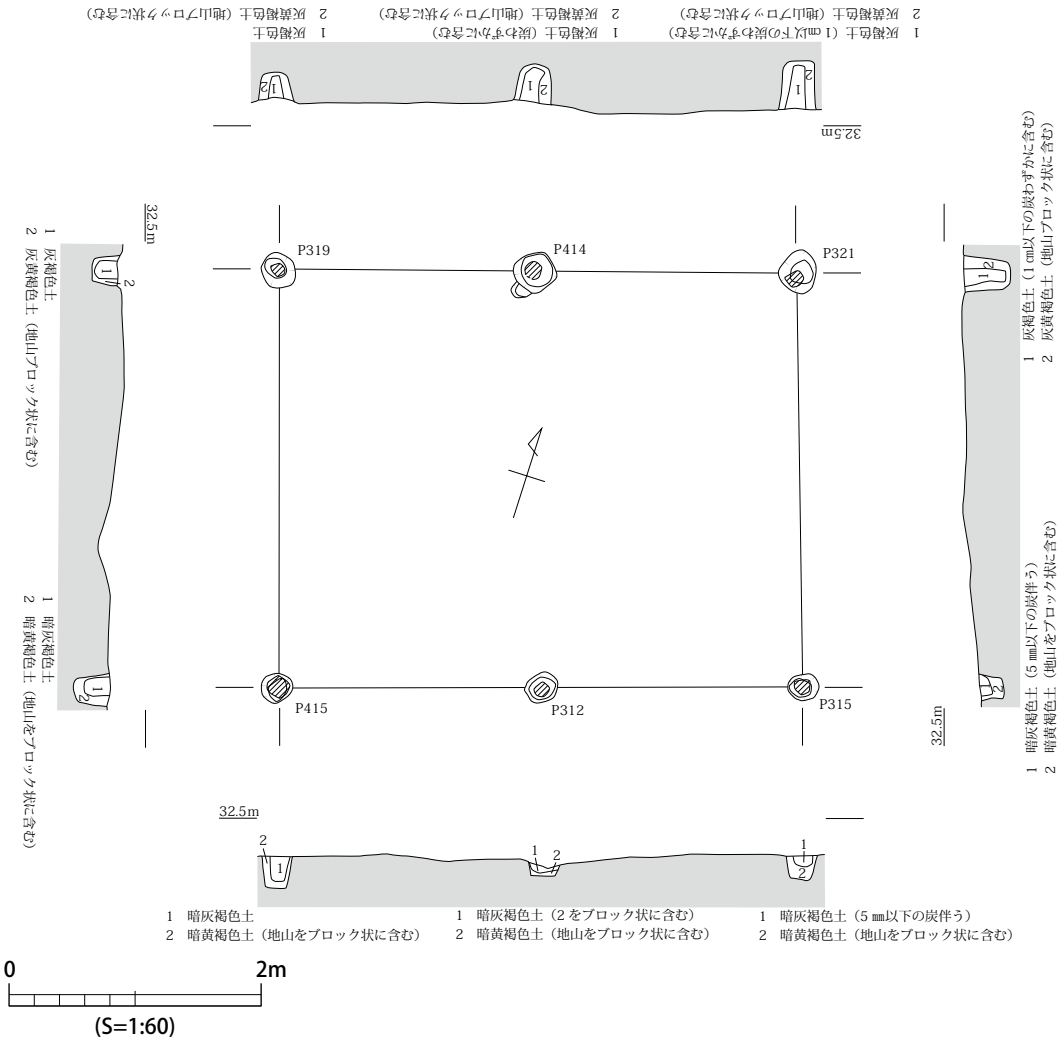


図 73.　SB03 実測図

SB07（図 74 、写真図版 56）

東区の谷部に面した J5・6、K5・6 グリッドで検出した 2 間× 3 間の掘立柱建物跡で、ほぼ南北方向に建てられている。柱の配置は整っており、柱間は約 2 m で揃っている。SB07 が検出された平坦地は耕作地造成のため大規模に造成されており、耕作土下で直ぐに地山と遺構が検出された。このため、建物が建てられた当時の地表面は残っていない。

各柱穴は耕作地造成によって上面を削平されているため小規模である。柱痕が確認できる柱穴があり、土層断面の状況から柱の径は 10 ～ 15㎝とみられる。また、南西側の柱穴は SD87 の埋土上から掘り込まれている。柱穴内から建物の時期を判断できる遺物は出土していないが、建物の範囲内で検出された浅いピット P761 からは、瓦質土器の甕の破片が数点出土している。

上記のように SB07 の詳しい時期は不明だが、重複して検出した古墓 SK01 ～ 05 に先行すると考えられる。SB07 の周辺では 17 世紀代と 18 世紀代の遺物が多く出土しており、先の古墓群との関係から概ね 17 世紀代の建物と推測される。

なお、平成 20 年度調査Ⅳ区で検出された SB01 は、規模や建物の方向が SB07 とほぼ同じである。調査報告書では非掲載だが、SB01 の周辺でも 17 世紀の陶磁器がまとまって出土しており、近世の掘立柱建物跡の可能性の考えられる。SB01 も近世前期の建物であれば、SB07 はこの時期の標準的な建物だったと考えられる。

東区の溜め池西側で検出した遺構。中世末から近世にかけての建物跡や古墓が多数切り合っている。

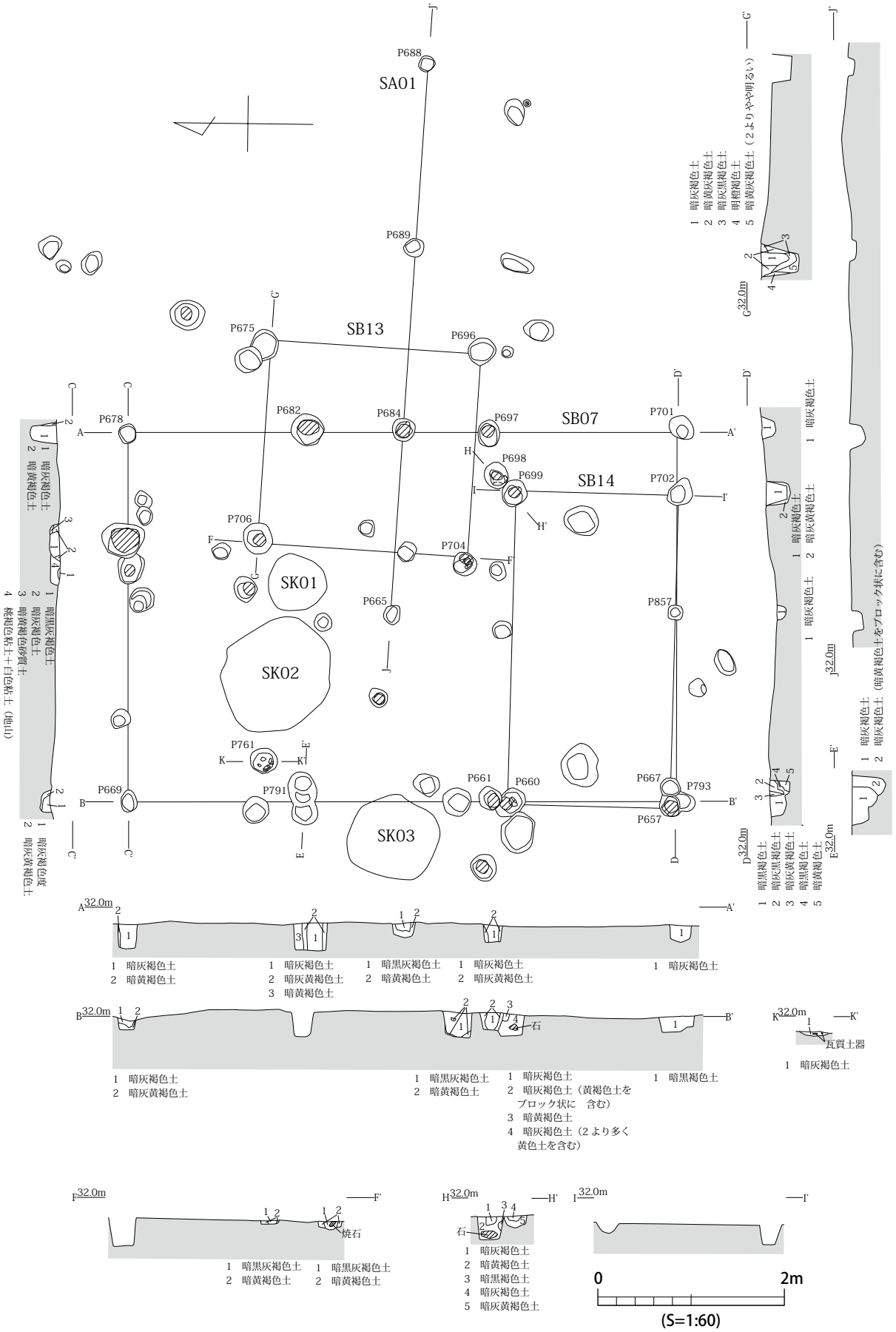


図 74.　SB07・13・14、SA01 実測図

SB13（図 74・75、写真図版 56）

SB01 の東側と重複する位置で検出した 1 間× 1 間の掘立柱建物跡で、柱間は 2.2 ～ 2.3 mでほぼ正方形の柱配置である。２基の柱穴で柱痕が確認できるほか、P704 では柱痕部分で根石と見られる焼けた石が出土した。

遺物は P706 から小型の陶器鉢が出土している。前面に灰オリーブ色の釉がかけてあるが、口縁上面は重ね焼きにより釉が剥がれている。詳しい時期は不明だが 19 世紀以前の陶器とみられる。

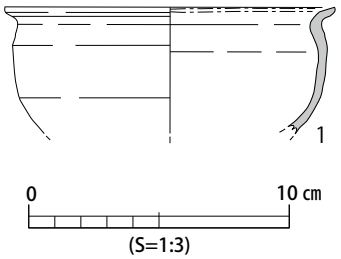


図 75.　SB13 出土遺物実測図

SB13 との新旧関係は不明だが、建物の方向が近いので連続する時期の建物と考えられる。

第25表　SB13出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	75	94	陶器	鉢	SB13		(12.7)			重ね焼きにより釉が剥がれている　口縁端部は強く外反する	内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:灰オリーブ色(7.5Y6/2) 外:灰オリーブ色(7.5Y5/2)	肥前系

SB14（図 74、写真図版 56）

SB07 の南側と重複する、１間×１間の東西に長い掘立柱建物跡である。柱間は柱痕部分で東西が 3.3 m、南北が 1.8 mで、建物の方向は SB13 とほぼ同じである。

P660 では柱痕部分で根石が出土している。また、この柱穴と SB07 の柱穴 P661 との切り合い関係から、SB07 に先行する建物と判断される。

SB15（図 76、写真図版 56）

SB07 の南東に隣接する 1 間× 2 間以上の掘立柱建物跡で、西側は柱穴を確認できなかった。南北の柱間は約 3 mで、中央の柱穴が、南北の柱穴より浅く掘られている。

柱穴内で建物の時期を判断できる遺物が出土していないため、詳しい時期は不明である。しかし、建物の方向がほぼ方位と一致しており、隣接する SB07・13・14 と近い時期の建物と考えられる。

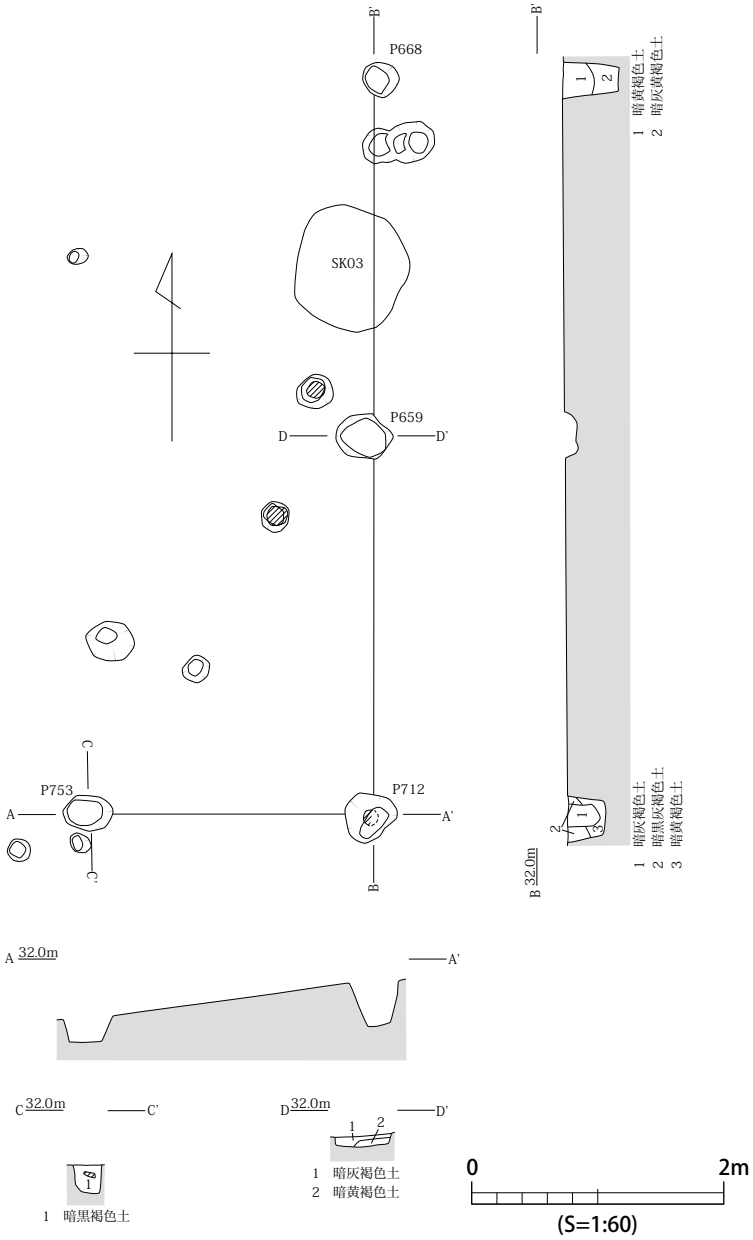


図 76.　SB15 実測図

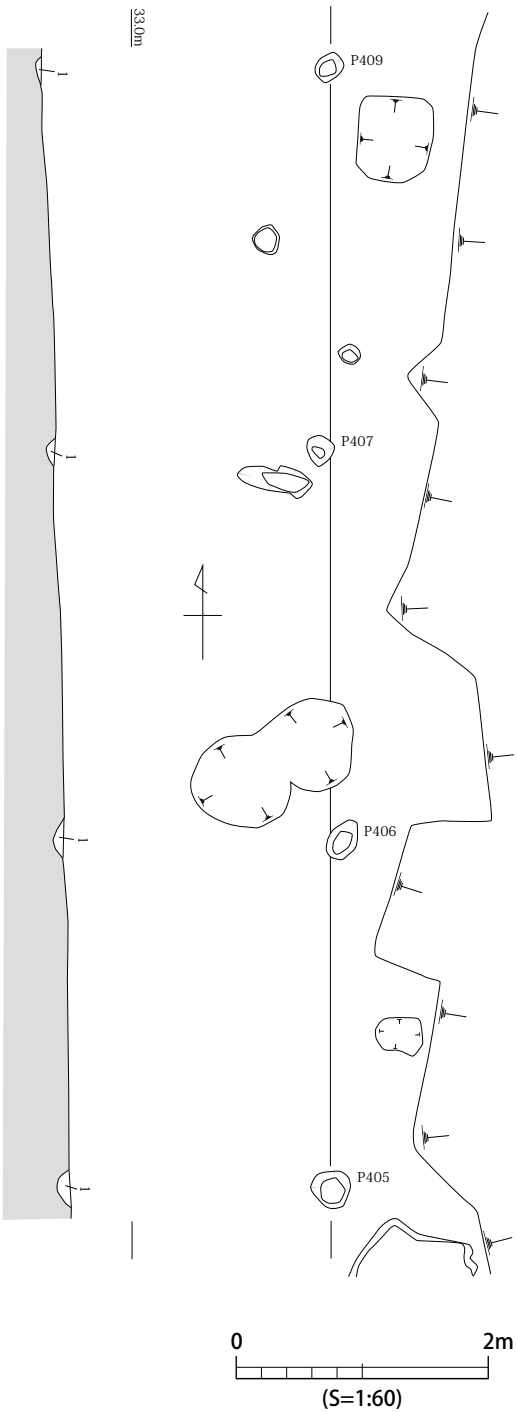


図 77.　SA02 実測図

2）柱列

SA01（図 74、写真図版 56）

SB07 と重複する位置で検出した柱列で、ほぼ東西方向に 2m の間隔で 4 基の柱穴が並んでいる。遺構を検出した場所は、後世に耕作地に改変された際、地山が大きく掘削されている。このため、対応する柱列を検出していないが、SB07 と同規模の掘立柱建物の桁行柱列の可能性も考えられる。重複して検出した掘立柱建物跡との前後関係は不明である。

SA02（図 77）

西区の D6・7 グリッドで検出した。約 3 mの間隔で、ほぼ南北方向に 4 基の柱が並んでいる。SA02 の東側は、近世以降から現代にかけて宅地になっていた所で、礎石や長さ 14 m、幅 5 mの大型の廃棄土坑が検出されている。このことから、SA02 は宅地の柵か塀の柱穴と考えられる。

遺構の明確な時期は不明だが、方位に合わせた区画の整備後の施設と考えられる。

3）古墓（図 78）

東区で古墓と考えられる土坑や集石を約 40 基検出している。市道脇で検出した集石は、類例や周辺で寛永通宝が出土したことから近世の墓と判断して発掘調査を行わなかったが、溜め池周辺で表土及び耕作土除去後に検出した古墓については、検出した平面プランから中世墓か近世墓か判断できなかったため、時期と性格を判断するために一部発掘調査を行った[1]。その結果、墓坑内や周辺の出土遺物から、大部分が 17 世紀から 19 世紀に造られた土葬墓と判断した。東区の土坑のうち、古墓と判断したものは 78 図で網掛けして示している。これらは北西方向に並んでおり、長方形プランの SK10・12・13・26 ～ 28・31・33 の主軸はこれと一致、または直行する。また、SK29 は 2.6 × 1.5 mと規模が極端に大きかったため墓としていないが、主軸方向は周辺の古墓と一致している。

SK01 ～ 11（図 79 ～ 81、写真図版 56 ～ 58・93）

東区の中央にある溜め池の西側では平面円形の古墓がまとまって検出された。このうち SK01・07 は検出面の径が 50 ～ 60㎝と小型だが、その他はみな径 1 m前後で同規模である。SK02 は床面に桶の底板が残っており、桶の径が約 90㎝だったことが分かる。底板上で骨片が出土している。

SK02 で出土した 2 は須恵器坏蓋のつまみ部分で、出土した位置や土器の年代から 1 号墳に伴うものと考えられる。6 は火入れで底部と内面に釉がかかっていない。8・9 は小片だが須佐焼の擂鉢とみられる。このほか図化していないが、SK1・2 では山口県防府市佐野産とみられる瓦質土器の胴部片が出土している。SK02 からは 17 世紀初め頃から 19 世紀初め頃まで幅広い時期の遺物が出土しているが、墓が造られた時期は桶の床上で出土した陶器碗（5）の時期から、18 世紀前半以降と考えられる。SK03 では棺の陥没後に堆積した土の中で、標石と思われる人頭大の石が出土した。埋土中で出土した陶器瓶（11）は内面にタタキの痕が明瞭に残っており、17 世紀代の製品と見られる。SK01 ～ 05 は SB07・13 ～ 15 と重複する位置で検出しているが、近い時期に墓地を削平して家屋を建てるとは考えにくいので、掘立柱建物が先行すると考えられる。

SK06・08 ～ 10 は耕作地造成に伴う削平が著しく、辛うじて土坑の基部を検出している。また、ここから約 10 m東の 1 段高くなった場所で古墓と考えられる土坑 SK18 ～ 20 を検出しているが、この間は地形の改変が著しいため、本来は他にも古墓が存在した可能性が高い。

SK11 は棺の陥没後に堆積した土の中から、標石と思われる石が多数出土している。また、石のほぼ中央で灯明皿（12）が検出された。作りは土師器と同じだが、非常に焼成が良く堅いので、窯で焼成した可能性がある。陶器瓶（13）は、SK11 の他に 1 号墳石室内で出土した破片が接合した。円盤状の不明石製品（15）は中央に孔の痕跡があり、径や傾きが石臼（16）と近いので、石臼に関係する石製品の可能性がある。SK11 は出土した陶磁器の年代から、17 世紀初めに造られたと考えられる。

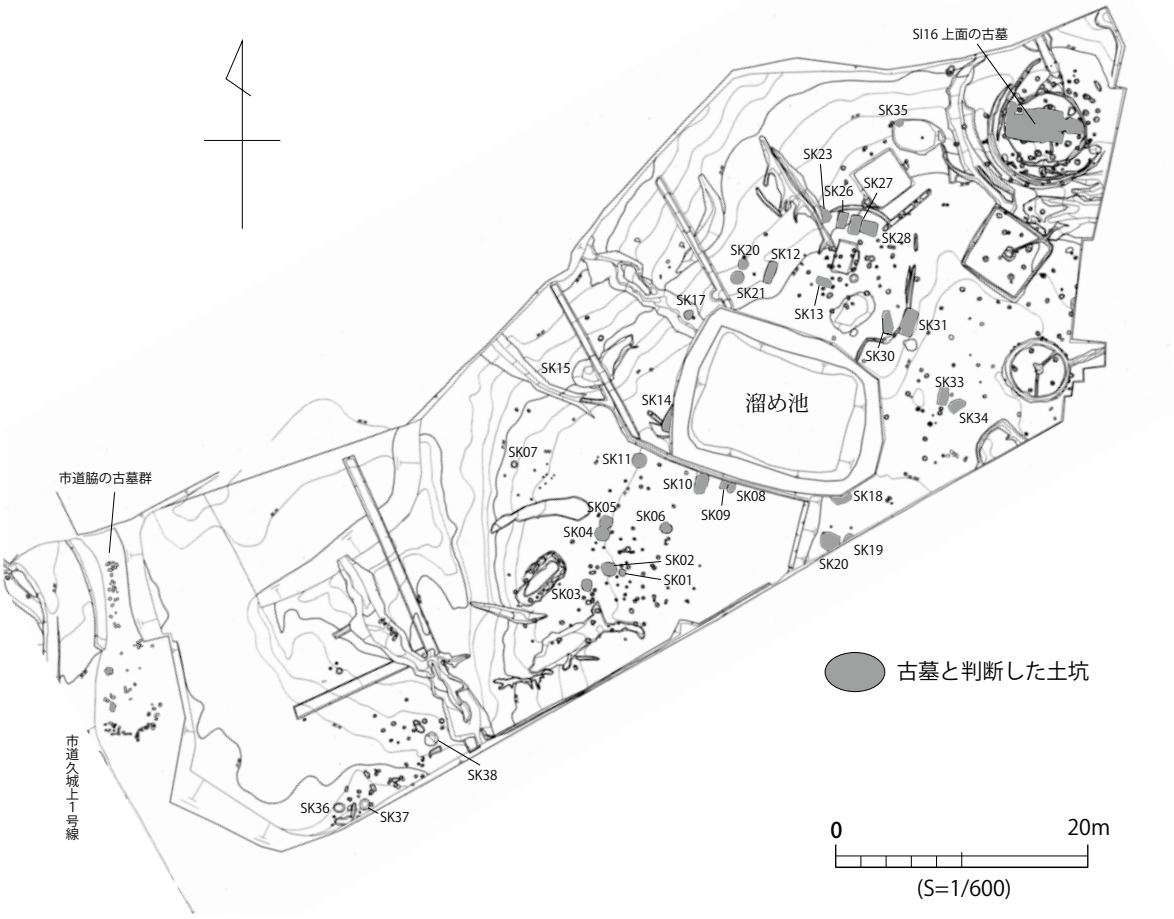


図 78.　堂ノ上遺跡　古墓配置図

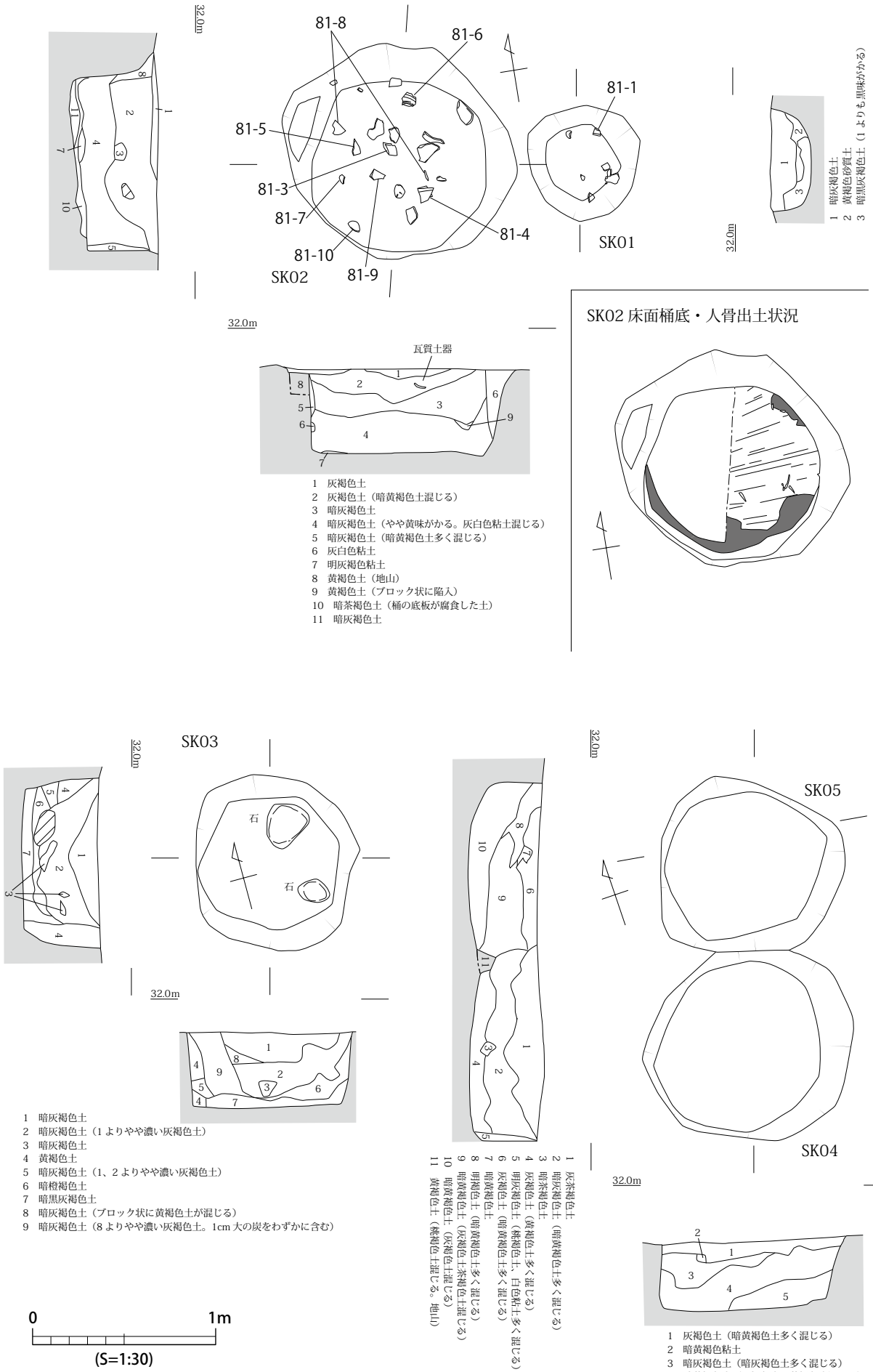


図 79.　SK01 ～ 05 実測図

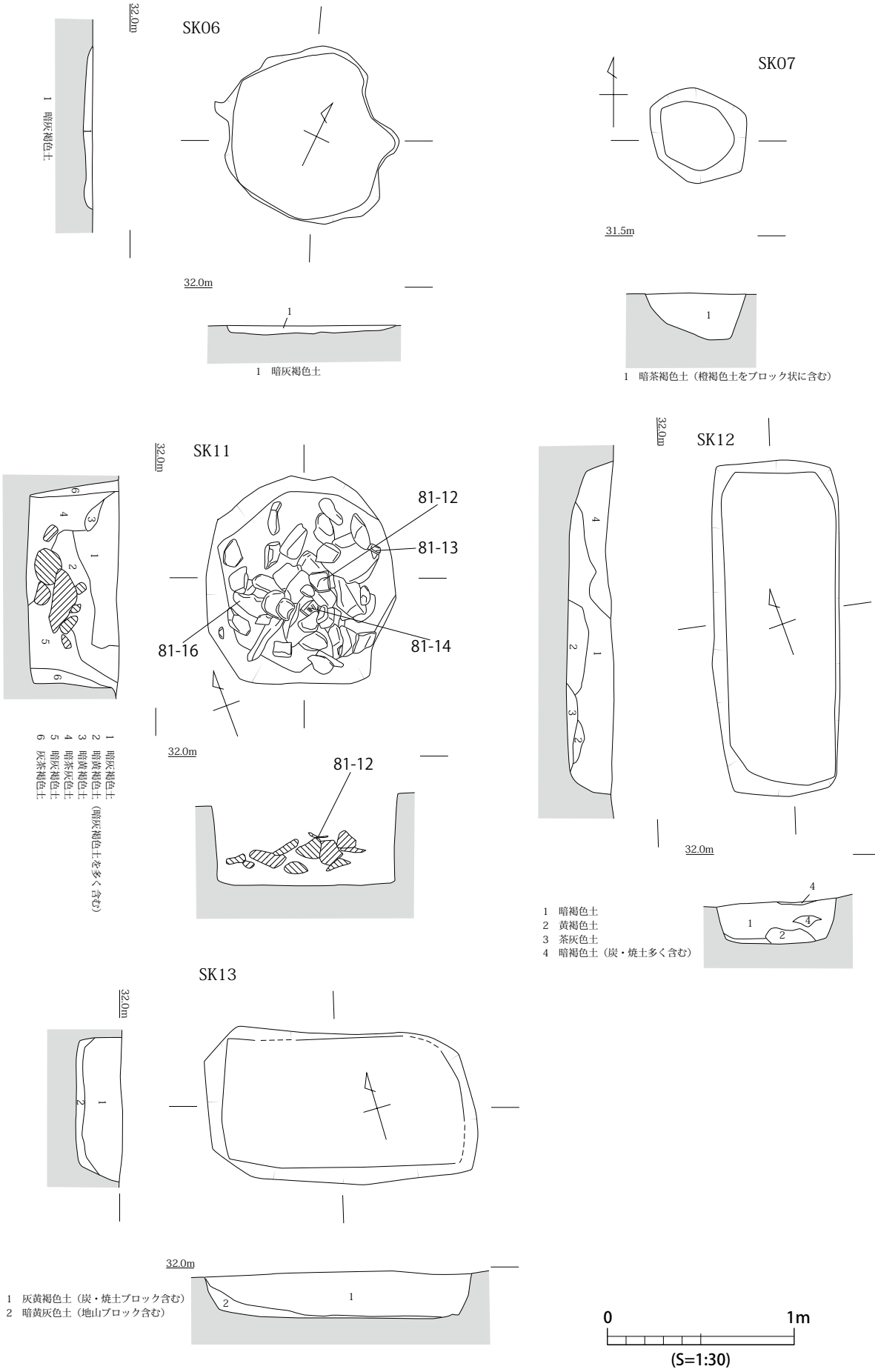


図 80.　SK06・07・11 ～ 13 実測図

SK12・13（図 80、写真図版 59）

溜め池の東側では平面長方形の古墓をまとまって検出している。このうち SK12・13 は、検出した当初中世墓の可能性が考えられたため、発掘を行った。その結果、SK12 では近世の陶磁器や煙管の他にガラス片が出土した。また、SK13 は遺物が出土しなかったため詳しい時期は不明だが、後述する 19 世紀代のピット P1044 を切っていることから、19 世紀以降の古墓と考えられる。

SK12・13 の周辺では他にも平面長方形の古墓を確認しているが、出土した遺物からいずれも 18 世紀以降のものと考えられる。

その他の古墓（図 78・93、写真図版 97・98）

SI16 のほぼ中央部分で長さ６m、幅 2.5 m の範囲で調査に先立って移転された墓の跡を検出した。重機が使用されているため詳しいことは不明だが、鉄釘（22）や寛永通宝（26）が出土しているので、近世以降に造られた墓が複数存在したと考えられる。

その他東区の北側斜面や東側の平坦地でも同様の古墓と考えられる円形及び長方形の土坑を検出しているが、検出状況や周辺で出土した遺物から近世以降の墓と判断できるものについては、平面プランを実測するまでに留めた。

このように、堂ノ上遺跡の所在する丘陵では、17 世紀代は掘立柱建物が数軒建ちその近くに墓が造られる小規模な集落だが、18 世紀以降は東区に多数の古墓が造られている。これは、正徳元年（1711）に邇摩郡佐摩村（現大田市大森町）栃畠谷から浄土真宗専光寺が堂ノ上遺跡北側の字寺屋敷へ移転し、後に遺跡南側の字堂ノ上に、さらに現在地に移転したことと関連すると考えられる（文献２）。

第26表　SK01～11出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調 整	胎 土	色 調	備 考
1	81	93	陶器	壺	SK01	1				平底	内:ヨコナデ 外:ケズリ	暗紫褐色	内:赤褐色(5YR4/6) 外:灰褐色(5YR4/2)	肥前系
2	81	93	須恵器	杯蓋	SK02		(つまみ径) 1.5		(つまみ高) 1.5		内:不明 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	灰白色(7.5Y7/2)	7C前半
3	81	93	陶器	壺か甕	SK02						内:タタキ後ナデ 外:ナデ		内:灰褐色(5YR4/2) 外:灰褐色(5YR4/2)	肥前 1580～1610
4	81	93	陶器	壺か甕	SK02	4		(24.0)			内:格子目タタキ、ナデ 外:ケズリ後ナデ	2mm以下の砂粒を含む	内:暗赤褐色(5YR3/4) 外:黒褐色(5YR3/1)	肥前　17C後半 タタキ成形
5	81	93	陶器	碗	SK02		(10.3)				内: 外:		内:灰白色(7.5Y7/1) 外:灰色(7.5Y6/1) 染付は暗い青	肥前　波佐見 18C前半
6	81	93	陶器	火入れ	SK02			(5.3)			内: 外:	灰色　1mm以下の砂粒を少量含む	内:黄褐色2.5Y5/3 外:灰黄色(2.5Y6/2)の釉 暗緑色(2.5Y5/2)の染付	肥前 18C前半
7	81	93	磁器	皿	SK02			(4.5)			内:回転ナデ 外:回転ケズリ		内外ともに、灰白色(10Y7/1) 染付は暗い青	肥前系 18C後半～19C初め
8	81	93	陶器	播鉢	SK02	3				内面に1単位12条のクシ描きの播目を施す	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	淡茶褐色	内:灰褐色(7.5YR5/2) 外:鈍い黄色(7.5YR5/3)	茶褐色の釉 (ツヤ無し)
9	81	93	陶器	播鉢	SK02					内面に1単位15条のクシ描きの播目を施す	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	茶褐色	内:鈍い褐色(7.5YR5/3) 外:鈍い橙色(7.5YR6/4)	
10	81	93	石器	磨石	SK02		(器長) 8.8	(器幅) 4.7	(器厚) 5.2		内: 外:		内:灰色(10Y6/1) 外:灰色(10Y6/1)	重さ:298.78g
11	81	93	陶器	瓶	SK03						内:タタキ 外:回転ナデ		内:明黄褐色(2.5Y7/6) 外:灰黄色(2.5Y7/2)	肥前系か 17C代
12	81	93	陶器	皿	SK11		14.2	6.5	4	内外面ともススが付着している	内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒を少量含む	内:淡黄色(2.5Y8/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	灯明皿 焼成は良く堅い
13	81	93	陶器	瓶	SK11 (1号墳)			(7.2)			内:タタキ、ナデ 外:ナデ	明褐色　0.5mm以下の砂粒を含む	黒茶褐色(10YR2/2)の釉 内:鈍い黄橙色(10YR6/4) 外:鈍い黄褐色(10YR5/3)	肥前 16C末～17C初め タタキ成形
14	81	93	陶器	播鉢	SK11			(10.0)			内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転糸切り	1mm以下の砂粒を少量含む	内:鈍い赤褐色(5YR5/3) 外:褐灰色(5YR4/1)	17C前半 (第2四半期)
15	81	93		不明	SK11		(器長) 11.7	(器幅) 12.8	(器厚) 3.2		内: 外:		褐灰色(10YR5/1)	重さ:382.81g
16	81	93	石器	石臼	SK11		(器長) 13.2	(器幅) 26.5	(器厚) 6.9		内: 外:		褐灰色(10YR5/1)	重さ:3.1kg

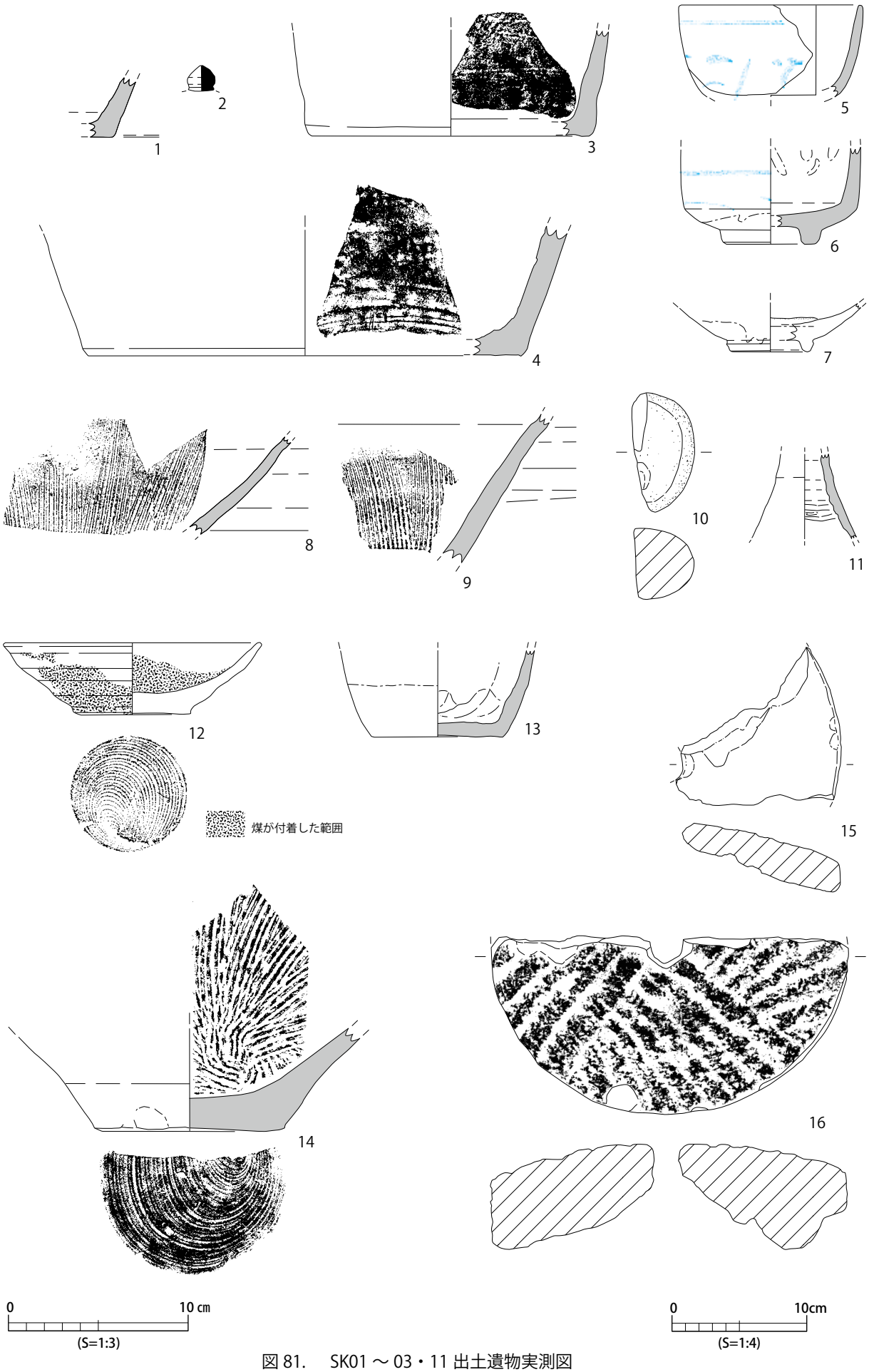


図 81.　SK01 ～ 03・11 出土遺物実測図

SK14、SD85・86（図 82）

溜め池の西側で検出した土坑で、深さは 10㎝と非常に浅いが、平面規模や長軸の方向が他の古墓と近いことから、近世以降の古墓と判断した。SK14 に切られる溝状遺構 SD85・86 の時期や性格は不明である。

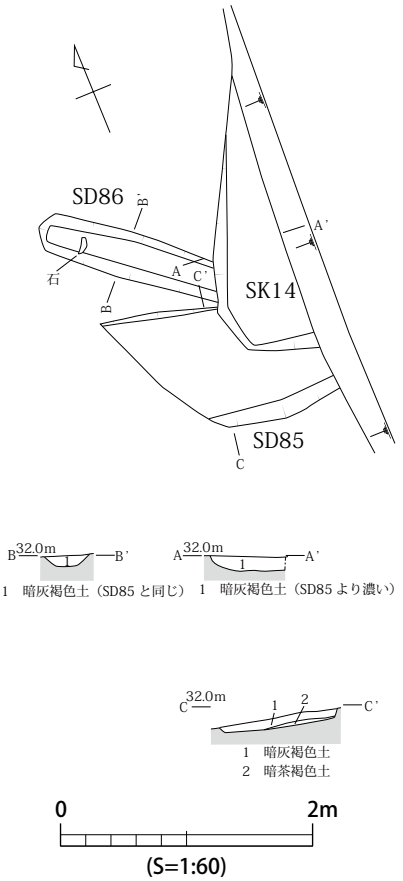


図 82.　SK14・SD85・86 実測図

4）土坑

SK36（図 83、写真図版 59・95・98）

東区谷部の南西側の H7・I7 グリッドでは、土坑やピットがまとまって検出された。出土した遺物からほとんどが中世以降の遺物と思われる。SK36 はその最も西側で検出された土坑で、床上で瓦質土器の甕（1）が折り重なるように出土した。形状から近世に山口県防府市佐野で生産された大甕とみられる。また、鉄釘（2）が出土している。土坑の機能については、当遺跡内や隣接する沖手遺跡で検出された古墓で甕を使用したものが無いので、古墓の可能性は低いと考えられる。埋甕の使用例や、約 1.2 m東側で同規模の SK37 が検出されたことから、便槽の可能性も考えられる [(2)]。

第27表　SK36出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	83	95	瓦質土器	甕	SK36		(86.4)			口縁部は内外に粘土を貼り付け肥厚させる　2条の沈線を廻らせる	内:ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ	4mm以下の白色砂粒を多く含む	内:灰色(7.5Y6/1) 外:灰色(7.5Y6/1)	
2	83	98	鉄製品	釘	SK36		(長さ) 3.3	(幅) 1.4	(厚さ) 1.1		内: 外:		内: 外:	

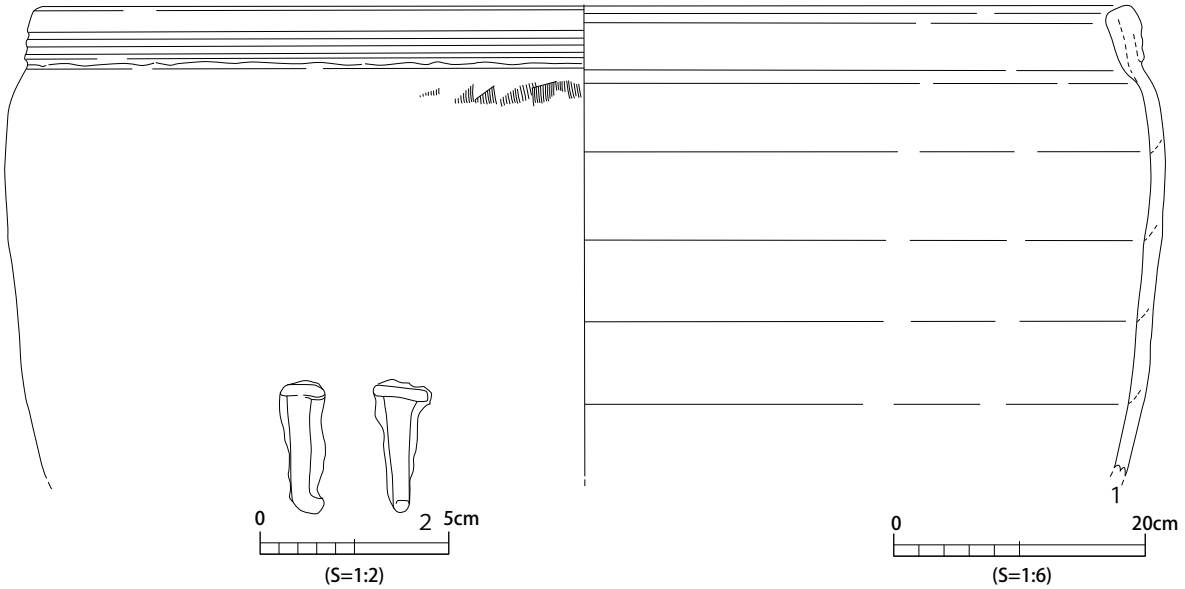


図 83.　SK36 出土遺物実測図

SK15・SD94（84・85 図、写真図版 58・94）

東区北側斜面の J4 グリッドで検出した平面楕円形の土坑で、規模は地山面で 3.3 × 2 m、深さは 70㎝である。土坑埋土は、床面から約 30㎝上の部分に焼土を多く含む土が堆積し、床面上には一定期間土坑内に水が溜まっていたことを示す、灰褐色の粘質土が堆積していた。西側の床面には拳大から長さ 45㎝までの石を用いた石組が設けられており、西から東へ向かって階段状になっている。SK14 の北西部分に接続するように、浅い溝 SD94 が検出された。床面が SK15 に向かってゆるく傾斜していることから、SK15 と一連の施設と考えられる。詳しい機能は不明だが、SD94 から引いた水を SK15 に溜め、西側の石組部分で汲んでいたと推測される。

遺物は陶磁器と燻瓦、石製品が出土している。大型の鉢（4）、石臼（5）、砥石（6・7）は石組に使用されていたものである。出土した陶磁器や瓦から 17 世紀以降に造られた施設と考えられる。

また、SD94 の約 6 m北西で L 字状に屈曲する溝 SD84 を検出している。検出状況や溝の形状が SD94 と似ているので水路跡と考えられる。

第28表　SK15, SD94出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	85	94	磁器	皿	SK15		16.0				内: 外:	白色	内:灰白色(5GY8/1) 外:灰白色(5GY8/1)	肥前系 17C中頃か
2	85	94	瓦	軒平瓦	SK15						内: 外:		内:灰色(5Y4/1) 外:灰色(5Y4/1)	
3	85	94	瓦	軒平瓦	SD94	1					内: 外:		内:灰色(5Y6/1) 外:灰色(5Y6/1)	
4	85	94	石器	鉢	SK15	石組					内: 外:		灰白色(10Y7/2)	重さ:2.3kg
5	85	94	石器	石臼	SK15	石組	(器長) 20.2	(器幅) 27.7	(器厚) 10.8		内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:5.4kg
6	85	94	石器	砥石	SK15	石組	(器長) 21.0	(器幅) 10.5	(器厚) 5.6		内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:1204.50g 石材:砂岩
7	85	94	石器	砥石	SK15	石組	(器長) 20.6	(器幅) 9.3	(器厚) 6.3		内: 外:		灰白色(7.5Y7/2)	重さ:1302.50g 石材:砂岩

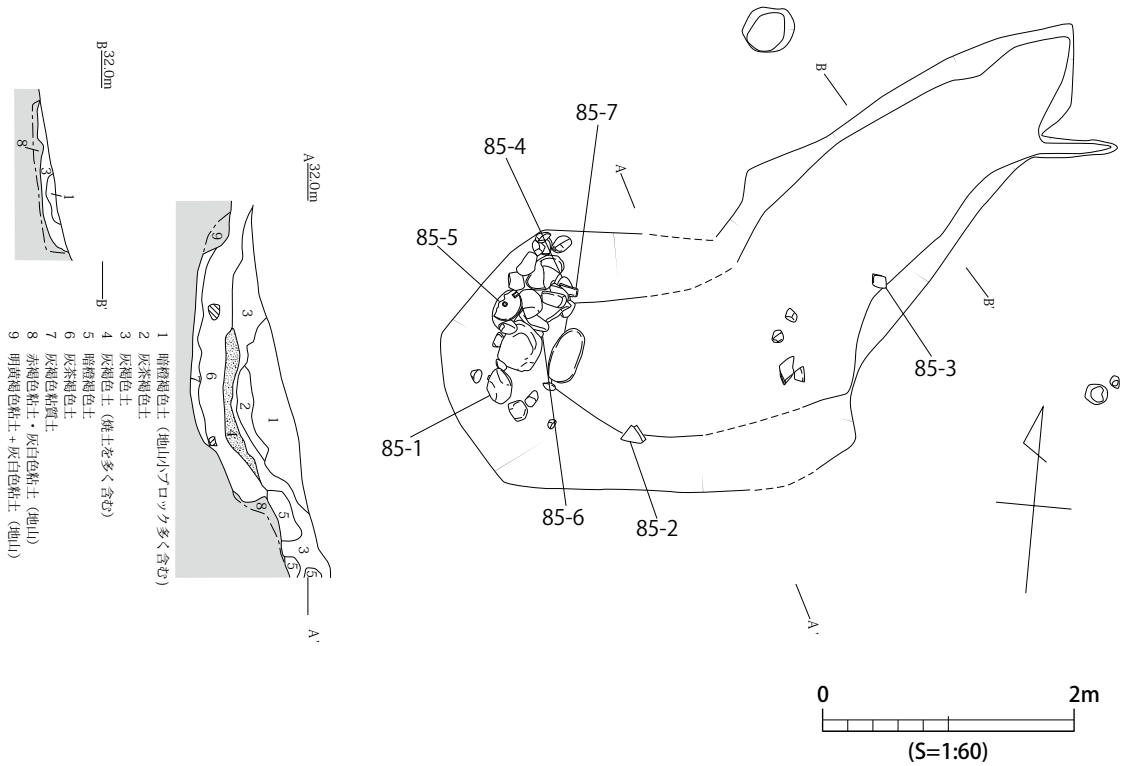


図 84.　SK15・SD94 実測図

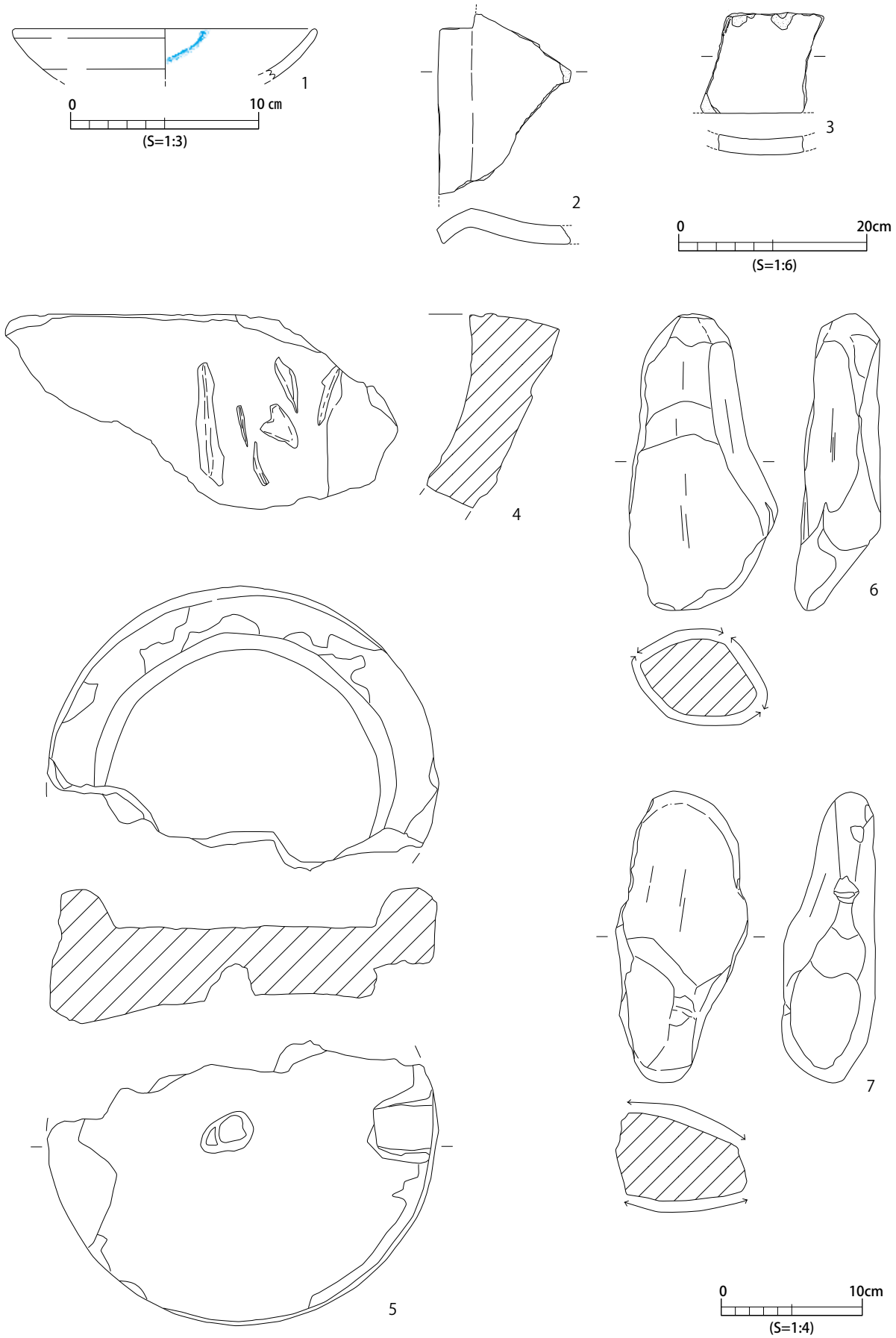


図 85.　SK15・SD94 出土遺物実測図

5）その他の遺構

区画溝（図 86・87、写真図版 94）

西区では、主軸方向がほぼ方位と一致し、土地の区画を示すと考えられる溝状遺構を 4 か所で検出している。これらの溝の埋土は、明褐色または明黄褐色でよく似ている。

西区の調査区西端で検出した SD31 は主軸はほぼ南北方向で、床面は南へゆるく傾斜している。C7 グリッドで検出した SD45 は、主軸がほぼ東西方向で床面は西へゆるく傾斜している。SD31・45 とも遺物は出土していない。

SD48・49・51 は同じ場所で 2 回掘り直された溝状遺構で、土層断面から SD49、51、48 の順に掘られたことが分かる。調査区東端で 90 度北へ折れ曲がっており、隣接する平成 20 年度調査区でこの溝の続きを確認している。遺物の出土量は少ないが、SD48 で焙烙（1）が、SD49 で肥前の磁器碗（4）が出土しており、遅くとも近世中頃には機能していたと考えられる。この溝を検出した場所は、調査前に集落内の舗装道路になっていた所で、舗装の下には石見焼の瓦生産で使用される窯道具が大量に敷かれていた。近世に遡る明確な道路遺構は検出していないが、SD48・49・50 は道路の側溝である可能性が考えられる。SD70 は、遺跡の中央を南北に通る「市道久城上 1 号線」の舗装下で検出した溝状遺構で、溝の東側の肩付近で 19 世紀以降の石見焼の瓦がまとまって出土した。検出状況から、舗装前の旧道路の側溝と考えられ、舗装前の道幅は 2 m前後だったと推測される。南北方向に折れ曲がった SD49 と SD70 の間の距離は約 30 mである。

これらの溝は、出土した遺物から近世以降に機能していたことは明らかである。この方位に合わせた土地区画の始まりが、いつ頃まで遡るのか今回の調査では明らかにできなかった。しかし、約 200 m南西に所在する沖手遺跡で、16 世紀後半頃に方位に合わせて掘られた同様の溝状遺構が確認されているので、堂ノ上遺跡で確認された区画も始まりは中世に遡る可能性がある。

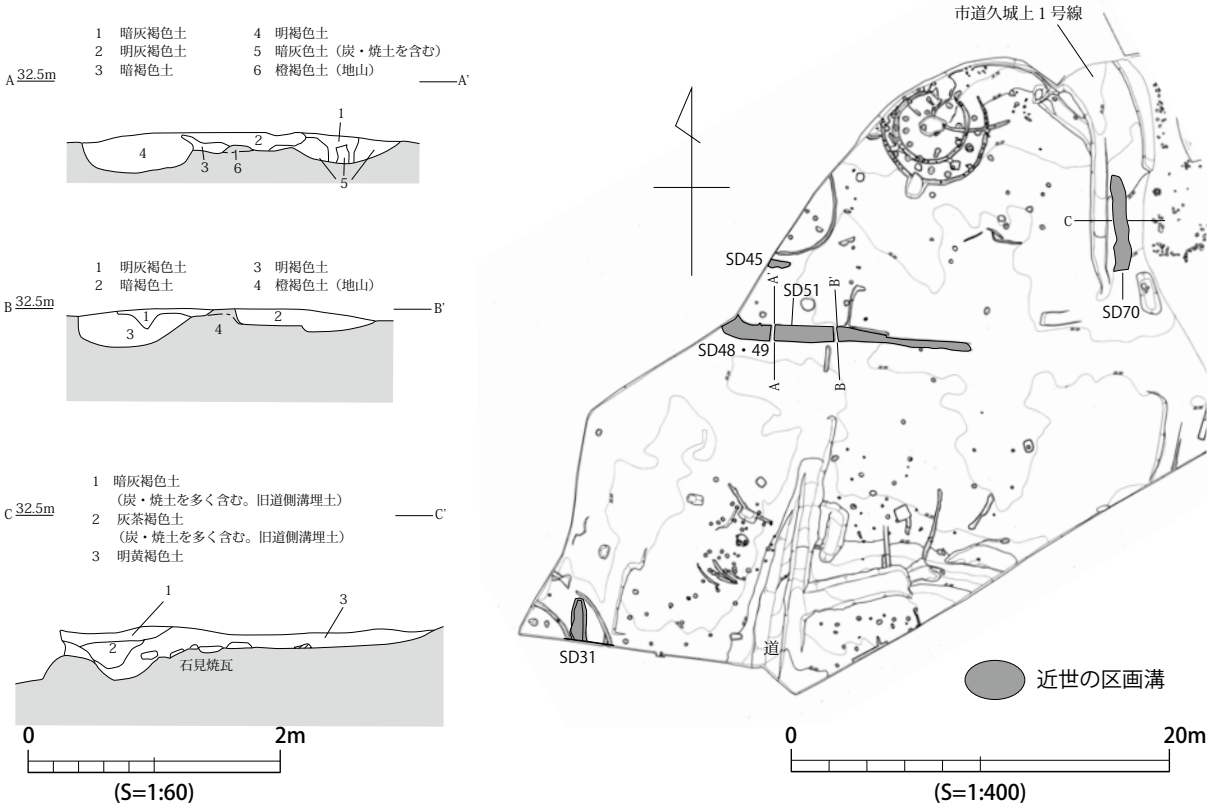


図 86.　近世以降の区画溝実測図

第29表　近世区画 SD46, 48, 49, 70出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	87	94	土器	焙烙	SD48						内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	
2	87	94	陶器	擂鉢	SD46	床上					内:擂目 外:回転ケズリ	2mm以下の砂粒を含む	内:褐色(7.5YR4/6) 外:褐色(7.5YR4/6)	須佐唐津か
3	87	95	石器	磨石	SD48		(器長) 12.1	(器幅) 11.3	(器厚) 7.3		内: 外:		灰白色(5Y7/1)	重さ:1408.43g
4	87	94	磁器	碗	SD49			4.8			内: 外:	緻密　明灰色	内:灰白色(5Y7/1) 外:灰白色(5Y8/1)	肥前　18C前半 コンニャク判か
5	87	94	磁器	小杯	SD70		3.8	1.4	1.8		内: 外:	緻密	釉:コバルト 内外とも灰白色(N8/1)	瀬戸・美濃系 昭和　ゴム印

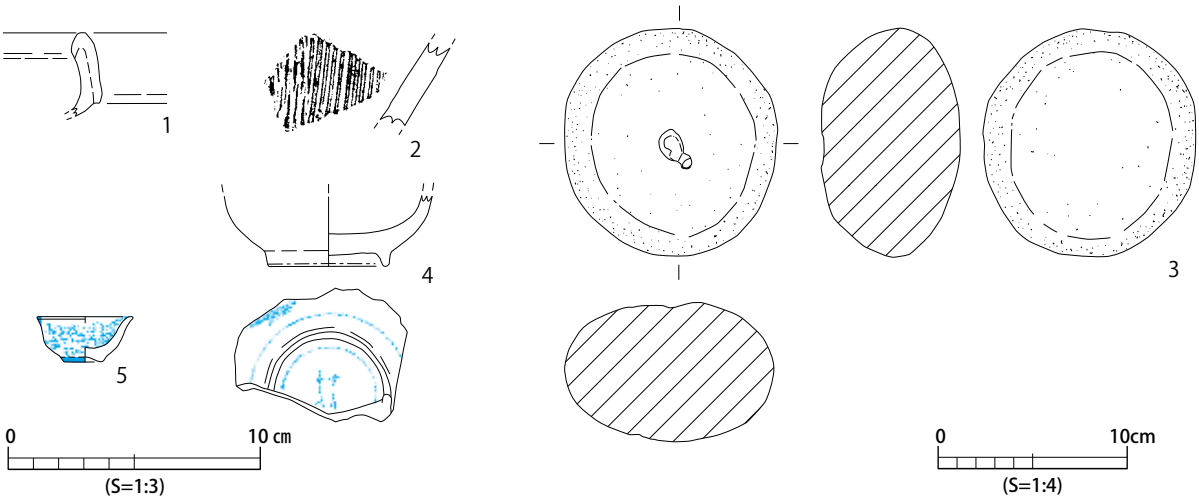


図 87.　SD46・48・49・70 出土遺物実測図

集石１（図 88・89、写真図版 61・94）

J6 グリッドの谷部に面した平坦地で、耕作土除去後に検出した。拳大から人頭大の石が約２ｍの長さで並んでいた。石の下層を精査するとＴ字状のプランが検出された。石の大きさから、古墳の石材を転用した暗渠等と考えられる。

遺物は近世の陶磁器類が出土したほか、石と共に古墳から運ばれたと考えられるガラス製の小玉（68-16）が出土した。

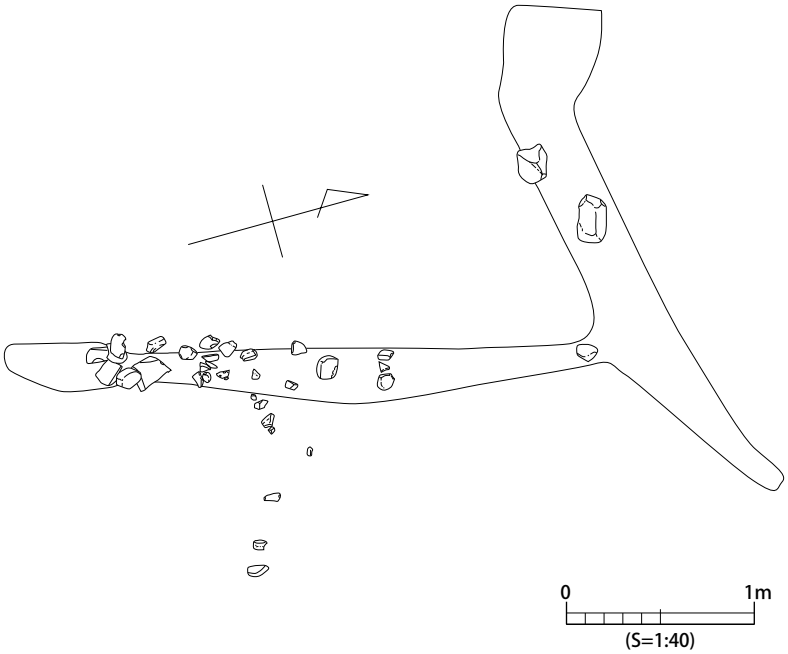


図 88.　集石１実測図

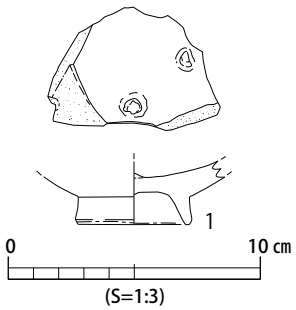


図 89.　集石１出土遺物実測図

第30表　集石1出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	89	94	陶器	碗	集石1	1		4.4		見込部の中心ともう一カ所重ね焼きの痕がある	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	明灰褐色	内:鈍い黄色(2.5Y6/4) 外:浅黄色(2.5Y7/4)、透明釉	

P1044（図 90、写真図版 61・95）

SK13 に切られる小規模なピットで、ピットの底に小型の陶器壺（1・2）が収められていた。P1044 を検出した溜め池の東側は、調査前は林になっていたが、元々は家屋が建てられた場所だった。このことから、家屋の地鎮に関係する遺構と考えられる。

出土した陶器壺は、完全に蓋がされており、調査現場からそのまま持ち帰り、中の土を洗浄したが何も確認できなかった。全体に来待石の釉とみられる暗茶褐色の釉がかかっており、19 世紀頃の石見焼の壺と考えられる。

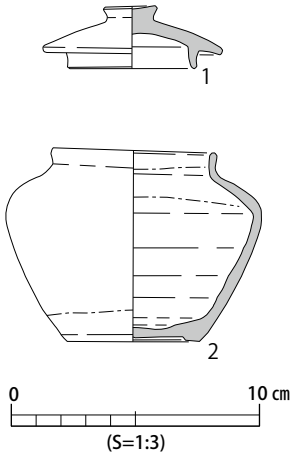


図 90.　P1044 出土遺物実測図

第31表　P1044出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	90	95	陶器	蓋	P1044		5.1	最大径 7.0	2.5		内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	内:黒褐色(7.5YR 3/2) 外:黒褐色(7.5YR3/2)	石見焼か
2	90	95	陶器	小壺	P1044		5.7	5.3	7.8	口縁部は短く直立する 底部は削り出し高台	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	0.5mm以下の砂粒を含む 暗灰色	内:黒褐色(7.5YR3/2) 外:黒褐色(7.5YR3/2)の釉	石見焼か

遺構外出土中世以降の遺物（図 91 ～ 93、写真図版 95 ～ 98）

東区の谷部と溜め池東側を中心に調査区の全域で、陶磁器・金属器など中世以降の遺物が多数出土している。このうち代表的なものを 92・93 図に図示した。ほとんどが 17 世紀初めから 19 世紀初めの陶磁器で、中世の遺物は白磁碗（1）や青磁碗（2）が僅かに出土している。近世の遺

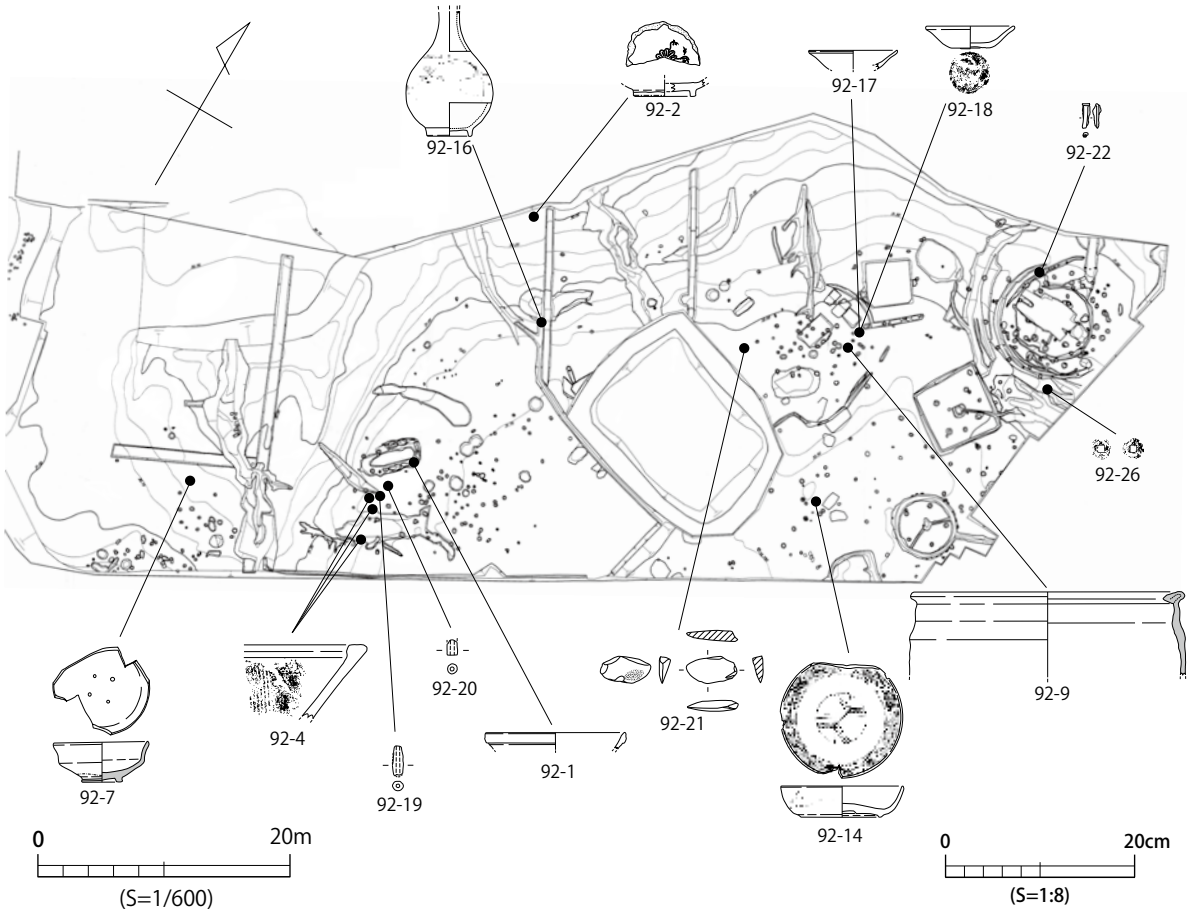


図 91.　中世以降の遺物出土状況図

物は肥前及び肥前系陶磁器の碗・皿類が最も多く出土している[3]。他の器種では、擂鉢は 17 世紀代は防長系とみられる瓦質土器（4）と肥前産とみられる陶器（8）が出土している。その後、肥前系から須佐焼、さらに石見焼へ産地が変化している。陶器については、その他の器種も概ね同様に産地が変化している。瓦質土器の湯釜（3）は、胴部に連続する花文がスタンプされている。土師器の皿（17・18）は古墓 SK28 の東でまとまって出土したもので、古墓に伴う可能性がある。

21 は研磨具と考えたもので、表面は非常に滑らかである。一見石器のようだが、表面に煤のようなものが付着しており、燻瓦か大型の瓦質土器を転用したものと判断した。このような研磨具は昭和期まで使用されていたようである[4]。釘（22）は SI16 埋没後に掘りこまれた古墓に伴うものと考えられる。25 は形状から鑿または鏃の可能性が考えられる[5]。硯（29・30）は、どちらも表面を磨いて丁寧に作られており、30 は角を面取りして仕上げている。そのほか、今回出土した古銭で種類を判断できるものは、全て寛永通宝だった。

第32表　中世以降出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	92	97	白磁	碗	J5		(14.6)				内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	灰白色　混入物は認められない	内:灰白色(7.5Y7/2) 外:灰白色(7.5Y7/2)	白磁Ⅳ類碗
2	92	97	青磁	碗	J3	2		6.6		内面に花文を施す	内:回転ナデ 外:回転ケズリ	灰色　混入物は認められない	内:緑灰色(7.5GY6/1) 外:緑灰色(7.5GY6/1)	
3	92	96	瓦質土器	湯釜	L4	1					内:ハケメ、ナデ 外:ミガキ	1mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(7.5Y7/2) 外:灰白色(7.5Y7/2)	
4	92	96	瓦質土器	擂鉢	J6,K6	1				1単位6条以上のクシ描きの擂目を施す	内:ハケメ、ナデ 外:ハケメ、ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y7/2) 外:灰黄色(2.5Y7/2)	
5	92	96	陶器	皿	東区谷部		(13.4)	(5.2)	(3.3)	口縁端部はS字状に屈曲する　見込み部に砂目が3カ所ある	内:回転ナデ 外:回転ケズリ	灰白色でやや粗い	内:淡黄色(2.5Y8/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	肥前系 17C
6	92	96	陶器	皿	E5	1				見込み部に砂目が2カ所以上ある	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	0.5mm以下の白色砂粒を少量含む	内:灰白色(2.5Y8/2) 外:灰白色(2.5Y8/2)	肥前系 17C
7	92	96	陶器	碗	I6	3	9.9	4.3	4.3	見込み部に円形の焼台痕が4カ所ある	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ケズリ	砂粒をほとんど含まない	内:黒褐色(10YR2/3) 外:黒褐色(10YR2/3)	須佐焼か
8	92	96	陶器	擂鉢	東区	1				口縁部は内側に折り込む 内面に1単位8条以上のクシ描きによる擂目を施す	内:回転ナデ 外:回転ナデ	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	内:鈍い黄橙色(10YR6/3) 外:鈍い黄橙色(10YR7/3)	肥前系 17C
9	92	96	陶器	甕	M4		(29.0)			口縁は内側に折り込んで内外に拡張する	内: 外:	黒灰色 2mm以下の砂粒を含む	内:灰褐色(5YR4/2) 外:灰褐色(5YR4/2)	福岡　17C前半 タタキ成形
10	92	97	磁器	碗	東区	造成土下	11.8	4.8			内: 外:	緻密　灰白色	内:灰白色(2.5GY8/1) 外:灰白色(2.5GY8/1)	肥前　18C後半
11	92	97	磁器	碗	東区	表土	(10.2)	(4.2)	(5.6)		内: 外:	緻密	内:灰白色(5GY8/1) 外:灰白色(5GY8/1)	肥前系(地元) 1820～1860
12	92	97	磁器	広東碗	東区 造成土下			(7.4)			内: 外:	緻密　灰白色	内:灰白色(5GY8/1) 外:灰白色(5GY8/1)	肥前 1780～1810
13	92	97	磁器	皿	J6	4	(18.8)	(9.2)	4.0		内: 外:	緻密　明白色	内:灰白色(5GY8/1) 外:灰白色(5GY8/1) 透明釉　呉須	肥前　波佐見 18C後半
14	92	97	磁器	皿	M4		12.8	8.3	3.3		内: 外:	緻密	内:明緑灰色(7.5GY8/1) 外:明緑灰色(7.5GY8/1)	肥前系(在地か) 18C第4四半期～ 19C前半
15	92	97	磁器	蓋	東区	造成土下	9.4				内: 外:	緻密　明白色	内:灰白色(2.5GY8/1) 外:明緑灰色(7.5GY7/1)	肥前　18C後半
16	92	97	磁器	瓶	J4		9.2	4.8			内: 外:	緻密　灰白色	内: 外:灰白色(2.5GY8/1)	肥前　波佐見 18C後半
17	93	96	土師器	皿	M3		9.3				内:回転ナデ 外:回転ナデ	1mm以下の砂粒をわずかに含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
18	93	96	土師器	皿	M3		9.4	4.0	2.3		内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転糸切り	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	SK26～28に伴うものか
19	93	96	土師器	土錘	J6	1	(長さ) 3.2	(幅) 1.2		管状	内:－ 外:ナデ	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	内:灰白色(10YR8/2) 外:灰白色(10YR8/2)	
20	93	96	土師器	土錘	J6		(長さ)	(幅)		円筒状	内:－ 外:ナデ	0.5mm以下の白色砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/3) 外:浅黄橙色(10YR8/3)	
21	93	95	瓦または瓦質土器	研磨具	L4	1				破片を再利用したもの 表面にススが付着している	内: 外:	3mm以下の石英を含む	内:灰白色(5Y7/2) 外:灰白色(5Y7/2)	
22	93	98	鉄製品	釘	N2		(器長) 5.2	(器幅) 1.6	(器厚) 1.8		内: 外:			SI16検出面
23	93	98	鉄製品	釘か	東区		(器長) 5.0	(器幅) 1.3	(器厚) 0.6	先端は厚さがうすくなる	内: 外:			
24	93	98	鉄製品	不明	N4		(器長) 4.3	(器幅) 2.7	(器厚) 0.6	薄い鉄板を折り重ねている	内: 外:			
25	93	98	鉄製品	不明	東区谷		(長さ) 10.8	(幅) 1.2	(厚さ) 0.3		内: 外:			
26	93	97	銭貨		SI16						内: 外:			寛永通宝
27	93	97	銭貨		市道脇						内: 外:			寛永通宝
28	93	97	銭貨		SI06	撹乱土					内: 外:			
29	93	95	石器	硯	東区		(長さ) 8.1	(幅) 4.9	(厚さ) 1.2		内: 外:		灰オリーブ色(7.5Y6/2)	重さ:73.81g
30	93	95	石器	硯	L4		(長さ) 11.0以上	(幅) 6.45	(厚さ) 1.5		内: 外:		墨痕有 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	重さ:153.68g
31	93	95	石器	砥石	L4	1	(器長) 8.7	(器幅) 6.4	(器厚) 4.3		内: 外:		浅黄色(2.5Y7/4)	重さ:368.43g

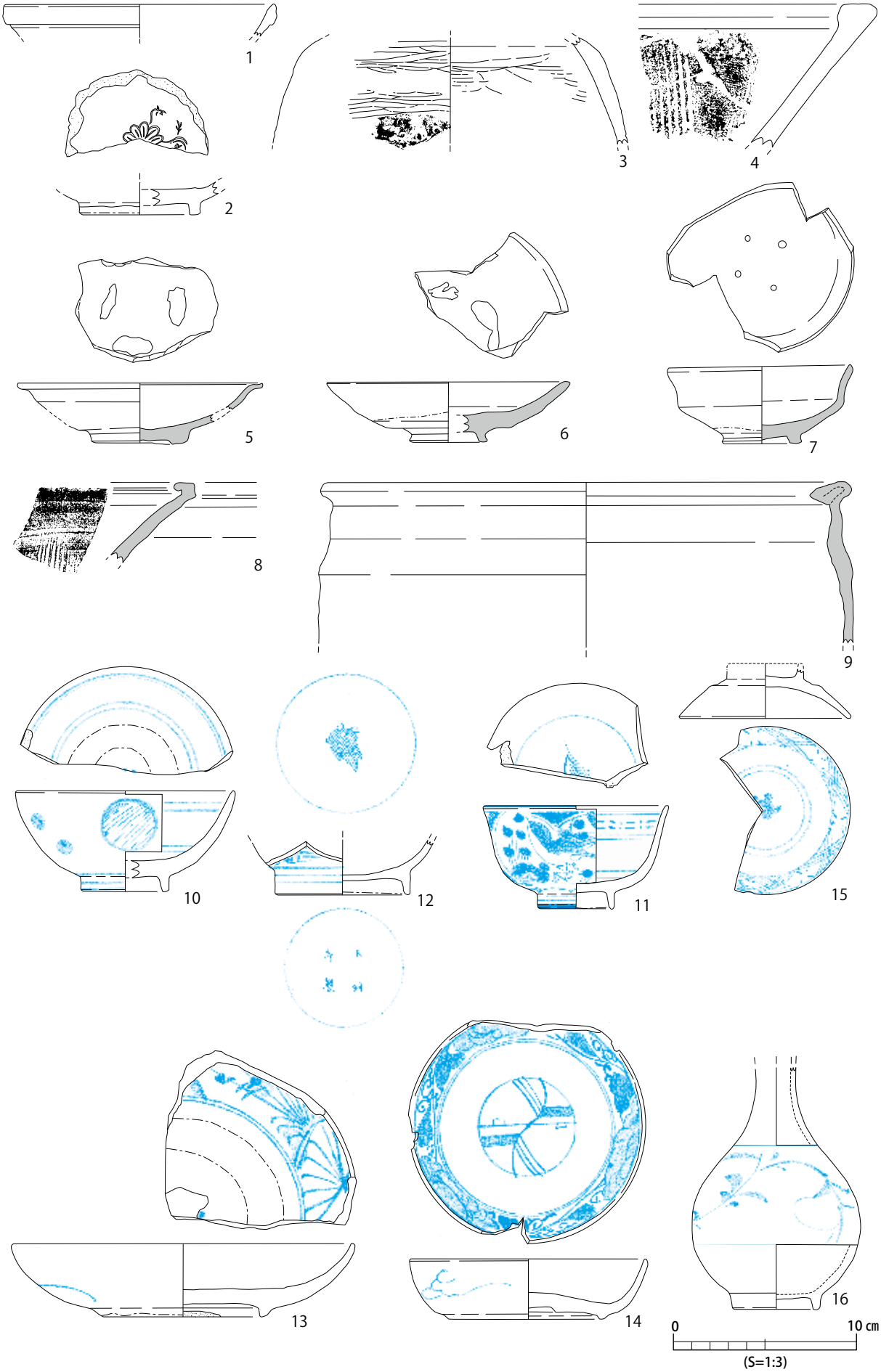


図 92.　中世以降の出土遺物実測図 (1)

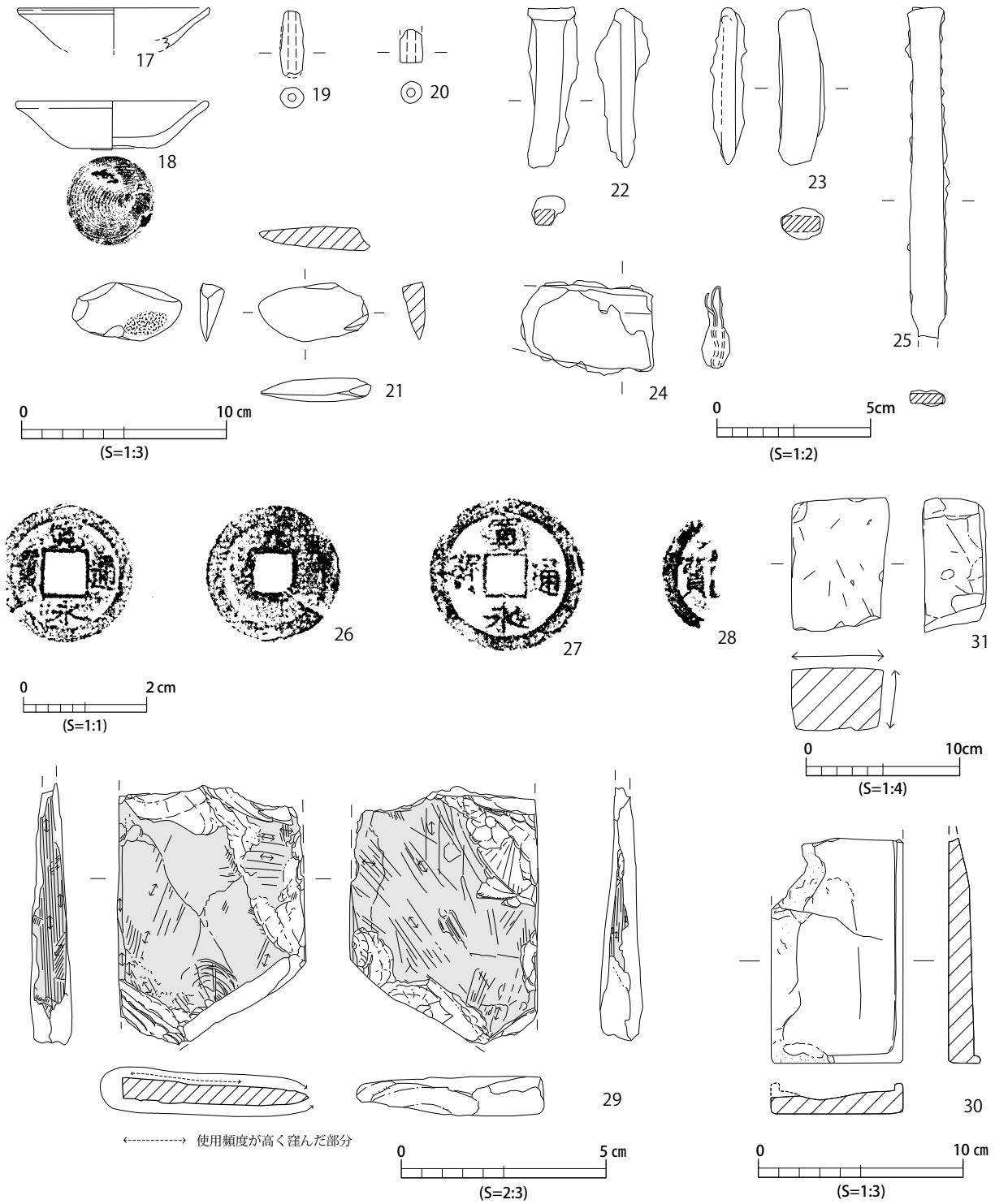


図 93.　中世以降の出土遺物実測図 (2)

注

(1)　沖手遺跡では、14 世紀以降に長方形プランの木棺墓が造られ、15 世紀後半以降には円形の桶を使用した墓や正方形プランの墓が混在して造られるようになる。（文献４）

(2)　史跡萩城跡で、防府市佐野産の大甕を埋設した便槽が報告されている。（文献２）

(3)　出土した陶磁器の内、図 81-3 ～ 7、13・14、図 87-15・16、図 92 -9 ～ 16 については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に分類していただいた。

(4)　島根県埋蔵文化財調査センター内田律夫の教示による。

(5)　安来市教育委員会舟木聡氏の教示による。

第７節　その他の遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の他、溝や段状遺構が数多く検出された。そのほとんどが、弥生時代後期や中世以降の集落に伴うものと考えられるが、時期や性格を明確に判断できなかった遺構もある。

本節では、そのうちの主な遺構とその出土遺物について、まとめて報告する。

１）溝状遺構

SD47（図 94 、写真図版 62）

西区の D7 グリッドで検出した、浅い溝状の遺構で、東側を現代の宅地に、南側を近世以降の区画溝によって切られている。北側でＬ時に曲がっており、溝の中に方形のピット状に落ち込む部分がある。

遺物は溝の中から弥生土器の小片が出土している。

溝の幅が概ね 20 ～ 30㎝であり、SD47 の約 5 m 北西で SI07 を、約 10 m 北で SI10 を検出していることから、竪穴住居の壁体溝の可能性を考えて精査を行った。しかし、主柱穴と考えられるピットや焼土面などは検出されず、遺構の性格は明らかにできなかった。

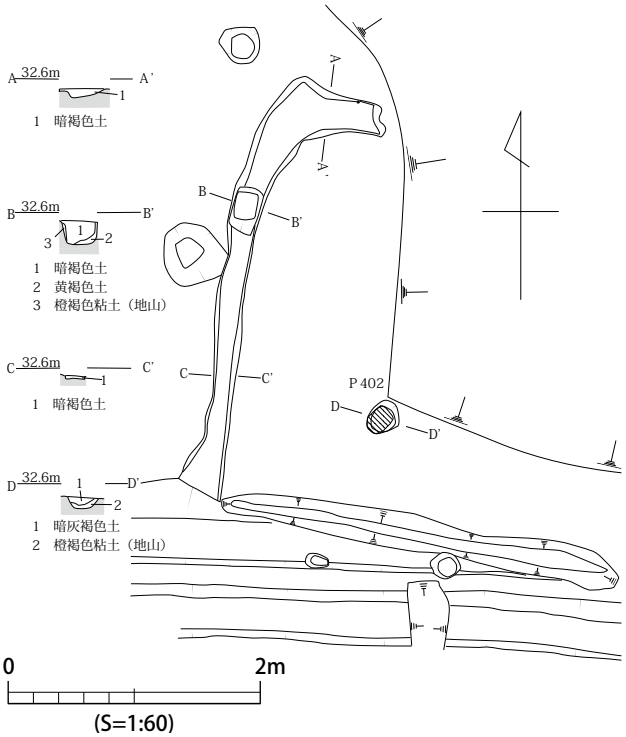


図 94.　SD47 実測図

SD52（図 95 、写真図版 62）

西区の D7 グリッドで検出した溝状遺構で、規模は検出面で幅約 1.4 m、長さは約 5.5 mである。床面は北西に向かってゆるく傾斜している。床面で建物の柱穴と考えられるピットを２基検出した。遺物は出土していない。

２）段状遺構

段状遺構 8（図 95、写真図版 63）

西区の E6・F6 グリッドで検出した遺構で、北側に緩やかに傾斜する斜面を削平してほぼ平坦にしている。床面で柱穴や焼土は検出されなかった。詳しい時期は不明だが、南側に隣接する古墳時代前期の竪穴住居跡 SI11 を切って造られている。埋土中で弥生土器の小片が出土した。

段状遺構 9（図 96・97、写真図版 63・88）

西区の E9 グリッドで検出した遺構で、南向き斜面を浅く掘りこんで段状の地形に造り出している。床面で柱穴や焼土面は検出されなかった。遺物は須恵器壺類の口縁部（1）が出土している。

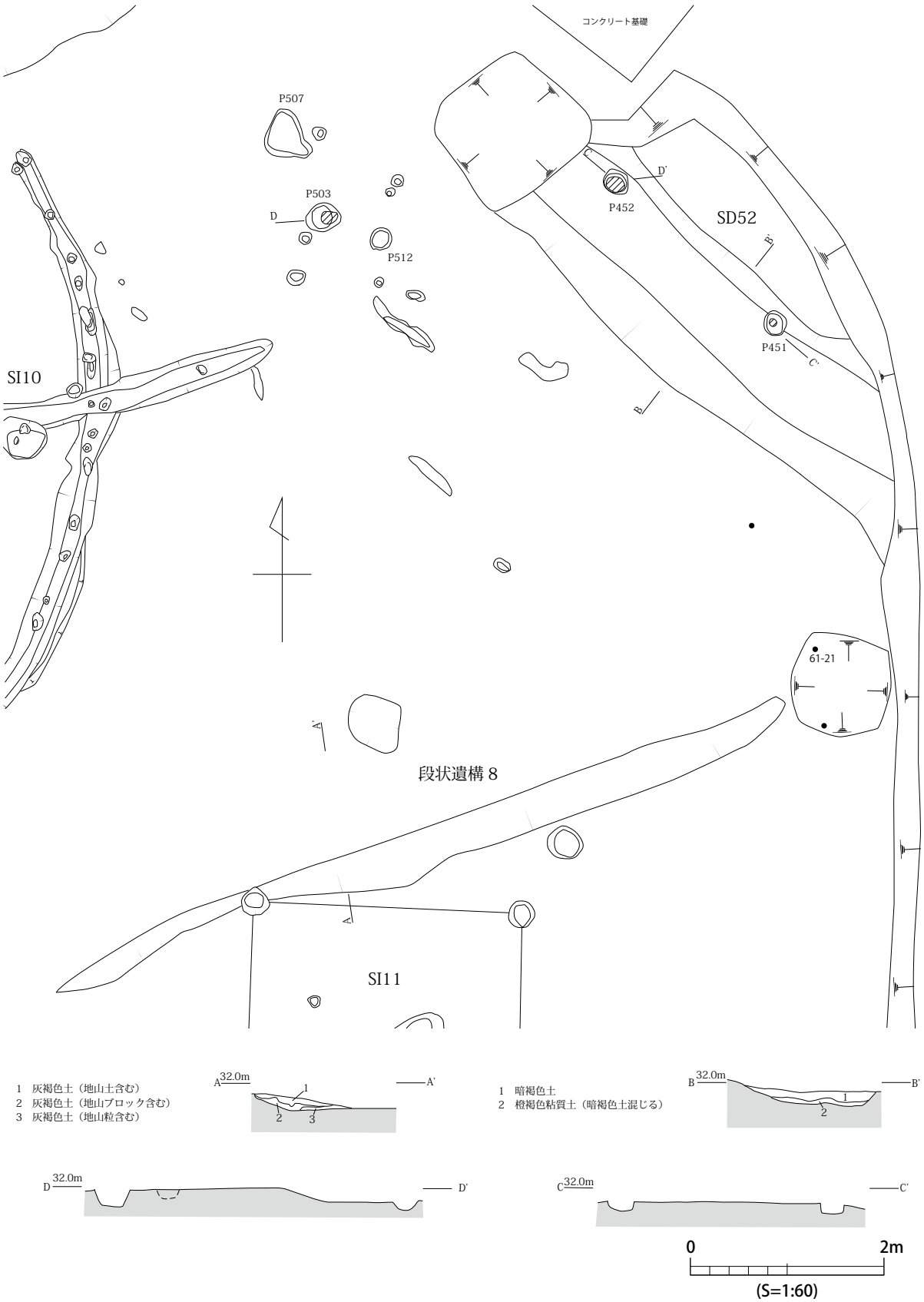


図 95.　SD52、段状遺構 8 実測図

段状遺構 10（図 96・97、写真図版 64・88）

段状遺構 9 の西側に隣接する位置で検出した。床面は非常に不整形である。遺構の北側は SI09 の周溝 SD42 を切っている。出土した土器は SI09 や SB04 に伴うとものと考えられる。

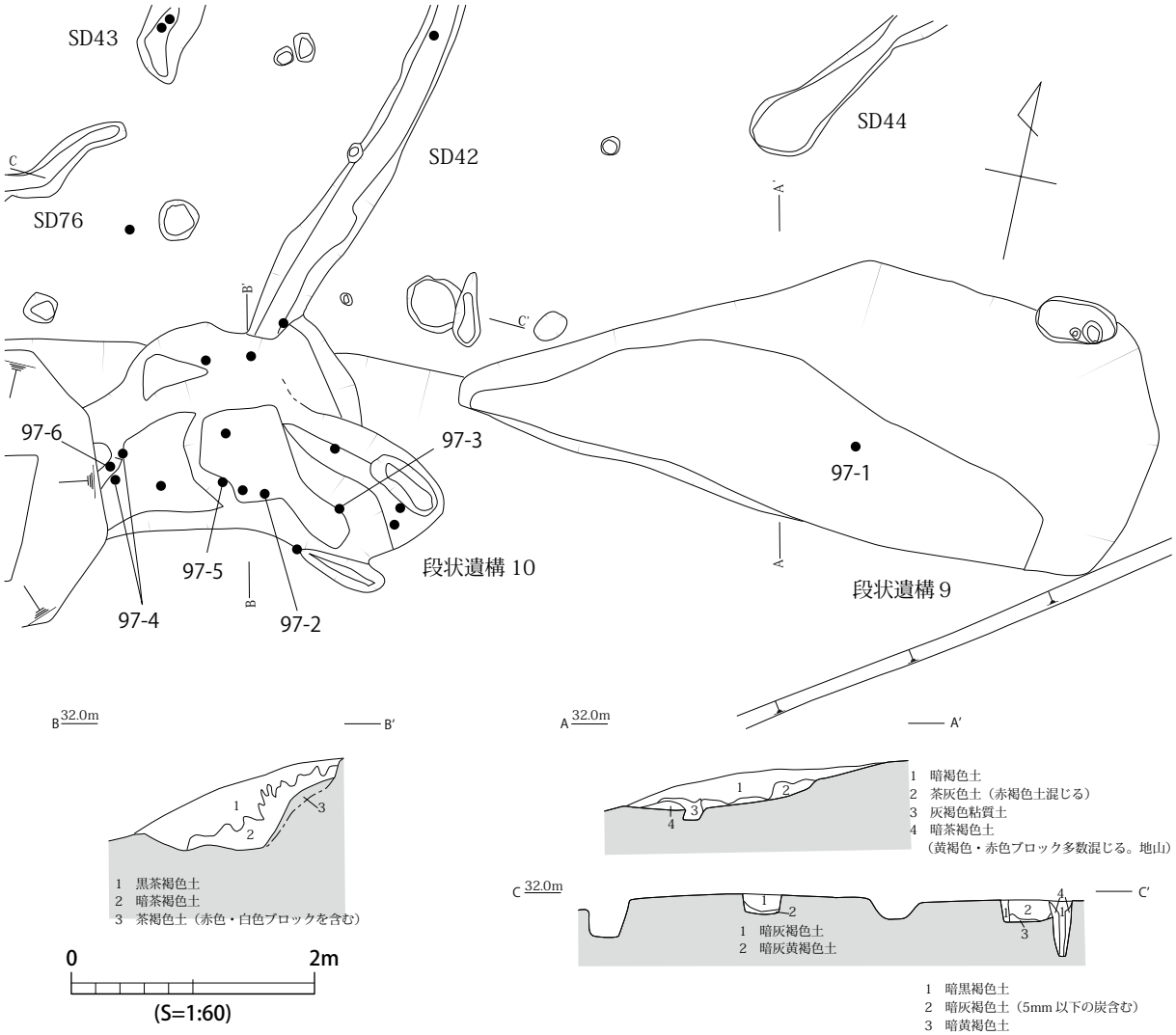


図 96.　段状遺構 9・10 実測図

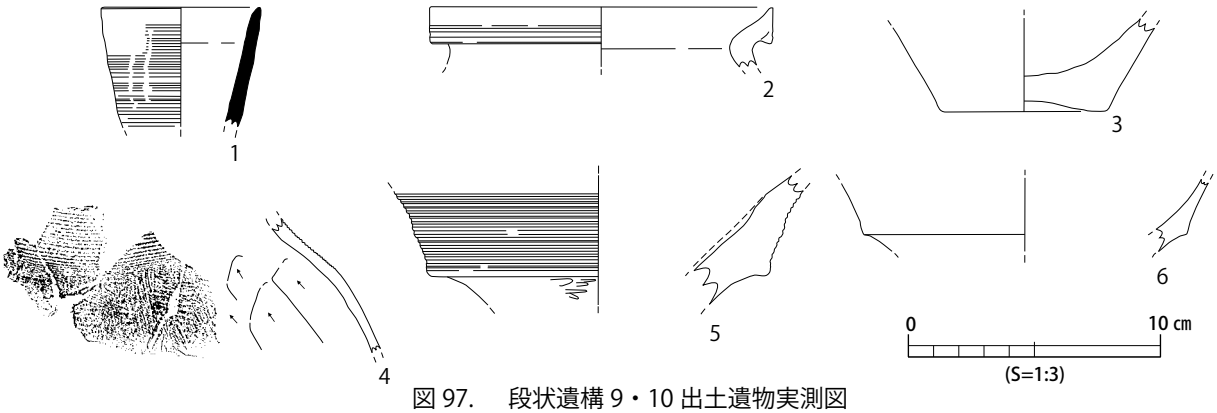


図 97.　段状遺構 9・10 出土遺物実測図

第33表　段状遺構9・10出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	97	88	須恵器	壺	KD09		(6.4)				内:回転ナデ 外:横方向のハケメ、縦方向のナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y7/2) 外:灰黄色(2.5Y6/2)	
2	97	88	弥生土器	甕	KD10	1	(13.5)			口縁端部に2条以上の凹線を廻らせる 口縁端部を下方に拡張	内:ナデ 外:ヨコナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:灰黄色(2.5Y6/2) 外:暗灰黄色(2.5Y5/2)	V－1様式
3	97	88	弥生土器	甕	KD10			(6.4)		底部中心に向かって上げ底になっている	内:ヘラケズリ後にナデ 外:ナデ	4mm以下の砂粒を含む	内:灰白色(10YR7/1) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
4	97	88	弥生土器	甕	KD10	1				凹線文 頸部	内:ハケメ 外:ヘラケズリ	2mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－4様式
5	97	88	弥生土器	鼓形器台	KD10	1				器受部外面に貝殻腹縁による擬凹線文を施す	内:ナデ 外:ヨコナデ、ヘラミガキ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:橙色(7.5YR7/6)	V－2様式か
6	97	88	弥生土器	鼓形器台	KD10	1					内:ナデ 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:橙色(7.5YR7/6) 外:黄橙色(10YR8/8)	V－4様式

D10 グリッドピット群（図 98・99、写真図版 66・67・82）

西区の南端に位置する D10 グリッドは、現代の宅地と畑の造成のために丘陵斜面が大規模に削られ、調査前にはコンクリート擁壁が築かれていた。このため遺構の残存状況は良くないが大小のピットが 24 基検出された。この中には柱痕の確認できたものや、規模から建物の柱穴と考えられるものもあるが、建物の柱配置は復元できなかった。

柱穴内や周辺では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が最も多く出土している。また、P655 では瓦質土器の湯釜（2）が出土している。

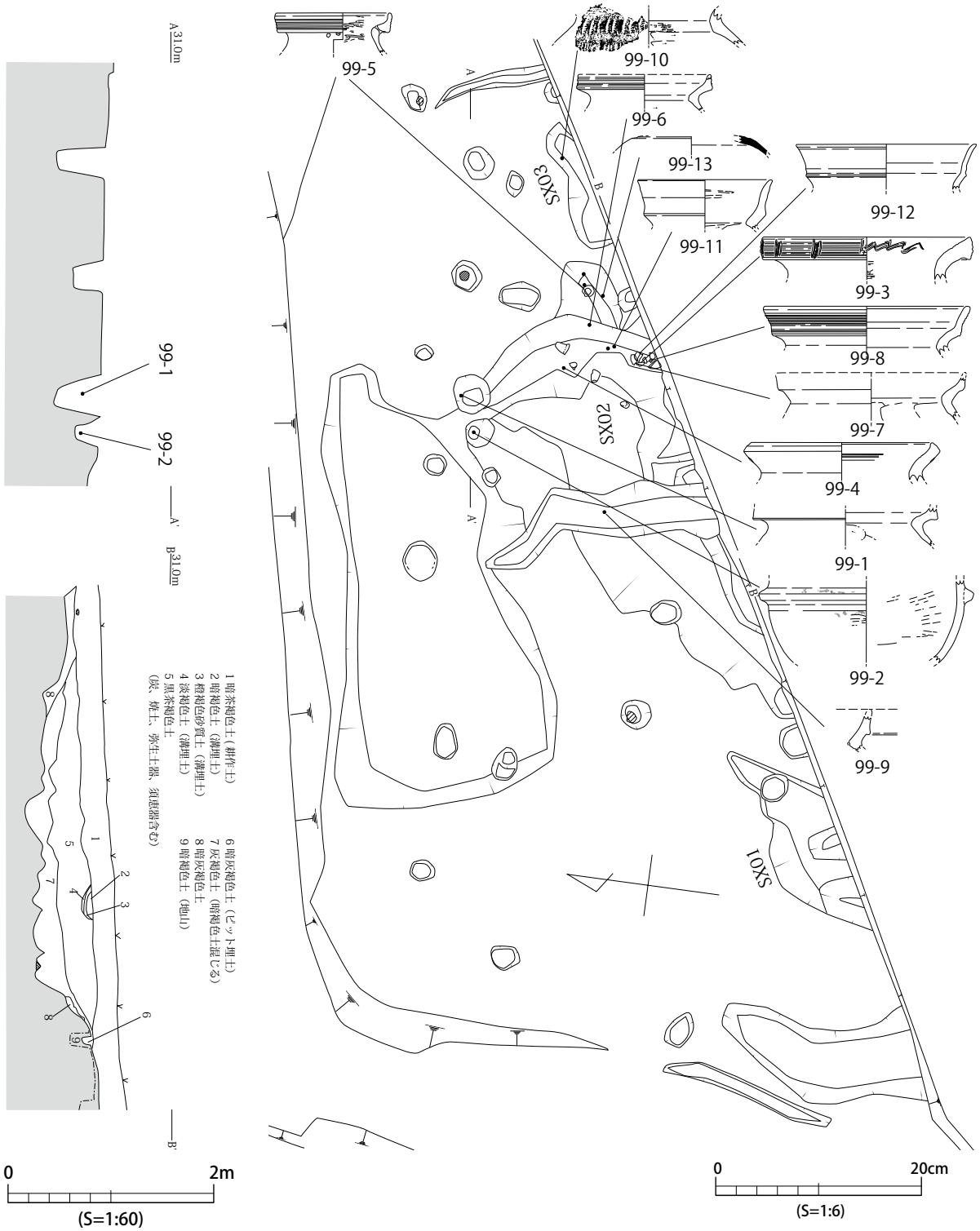


図 98.　D10 グリッド　ピット群、SX02・03 実測図

SX02・03（図 98・99、写真図版 67・82）

D10 グリッドピット群の中央で検出した不整形な遺構で、各溝状の落ち込みとピットが複雑に切り合っている。溝状に落ち込んだ部分からは、弥生時代後期の土器が多数出土したほか、須恵器の坏蓋（13）が 1 点出土している。摩滅している遺物が多いが、弥生土器の壺（5）は表面の残りが良い。遺構の詳しい時期や性格は不明である。

第34表　D10グリッドピット群、SX02・03出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 Gr/遺構	層位	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
1	99	82	弥生土器	甕	P342						内:ナデか 外:ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:黄橙色(10YR8/6)	弥生時代後期
2	99	82	瓦質土器	湯釜	P655	1			最大径 21.9	胴部最大径部分に突帯を貼り付ける	内:ハケメ 外:ミカキ	2mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/4) 外:浅黄色(2.5Y7/8)	防長型
3	99	82	弥生土器	壺	SX02	1	(20.0)			口縁外面に5条の凹線文、内面に波状文を施す	内:ヨコナデ、ミガキ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒・石英を含む	内:浅黄色(2.5Y7/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	
4	99	82	弥生土器	甕	SX02	1	(17.5)			口縁端部は上方にわずかに拡張する	内:ヨコナデ(一部ハケメ残す) 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:浅黄色(2.5Y7/3) 外:淡黄色(2.5Y8/3)	V－1様式
5	99	82	弥生土器	壺	SX02	1	11.2			口縁部に4カ所孔がある 口縁端部は上下に拡張し、4条の凹線文を施す	内:ヘラミガキ 外:ヨコナデ	2,3mmの石をやや含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:黄橙色(10YR8/6)	V－2様式
6	99	82	弥生土器	甕	SX02	1	(12.6)			口縁端部を上方に拡張し、凹線を3条施す	内:不明 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:鈍い黄橙色(10YR7/4) 外:鈍い黄橙色(10YR7/4)	V－2様式
7	99	82	弥生土器	甕	SX02	1					内:ヘラケズリ 外:不明	4mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
8	99	82	弥生土器	甕	SX02	1	(19.4)			口縁端部は外反し、貝殻腹縁による擬凹線文が7条施される	内:ヨコナデ、ヘラケズリ 外:ヨコナデ	8mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
9	99	82	弥生土器	甕	SX02	1				口縁端部は下方に突出する	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(10YR8/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	V－2様式
10	99	82	弥生土器	甕	SX03	1				頸部から肩にかけて二枚貝による刺突文が施されている	内:ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ 外:ヨコナデ、二枚貝押擦	3mm以下の砂粒を含む	内:明黄褐色(10YR7/6) 外:明黄褐色(10YR7/6)	
11	99	82	弥生土器	甕	SX02	1	(13)			口縁は外反し、端部は先細りする	内:ヨコナデ、ヘラミガキ 外:ヨコナデ	5mm以下の砂粒を含む	内:浅黄橙色(10YR8/4) 外:浅黄橙色(10YR8/4)	V－4様式
12	99	82	土師器	甕	SX02	1	(17.5)			口縁端部は外方に肥厚し面を持つ	内:回転ナデ 外:回転ナデ	3mm以下の砂粒を含む	内:黄橙色(7.5YR7/8) 外:黄橙色(7.5YR7/8)	SB04に伴うものか
13	99	82	須恵器	蓋杯	SX02	1					内:回転ナデ 外:回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	内:灰色(10Y6/1) 外:灰白色(10Y7/1)	

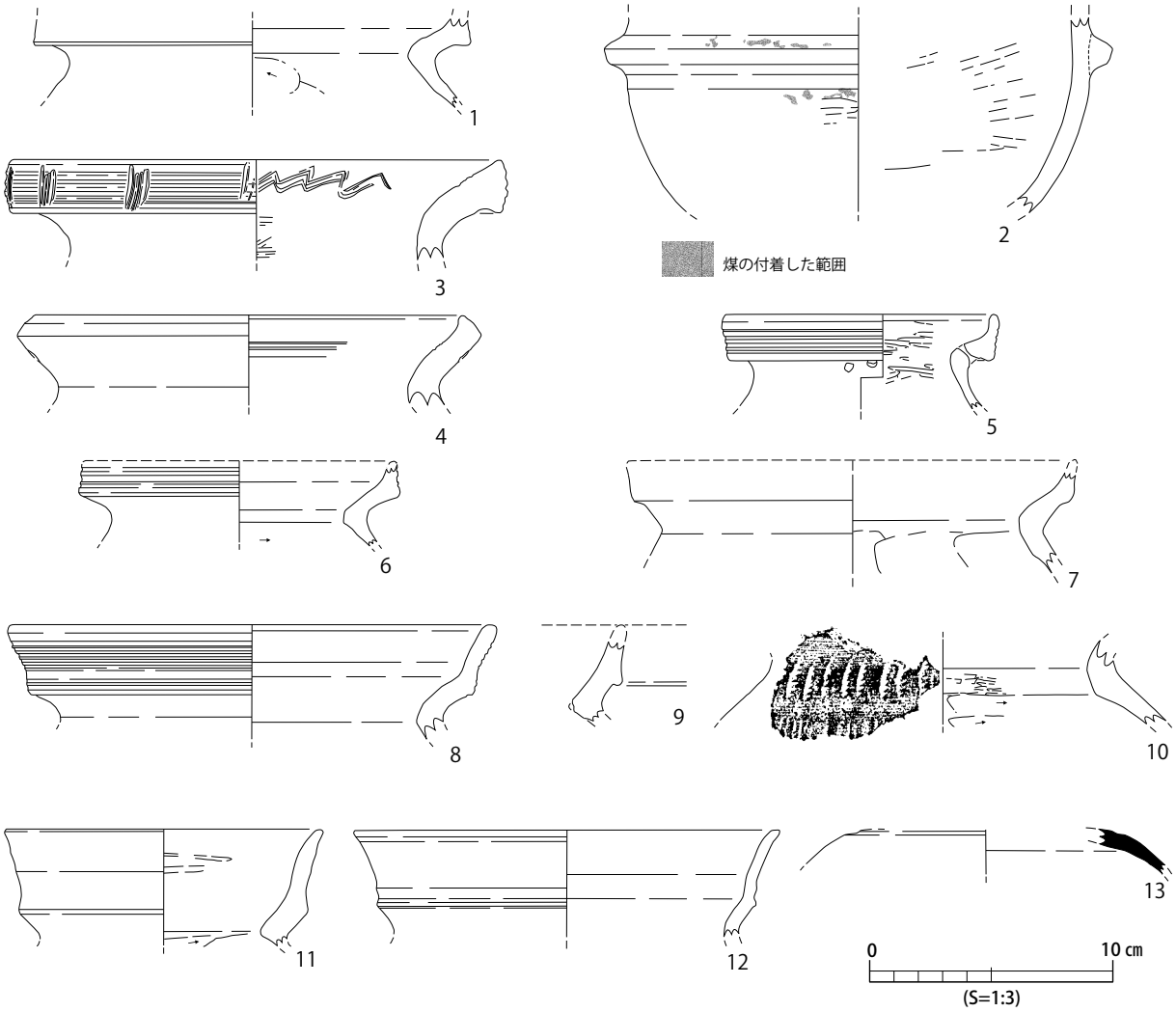


図 99.　D10 グリッド　ピット群、SX02・03 出土遺物実測図

第 4 章　自然科学的分析

第 1 節　堂ノ上遺跡焼失竪穴住居 SI13 の樹種同定及び年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント (株)）

はじめに

堂ノ上遺跡は島根県西部益田市久城町に位置し、益田平野東端の標高 30m 程度の丘陵上に立地する。同遺跡からは弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数検出されている。

本報告は、堂ノ上遺跡発掘調査に係り検出された焼失竪穴住居 SI13 の年代及び用材を調べる目的で、島根県教育庁埋蔵文化財センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した調査報告書の概報である。

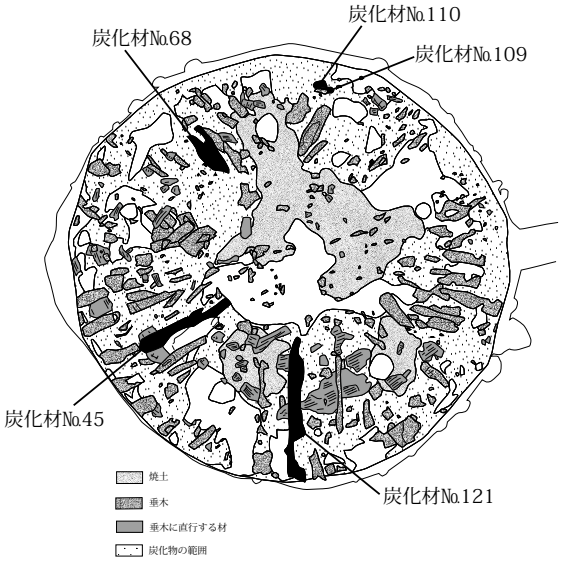


図 1　SI13 平面図及び資料採取位置

試料について

調査区内、図 1 に示す焼失竪穴住居 SI13 において採取され、保管されていた試料（表 1）を対象に、樹種同定 AMS 年代測定を行った。

分析方法

(1) 樹種同定方法

対象が炭化材であり、走査電子顕微鏡を利用して観察・同定・写真撮影を行った。

(2) AMS 年代測定方法

前処理として、塩酸による酸洗浄を行った。測定にはタンデム型イオン加速器を用い、年代計算の半減期としてリビーの値（5568 年）を用いた。暦年校正には INTCAL09 を用い、OxCal ver4.1 により算出した。

分析（測定）結果

(1) 樹種同定結果

分類ごとに特徴的な試料（下線試料）の記載を行った。また、表 1 に同定結果を示し、下線試料について電子顕微鏡写真を図版に示した。

① シイノキ属類似　cf. Castanopsis sp.（ブナ科？）

試料№：№ 110、121

表１　資料一覧（樹種同定結果及び年代測定結果）

試料			樹種名	測定年代*1 (yrBP±1σ)	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	補正年代*2 (yrBP±1σ)	暦年較正年代		測定番号 (PLD-)
試料名	出土地点	重量(g)						1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
炭化材No.45	SI13(焼失住居)	1.2041	広葉樹	2064±19	-25.36±0.30	2057±19	2055±20	BC104－41(68.2%)	BC162－132(10.3%) BC117－19(80.6%) BC13－1(4.5%)	17282
炭化材No.68			広葉樹							
炭化材No.109		1.5820	シイノキ属類似	1936±20	-25.80±0.29	1923±20	1925±20	AD58－88(46.8%) AD104－121(21.4%)	AD28－40(5.8%) AD49－128(89.6%)	17283
炭化材No.121		1.9177	シイノキ属類似	2045±19	-24.93±0.28	2046±19	2045±20	BC92－68(21.3%) BC61－37(29.5%) BC31－20(8.1%) BC12－1(9.4%)	BC158－136(4.2%) BC114－AD5(91.2%)	17284

*1 δ13C補正無年代　*2 δ13C補正年代

記載：環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部の道管は小さいが、材の状態が悪く配列は不明瞭であった。道管のせん孔は単せん孔である。放射組織は単列で同性となる。以上からシイノキ属の可能性が指摘できるが､材の状態が悪く、断定には至らなかった。

② 広葉樹　Broadleaf wood

試料No.：No.45、68

記載：単せん孔の道管が認められ、広葉樹であることが分かる。しかし試料の状態が悪く、横断面における道管の配列が観察できなかった。放射組織は単列で同性であり、他の２試料と同様にシイノキ属の可能性もあるが、分類群の特定には至らなかった。

(2)AMS 年代測定結果

測定結果を表１に示す。また、暦年較正結果を図２に示す。

表１には、測定年代、（δ^{13}C）補正 ^{14}C 年代、暦年較正用年代、暦年代の４種類の年代値を示してある。測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。^{14}C 濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5568 年）を用いて計算した値である。（δ^{13}C）補正 ^{14}C 年代は、^{14}C 濃度が環境により変動することから、δ^{13}C を測定し、δ^{13}C＝-25‰に規格化した ^{14}C 濃度を求め、算出した年代値の１桁を５年あるいは 10 年単位で丸めた物である。暦年較正用年代は、δ^{13}C＝-25‰に規格化した ^{14}C 濃度を求め、算出した年代値であり､補正 ^{14}C 年代の元の値である。暦年較正には､この値を用いている。上記の年代は、いずれも西暦 1950 年からさかのぼった年代値で示してある。一方暦年代は､INTCAL09 を用いて、OxCal 4.1 により算出・較正したものである。

何れの試料も、弥生時代中期から後期の年代を示し、竪穴住居 SI13 がこの時期に建築されたこ

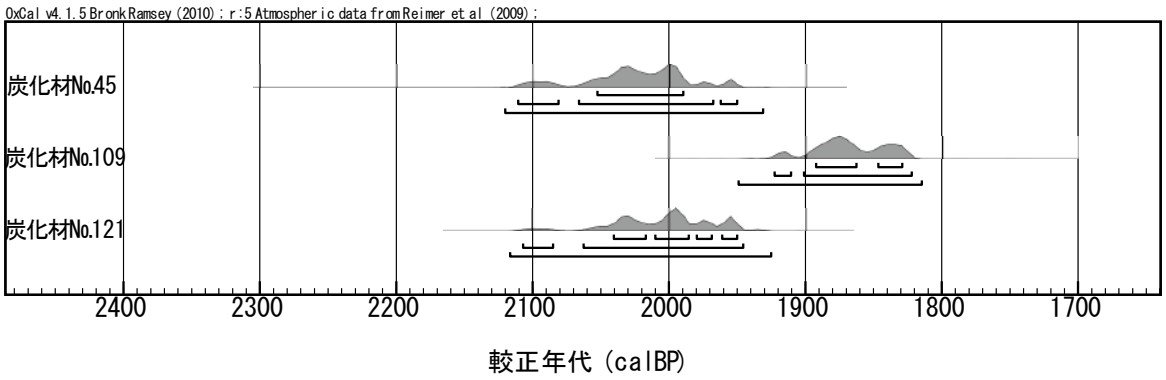


図２　暦年較正結果

とが示唆される。

用材について

弥生時代の焼失住居の樹種同定は、島根県西部では堂ノ上遺跡（渡辺 ,2010a)、道休畑遺跡：浜田市（渡辺 ,2010b）で報告されている。堂ノ上遺跡（渡辺 ,2010a）では、弥生時代後期の住居跡から得られた 6 試料中 4 試料がシイノキ属、2 試料がクスノキ科であった。また、道休畑遺跡では、弥生時代後期の住居跡から得られた 16 試料中 13 試料がシイノキ属、トネリコ属、ネジキ、クスノキ科がそれぞれ 1 試料であった。

また、島根県東部の田和山遺跡：松江市（金井；2005、株式会社古環境研究所；2005）でも 13 試料中 9 試料がシイノキ属を占めている。

今回の樹種同定結果は、試料の保存状態が悪く、「シイノキ属類似」、あるいは「広葉樹」としている。しかし、いずれも単列同性の放射組織を持つことと、従来の結果から推測すると、すべてがシイノキ属である可能性が高いと考えられる。

「シイノキ属」は暖温帯の指標的な植物であり、現在の島根県下海岸平野部の潜在植生でもある。周辺地域の花粉分析などが行われておらず推測の域を脱しないが、比較的近くに生えていた樹木（「シイノキ属」）を、住居を造るために用いられたと考えられる。

まとめ

焼失竪穴住居 SI13 は弥生時代中期から後期にかけての時期に建築されたものと推定できた。SK13 からは弥生時代後期前葉の土器が出土しており、良い一致が見られた。また、樹種同定の結果、住居の用材を「シイノキ属類似」、「広葉樹」としたが、状況証拠からシイノキ属の可能性が高かった。潜在植生から考えると、遺跡の比較的近くに生育していた樹木を伐採したものと推定され、島根県下の弥生時代竪穴住居の一般的な用材であった。

引用文献

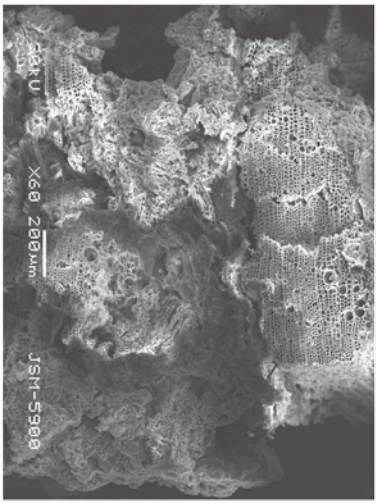
金井慎二（2005）田和山遺跡の自然科学分析．田和山遺跡群発掘調査報告 1- 田和山遺跡 -，265-272，松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団，島根.

株式会社古環境研究所（2005）田和山遺跡群における自然科学分析．田和山遺跡群発掘調査報告 1- 田和山遺跡 -，273-276，松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団，島根.

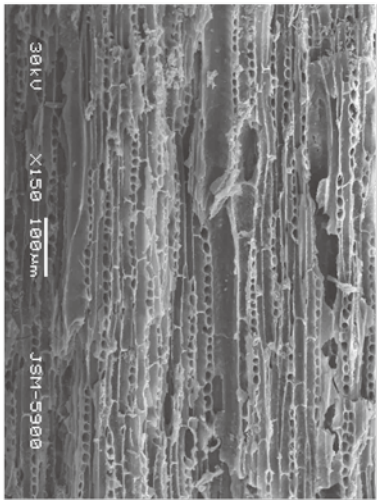
渡辺正巳（2010a）堂ノ上遺跡発掘調査に係る AMS 年代測定と焼失住居より得られた炭化木材の樹種．堂ノ上遺跡 - 一般県道久城インター線久城工区地域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -，79-83，島根県教育委員会.

渡辺正巳（2010b）道休畑遺跡発掘調査に係る焼失住居及び貯蔵穴から得られた炭化材の樹種．道休畑遺跡，一般国道 9 号（浜田・三隅道路）建設予定地内発掘調査報告書，1，146-148，国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所・島根県教育委員会.

広葉樹　Broadleaf wood　：試料№68



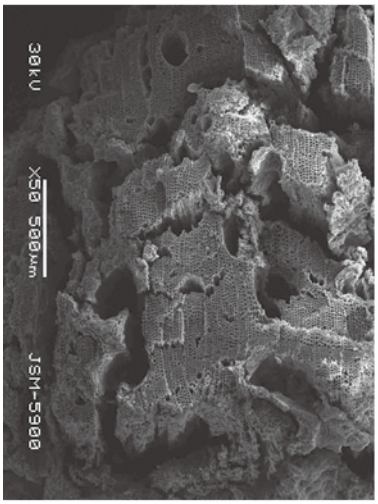
横断面



接線断面

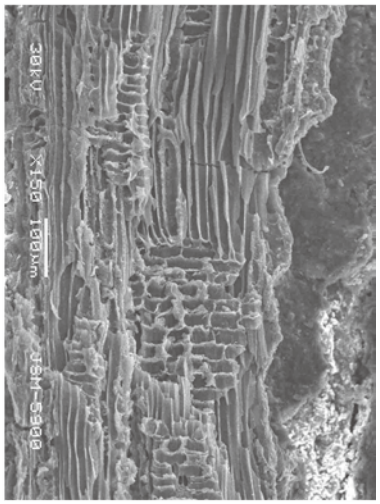
放射断面

シイノキ属類似　cf. Castanopsis sp.　：試料№121



横断面

接線断面



放射断面

第２節　堂ノ上遺跡における焼失住居跡から出土炭化種実について

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント (株)）

はじめに

堂ノ上遺跡は島根県西部益田市久城町に位置し、益田平野東端の標高 30m 程度の丘陵上に立地する。同遺跡からは弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数検出されている。

本報告は、堂ノ上遺跡発掘調査に係り発見された焼失竪穴住居などから検出された種実の種名を調べる目的で、島根県教育庁埋蔵文化財センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した種実同定業務の概報である。

試料について

島根県教育庁埋蔵文化財調査センターによって、図 1 に示すの 7 地点（遺構）から、表 1 に示した 14 地点（層準）に分けて試料が採取され、水洗・篩分した状態で保管されていた。この保管試料の提供を受け、種実同定を行った。

種実分析方法

前述のように、試料は事前に水洗・篩分けされていた。このため、提供を受けた試料を実態顕微鏡下で直接観察し、種実の選別・同定を行った。同定作業は、現生標本との比較を基本として、植物図鑑（参考文献参照）の記載を参考に行った。また、同定を行った種類ごとに顕微鏡写真を撮影し、主な種類について同定の根拠を記した。同定結果は表に表し、検出した数を示した。

種実分析（同定）結果

同定結果を、表 1 に示すとともに、主な種類の記載を以下に、顕微鏡写真を図版 1 ～ 2 に示す。また、イヌビエ、スズメノエンドウ近似種は、未炭化であったことからいずれかの過程で混入した現生種の可能性が高い。

(1) 草本

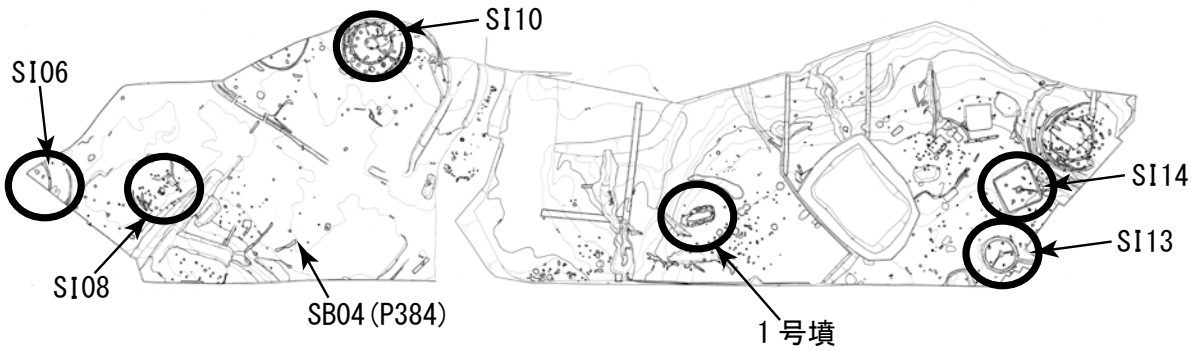


図 1　遺構の配置

アワ：種子はほぼ球形で一側に種子長の半分よりやや長い胚がある。表面は不明瞭だが、炭化する際に前後方向に膨張するというアワの特徴を持っている。
カボチャ仲間類似：種子周辺部の縁は平行に一段低くなり翼状に突出する。種子表面には細かい多角形の網目状模様があり、種子が割れた内面は平滑である。これらの特徴はカボチャ仲間（栽培種であるカボチャ（属）の総称として使う。）と一致するが、破片のために種子全体が分からないことからカボチャ仲間類似としておく。
(2) 藤本
ササゲ属：完形種子は上面観、側面観ともに楕円形で一側に幅の狭い帯状のへそがあり、へそ直上に突出がある。子葉はへそ部分から長軸方向に半分に割れやすく、割れ面は平滑で中央がややへこみ、へそ上端から縁に平行に湾曲した初生葉が長く伸びる。このため初生葉が残っていない子葉でも子葉長半分くらいまで湾曲したへこみが見られる。このササゲ属の特徴が不明瞭あるいは持たないものはマメ科とした。
ブドウ属：種子は鈍い三角形で腹面には稜を挟んで縦に伸びた小孔が 2 個あり、背面にはさじ状の溝が 1 個ある。
(3) 木本
ウルシ属：内果皮は楕円形で扁平、上下方向に湾曲した不明瞭な筋がある。内果皮壁の割れ面で壁が 3 層構造を持つことが確認できる。表面はざらついて見え、拡大すると網目は確認できないため、ウルシ以外のウルシ属であることがわかる。
ツバキ属：種子破片のみ出土した。破片は頂点に小さいへこみがある 3 つの稜を持つ固い壁で表面にざらつきがある。なお、ツバキ属のうちチャの種子は稜がほとんど無いほぼ球で、種子表面はやや光沢があり平滑であるため、出土種子はチャ以外のツバキ属である。

栽培植物の検出状況

栽培の可能性がある分類について、出土遺構ほかついて以下にまとめた。

イネ科作物：イネ、アワが検出された。イネはほとんどの遺構から検出されたが、アワは SI14 からのみ、1 粒が検出された。

モモ：SI06 内の P425 から検出された。中国渡来の栽培種とされているが、野生品種（野生化したもの？）の報告もある（星川，1992）。検出されたモモは破片であるが、長径 2cm 程度と小型であり、古代の品種である。

カボチャ（仲間）：SI10 内埋土及び P561 から検出された。カボチャは中南米原産で、日本には 16 世紀中頃以降、ヨーロッパ経由で伝わっている。一方、大阪府東大阪市瓜生堂遺跡では弥生時代中期の層から検出の記載がある。今回、弥生時代後期の住居跡から検出されたことは非常に興味深い。ただし、種子が破片であり、外形が不明のまま「類似」と同定を留めたことなど、慎重な対応が必要である。また、検出層や遺構の層序についても検討を要する。

ササゲ属:SI06 から検出された。栽培種のササゲ、アズキ、リョクトウ（ヤエナリ）が含まれるが、特定できなかった。また、野生種の可能性もある。

ブドウ属：SI14 から検出された。ブドウ属には野生種も含まれ、作物ではない可能性もある。

1 号墳出土蓋坏内の栽培植物

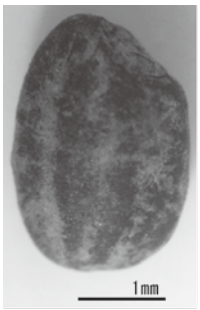
1 号墳から出土した蓋坏内からは、イネが 1 粒、エノコログサ属が破片を含め 5 粒、カラスザンショウ属が 1 粒検出された。イネを供物として入れた可能性が示唆されるが、量が少ないことと、炭化していることなど疑問は残る。

参考文献

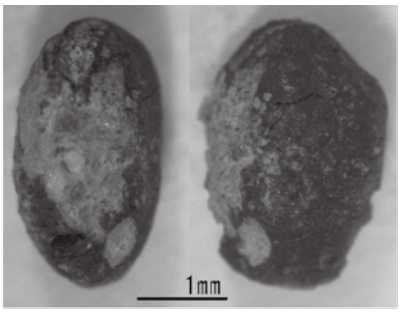
浅野貞夫（1995）新装版原色図鑑芽生えとたね．p.280, 全国農村教育協会.
石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑．p.327, 石川茂雄図鑑刊行委員会，東京.
角野康郎（1994）日本水草図鑑．p.179, 文一総合出版.
徳永桂子（2004）日本どんぐり大図鑑．p.156, 偕成社.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑．p.642, 東北大学出版会.
星川清親（1992）改訂増補栽培植物の起源と伝搬．p.311, 二宮書店.

表１　種実同定結果

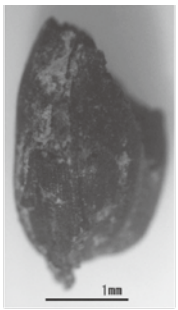
分類群			部位	状態	S106 弥生後期前葉～中葉		S108 弥生後期前半	S110 弥生後期前葉					S113 弥生時代後期前葉		S114 弥生末～古墳初頭		SB04 古墳前期	1号墳 古墳後期	備考
					床面	P425	P324	埋土2層	埋土3層	南側焼土	南東焼土下層	P561	中央ピット	埋土	中央ピット4層	中央ピット6層	P384	蓋坏	
イネ科	イネ属	イネ	炭化胚乳		19	7	1	13				2	5	20	1		2		
			炭化胚乳	片	6	1													
			炭化胚乳	焼け膨れ片		1		3		1				3	1	5		1	
			炭化穎果					2											
			炭化未熟胚乳	片					1										
	エノクログサ属	エノクログサ属	炭化穎果															1	
			炭化穎果	片														5	
		アワ	炭化種子												1				
	ヒエ属	イヌビエ	未炭化穎果					1				1							
タデ科	ギシギシ属	ギシギシ属	炭化果実					12											
			炭化果実	片				1											
バラ科	サクラ属	モモ	炭化核	片		1													
マメ科	ソラマメ属	スズメノエンドウ近似種	未炭化種子															4	
			未炭化種子	片														1	
	ササゲ属	ササゲ属	炭化種子		2														
			炭化種子	片	1														
		マメ科	炭化種子		1														
			炭化種子	片	8	1													
ミカン科	サンショウ属	カラスザンショウ	炭化内果皮		1	2													
			炭化内果皮	片														1	
ウルシ科	ウルシ属	ウルシ属	炭化内果皮													1			
ブドウ科	ブドウ属	ブドウ属	炭化種子			1													
ツバキ科	ツバキ属	ツバキ属	炭化種子	片										7					
アカネ科	ヤエムグラ属	ヤエムグラ属	炭化種子					1											
ウリ科	カボチャ属	カボチャ仲間類似	炭化種子	片				6	2			1							
不明	不明	不明種実	炭化種実	片・雑多					4					6			3	2	
		不明子葉	炭化子葉	片・雑多							3			1					
		不明種子	炭化種子														1		
合計					38	14	1	39	7	1	3	4	5	37	3	6	6	15	



イネ：炭化胚乳
SI06床面

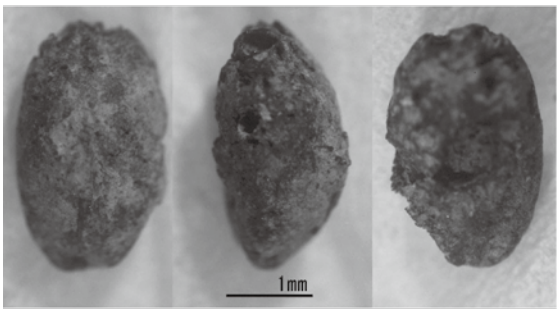


イネ：炭化胚乳
SI06P425

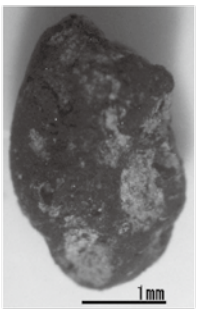


イネ：炭化頴果
SI10埋土2層

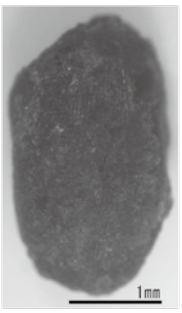
イネ：炭化胚乳
SB04P384

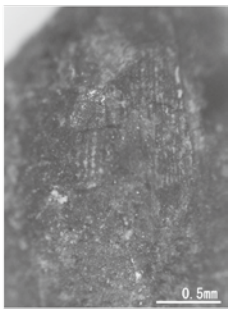


イネ：炭化胚乳焼け膨れ
SI06P425



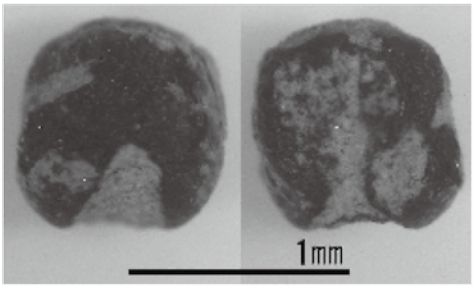
イネ：炭化胚乳
SI13中央ﾋﾟｯﾄ



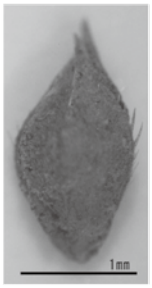


イネ：炭化胚乳　　（拡大）
SI13埋土

ｴﾉｺﾛｸﾞｻ属：頴果
1号墳蓋坯

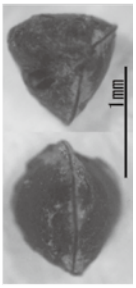


アワ：炭化種子
SI14中央ﾋﾟｯﾄ4層



イヌビエ：頴果
SI10埋土2層

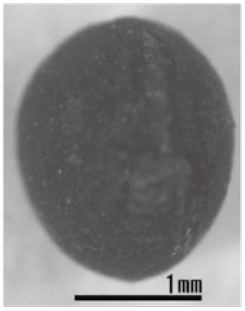
イヌビエ：頴果
SI10P561



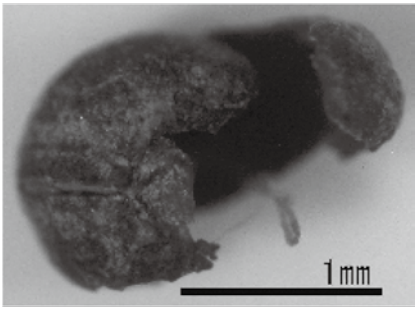
ギシギシ属
：果実
SI10埋土2層

モモ：核
SI06P425

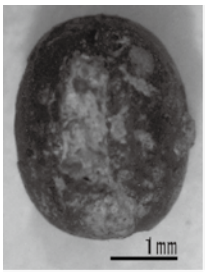
ｽｽﾞﾒﾉｴﾝﾄﾞｳ近似種：種子
1号墳蓋坯



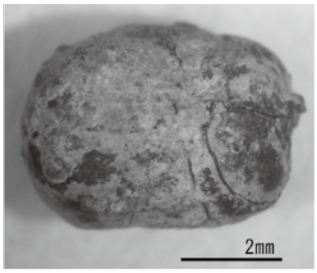
ｽｽﾞﾒﾉｴﾝﾄﾞｳ近似種：種子
1号墳蓋坯



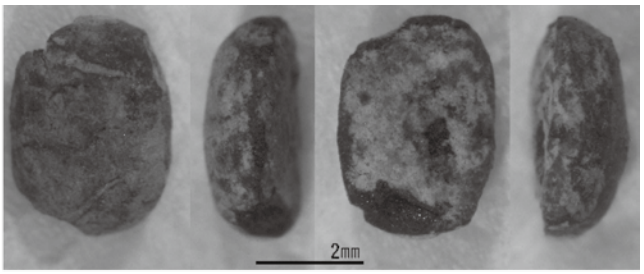
ｽｽﾞﾒﾉｴﾝﾄﾞｳ近似種：種子
1号墳蓋坯



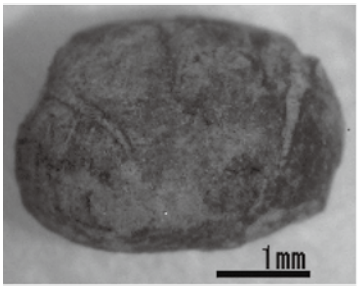
ササゲ属:炭化種子
SI06床面



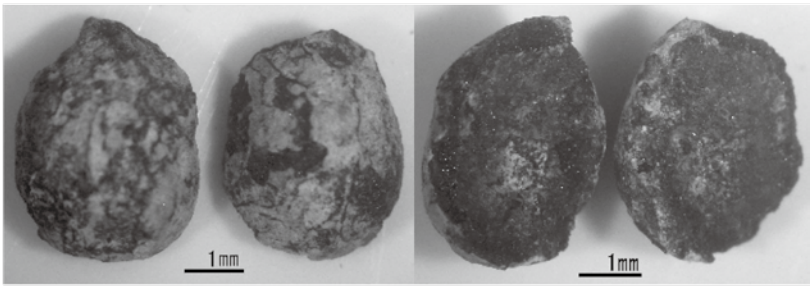
ササゲ属:炭化種子
SI06床面



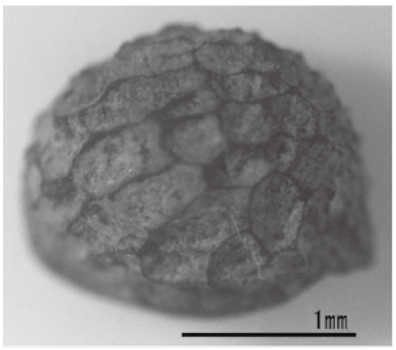
マメ科:炭化種子
SI06P425



マメ科:炭化種子
SI06床面

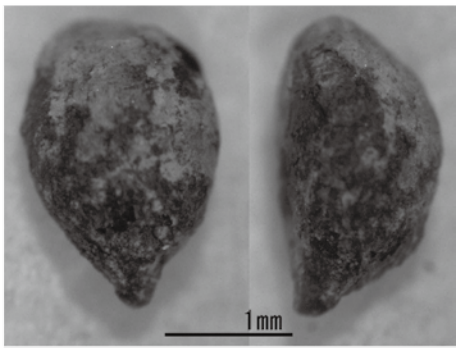


マメ科:炭化種子
SI06床面

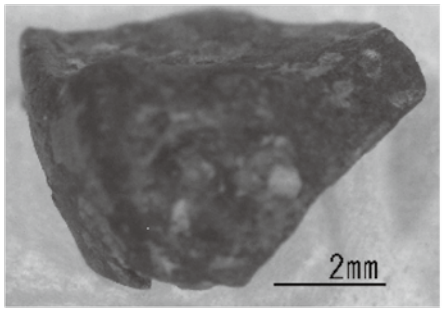


カラスザンショウ:炭化内果皮
SI06P425

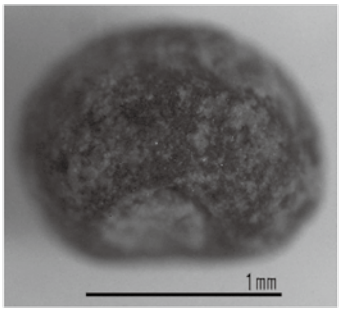
ウルシ属:炭化内果皮
SI14中央ﾋﾟｯﾄ6層



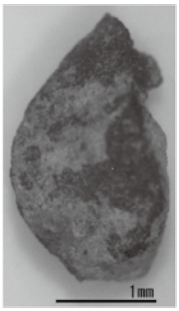
ブドウ属:炭化種子
SI06P425



ツバキ属:炭化種子
SI13埋土



ヤエムグラ属:炭化種子
SI10埋土2層



ｶﾎﾞﾁｬ仲間類似
:炭化種子
SI10埋土2層

ｶﾎﾞﾁｬ仲間類似
:炭化種子
SI10P561

第３節　堂ノ上遺跡で出土した土器に付着した赤色顔料について

1. はじめに

堂ノ上遺跡から出土した弥生土器（61 図 -12）は、底部が残存している甕もしくは壺であり、肉眼観察と顕微鏡観察によって、底部内面に粒状の赤色物質が付着しており、断面にも染み込むように付着している様子が窺えた。よって、赤色物質は赤色顔料であると推測した。赤色顔料には硫化第二水銀 (HgS) を主成分とする水銀朱、酸化第二鉄 (Fe2O3) を主成分とするベンガラ、四酸化三鉛 (Pb3O4) を主成分とする鉛丹があるが、出土した土器の形式や年代から水銀朱かベンガラの使用が想定される。赤色顔料の主成分を調べることによって、その土器がどのような性格を持つかが推測可能である。したがって、蛍光 X 線分析による元素定性分析を行なった。

2. 分析箇所と測定条件

分析箇所は赤色顔料の付着している土器内面・断面と赤色顔料の付着していない土器外面胎土である。

使用機器は島根県古代文化センター設置の「エスアイアイ・ナノテクノロジー社製　SEA1200VX 卓上型蛍光 X 線分析計（エネルギー分散型）」である。

測定条件は以下のとおりである。

測定時間：60 ～ 100 秒（うち、有効時間は 38 ～ 71 秒）

試料室雰囲気：大気／真空

コリメータ（分析範囲）：直径 8.0㎜

励起電圧・電流：試料室雰囲気大気の場合：40kv・463 ～ 592 μ A

試料室雰囲気真空の場合：15kv・30 ～ 62 μ A

ピーキングタイム：8.0usec.

3. 結果と考察

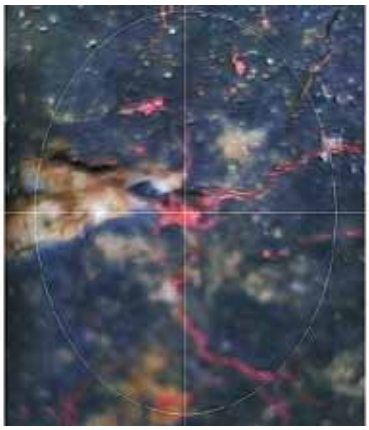
赤色顔料の付着している土器内面・断面からは主に Fe（鉄）、Hg（水銀）、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、S（硫黄）、K（カリウム）、Ti（チタン）の蛍光 X 線スペクトルピーク（以下、ピーク）を検出した。このうち、赤色顔料に由来すると考えられるものは Fe 、Hg、S であり、それ以外は土器胎土に由来するものと考えられる。鉛丹の主成分である Pb(鉛)が検出されなかったため、付着している赤色顔料はベンガラか水銀朱であることがいえる。そこでこの赤色顔料がベンガラか水銀朱かを判定するため、土器胎土の分析を行なったところ、K（カリウム）、Ti（チタン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Rh（ロジウム）、Pd（パラジウム）のピークを検出した。特に Fe は高いピークを示しており、胎土に鉄分が多く含まれているか、胎土表面に鉄分が付着していることが考えられる。したがって、赤色顔料部分から検出された Fe は赤色顔料に由来するものではなく、土器胎土、あるいは赤色顔料部分も含めた土器全体の表面に付着した鉄分に由来するものであり、この赤色顔料は水銀朱（硫化第二水銀；HgS）であると考えられる。

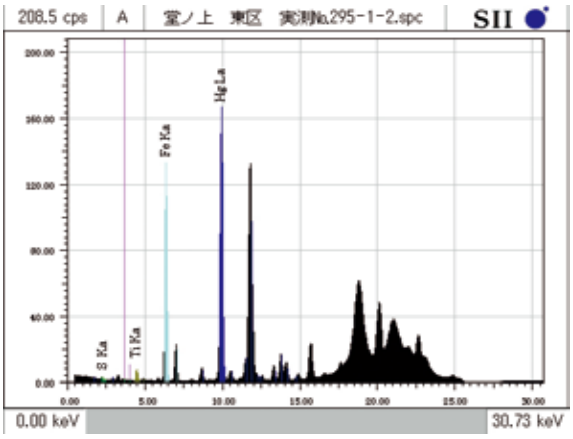
赤色顔料としての水銀朱の利用は縄文時代後期には開始され、島根県内の遺跡でも水銀朱で彩色が施された縄文土器や土製耳飾りが出土している。弥生時代に入ると、島根県内の遺跡では水銀朱の使用はやや下火になるが、後期から再び水銀朱の使用が盛んになっていく。
水銀朱は辰砂（硫化第二水銀；HgS）という鉱物を石杵で砕いてすり潰し、粒を揃えることによって作られる。したがって、内面に水銀朱が付着している土器は装飾としての塗彩のほかにも水銀朱の生産や加工、使用に利用されたものと考えられる。しかし、辰砂は主に水銀鉱床で産出し、島根県をはじめ山陰地域には大規模な水銀鉱床は現在のところ見当たらない。また、堂ノ上遺跡では水銀朱の付着した石杵が見つかっていない。これらのことより、原材料として辰砂が外部地域から持ち込まれ、堂ノ上遺跡で水銀朱の製造が行なわれたというよりは、製品としての水銀朱が搬入されて、使用に際して何らかの加工や調製が行なわれていた可能性が高く、61 図 -12 は甕、もしくは壺の形状をしていたと考えられることから、水銀朱を貯蔵していた容器であると考えられる。

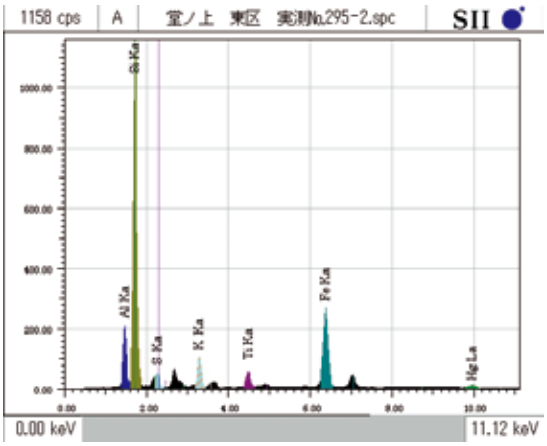
市毛勲　　1998 『新版　朱の考古学』雄山閣
本田光子　2008 「古代の赤」『日本文化財科学会会報第 57 号』日本文化財科学会
本田光子　1987 「墳墓出土の赤色顔料小考」『肥後考古第 6 号』
本田光子　1995 「古墳時代の赤色顔料」
『考古学と自然科学第 31・32 号』日本文化財科学会
中井泉編・日本分析学会 X 線分析研究懇談会監修 2005『蛍光 X 線分析の実際』朝倉書店
柴崎晶子　2009 「出雲圏域における赤色顔料の使用について」『島根考古学会誌』第 26 集
矢嶋澄策　1958 「日本の水銀鉱床」『鈴木醇教授還暦記念論文集』早稲田大学
出雲弥生の森博物館　平成 22 年夏季開館特別展図録 『弥生人の彩エンス - 出雲王が愛した色』

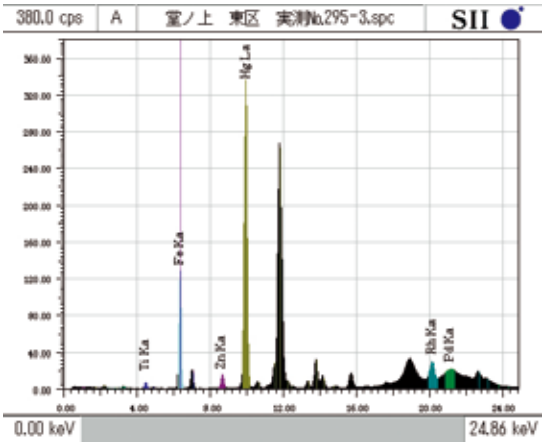
分析箇所と蛍光Ｘ線スペクトルデータ

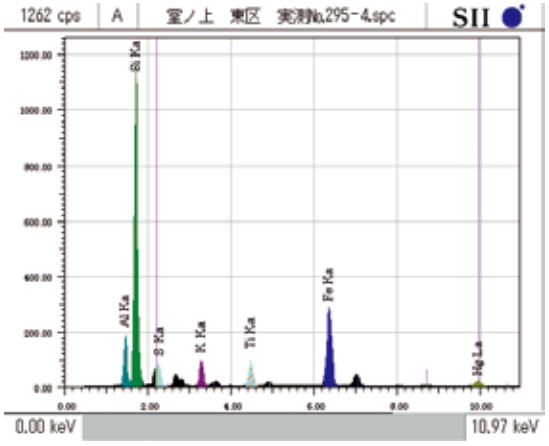
土器内面

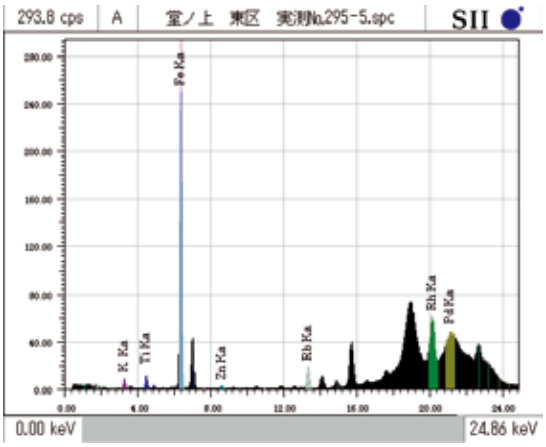







380.0 cps
A
室ノ上 東区 実測No.295-3.spc
SII
Ti Ka
Fe Ka
Zn Ka
Mg La
Rb Ka
Pd Ka
0.00 keV
24.86 keV


1262 cps
A
室ノ上 東区 実測No.295-4.spc
SII
Si Ka
Al Ka
S Ka
K Ka
Ti Ka
Fe Ka
Mg La
0.00 keV
10.97 keV


293.8 cps
A
室ノ上 東区 実測No.295-5.spc
SII
Fe Ka
K Ka
Ti Ka
Zn Ka
Rb Ka
Rb Ka
Pd Ka
0.00 keV
24.86 keV

第５章　総括

第１節　堂ノ上遺跡における人々の活動

堂ノ上遺跡は、平成 19 年度に県道久城インター線工事に伴う発掘調査を実施して以来、３年間で 9,000㎡以上の面積を発掘調査した。その結果、時代ごとに粗密があるものの、縄文時代から近世に至る様々な遺構・遺物を確認することができた。本節では各時代における人々の活動の変遷を概観する。

１．縄文時代

堂ノ上遺跡における人々の活動の痕跡は古く、調査区中央北側の谷で、草創期と考えられる安山岩製の有茎尖頭器が１点出土している。一方、その後は、縄文時代の遺構は確認されておらず、遺物も石器数点のほか、中央の谷斜面から縄文時代晩期の粗製深鉢が出土した程度である。遺物の出土状況をみると、全て中央北側の谷の斜面である。

堂ノ上遺跡と同じ久城町の台地上に位置する若葉台遺跡で、縄文時代中期後葉から後期前葉の落とし穴が、久城西Ⅱ遺跡では旧石器時代末から縄文時代草創期の尖頭器が出土している。この台地では縄文時代の早い段階から人々の活動が行われており、堂ノ上遺跡もその範囲内にあったことが分かる。

２．弥生時代

堂ノ上遺跡の台地上に人々が移り住み、本格的に定住が始まるのは弥生時代中期末から後期初頭頃からである。その後、後期の前葉以降は確認された住居の数が増加し、中期後葉の土器が出土した住居を中心に竪穴住居群が台地上に展開していった様子が分かる。竪穴住居跡の分布には

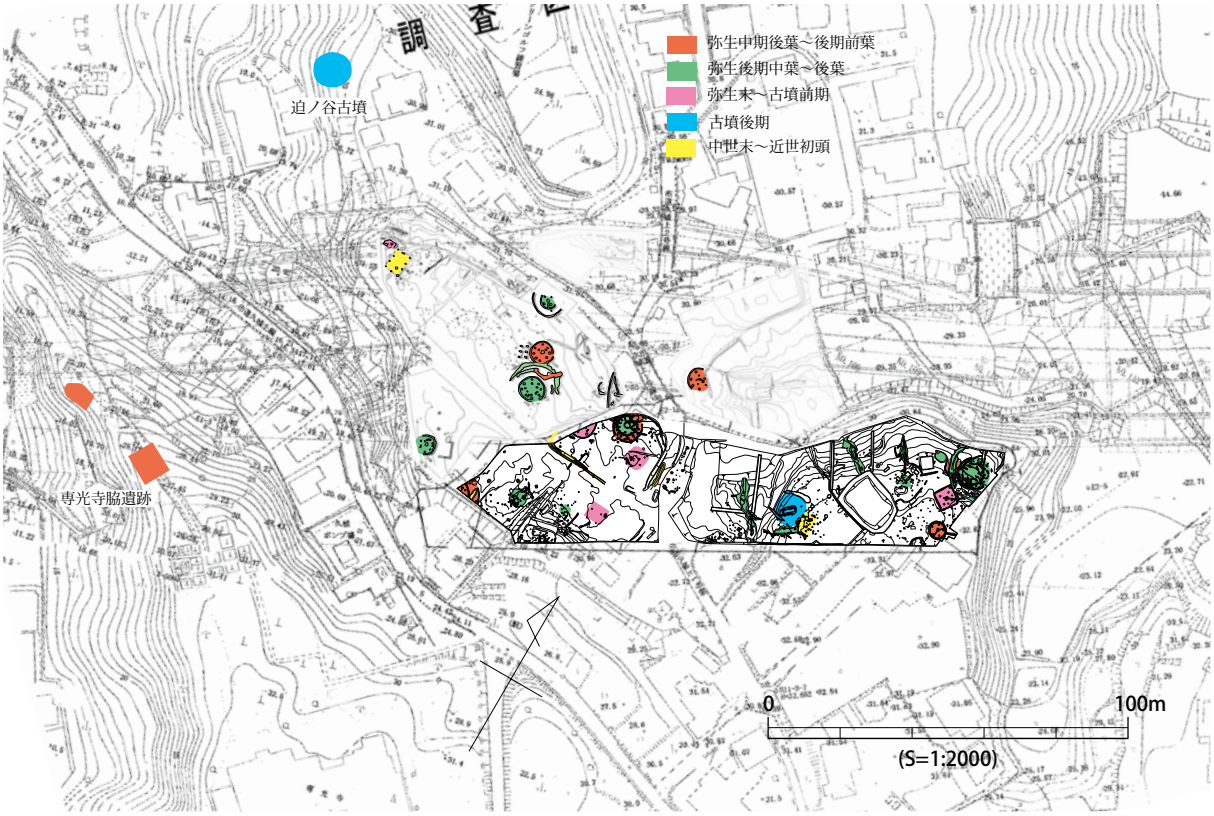


図 100.　堂ノ上遺跡と周辺の遺跡で検出された各時代の遺構

まとまりがあり、台地上の緩斜面から傾斜が急になる地形の変換点に建てられている。堂ノ上遺跡で定住が始まった頃、南西側の谷を挟んだ隣の丘陵尾根に位置する専光寺脇遺跡で、貼り石墓や土坑墓群が造られている。墓に伴う遺物がほとんど無いため詳しい時期などは不明だが、それぞれの立地から、堂ノ上遺跡の人々に関係した墓であることは間違いないと言える。

また、標高 30 m以上の台地上で営まれた集落だが、調査区内で複数の自然流路が確認されており、水の確保は問題なかったとみられる。自然流路が確認された東区谷部では、後期全般の土器が多数出土し、中でも水銀朱を貯蔵した中期末から後期前葉頃の壺または鉢の底部が注目される。このことから、弥生時代の集落跡が調査区の南東側へ広がっていることはほぼ確実である。

そのほか、集落の構造や出土した遺物の詳細については次節で記述する。

３．古墳時代

古墳時代前期の建物跡が 2 棟確認されている。後世の開発で遺構の残存状態は良くなかったが、竪穴住居跡とみられる。このうち 1 棟は弥生時代の竪穴住居跡が確認されていない台地の西端に位置している。遺物は調査区の広い範囲で出土したが、弥生時代に比べると出土量が大きく減少する。このことから、弥生時代から引き続き集落が存続していたことと、台地上の居住域が次第に移動していった状況が考えられる。その後、古墳時代中期前半までの土器がわずかに出土しているが、集落の中心となる竪穴住居跡や掘立柱建物跡は確認されていない。弥生時代中期末から約 300 年間続いた集落の人々は、遺跡の所在する台地の上から完全に移動したと考えられる。

その後、堂ノ上遺跡の台地上で遺構が確認されるのは、古墳時代後期の横穴式石室を持つ 1 号墳である。後期の遺物は、須恵器の坏類や壺・甕類のみ出土し、土師器の甕・甑・カマドが出土しなかった。今回の調査区の西端からさらに 40 m西の丘陵南側斜面には、後期古墳群である迫ノ谷古墳群 (1) が所在する。また、専光寺脇遺跡と隣接する墓地周辺にも後期古墳があったとされ (2)、益田道路建設に伴う近年の発掘調査で須恵器の蓋坏や壺が出土している。このように、堂ノ上遺跡周辺は、古墳時代後期には集落の居住域から墓域へ土地の利用が変化したと考えられる。

４．奈良時代

奈良時代の遺構は、台地の西端で区画溝が確認されたのみで、遺物も須恵器の蓋坏や壺が各調査区で数点出土したのみである。このように、堂ノ上遺跡の台地は人々の活動の範囲内ではあるが、集落の中心からは外れていたと考えられる。

５．中世以降

今回の調査では、白磁や青磁、16 世紀代の肥前陶器など、中世の遺物も出土しているので、詳しい時期の判断できなかった建物跡や柱穴、土坑などで中世の遺構が存在する可能性もある。また、17 世紀頃と考えられる掘立柱建物跡が、調査区の東西で複数確認されている。各調査区で 17 世紀初め頃の陶磁器の食器や調理具、貯蔵具などが一通り出土し、この頃から遺跡の東側で墓が造られ始めているので、再び台地上に集落が営まれたことは明らかである。さらに、遺跡の中央部では、方位に合わせて掘られた区画溝が確認されており、整備された集落景観をうかがわせる。

第２節　堂ノ上遺跡の弥生集落

今回の発掘調査では、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけて、継続して営まれた集落の居住域が確認された。当該期の発掘調査資料が少ない石見地方において、一遺跡で検出された確実に継続性のある遺構・遺物の変遷を整理することは必要な作業と考えられる。また、堂ノ上遺跡の周辺では、今回確認された居住域と関連すると考えられる弥生時代の生産域や墓域が確認されている。そこで、本節で今回の調査で最も成果のあった弥生集落について検討を行う。

１．住居跡の変遷

今回検出された竪穴住居跡の、時期ごとの変遷と共通する特徴をまとめると以下のようになる。

1) 中期末～後期後葉の竪穴住居跡（図 102・103）

床面は円形で、壁体溝内側の径は、小型の住居が４ｍ前後、一般的な住居が６ｍ前後、後期前葉から中葉見られる大型の住居は８～９ｍである。主柱穴は４基のものと５基以上の柱穴が多角形に配置されるものと大きく二つに分かれるが、いずれも住居の壁に近い位置に設けられている。大型の住居では、８～９基の多数の柱が２ｍ前後の短い間隔で配置される。壁体溝の床面で小ピットや小型の石が連続して検出されるものもある。住居の２～３ｍ外側に周堤の外周溝が掘られる。

2) 後期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡（図 103）

後期末には床面が楕円形の住居が見られる。このよう住居は石見地方では山間部に例がある[(3)]。一方で、県内でこの時期に多く見られる床面が隅丸方形の住居は見られなかった。その後、古墳

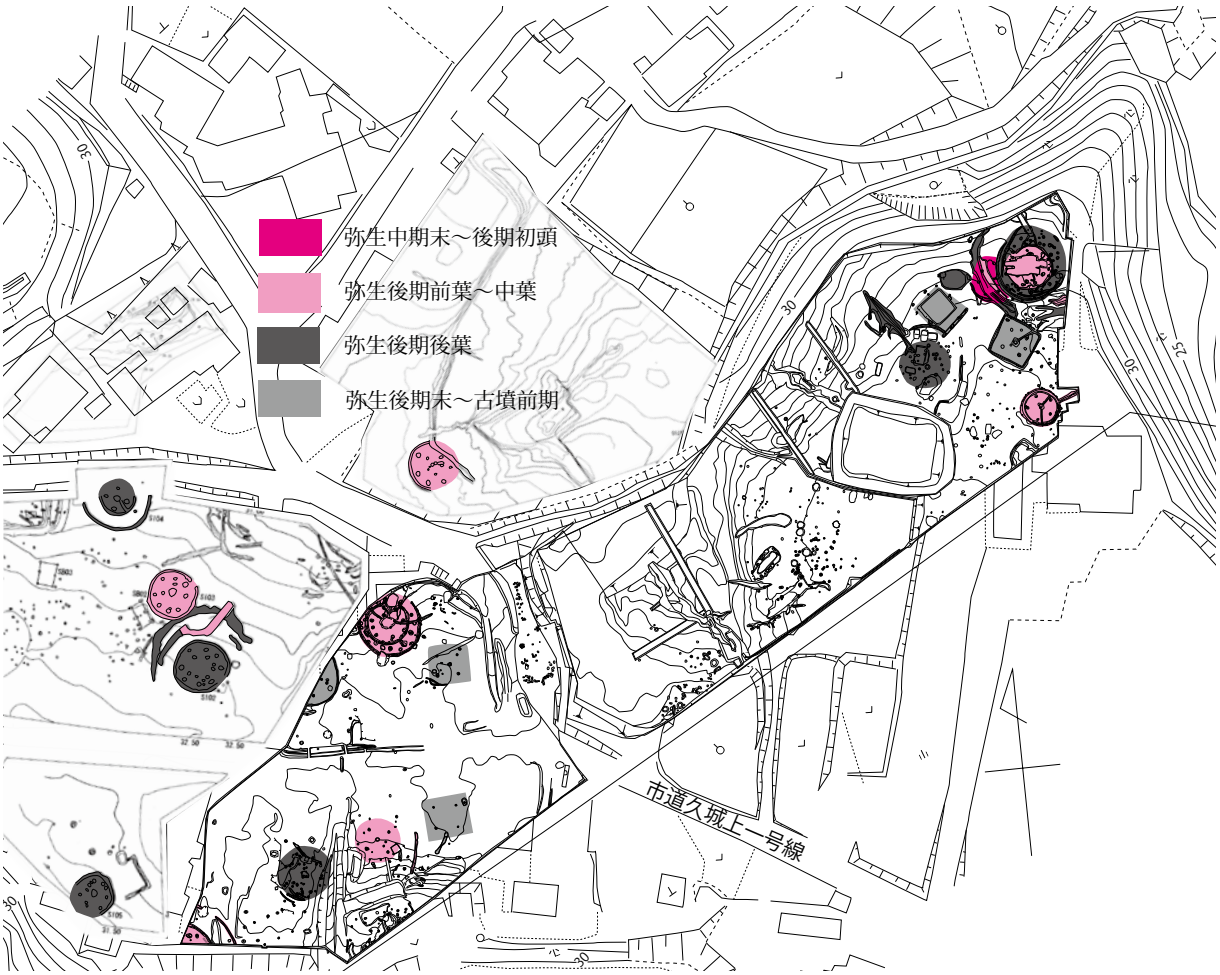


図 101.　堂ノ上遺跡の弥生時代集落の変遷

時代初頭にかけて住居の床面は方形に、主柱穴の数は４本になり規格性が高くなる。主柱穴の位置は、それまでの壁際から内側に寄り、床面を４等分した中の中央付近に設けられる。SI11 は、中央ピットが床面の中央からややずれた位置に設けられている。建物が方位に合わせて建てられている点も続く古墳時代前期の建物に近い特徴である。

3) 古墳時代前期の住居跡

SB04 では、４本の主柱で囲まれた範囲の外側に炉跡が移動している。また、同じく古墳時代前期の竪穴住居跡と見られる加工段７と SB04 は方位に合わせて建てられており、それまでの円形の竪穴住居と異なり、向き認識できる外観だった可能性がある。なお、益田道路建設に伴って発掘調査を行った、同じ久城町内の若葉台遺跡、久城西Ⅰ遺跡では、主柱が２本の古墳時代中期の竪穴住居跡が検出されている。堂ノ上遺跡では主柱が２本の建物跡は確認しておらず、古墳時代前期までは弥生時代同様に主柱４本の建物が主流だった可能性が考えられる。

4) その他の特徴

堂ノ上遺跡で検出した弥生時代の竪穴住居跡は、県東部や中部で検出された同時期の竪穴住居に比べて、いずれも壁体溝の幅が 30 ～ 50㎝と広かった。また、壁体溝を切って調査区外に伸びる排水溝が付属する住居跡が少なくとも３棟確認されている。床面の中央ピットは 15 ～ 25㎝と浅く、中央ピットの中や隣接する位置で、径 20㎝程度の小ピットが検出された住居が多い。この小ピットの機能については不明だが、住居のほぼ中心に位置している点が注目される。また、同じ久城町内の久城西Ⅰ遺跡で調査された竪穴住居跡でも同様の小ピットが確認されている。

２．各時期の土器の特徴

石見地方の弥生土器の編年については、文献３で示されており、本遺跡の弥生土器の年代観は巻頭の凡例で示したとおりこの編年に従っている。しかし、この編年が製作された時点では資料数が少なく、各地域の土器の変遷を反映しきれていなかった[(4)]。今回の調査では竪穴住居跡から一括して出土した遺物があり、益田地域の弥生土器を検討する上で貴重な資料を得ることができた。以下、今回の資料から得た主な知見を記述する。

1) 中期末から後期初頭の土器

今回の調査では、Ⅳ -2 様式からⅤ -1 様式にかけて、既存の松本編年では中間形態的で分類が困難なものや、編年に現れない器形が出土している。SI15 出土資料（図 10）がこの一括資料で、集落における弥生土器の使用実態を示す資料と言える。

(2) 後期前葉から中葉の土器

Ⅴ -2 様式以降は二枚貝腹縁によって、口縁外面と頸部下に文様が施されるものが多い。頸部の施文はⅤ -1・2 様式とも頸部と肩の高い位置に施され、山陰東部の土器と比べるとかなり高い位置と言える。また、貝殻腹縁による粗いハケ調整が施されるものも一定量みられる。

山口大学田畑氏による周防系土器の指導状況

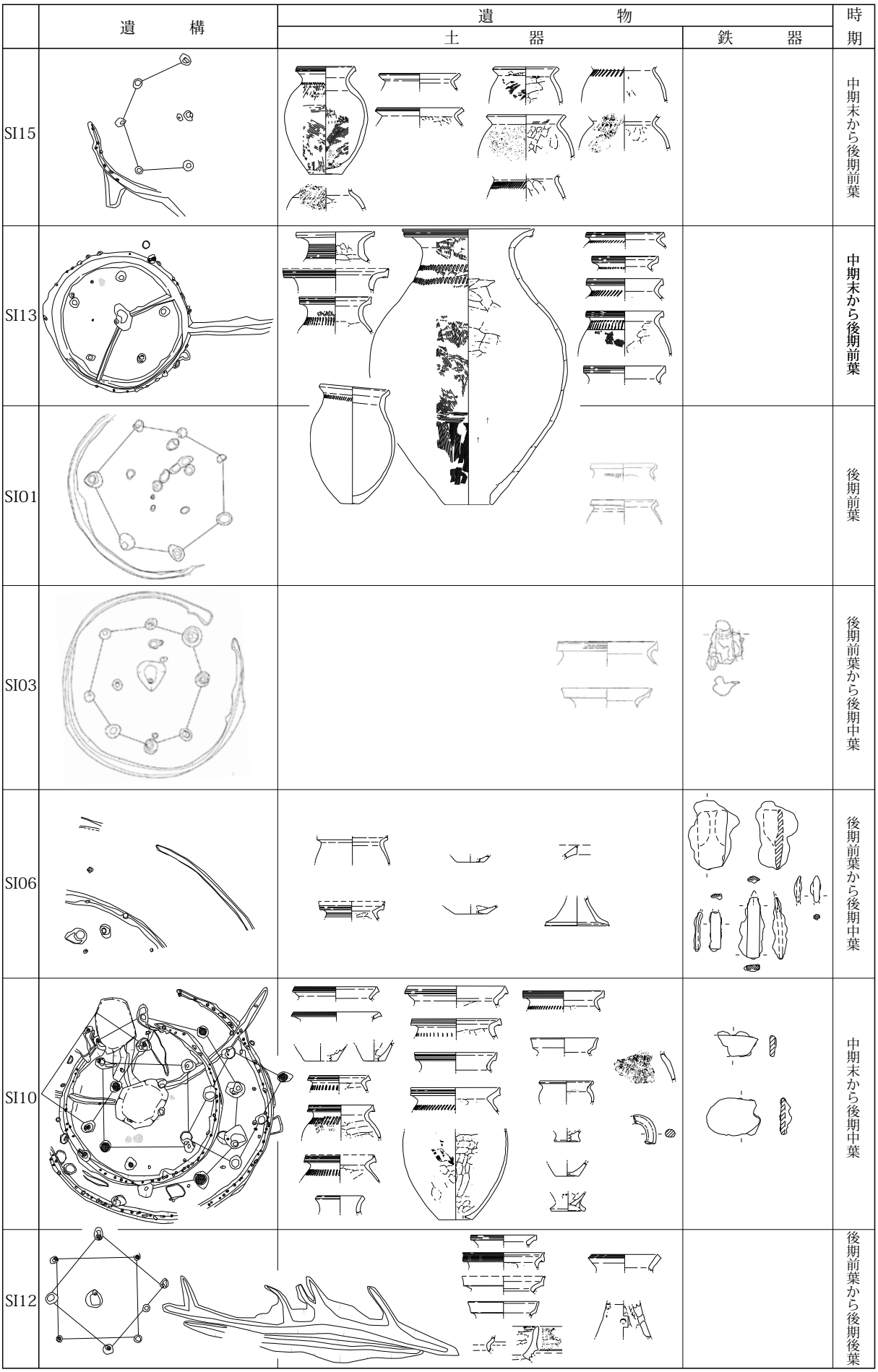


図 102.　堂ノ上遺跡の竪穴住居跡と出土遺物 (1)
（遺構：S=1/200、土器：S=1/12、鉄器：S=1/6）

	遺　構	遺物 土器	遺物 鉄器	時期
SI02				後期中葉から後期後葉
SI16				後期前葉から後期後葉
SI05				後期中葉から後期後葉
SI04				後期後葉
SI07				古墳時代前期
SI14				弥生時代終末から古墳時代初頭
SB04				古墳時代前期

図 103.　堂ノ上遺跡の竪穴住居跡と出土遺物 (2)
（遺構：S=1/200、土器：S=1/12、鉄器：S=1/6）

(3) 後期後葉から終末期の土器

Ⅴ -3 様式の土器はほぼ浜田市以東と同様であるが、Ⅴ -4 様式から古墳時代初頭の土師器では違いが明確化する。所謂山陰系の土器に、畿内系と周防系の土器が加わり、SI14 では山陰系の土器より個体数が多くなる。今回周防系とした土器は主なものについては山口大学の田畑氏の指導を受けて判断しているが、島根県と山口県の年代観に若干ずれがあり、今後遺跡周辺で出土した同様の資料も合わせて、より詳しい時期や系譜を検討する必要がある。なお、同じ益田市内の集落遺跡出土資料でも、高津川流域の資料については山口県との関係が注目されてきたが、堂ノ上遺跡の弥生土器については、終末期まではほぼ浜田市以東に近い状況だった。

３．焼失住居と建物廃棄時の祭祀について

堂ノ上遺跡では、弥生時代中期末から古墳時代前期の竪穴住居跡と竪穴住居の可能性のある建物跡を 18 棟確認した。このうち 10 棟が所謂焼失住居と判断した。このうち保存状態の良好だった SI13 では、第３章３節で記述したように様々な知見を得ることができた。その結果、他の住居跡についても改めて検討し直すことができたので、その主な点を以下に記述する。

近年石見地方の弥生時代の竪穴住居も、他の山陰地方同様土葺き屋根だったと考えられているが、SI13 でも炭化した建築材の上から大量の焼土が出土した。この焼土塊は住居の中央部分で特にまとまって出土しており、SI02・03 も同様の状況だった。また、本遺跡の焼失住居では主柱穴を結ぶ線に直行する方向で垂木が検出されている。これは柱の本数に関係が無いようで、浜田市道休畑遺跡竪穴住居 4 の例でも同様だった。

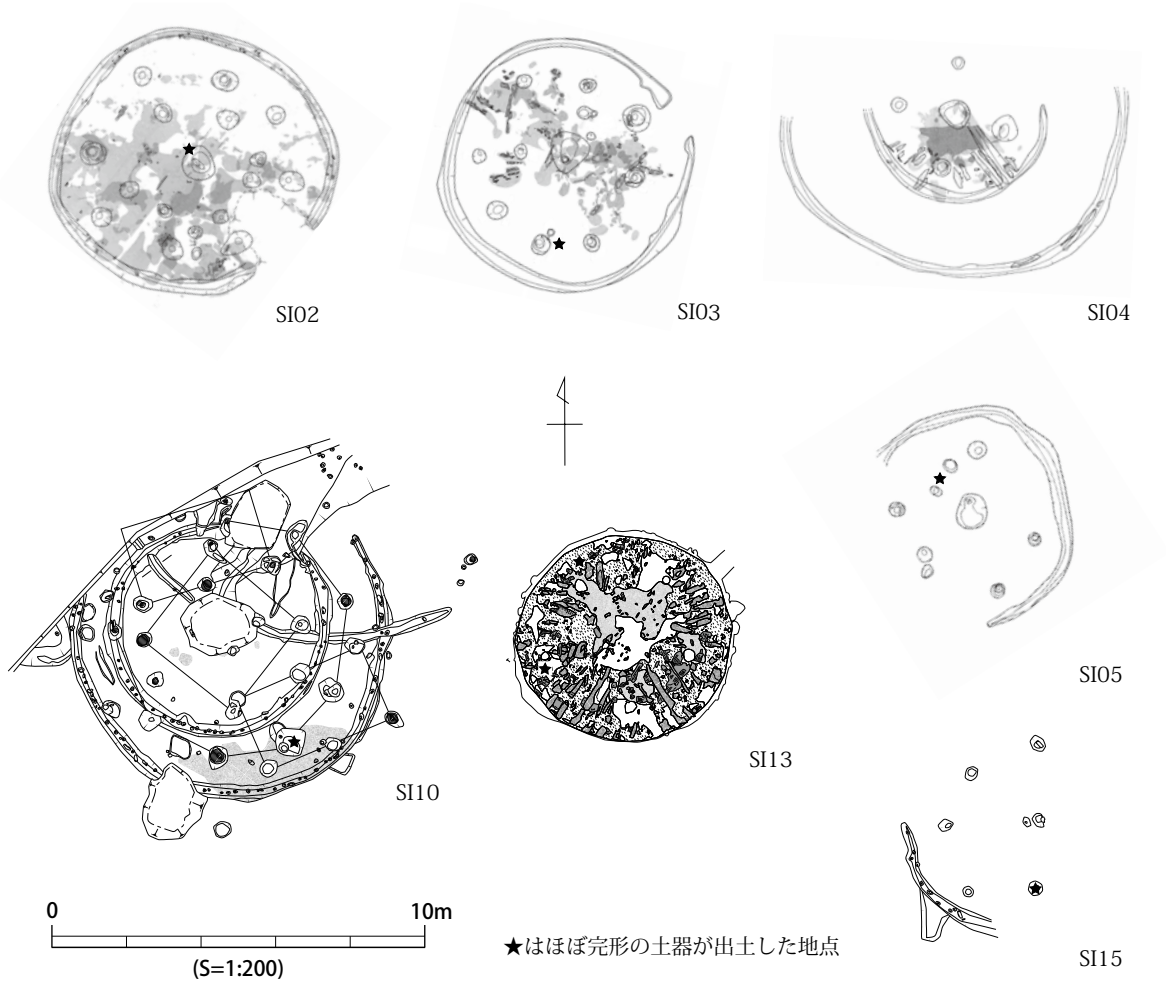


図 104.　堂ノ上遺跡で検出された主な竪穴住居跡

さらに、各住居の主柱穴の土層断面から、柱抜き取り後に住居の焼却を行っていることが明らかである。これに関係して、焼失住居の特定の主柱穴付近で完形やほぼ完形に近い土器が出土することから、住居廃絶時に柱の近くで何らかの祀りを行い、土器が置かれたと考えられる。全ての柱でないことを考えると、先の柱抜き取り時に特定の柱について行われたと推測される。主な住居跡と柱の位置を見ると、住居内で最も南よりの主柱付近に置く例（SI03・10・13・15・16）が多いが、最も北（SI05）・中央ピット（小ピット）の例（SI02）もある。置かれる土器は、古い時期は壺だが、甕や鉢も使われており、底部を意図的に欠くものが見られる。参考に道休畑遺跡の竪穴住居７（弥生終末期）の例を見ると、最も南の主柱穴の傍に壺を置いている。こうした土器の出土状況が実際に祭祀に関わるものか、具体的にはどのような行為が行われた可能性があるのかなど、今後は堂ノ上遺跡近隣の他の遺跡の例や、民俗例も含めて調査していく必要がある。

4. 集落の構造について

これまで堂ノ上遺跡で確認された各遺構・遺物について検討してきたが、次に同時期に存在した建物の状況について検討してみる。竪穴住居は遺構内から出土した土器と住居跡同士の切り合い関係から、基本的に２・３棟が 10 ～ 20 mの間隔を開けて建てられ、これに倉庫と見られる１×２間の掘立柱建物が加わって一つの単位を構成していたと考えられる。これらの住居には、何度も同じ場所で建て替えを繰り返して存続し、時に非常に大型化する中核的な住居と、建て替えが行われず、土器形式で１形式程度しか存続しない住居が存在する。いわば本家と分家とも言える関係で、鉄器が出土したのはこの中核的な住居（SI03・06・10・16）のみだった。さらに、調査区内ではその単位が、50 m前後の間隔で３～４個存在している。こうした単位が集まって一つの集落を構成していたと考えられるが、堂ノ上遺跡周辺の広い台地に対し調査範囲が限られているため一集落を構成する単位数は不明である。しかし、周辺の地形から推測すると、調査区の四方に集落が広がっていた可能性が高いと考えられる。

堂ノ上遺跡周辺では竪穴住居群と同時期の生産域、墓域が確認されているので、集落の全体像を考えることが可能である（第２章第２節歴史的環境及び図３参照）。まず、生活の拠点である住居と倉庫は、益田川を東岸の台地上に集まっている。益田川に近い沖手遺跡の下層で弥生時代中期中葉の壺が出土した農耕用の排水路が検出されており、生産の中心となる水田は台地の西側の平野部に造られていたと考えられる。住居跡は未確認だが、益田川東岸に人々が定住するのはこの頃まで遡る可能性がある。

また、竪穴住居群と水田の間には幅の細い丘陵があり、その先端に位置する専光寺脇遺跡で、弥生時代中期後葉頃の貼り石墓群が確認されている。水田開発の後、台地上に竪穴住居が建ち始める時期であり、この集落に関係する人物の墓であると考えられる。

一方、祭祀関係については、焼失住居で確認された建物廃棄に伴う祭祀以外ほとんど不明である。近隣の遺跡を見ても、青銅器や分銅型土製品など県内の他の地域で見られる弥生時代の祭祀は確認できない。この地域の弥生時代の祭祀の検討は今後の課題といえる。

以上、同時期の居住域・生産域・墓域を一体で確認できた点から、今回の一連の発掘調査は、石見地方の弥生集落遺跡の調査としては、特筆すべき成果があったと言える。

第３節　調査のまとめ

堂ノ上遺跡では、平成 19 年度から 21 年度にかけて国道及び県道建設予定地内で行われた発掘調査によって、縄文時代草創期から近世に至る多くの遺構・遺物が確認された。特に弥生時代後期を中心とする集落遺跡の調査成果は大きく、約 300 年間にわたる様々な形態の建物跡や遺物が見つかっており、1 遺跡で遺構や遺物の変遷を確認できる石見地方を代表する集落遺跡であることが明らかになった。

しかし、古墳時代前期以降は建物の数が徐々に減り、古墳時代中期になると集落の中心からはずれた状況になることも分かってきた。また、益田川東岸では縄文時代から弥生時代中期中葉までの集落の様子はほとんど分かっておらず、弥生時代中期後葉になって突如大規模に集落が広がった観がある。今回の調査で解明できなかった点、また新たに生じたこうした疑問点は、今後の課題といえよう。

また、東区で検出した横穴式石室を持つ 1 号墳の発掘調査は、益田市内の古墳の発掘調査としては平成 9 年の研石横穴墓以来であり、古墳の調査例が少ない石見西部の墓制を知る上で貴重な資料となった。

一方で、調査前の堂ノ上遺跡は、すでに丘陵を平坦に造成した宅地や畑地、溜め池、墓地で、遺跡の保存状態は必ずしも良好と思われなかった。事実、現代の宅地下ではコンクリートの基礎による旧地形の改変が著しかった。

しかし、旧地形が改変された部分についても、保存状態の良かった遺構を参考にし、バラバラで検出される柱穴や溝など遺構の部品を慎重に判断して組み合わせた。その結果、住居跡の変遷を確認できる、良好な弥生時代後期の集落遺跡が検出された。また、そのことによって遺跡周辺で確認された同時代の生産域や墓域と合わせて石見地方屈指の弥生集落資料を得ることができた。このように、過去に開発されて地形改変が行われた地域であっても、現在の大幅に蓄積された研究成果や調査技術によって、改めて入念な発掘調査を行うことで、地域の歴史を詳細に知ることができると言える。今後も事業者や関係者の理解のもと地道な発掘調査が行われ、地域の歴史が明らかにされていくことが望まれる。

注

1　文献２による。
2　同上
3　邑南町清源那遺跡 SI01、吉賀町前立山遺跡 SI11 等の例が確認されている。
4　編年製作者の松本氏に伺った。

参考文献

1　『史跡萩城跡（外堀）』　萩市建設部文化財保護課　2007 年
2　矢富熊一郎　『益田町史』上巻　1975 年
3　松本岩雄　「石見地域」『弥生土器の様式と編年　－山陰・山陽編－』　木耳社　1992 年
4　島根県教育委員会　『沖手遺跡－１区の調査－　一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３』　2007 年

写真図版

堂ノ上遺跡全景（各調査区の合成）

図版 2

堂ノ上遺跡　東区（北東から）

堂ノ上遺跡　西区全景（北から）

同上（西から）

図版 4

堂ノ上遺跡　東区全景（南東から）

同上（南西から）

SI13 炭化材・焼土検出状況（南西から）

同上　床面検出状況（南西から）

図版 6

SI13 床上炭化材検出状況（東から）

同上　西壁部分（北から）

SI13　北側壁体溝内
弥生土器（14-4）
出土状況

SI13　西側壁体溝内
弥生土器（15-5）
出土状況

SI13、SD103 土層断面

SI13　P 1065 柱穴掘方と柱抜き取り痕

SB04　P384 遺物・炭・焼土検出状況（北西から）

１号墳出土金属器

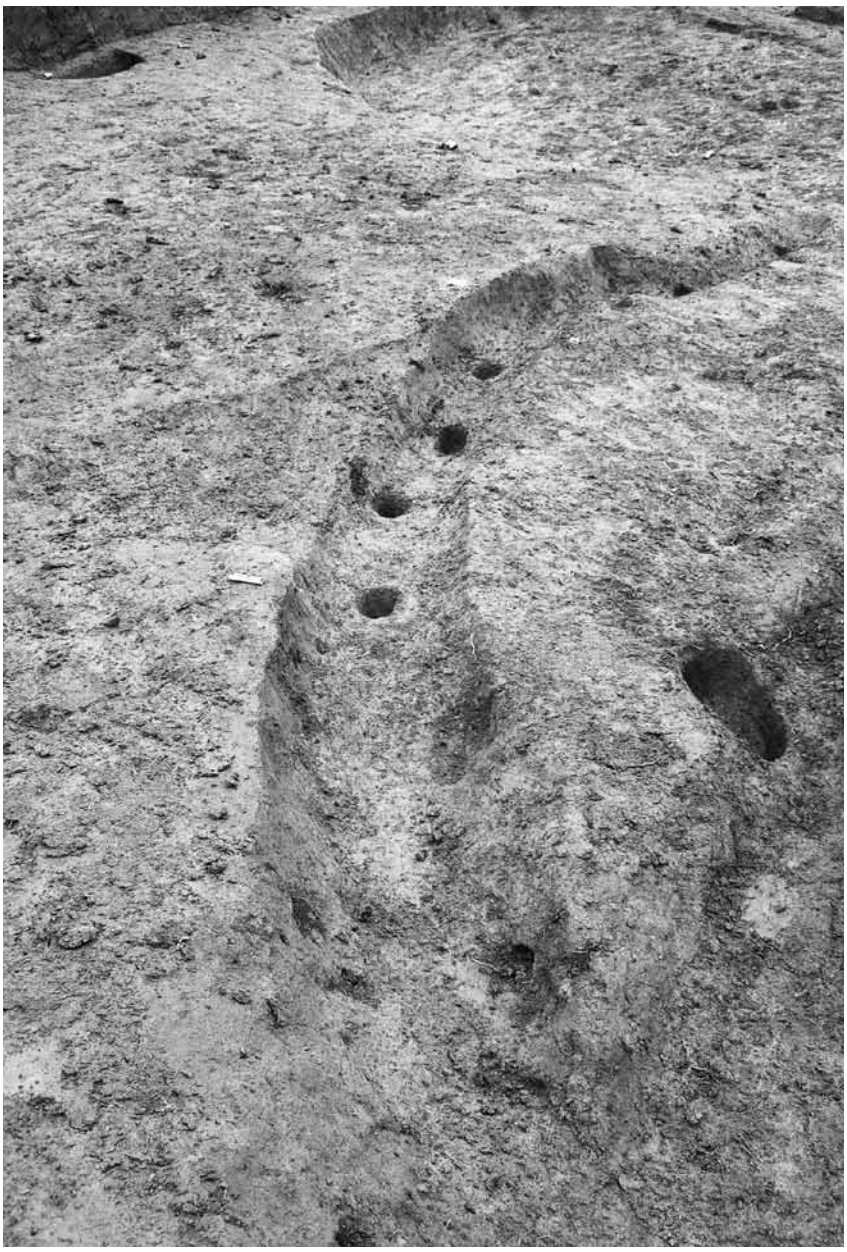
集石１出土ガラス玉

堂ノ上遺跡遠景（南から）

堂ノ上遺跡東区調査前（西から）

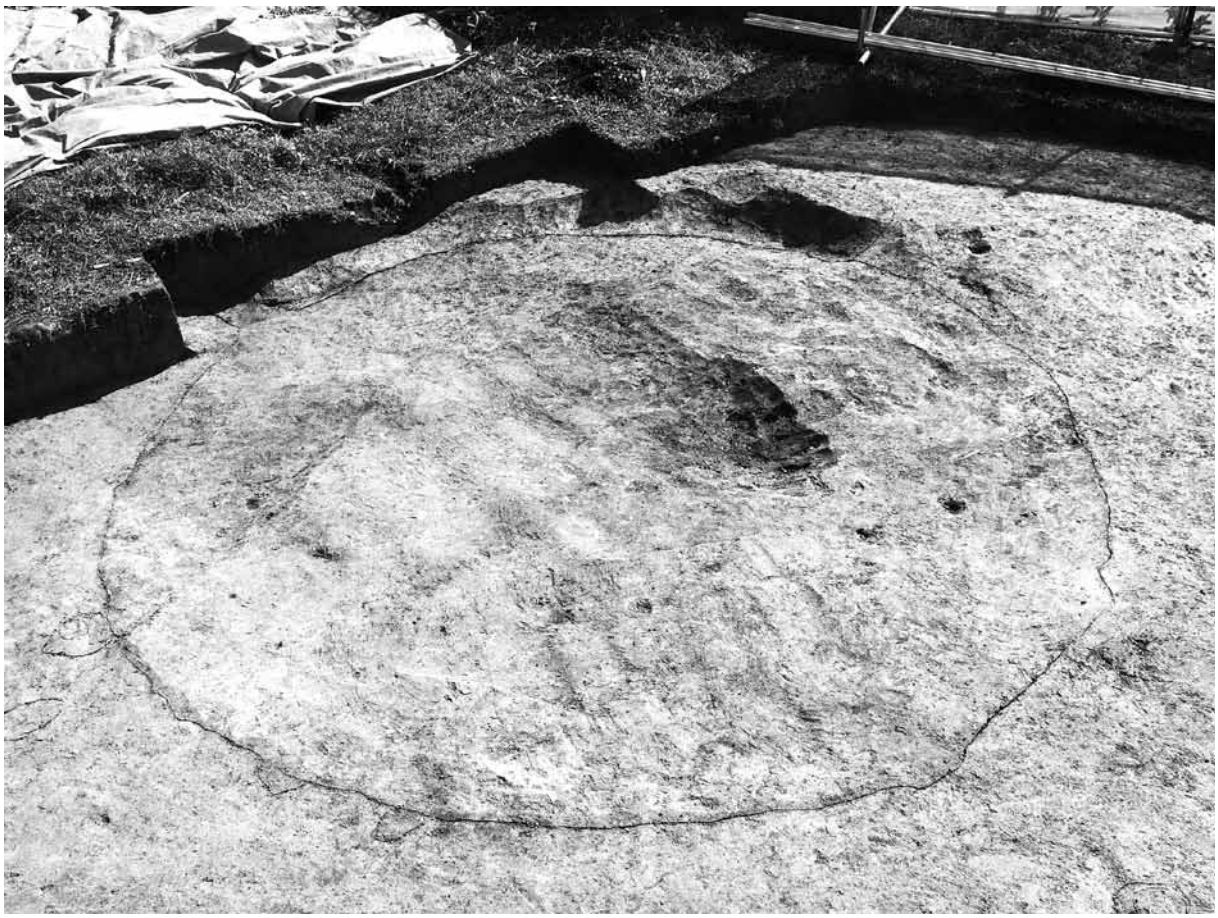
SI15（南から）
SD95（SI16 の外周溝）に切られる。写真右上が SI16

同上　（東から）　　写真右下の柱穴が P1040

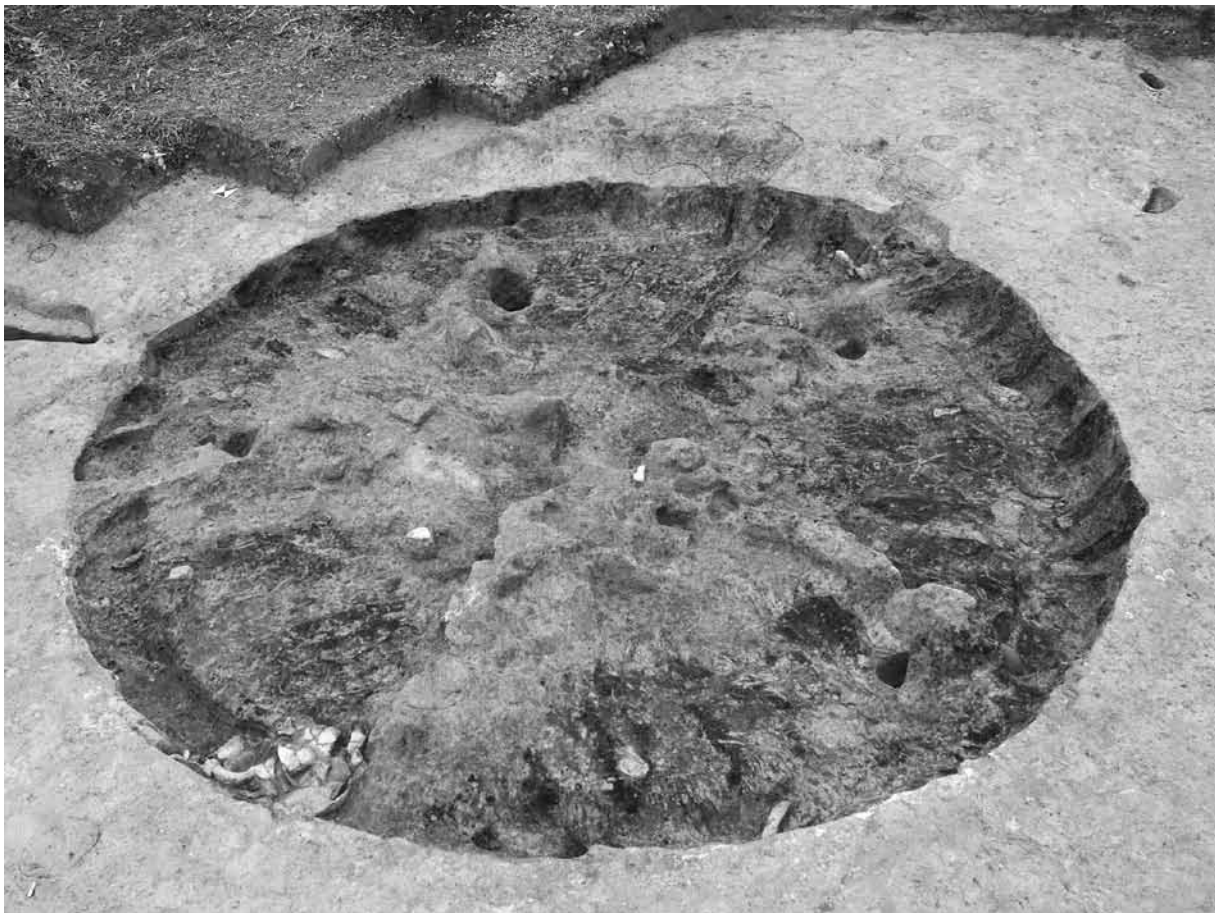


SI15 壁体溝（南東から）

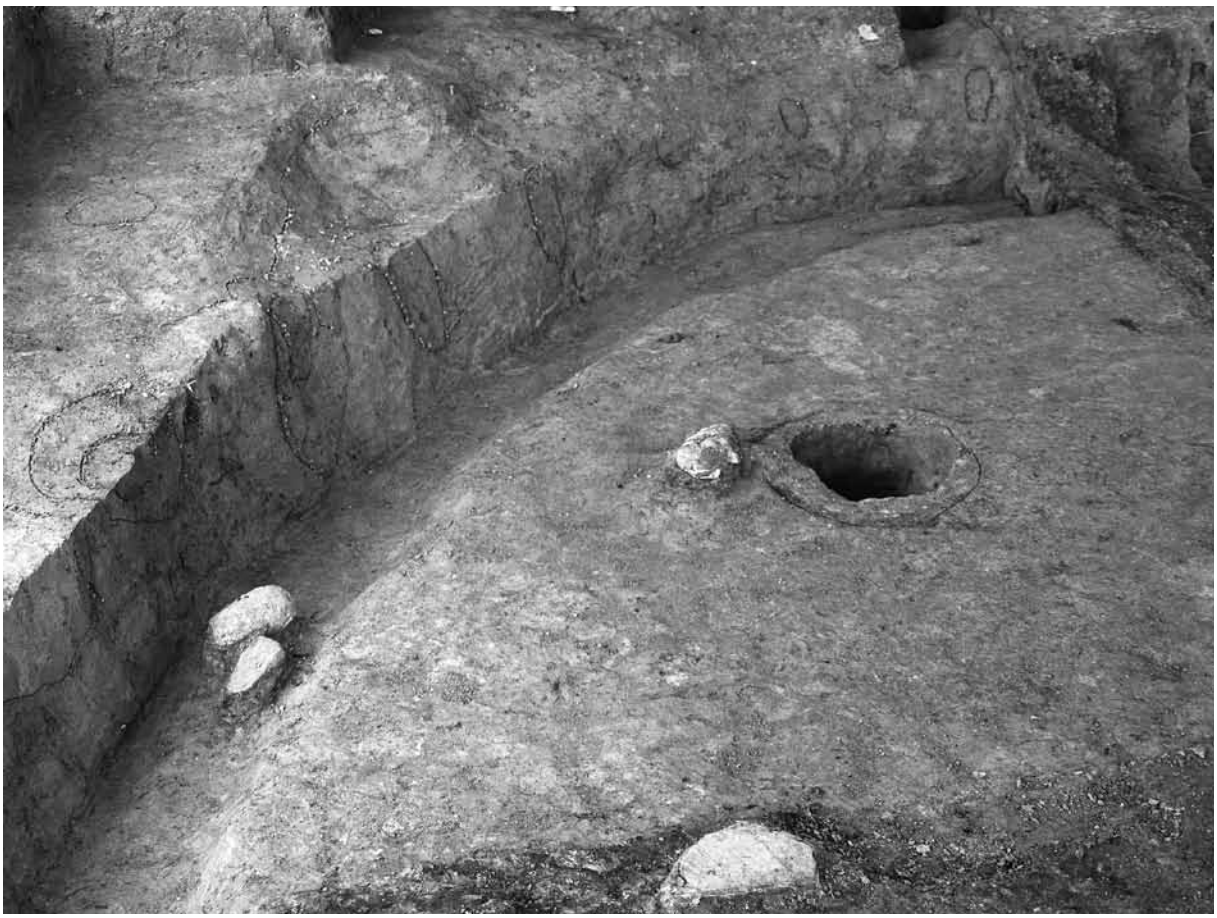
P1040 内
壺（10-1）出土状況



SI13　検出状況（北西から）



同上　炭化材・焼土検出状況（北西から）



SI13　南東壁面ピット検出状況（北から）

SI13　完掘後（北西から）

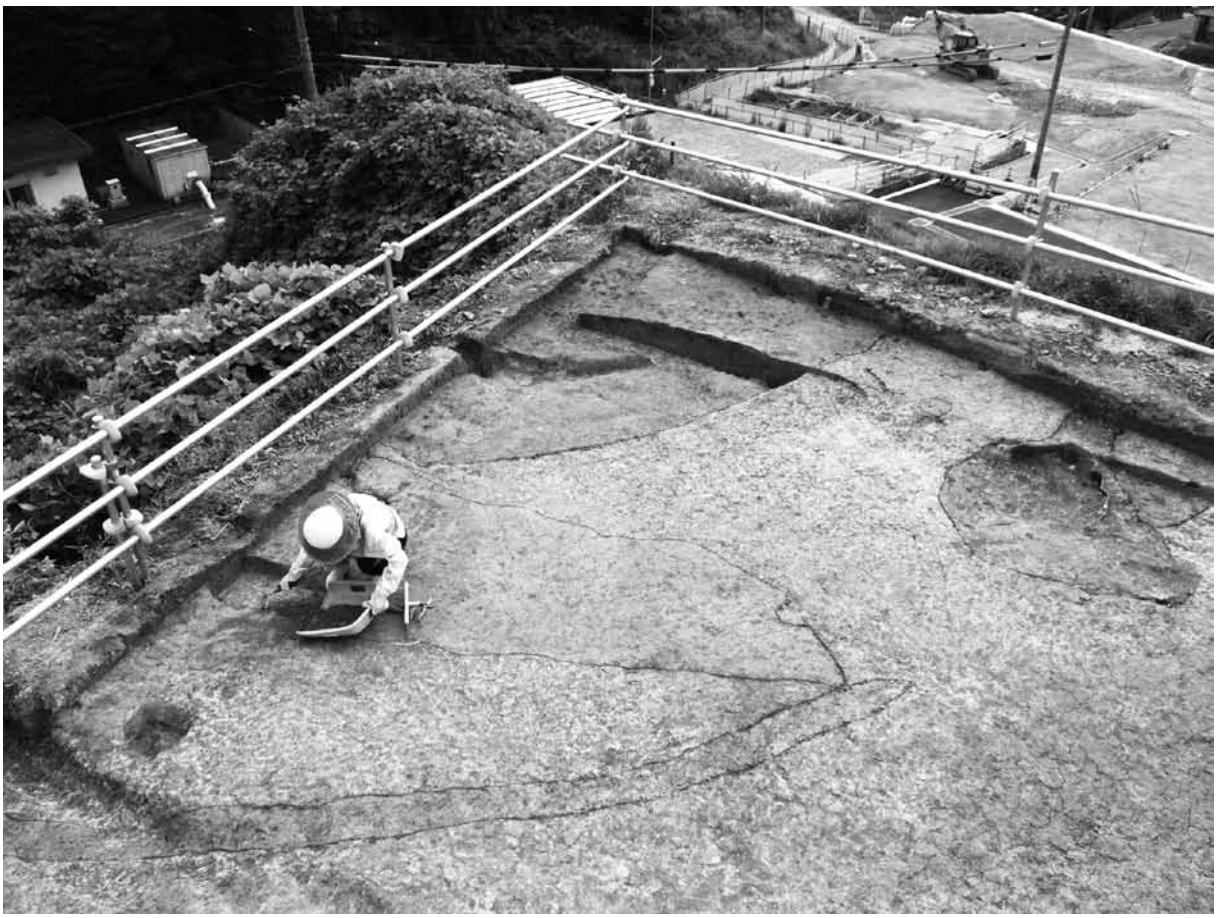
SI13 南側　弥生土器（15-3・7・9・10）出土状況

SI13　P923
柱抜き取り穴に床上から炭・焼土が流入している。

SI13　P1064
柱抜き取り後間もなく床上から炭・焼土が流入している。

SI13　P1134（中央ピット）

SD103 横断土層



SI06、SD30・31　検出状況（東から）

SI06、SD30・31（東から）

SI06　完掘後（北から）

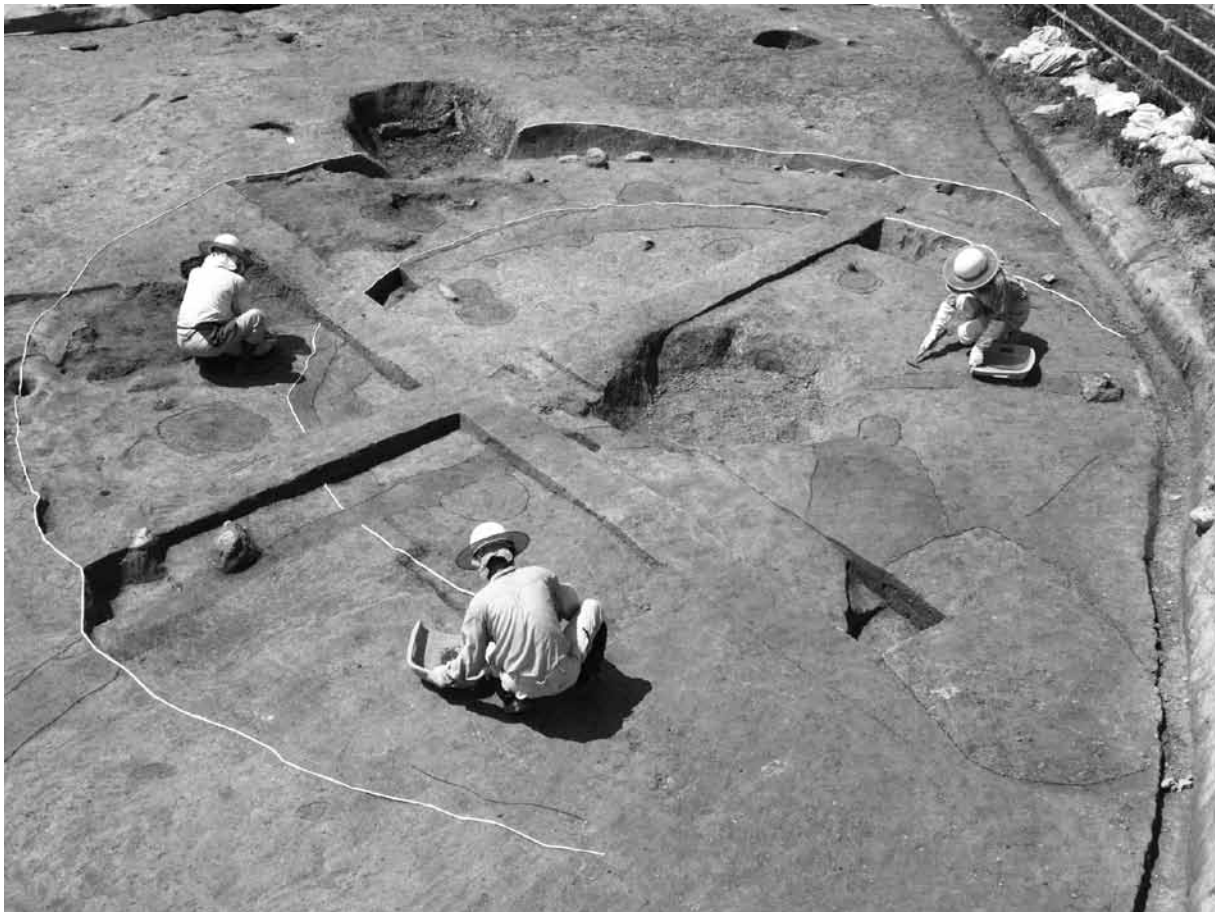
同上　土層断面（東から）

SI06　P425
炭・焼土塊検出状況

SD30　調査区南壁付近
（北から）

SD30
調査区西壁土層断面

SI10　検出状況（南から）



SI10　床面検出状況（北東から）

SI10、SB06・12、SD66（北東から）

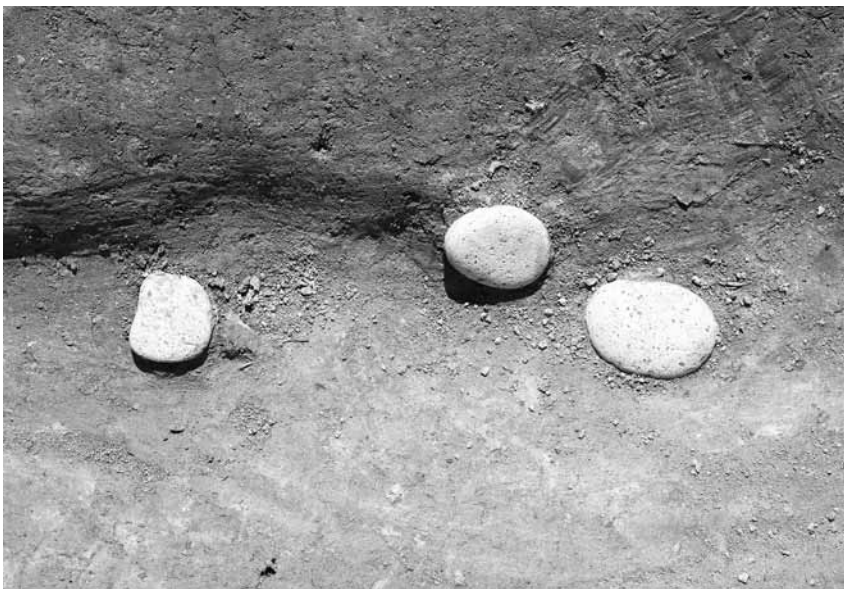
同上（東から）

SI10A　南側土層断面（西から）

SI10　西側壁体溝（北から）

SI10B　東側壁体溝
土層断面（北から）

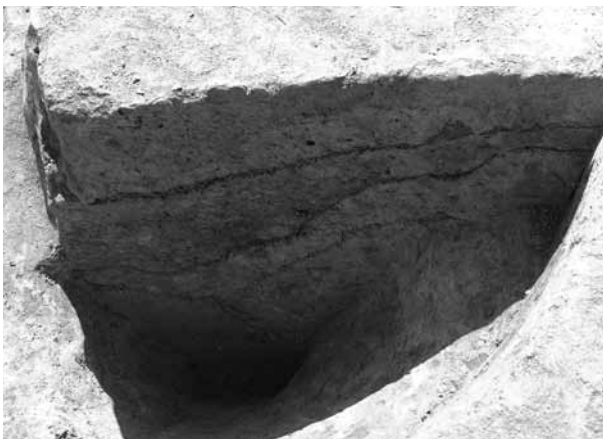
同上　遺物出土状況
写真中央鉄器（23-45）



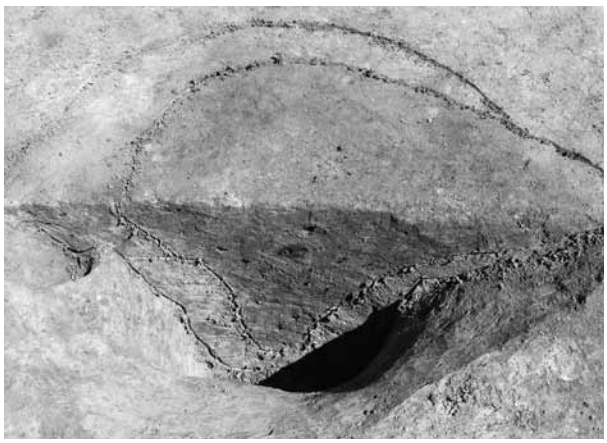
同上　北側
壁体溝内の石

SI10A　P562 検出状況（東から）

同上　遺物出土状況（北東から）



SI10A　P483 土層断面

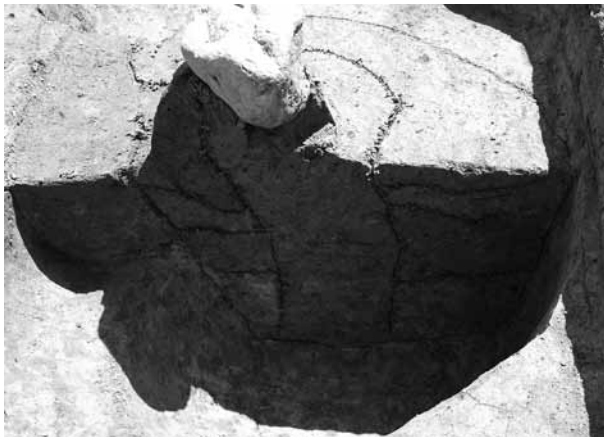


SI10A　P495 土層断面

SI10A　P552 土層断面

SI10B　P488 土層断面

SI10　P493（右）と SB06　P485（左）



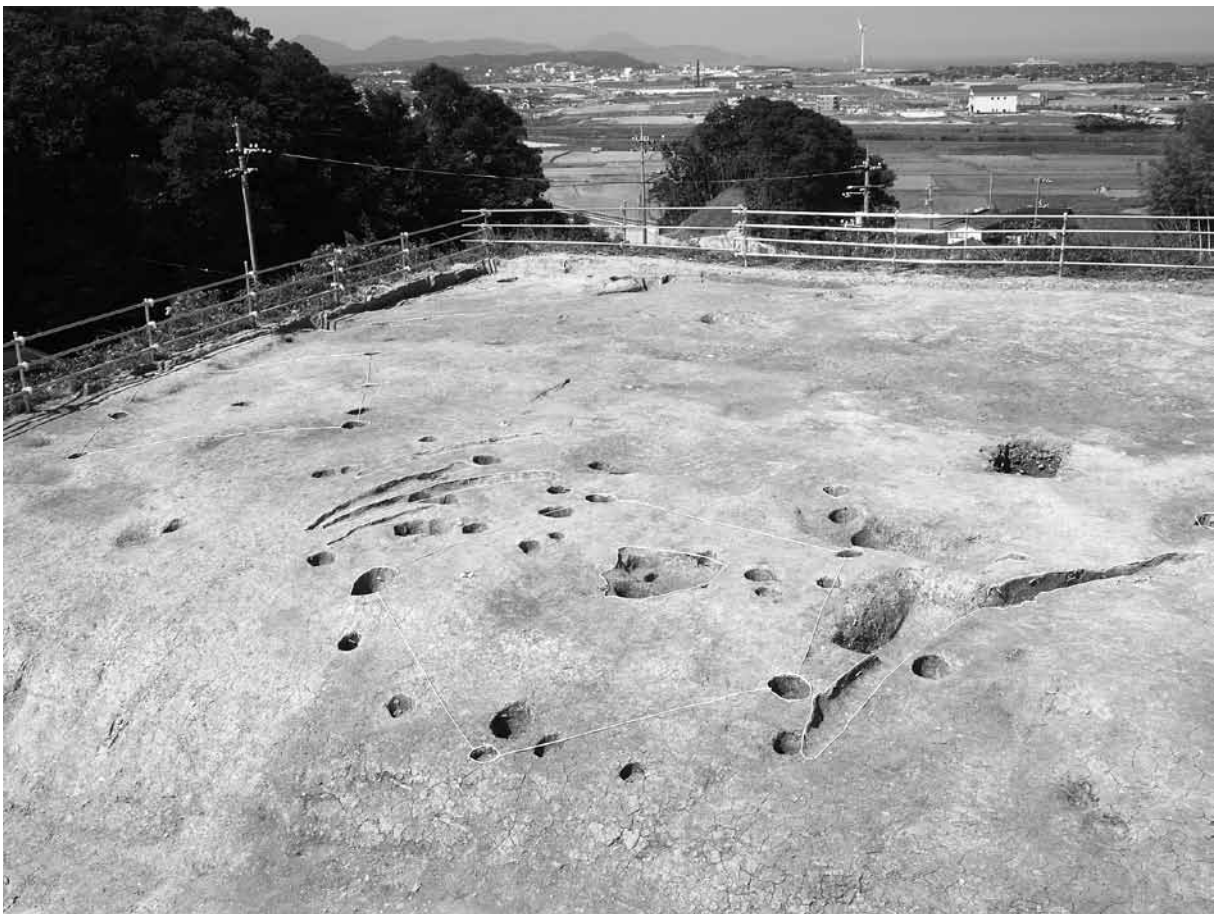
SB06　P502 土層断面

SB12　P566 土層断面

P565 土層断面

SI09　検出状況（北西から）

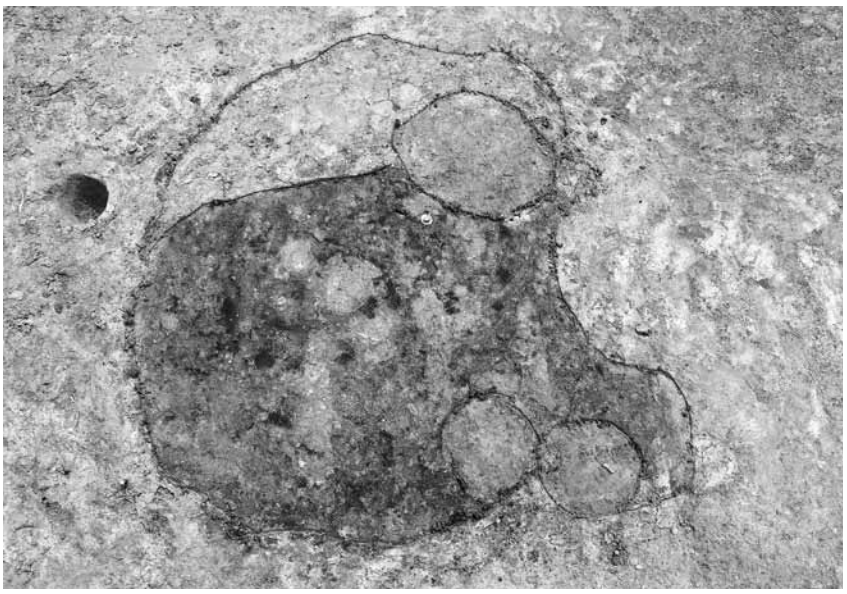
SI09、SD42（北から）



SI08（東から）

同上（南西から）

SI08　南西側壁体溝
（南東から）



SI08　P331
（中央ピット）検出状況

SI08　P384
柱部分上側に炭・焼土を多く含む土が堆積する。

SD37 南側
遺物・焼土出土状況
（南東から）

SD37 北側土層断面
溝の床上に灰白色の粘土が堆積している

SI12　検出状況（北から）

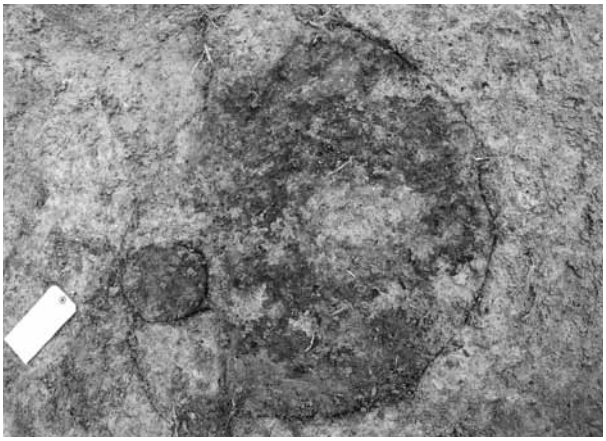
SI12（南東から）

SI12　P775

SI12　P807

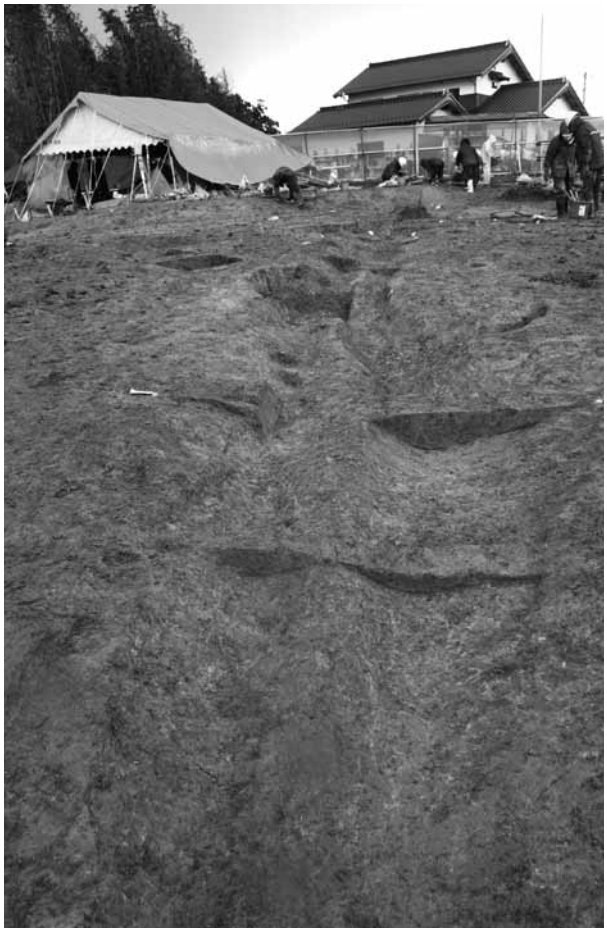
SI12　P817

SI12　P1018



SI12　P1058（中央ピット）

SD109 弥生土器（30-8）出土状況（北から）



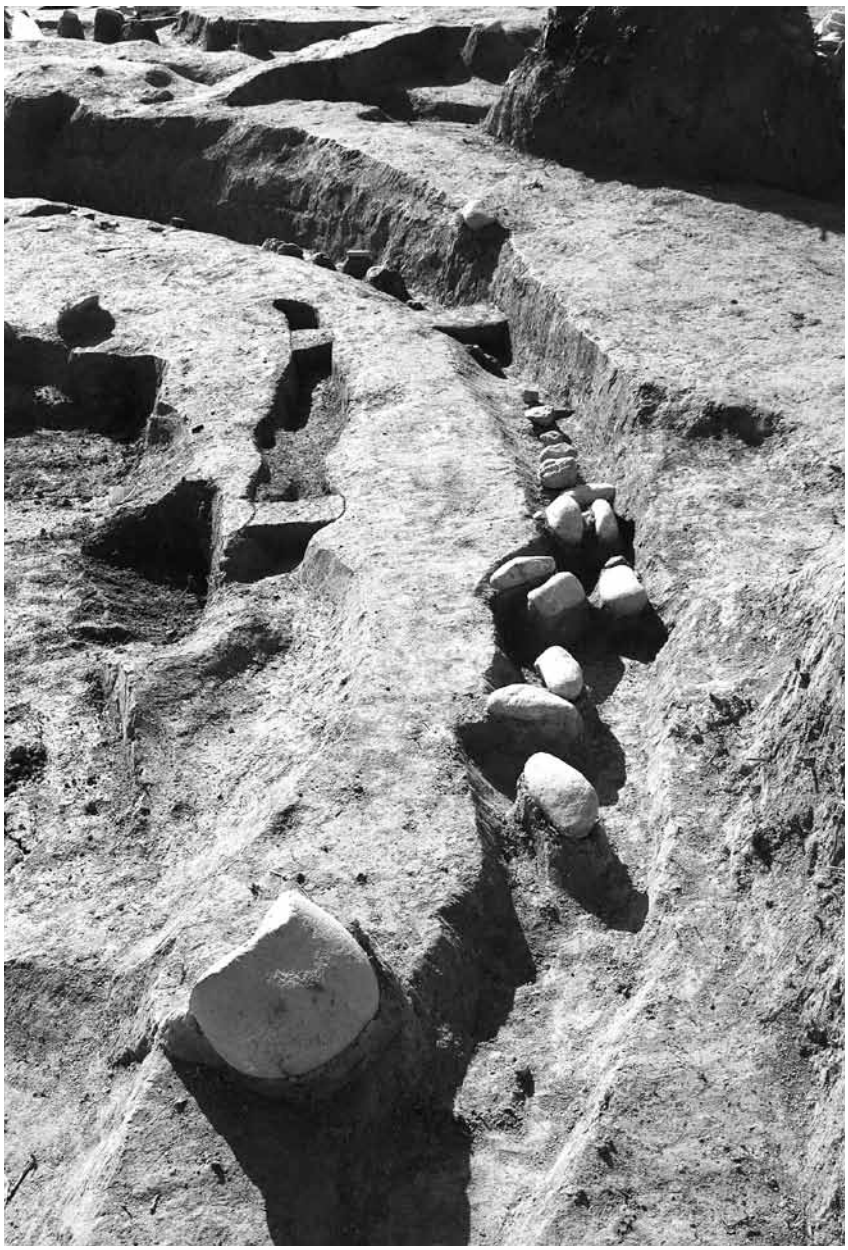
SD108・109（北西から）

SI16　検出状況（東から）

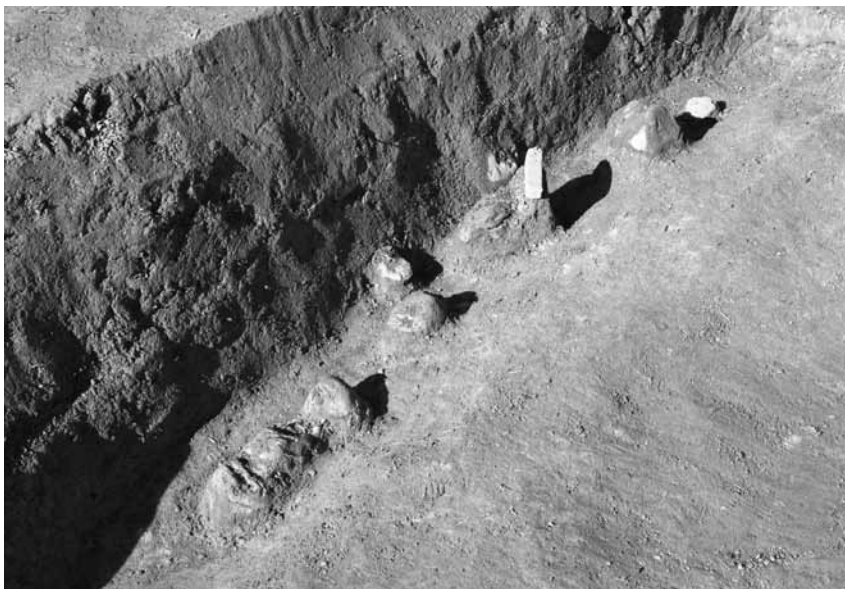
同上　床面検出状況（北から）

SI16（東から）

同上　（北から）



SI16A　壁体溝内
遺物出土状況（北から）



同上　石器・軽石
出土状況（南東から）

SI16　南西側土層断面（南東から）

P962 土層断面

SI16A・C 壁体溝土層（東から）

SI16C　西側壁体溝土層断面（北東から）

SD106 土層断面及び遺物出土状況（東から）

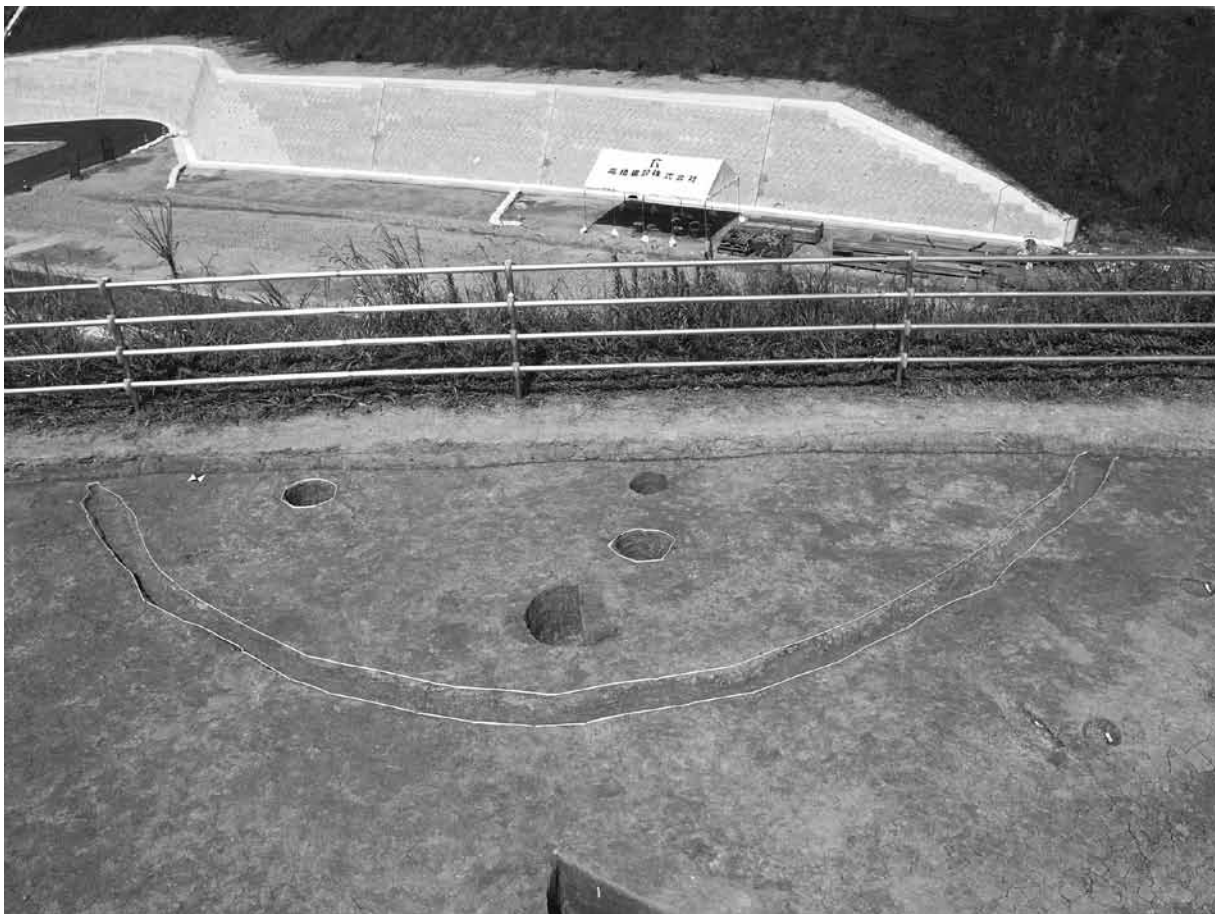
SD105（北東から）

同上　壁面の溝と床面小ピット（東から）

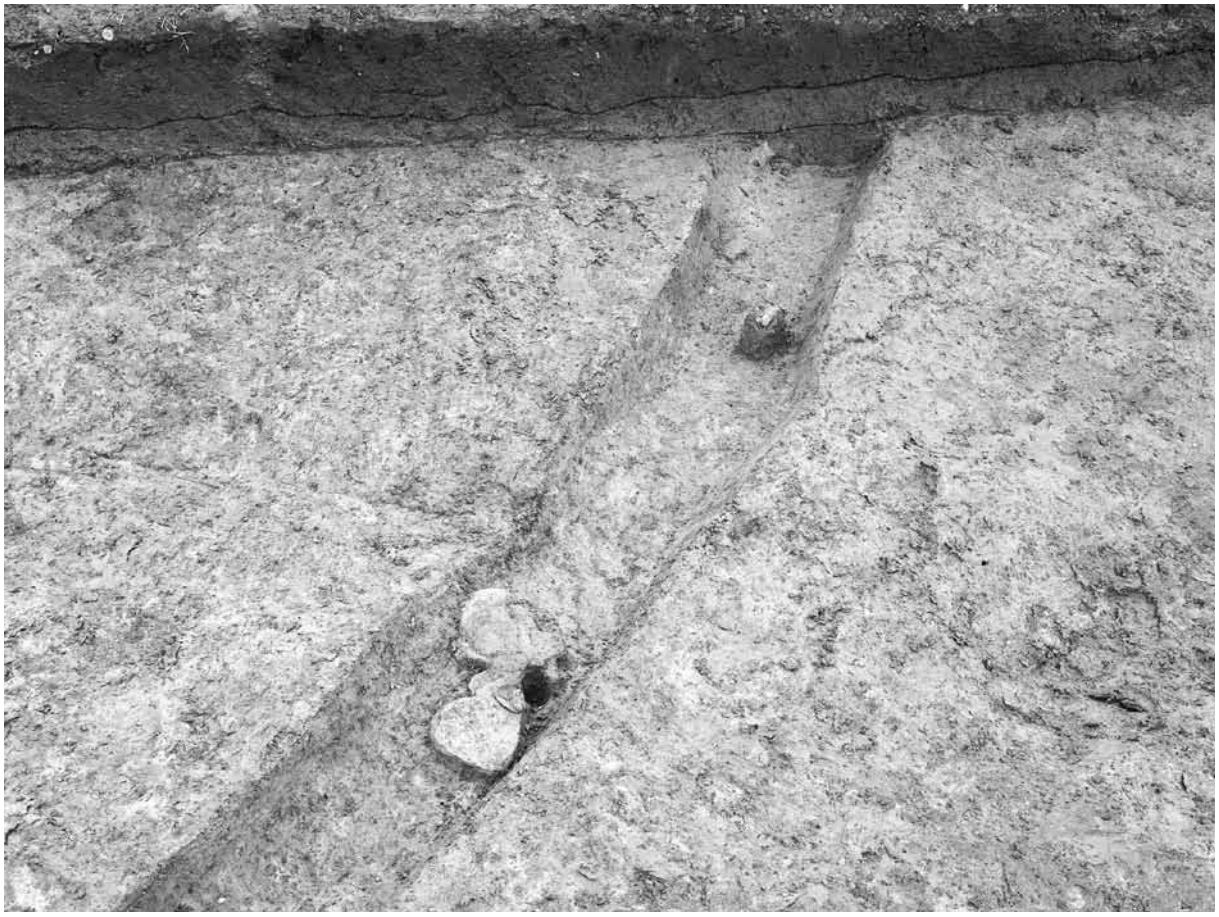
SD95　検出状況（北西から）

SD107 遺物出土状況（東から）

写真左上が SI14、右上が SI16



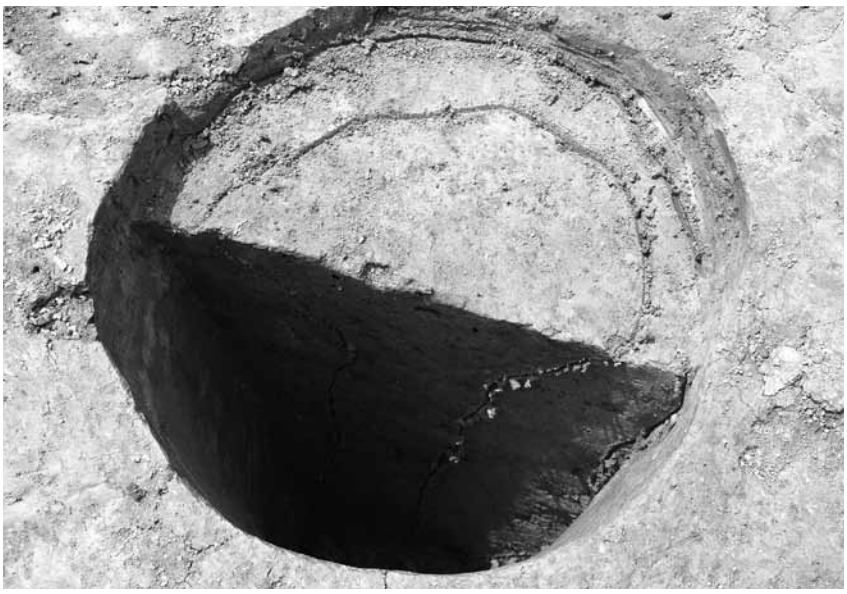
SI07（南東から）



SI07　壁体溝内遺物出土状況（南東から）

SI07 壁体溝
色の濃い部分は埋土で、壁面がオーバーハングしている。

P393 土層断面
柱部分下側に炭・焼土を多く含む土が堆積する。

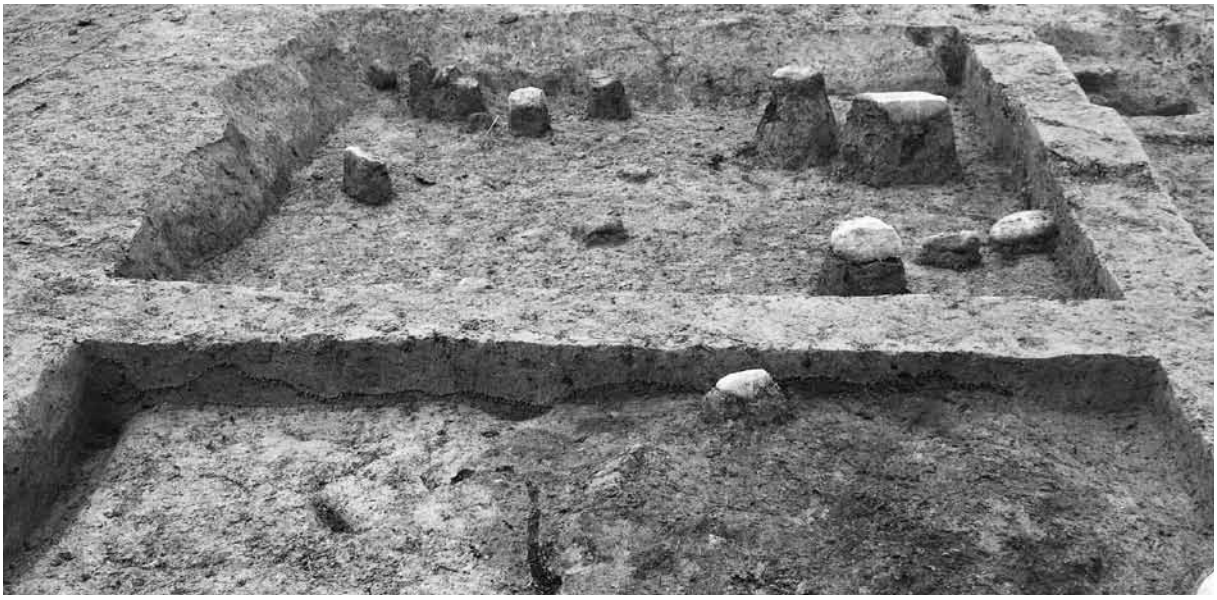


P396 土層断面

SI14　検出状況（北西から）

同上　完掘後（北西から）

SI14　南側土層断面（北西から）



同上　東側土層断面（北東から）

SI14 床面検出状況（北西から）

SI14　中央ピット土層断面（北東から）

SI14 中央ピットと SD100（北西から）

SI14　西側床面
遺物出土状況（北から）

SI14　北側壁体溝内
高坏（45-14）
出土状況（西から）

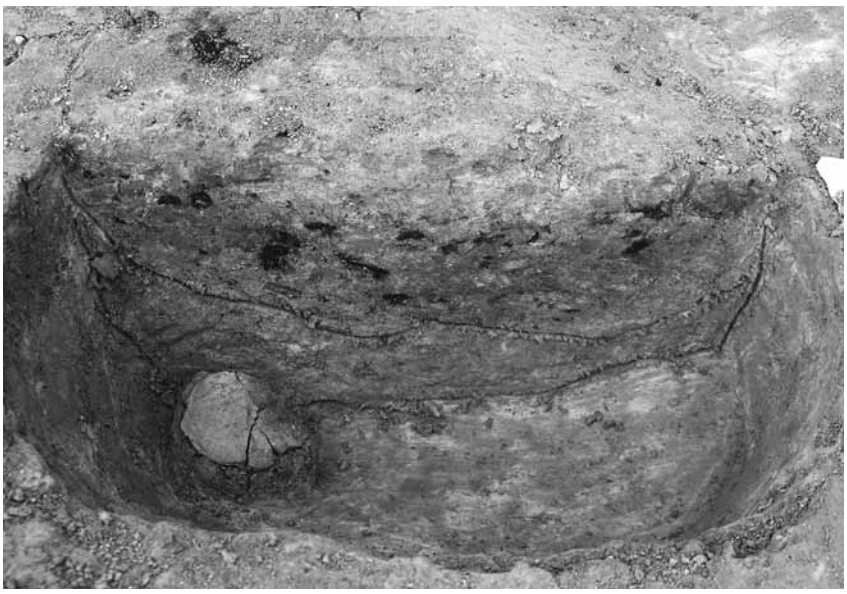
SI14 中央ピット南西側の
砂利の面

SI11、段状遺構 8 検出状況（北から）

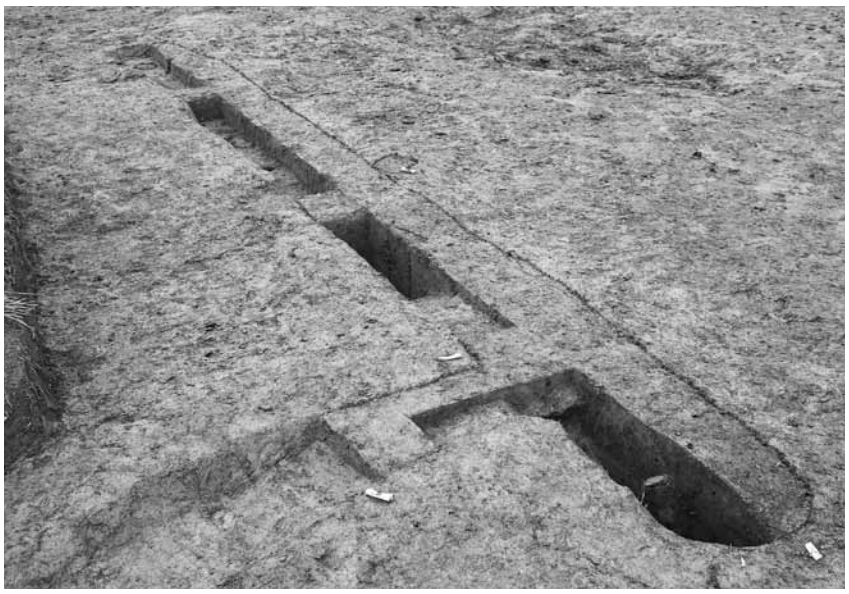
SI11（北から）

SI11　P451
柱部分に炭・焼土を多く含む土が堆積する。

SI11　P453
柱部分に炭・焼土を多く含む土が堆積する。



SI11　P447
土層断面および遺物出土状況

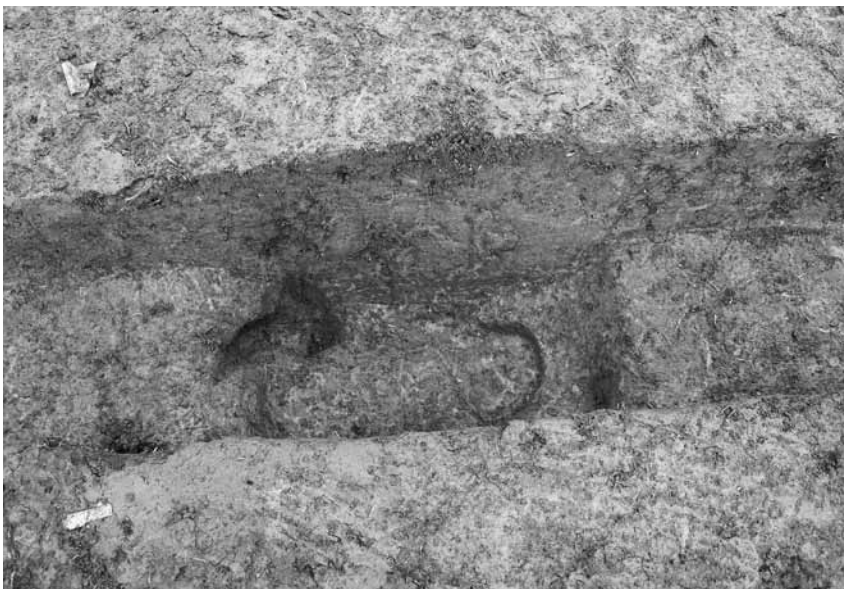


SB08 南柱列と SD93
（西から）

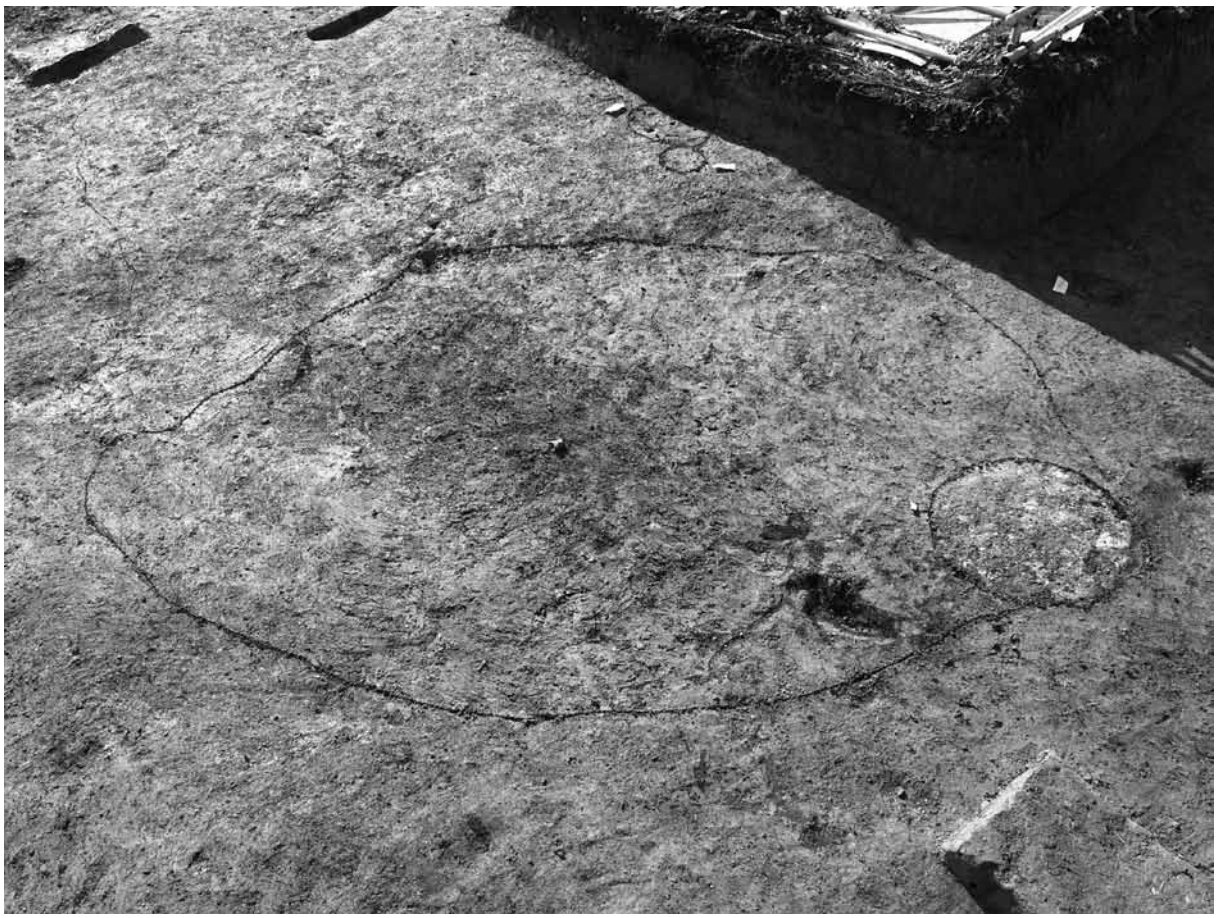
SB08 南柱列完掘後
（北東から）

SB08　P988
土層断面（北西から）

SB08　P989



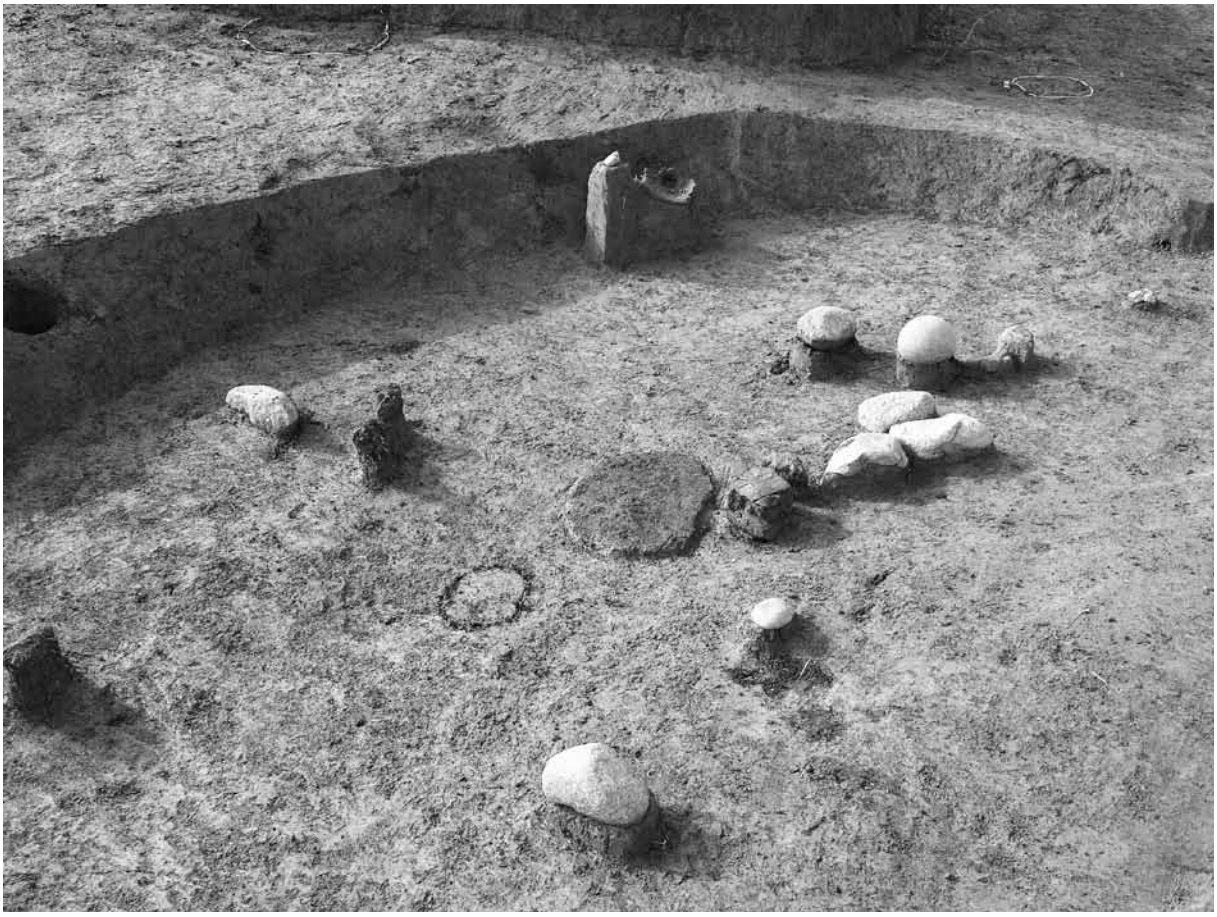
SB08　P828



SK40　検出状況（北から）

同上　東西土層断面（北から）

SK40　床面検出状況（西から）



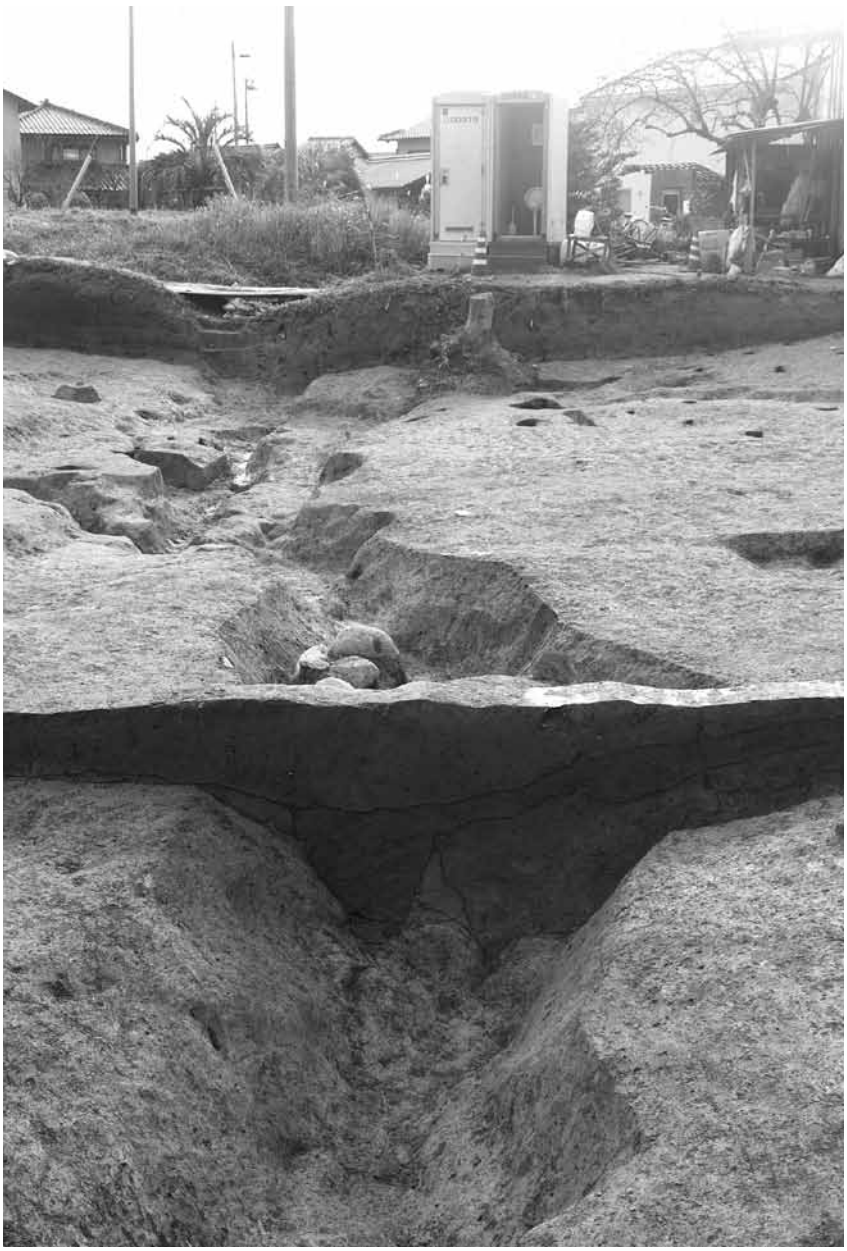
同上（北東から）

床面中央で焼土面を検出

SR01（北から）

同上（南から）

東区の北側は近世以降の造成土が厚く、北側では現地表から約 1.7 m下で遺構面を検出した。



SR03　土層断面
（北西から）

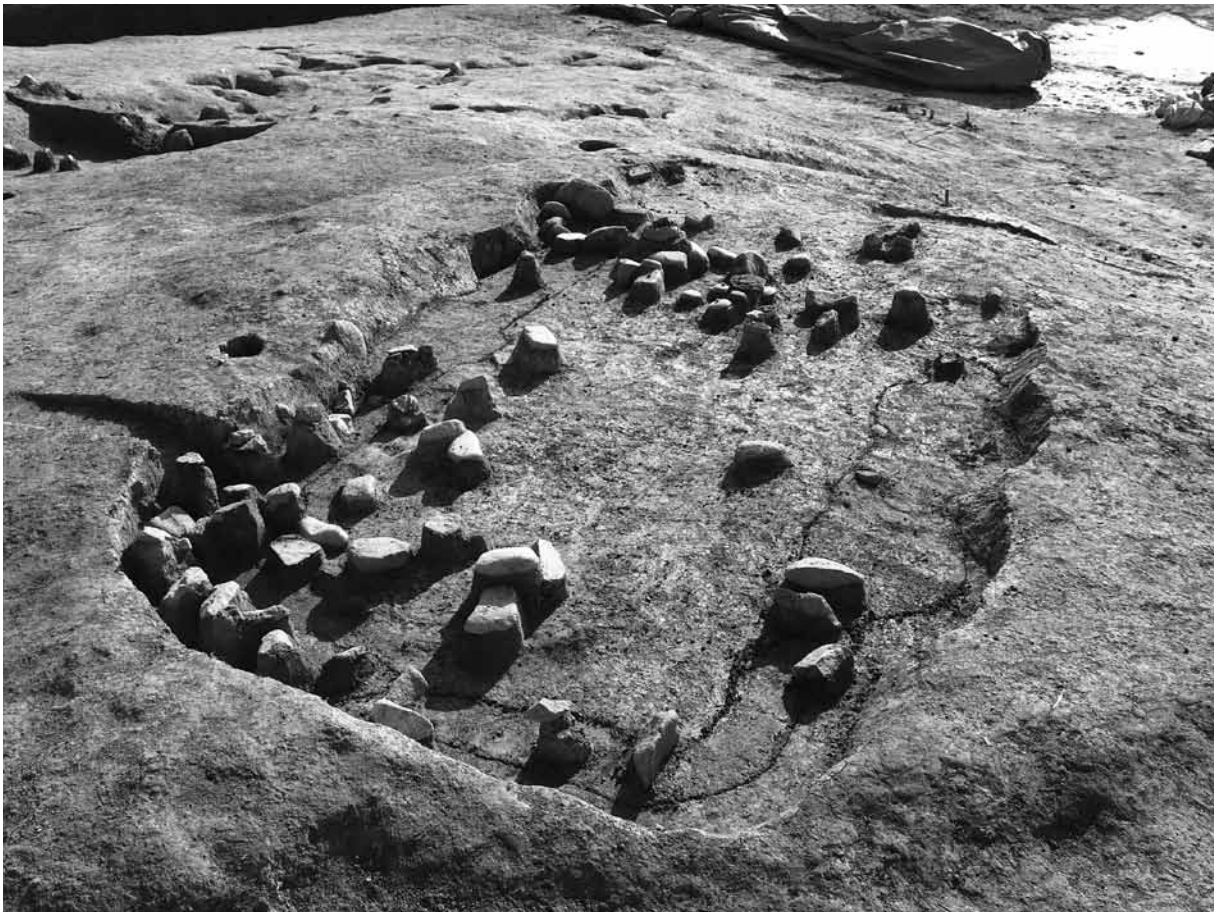
SR03 上層で出土した石

SB04（北から）

P384　検出状況（北西から）

SD44 土層断面

１号墳　全景（西から）



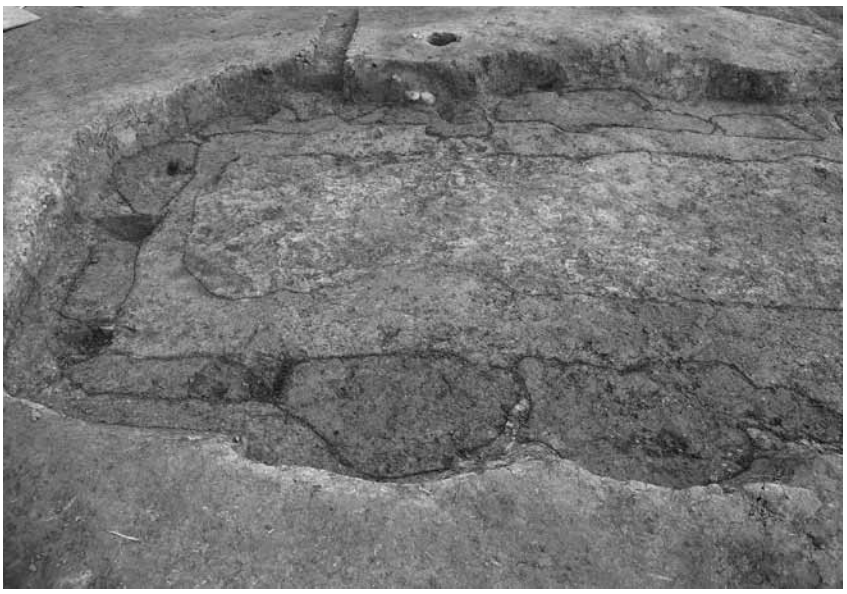
１号墳　横穴式石室（北から）

1 号墳　石室内遺物出土状況（南から）

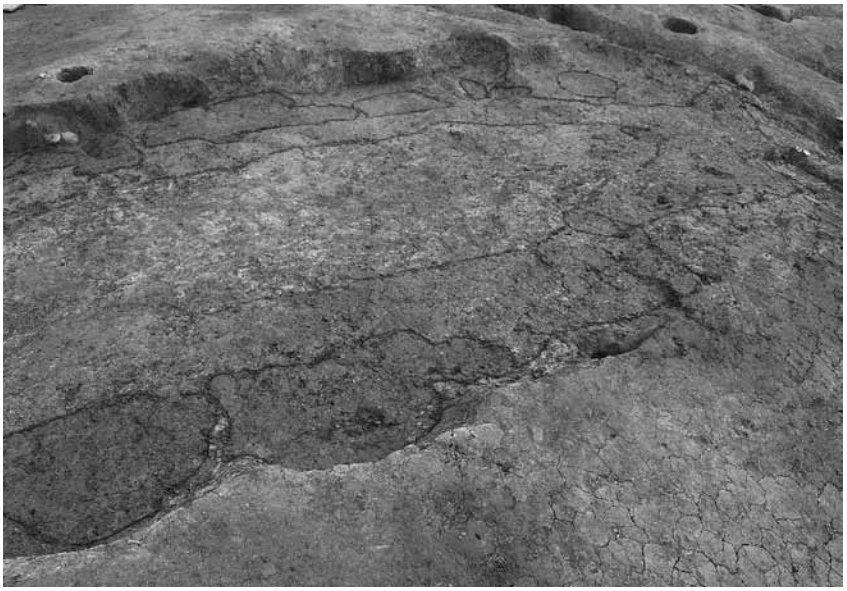
同上　（北西から）

1 号墳　遺物出土状況

同上　刀子 (68-11) 出土状況（西から）



１号墳　石室掘方及び
基底部石材抜き取り痕
（北西から）



同上（北から）

同上　土層断面
（南西から）

SB03（北西から）

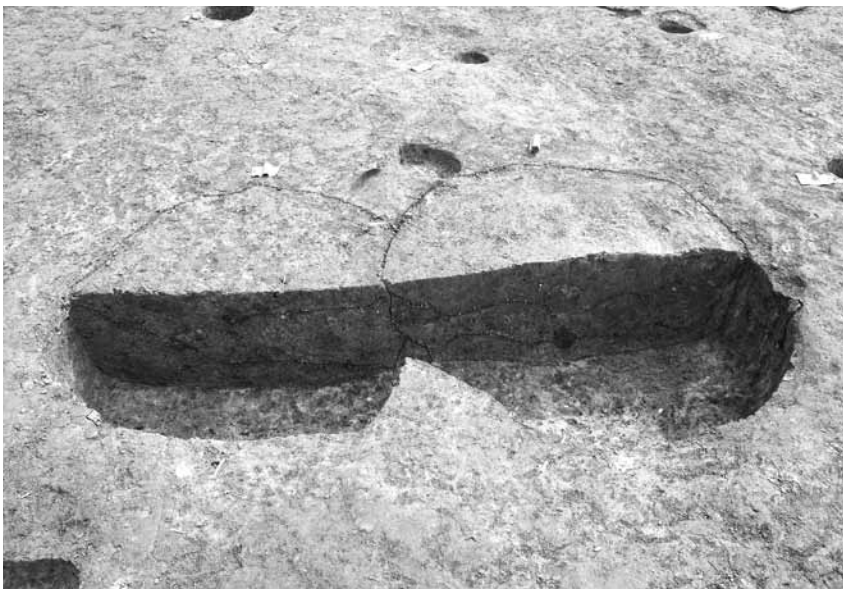
同上　現地説明会風景

SB07・13・14、SA01、SK1 ～ 3 検出状況（北東から）

同上　完掘後（北東から）

SK02　遺物出土状況
（西から）

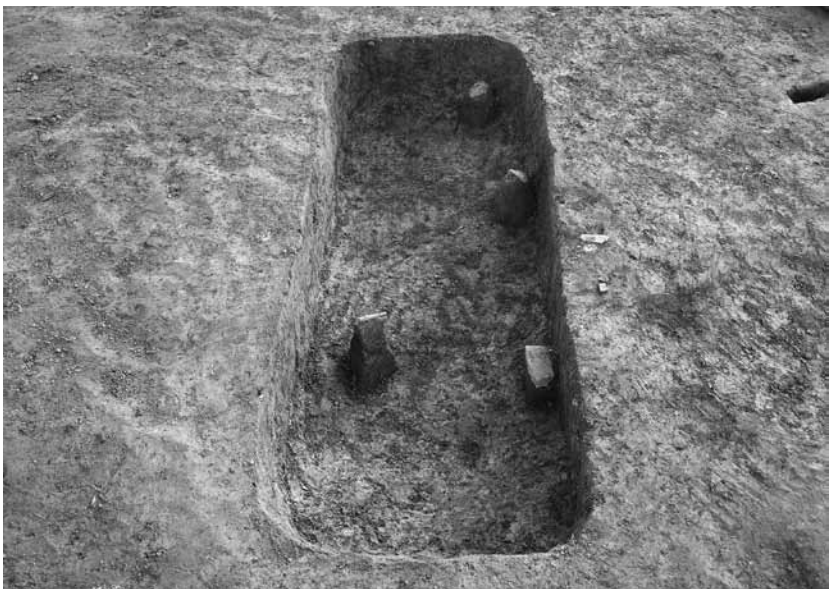
同上　桶底・人骨
出土状況（西から）



SK4・5 土層断面
（西から）

SK11（北西から）
土坑中央で土師器皿（81-12）が出土

SK15（西から）

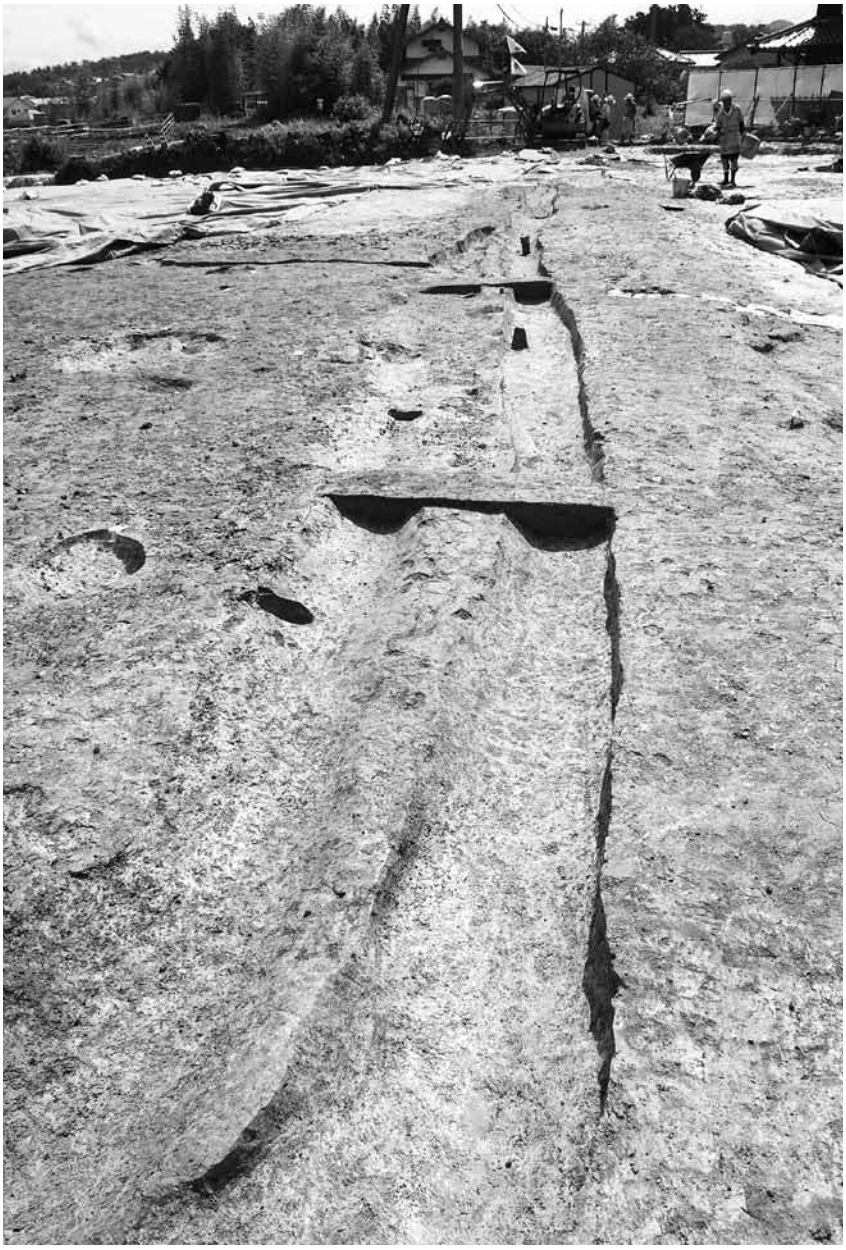


SK12（北から）

SK13（北から）

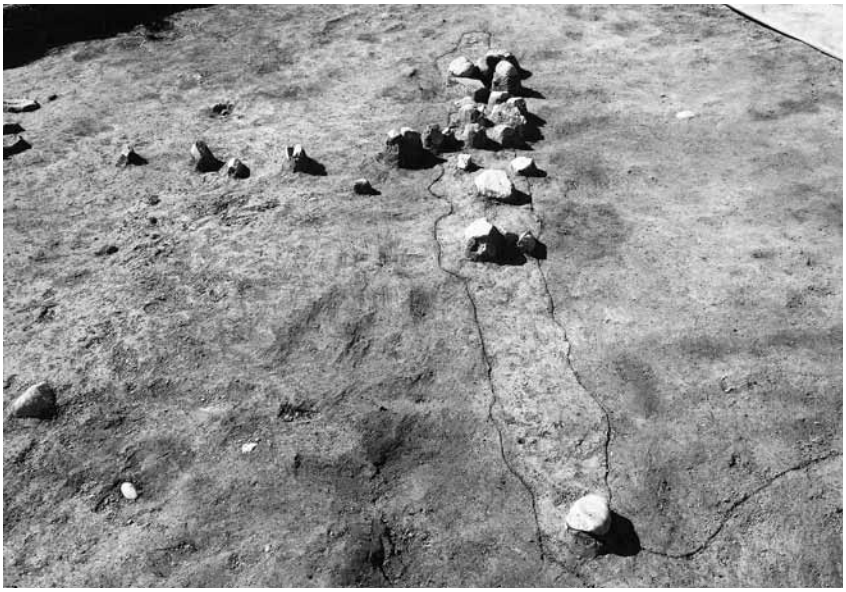
SK36 遺物出土状況

SD49・51 検出状況
（東から）



同上　完掘後
（西から）

SD77 検出状況
（南西から）
市道久代上 1 号線とほぼ
重複する。



集石 1 （北西から）
ガラス玉・近世陶器が出土

P1044 内陶器壺
（90-1・2）出土状況

SD47　土層断面
（北から）

SD52 検出状況
（南東から）

同上　土層断面
（南東から）

SD87 土層断面
（南西から）

段状遺構 8 土層断面
（東から）
SI11 の柱穴（左上）を切っている。

段状遺構 9 土層断面
（東から）

段状遺構 10
検出状況（西から）

同上　土層断面
（東から）

同上　完掘後
（南東から）

J6・7 グリッド
調査区南壁土層断面
（北西から）

東区谷部トレンチ内土層
（南西から）

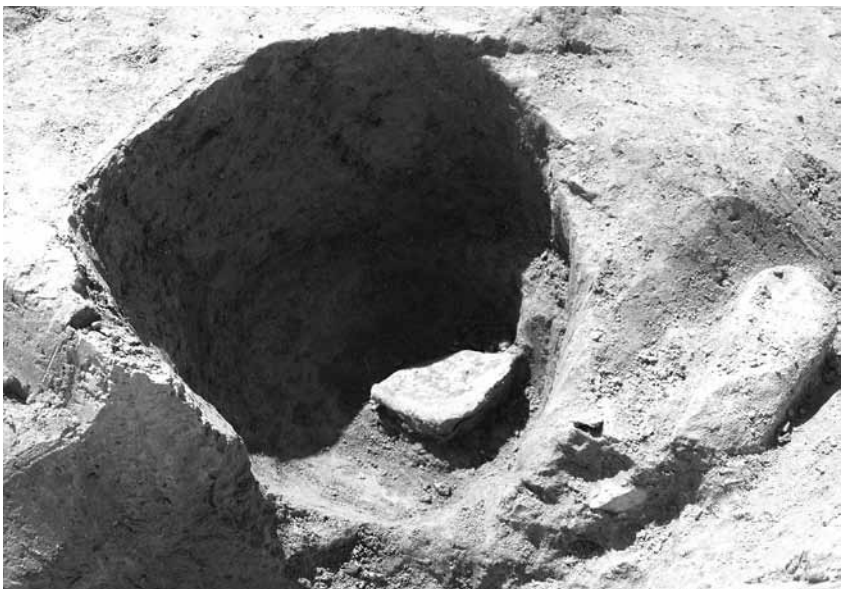
H7・I7 グリッドの
遺構検出状況（南西から）
中世以降の土坑や時期不明の柱穴・溝などを多数検出した。

D10 グリッド　ピット群と SX02・03（北西から）

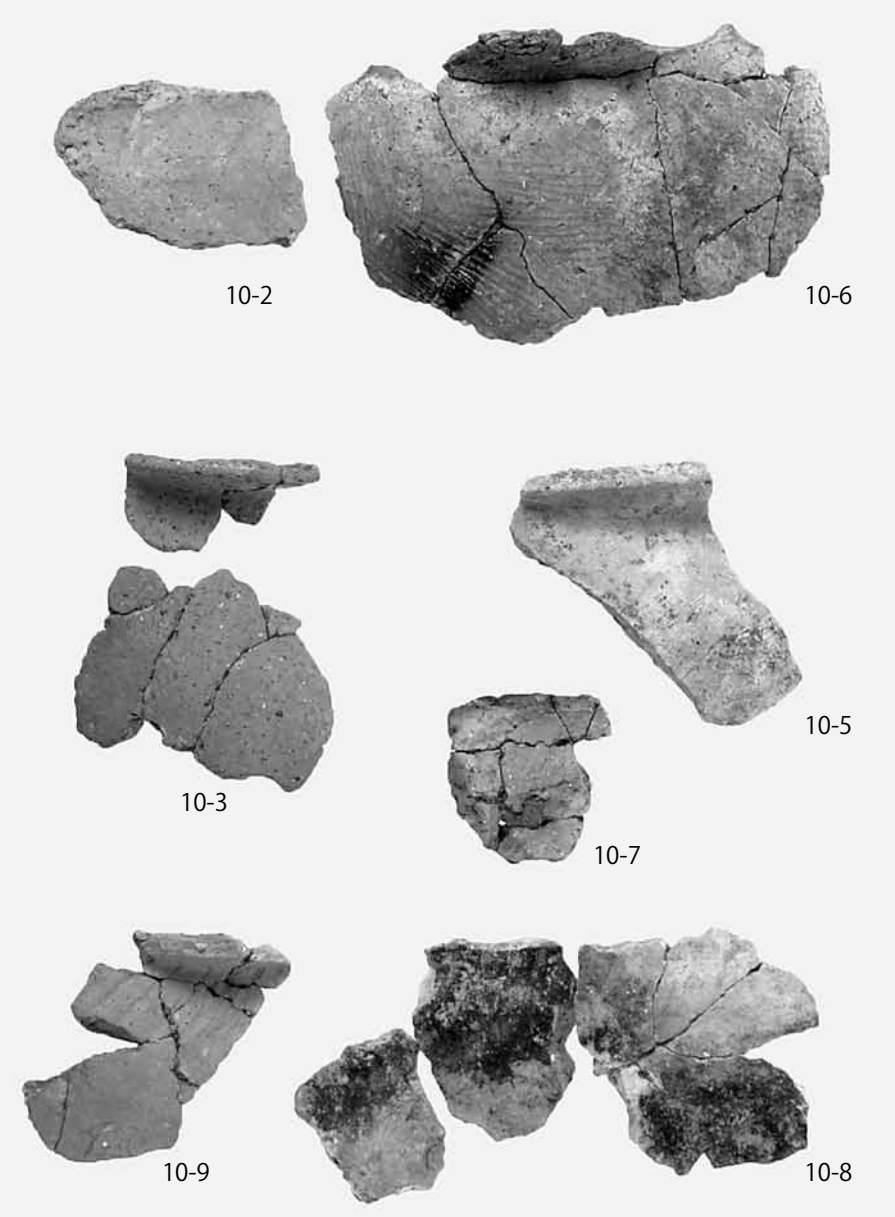
同上　検出状況（西から）

SX02（北から）

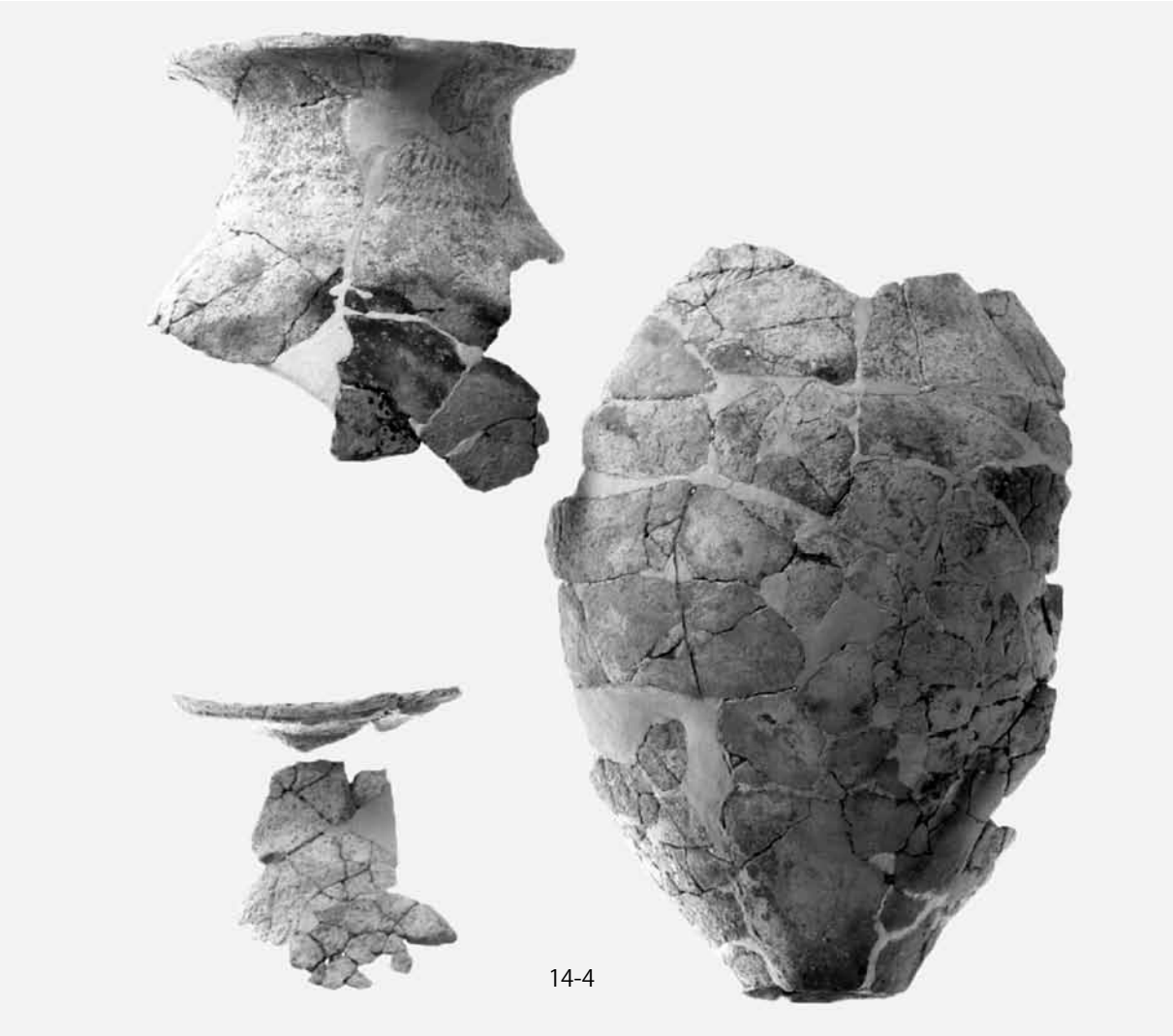
同上　弥生土器（99-5）
出土状況



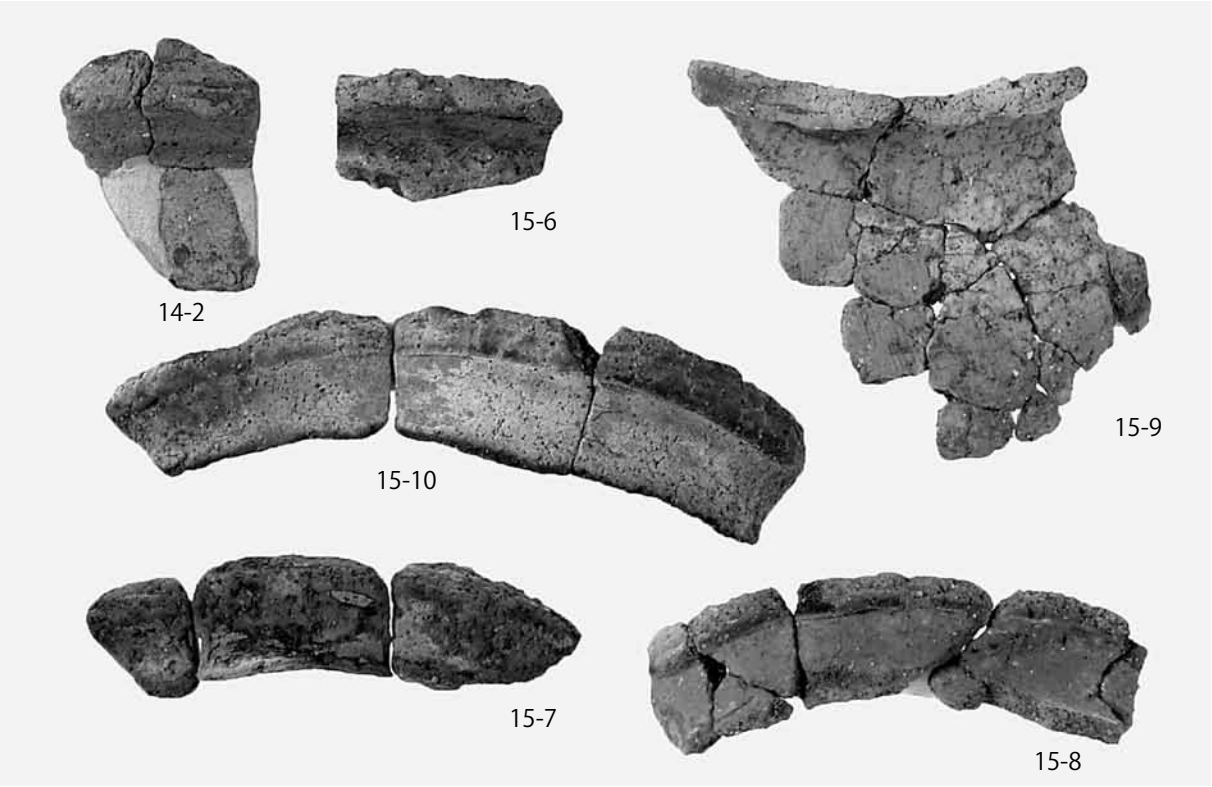
P342 内　瓦質土器
（99-2）出土状況

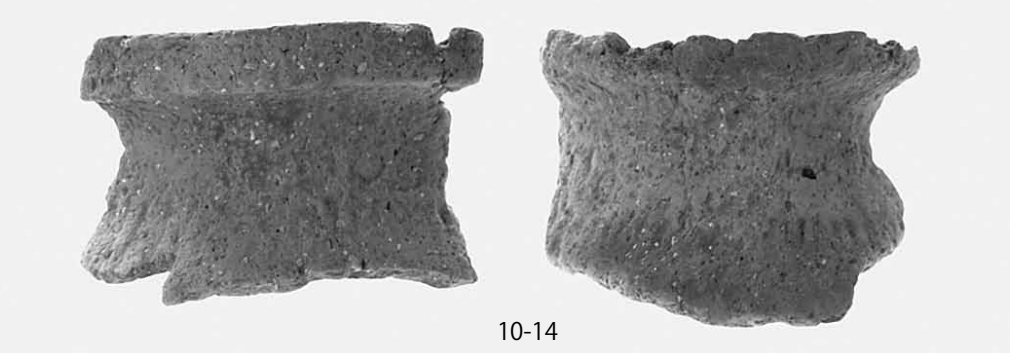


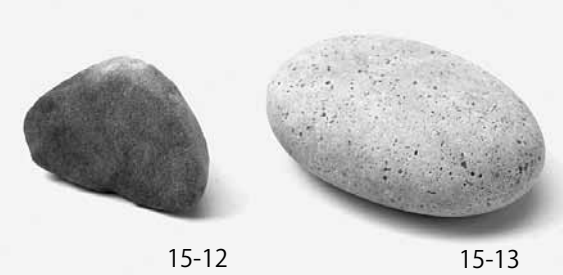
SI15 出土弥生土器



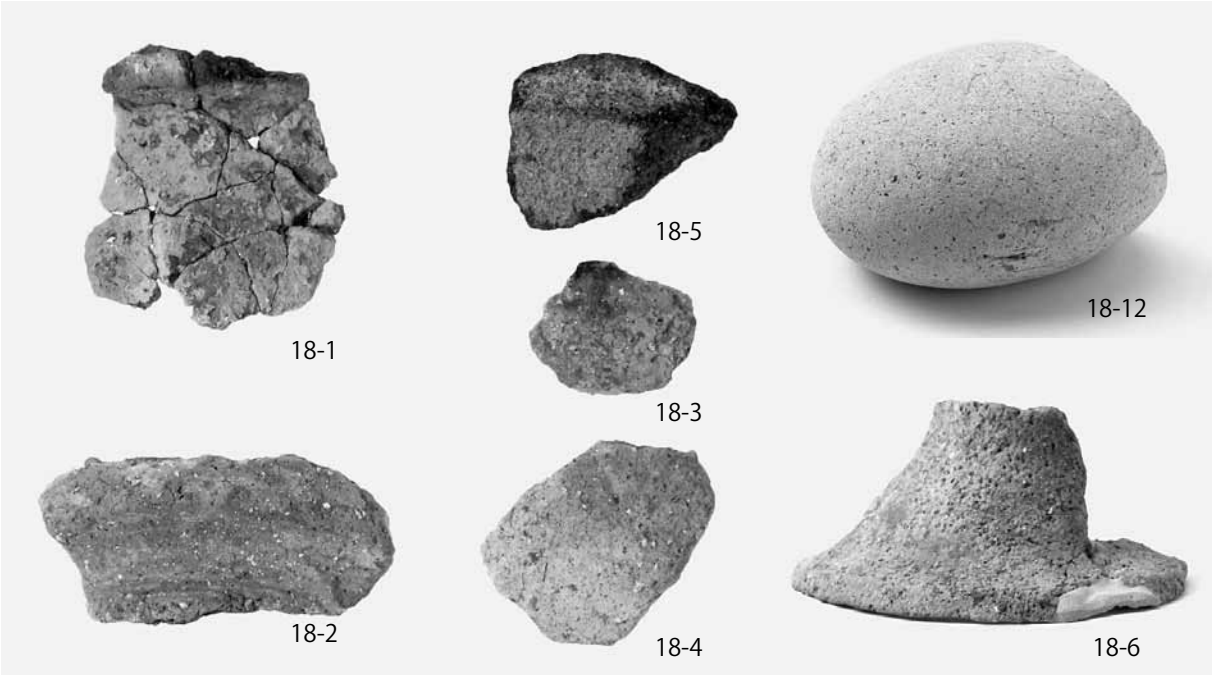
SI13 出土遺物（1）



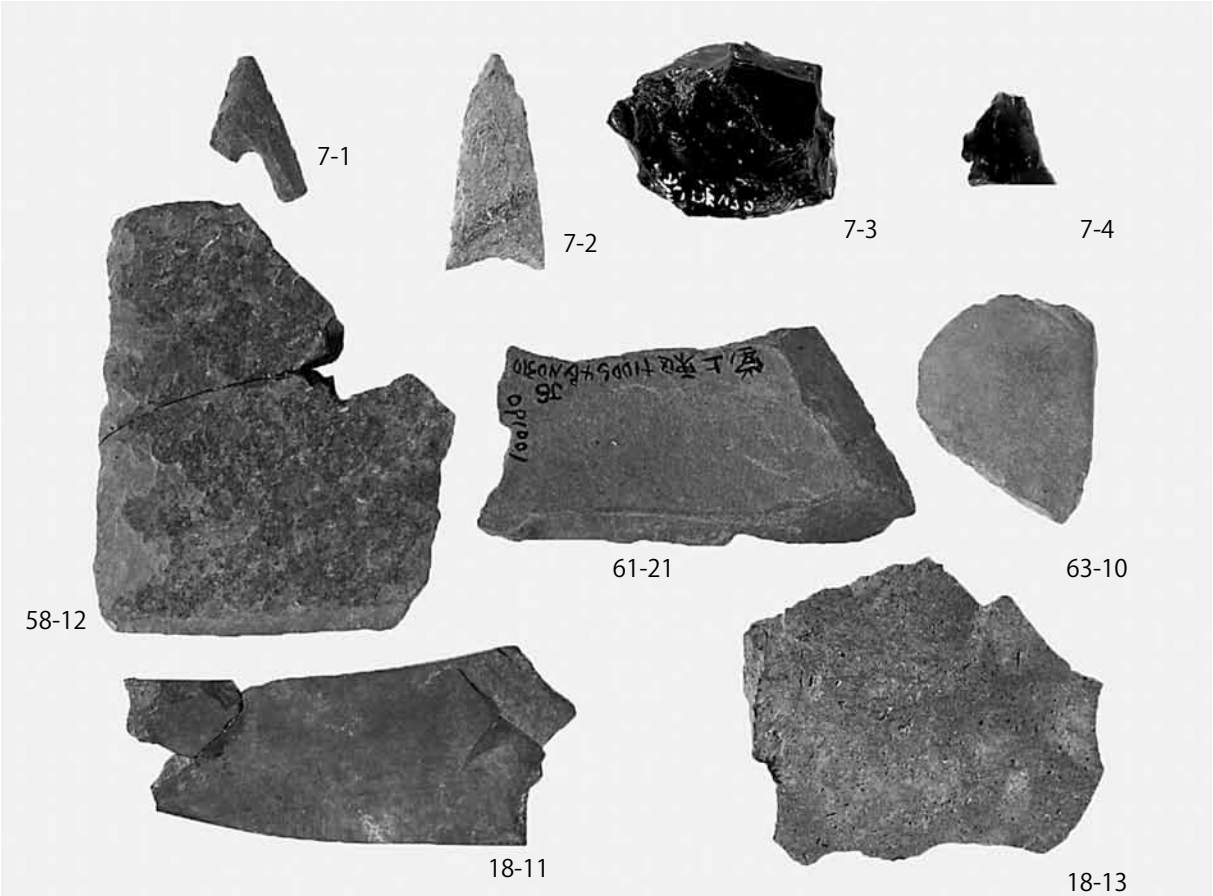




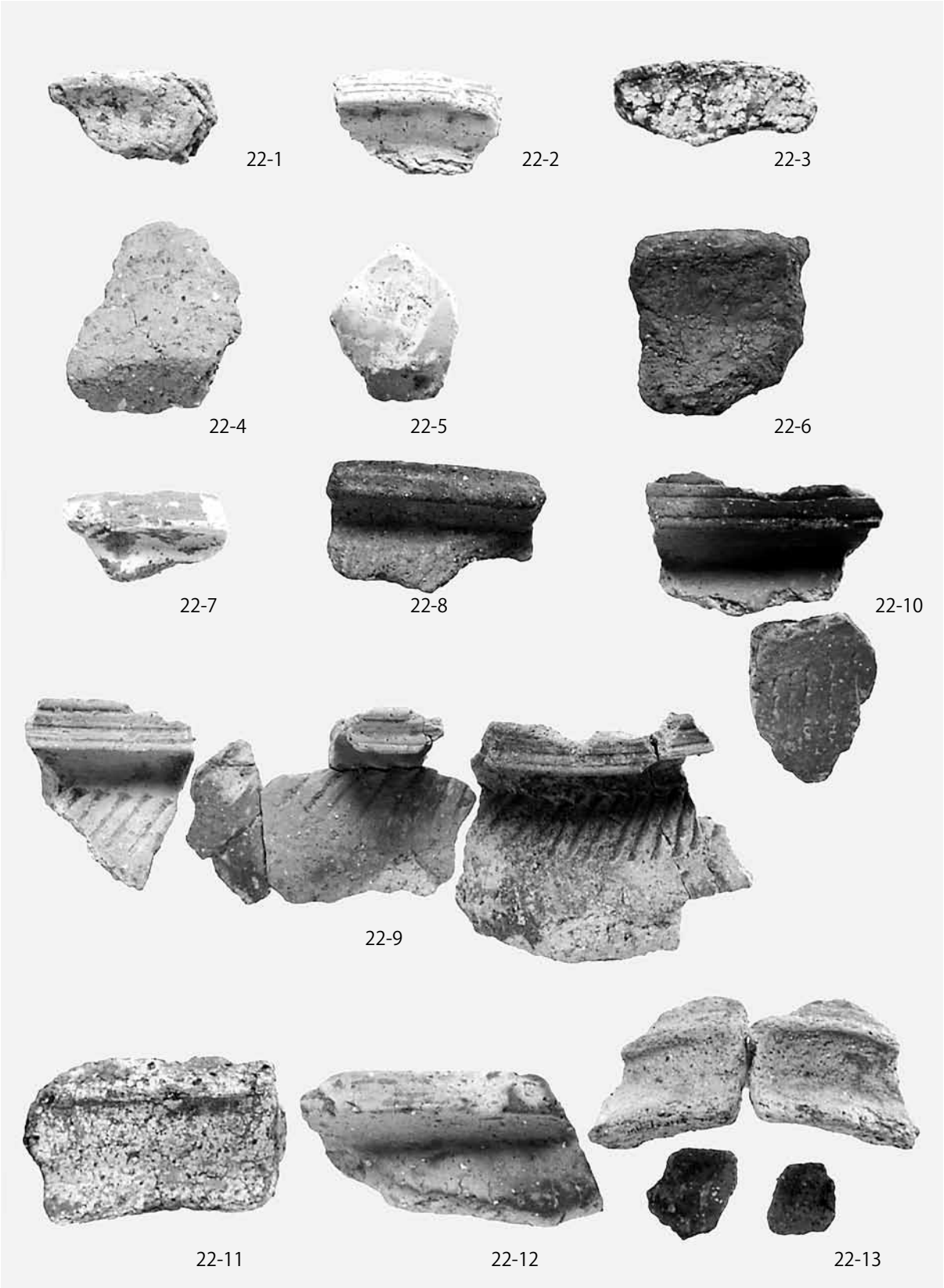
SI13 出土遺物（2）



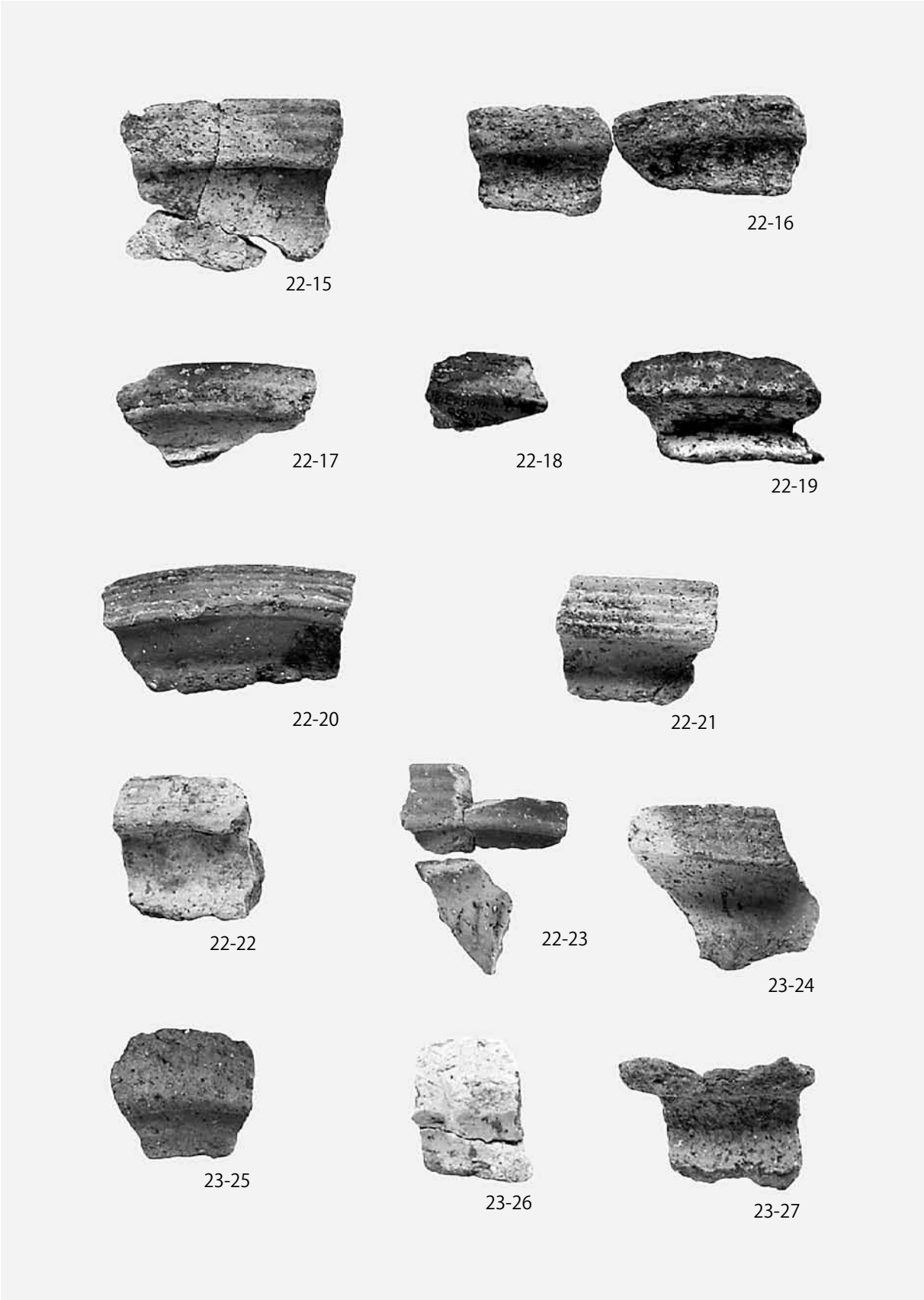
SI06 出土遺物



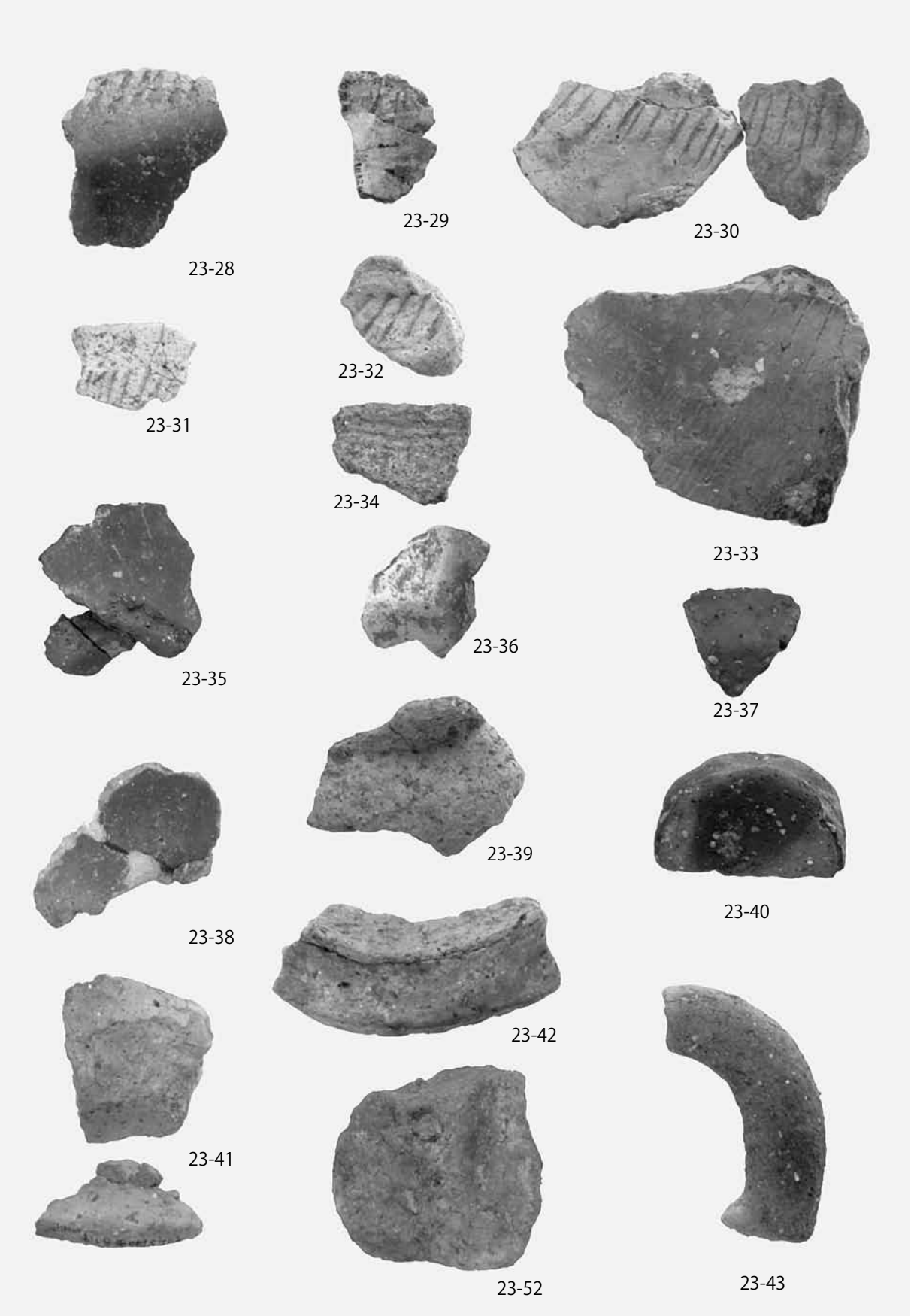
SI06、遺構外出土石器



SI10 出土弥生土器（1）

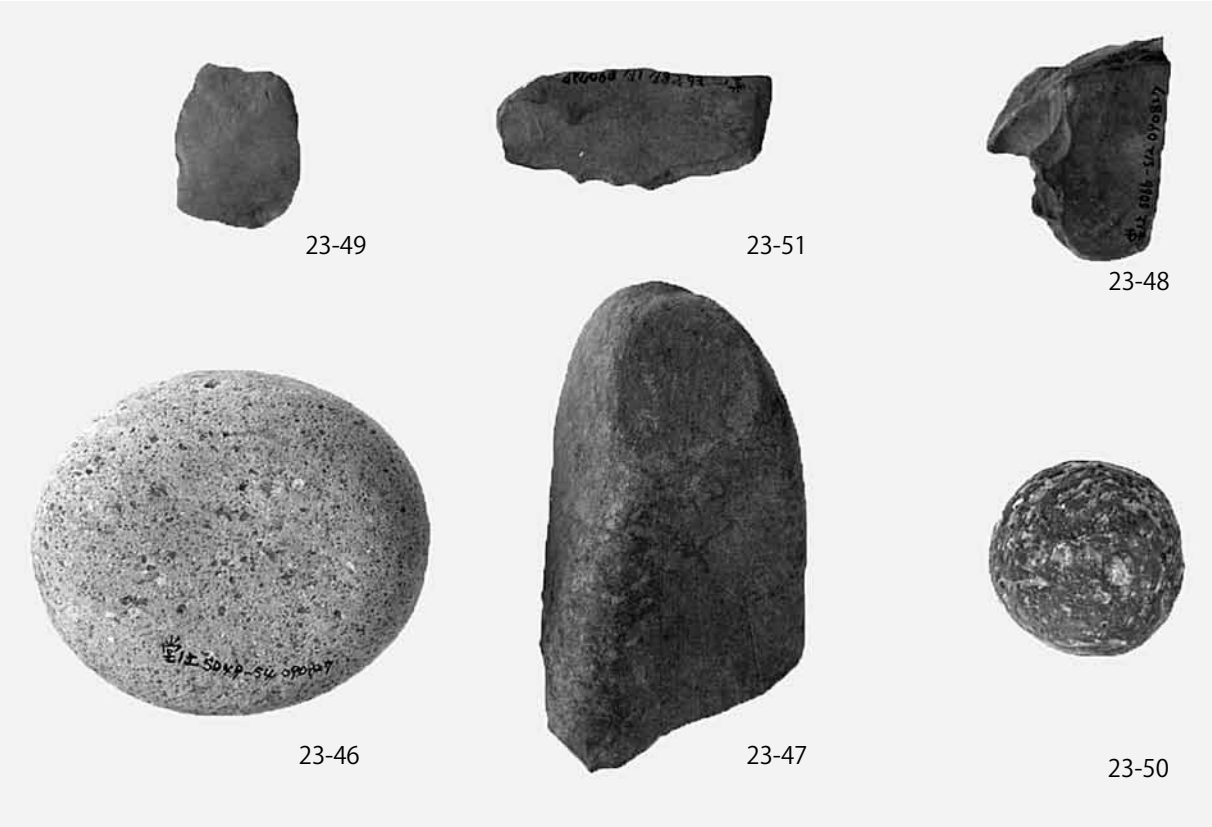


SI10 出土弥生土器（2）

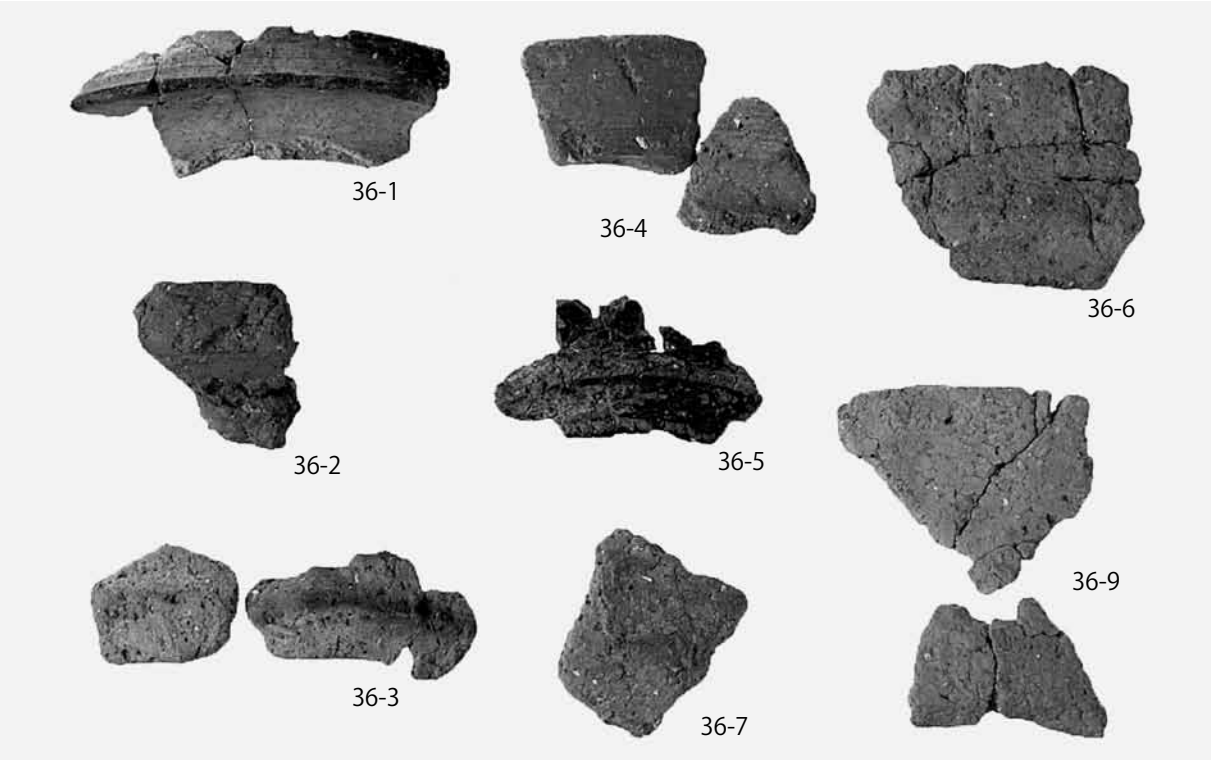


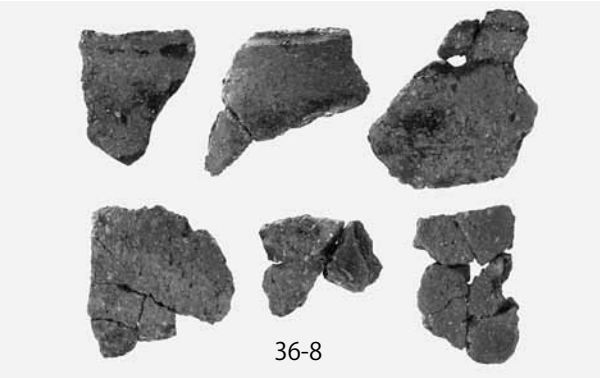
SI10 出土弥生土器（3）

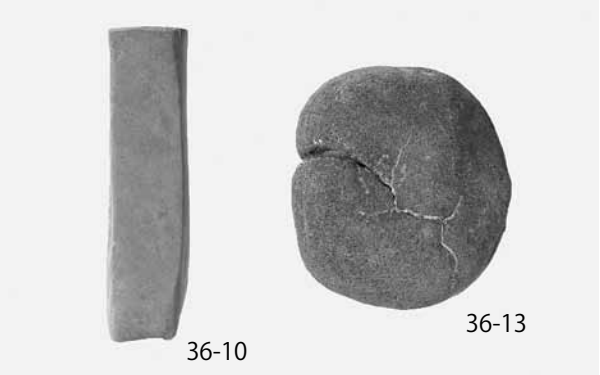
SI10 出土弥生土器（4）

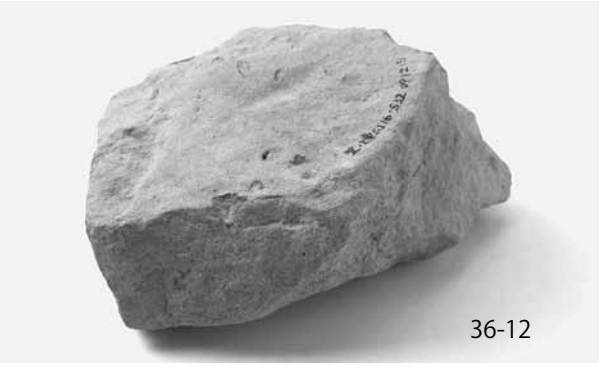


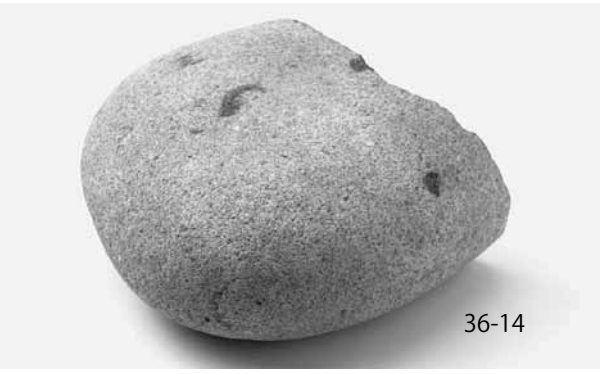
SI10 出土石器



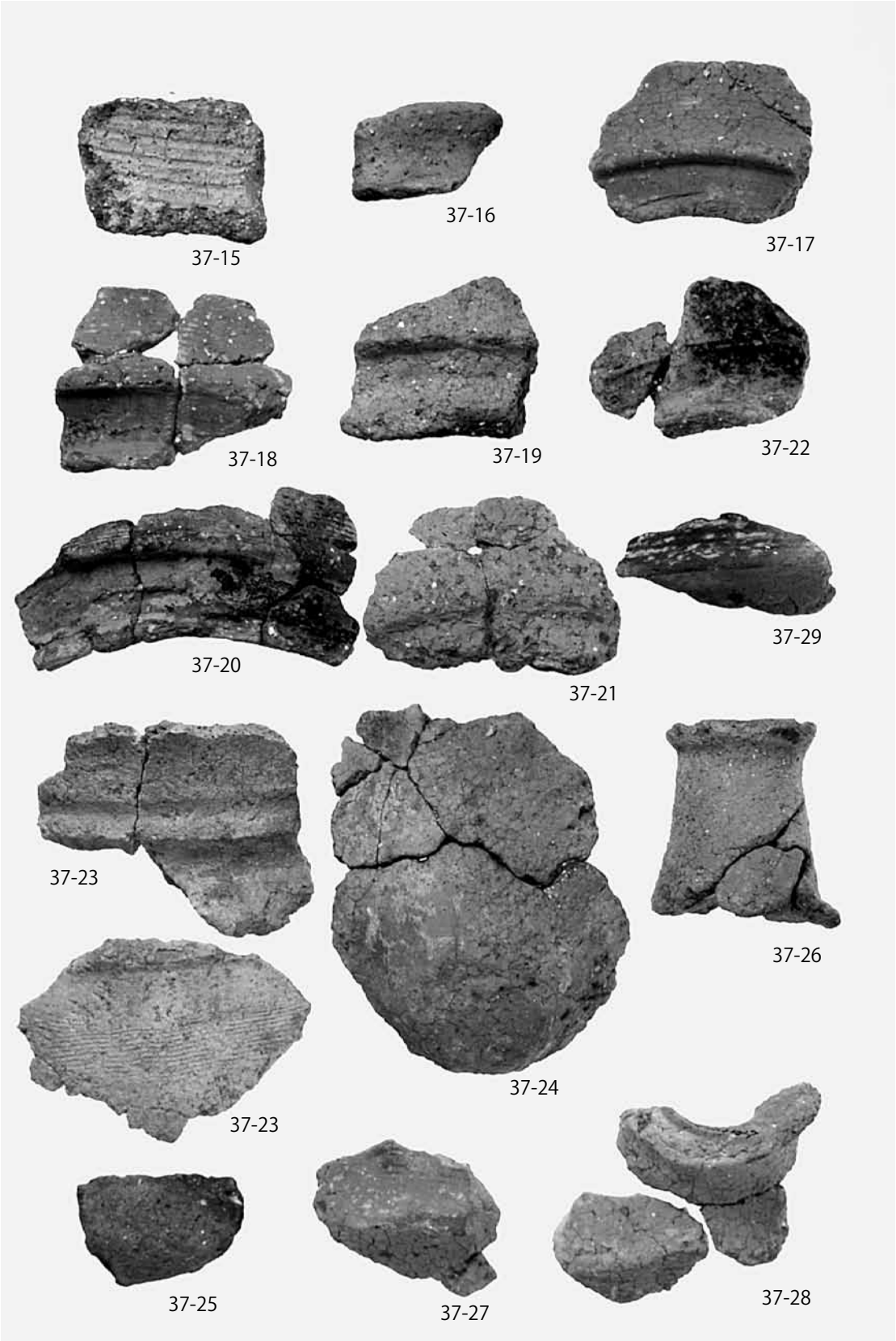




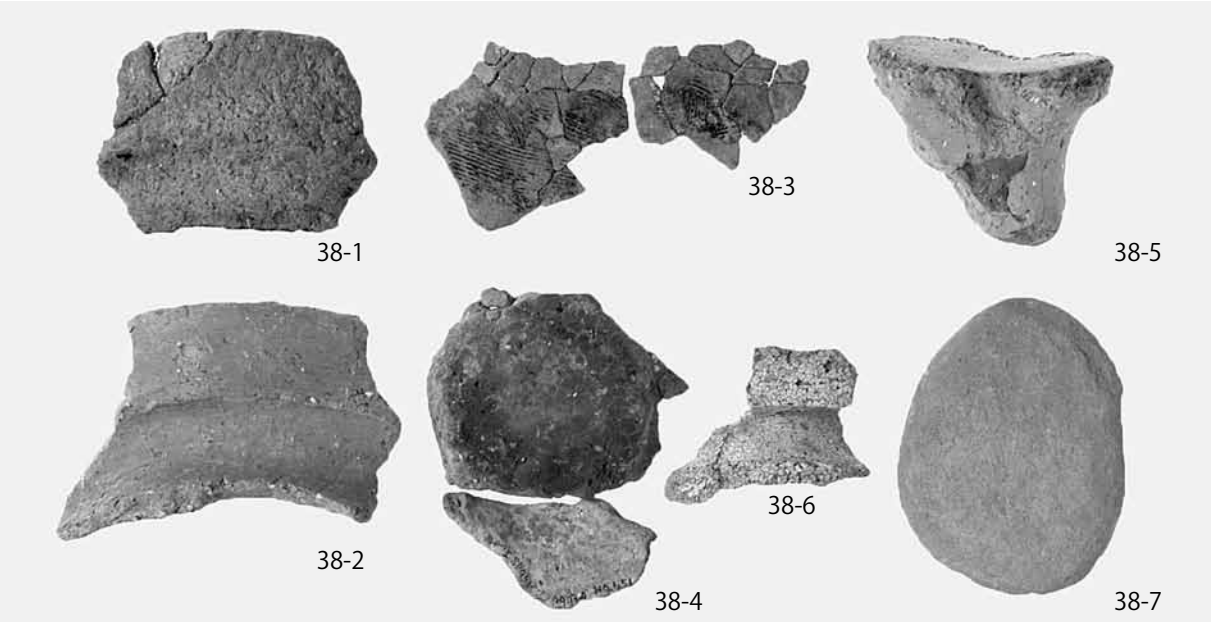


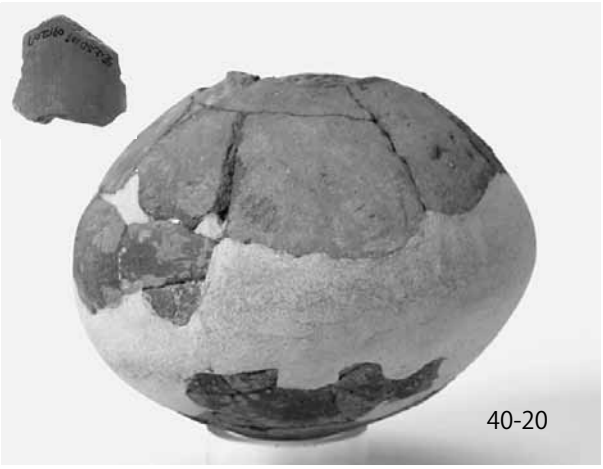


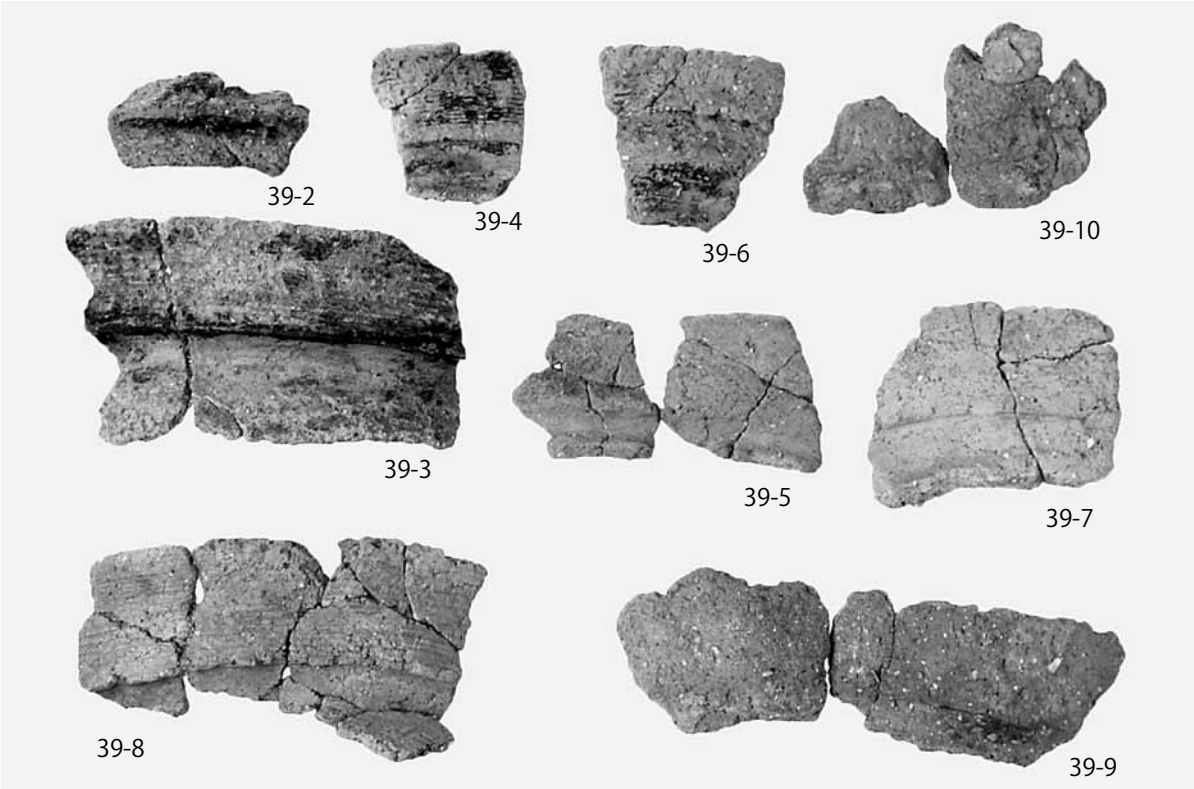
SI16 床面出土弥生土器・石器・軽石



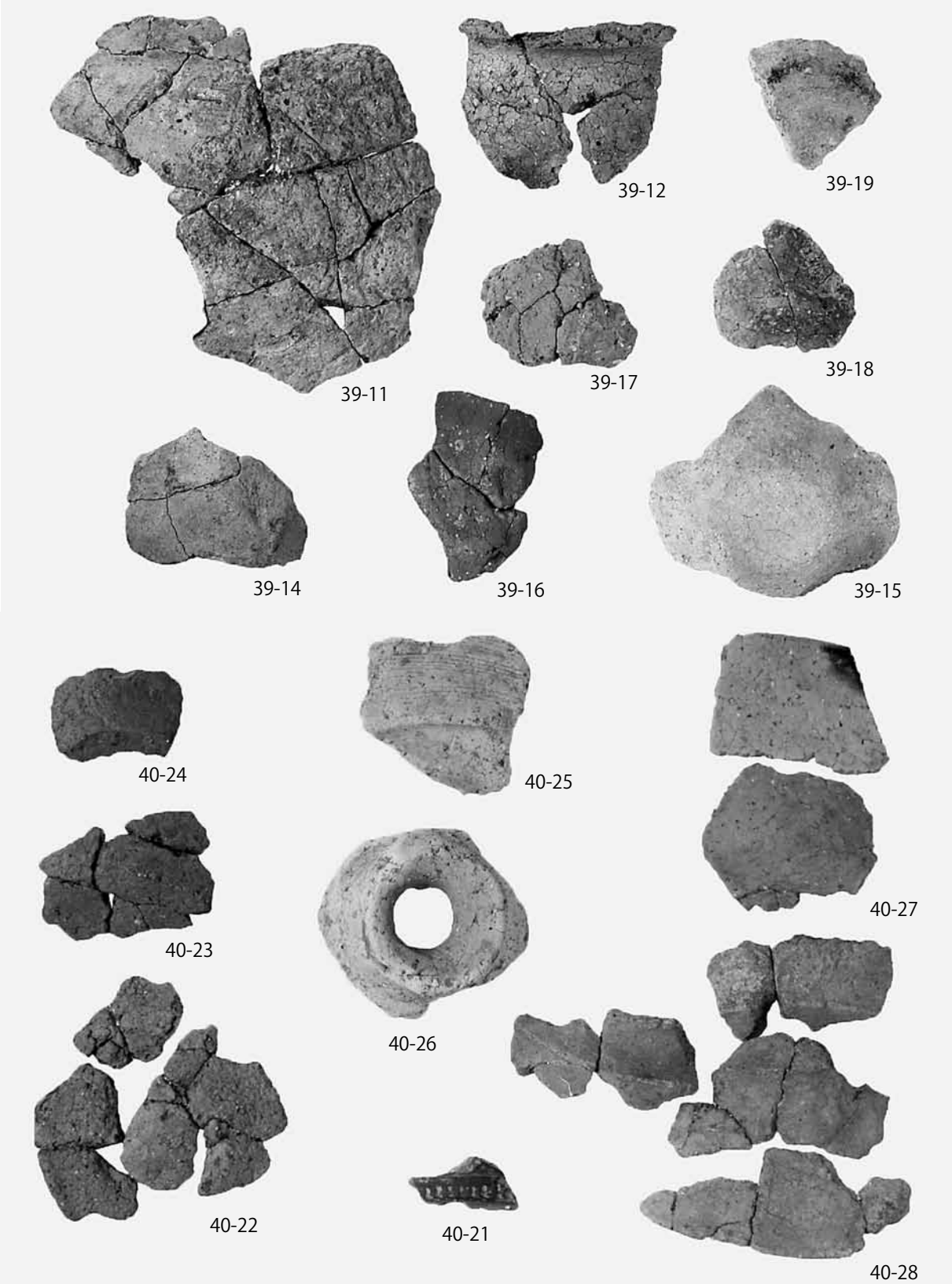
SI16 埋土出土弥生土器



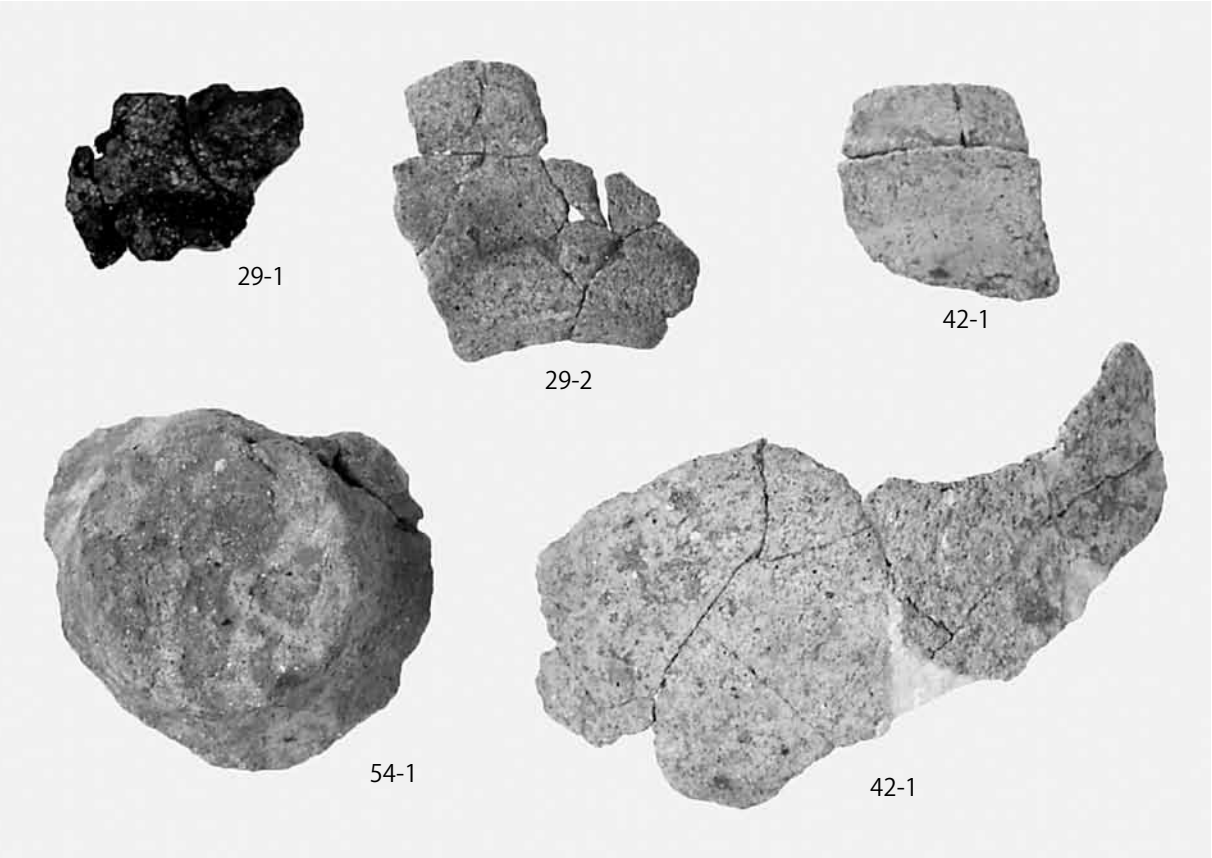




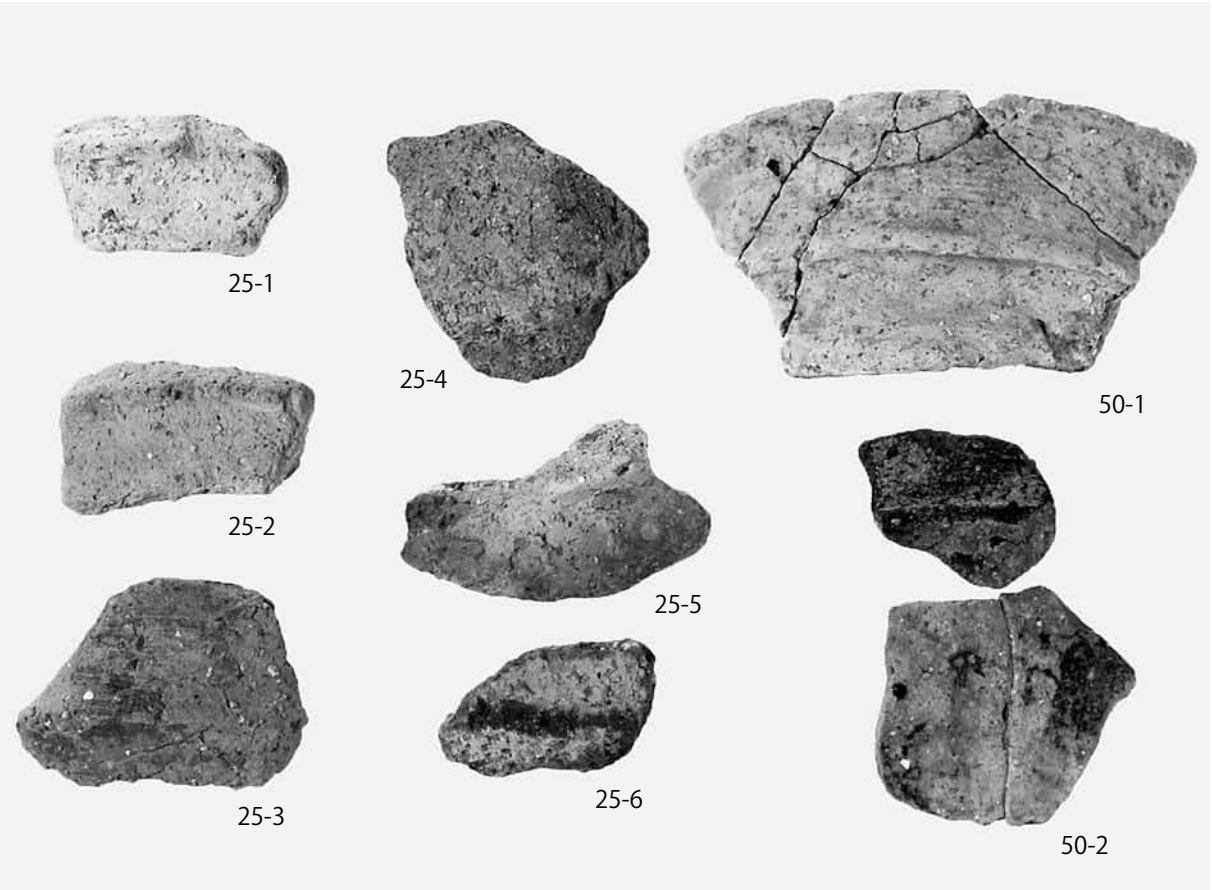
SD95・106・107 出土遺物



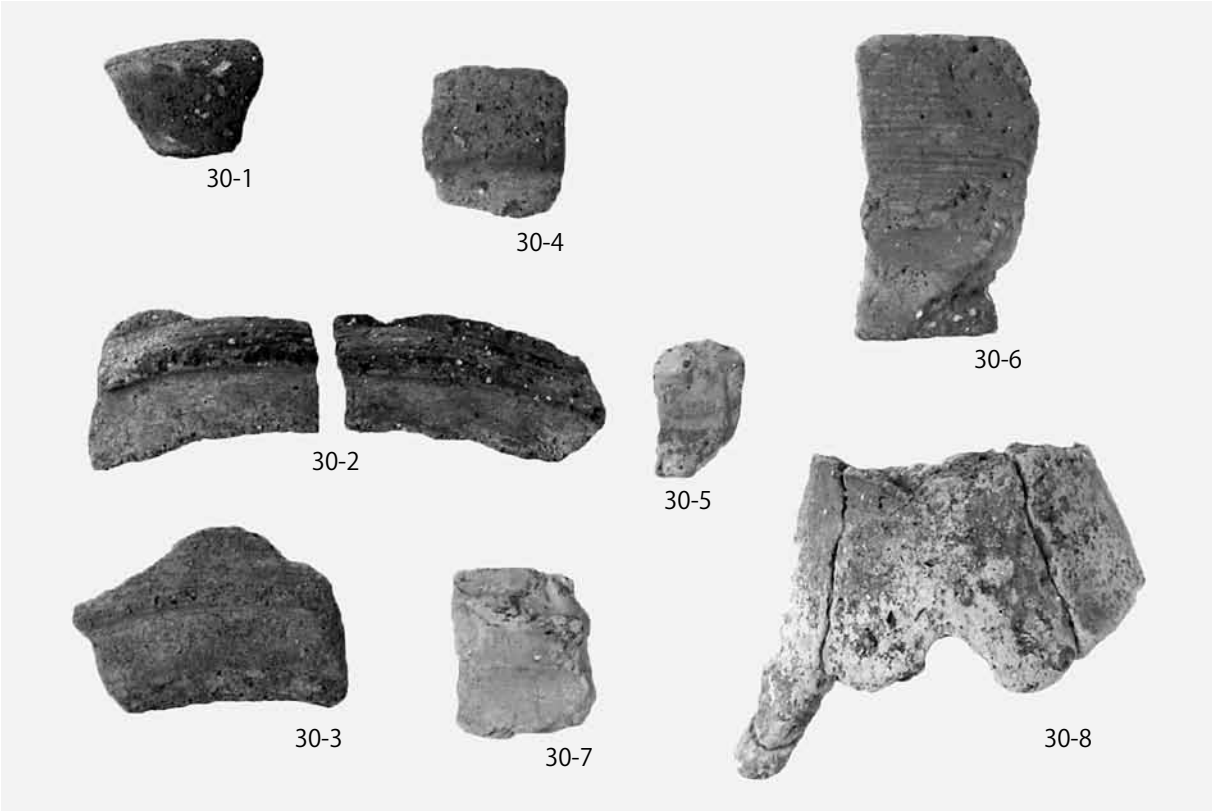
SD106・107 出土遺物



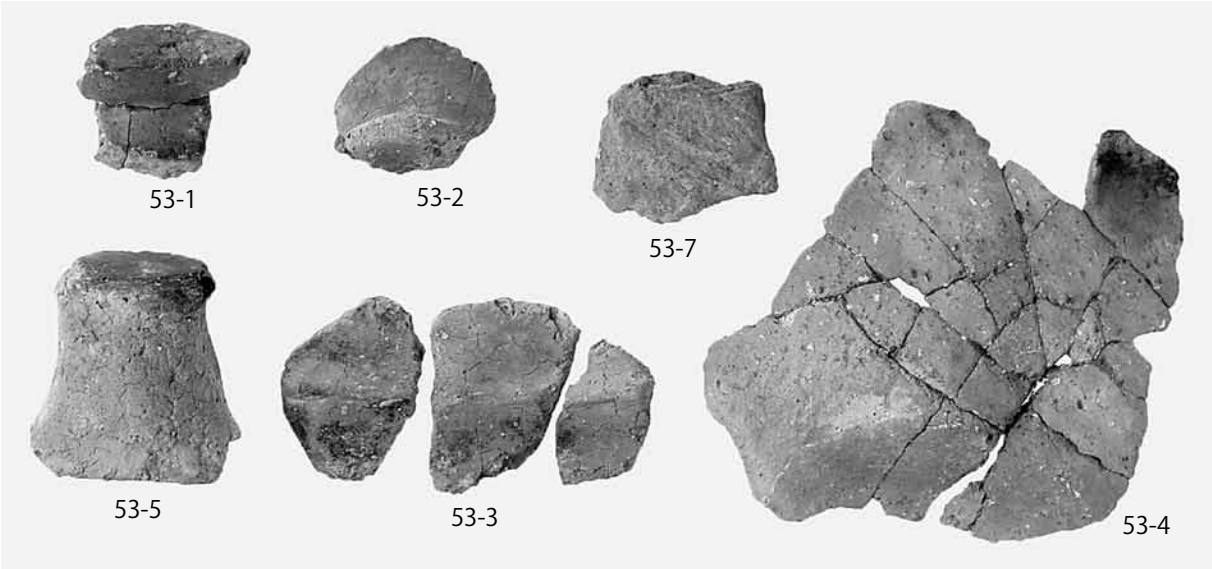
SI07・08、SD37、SR01 出土弥生土器



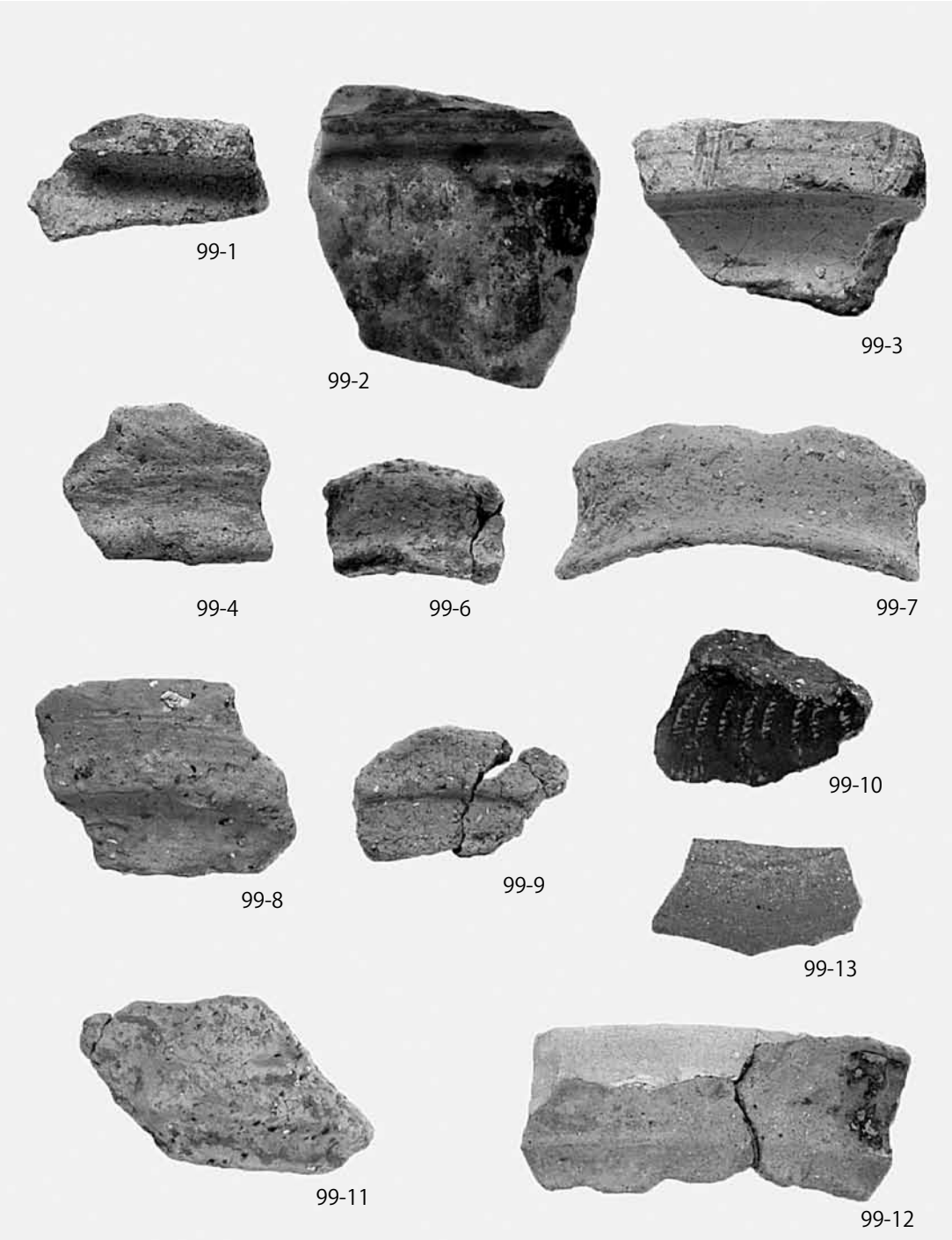
SI09、SD42、SB11 出土遺物



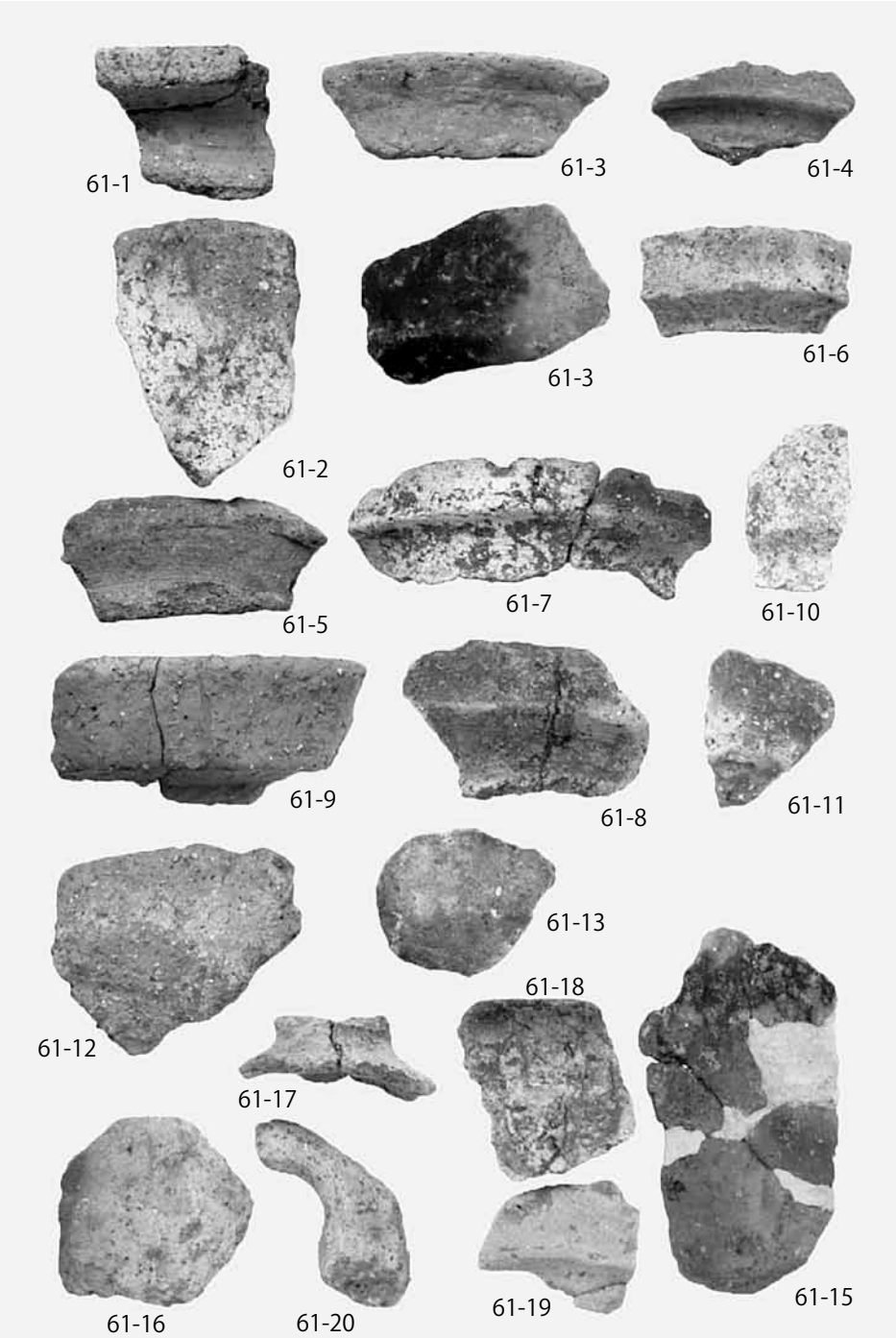
SI12、SD109 出土弥生土器



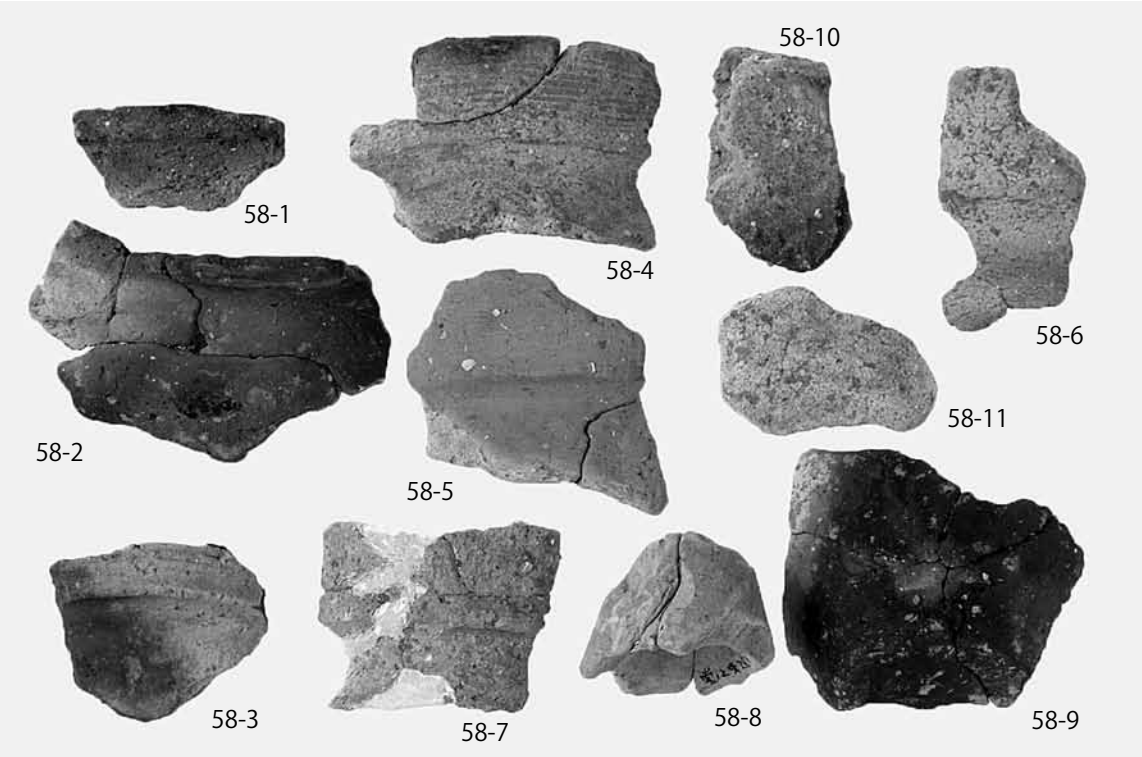
SK40 出土遺物

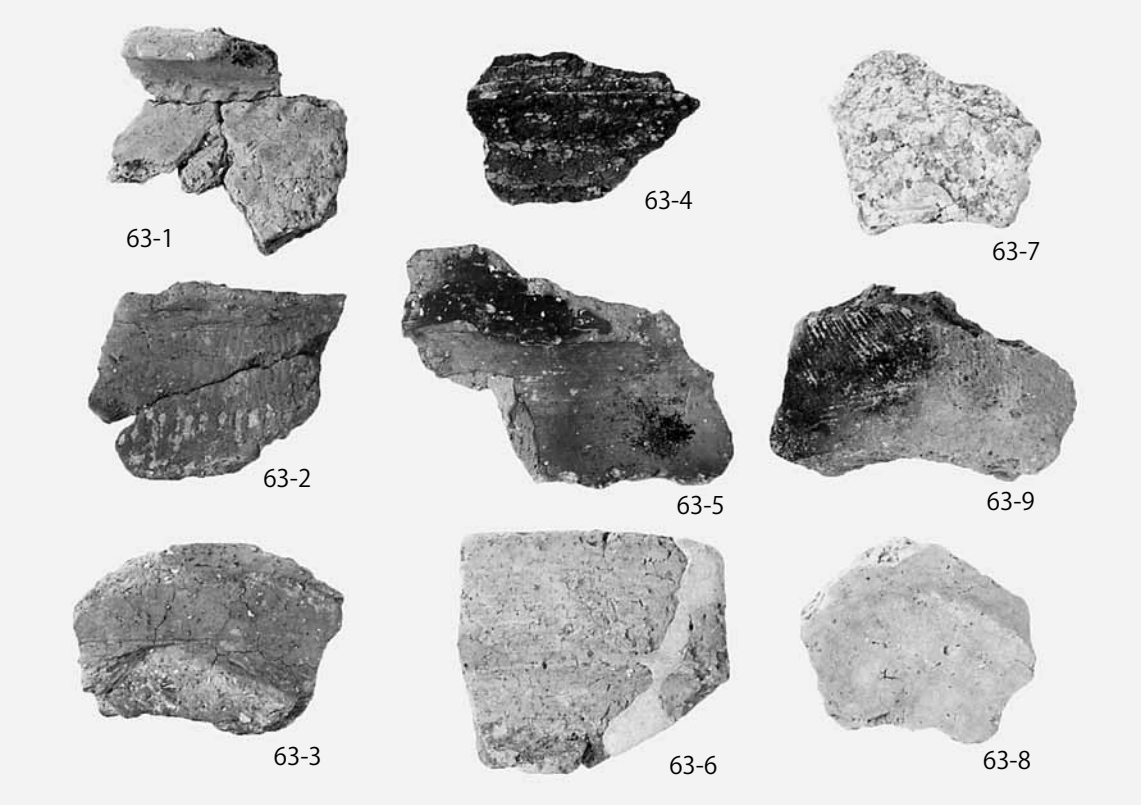


SX02・03 出土遺物



J6 グリッド出土弥生土器・石器





東区谷部、遺構外出土弥生土器・石器

45-8

45-7

45-8

45-9

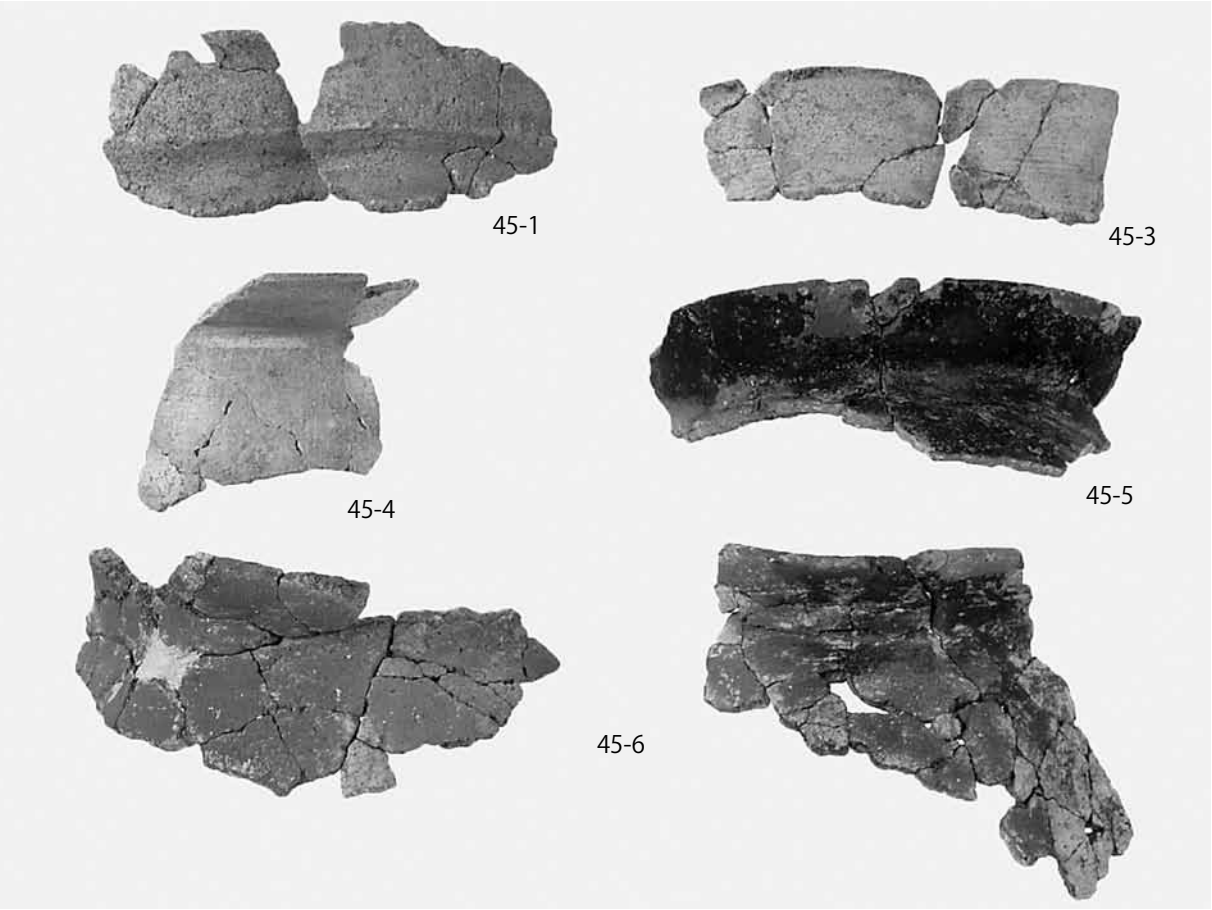
45-2

46-34

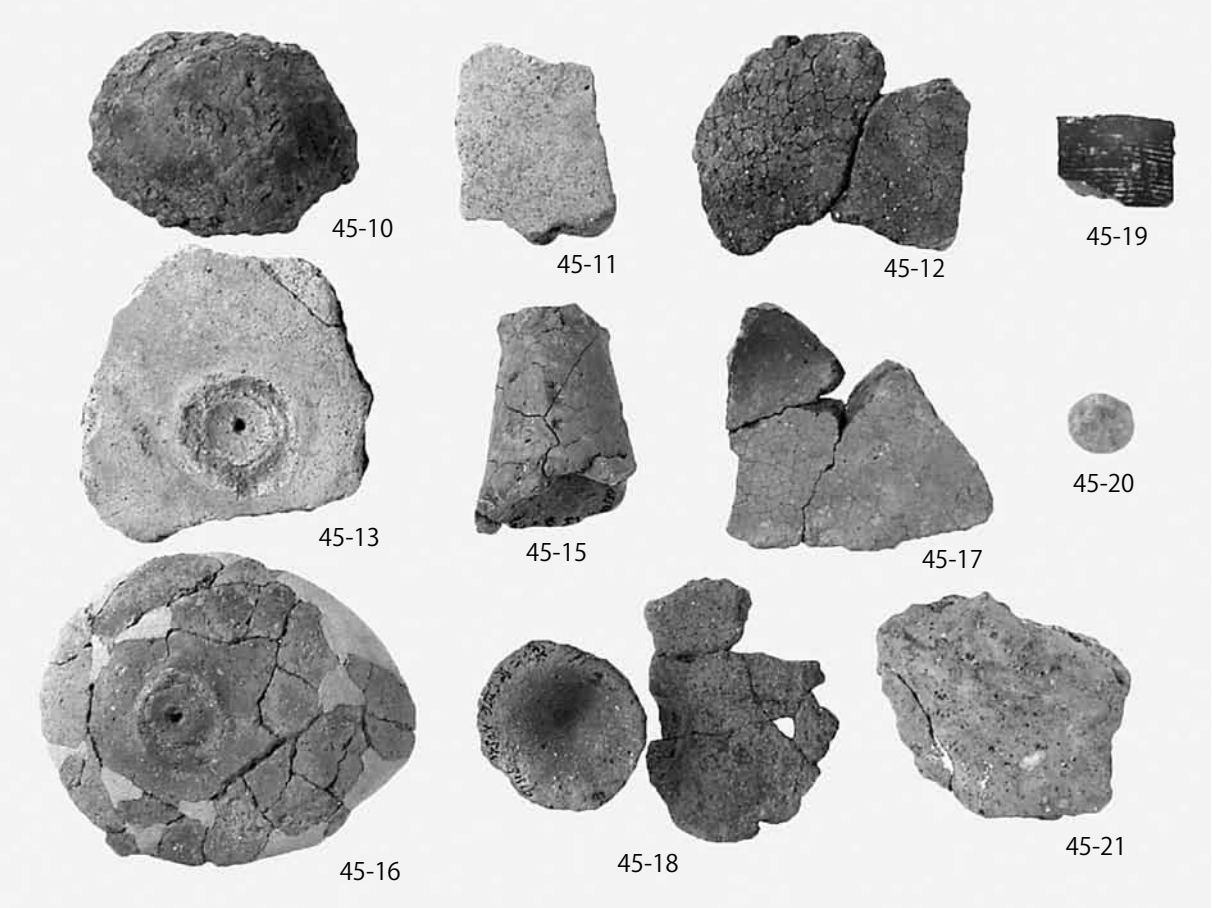
45-14

46-37

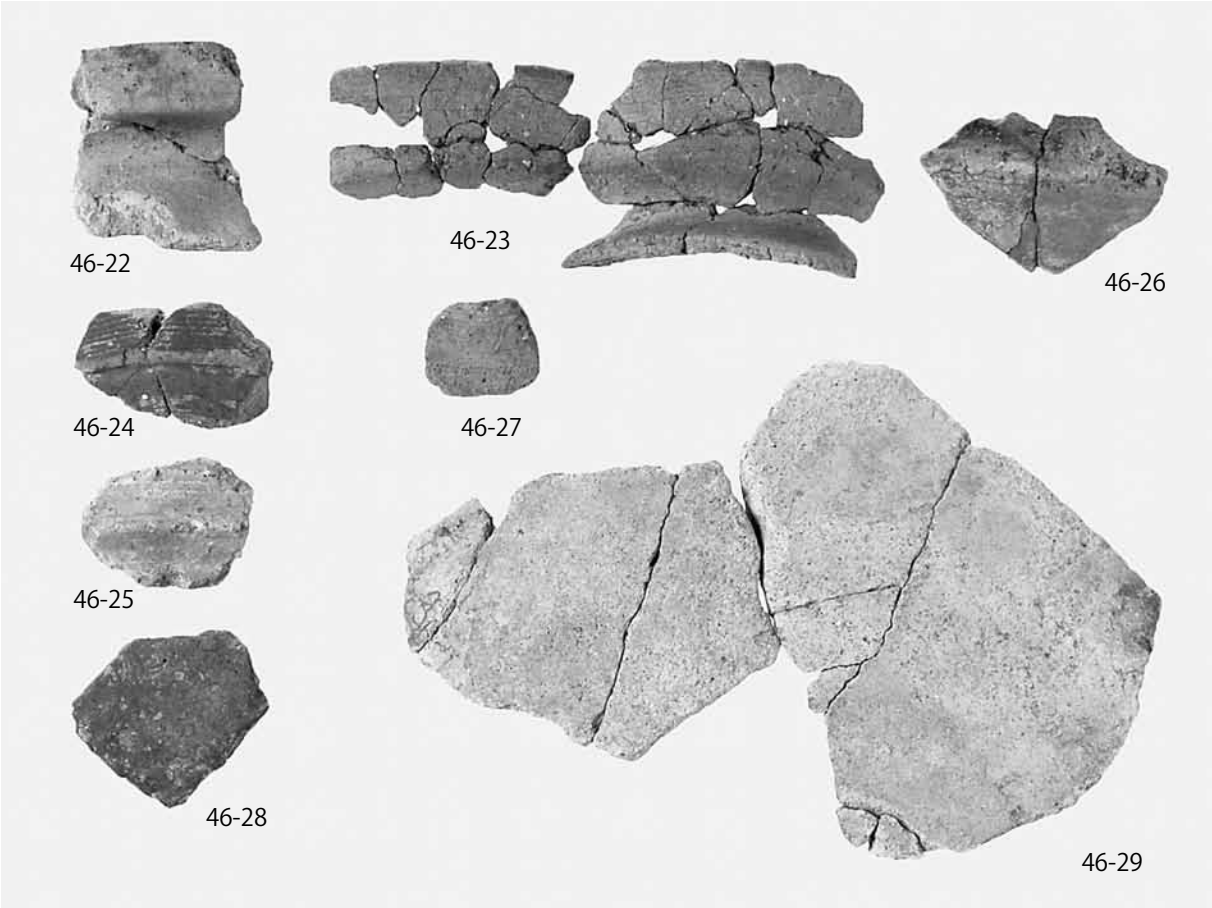
SI14 出土遺物



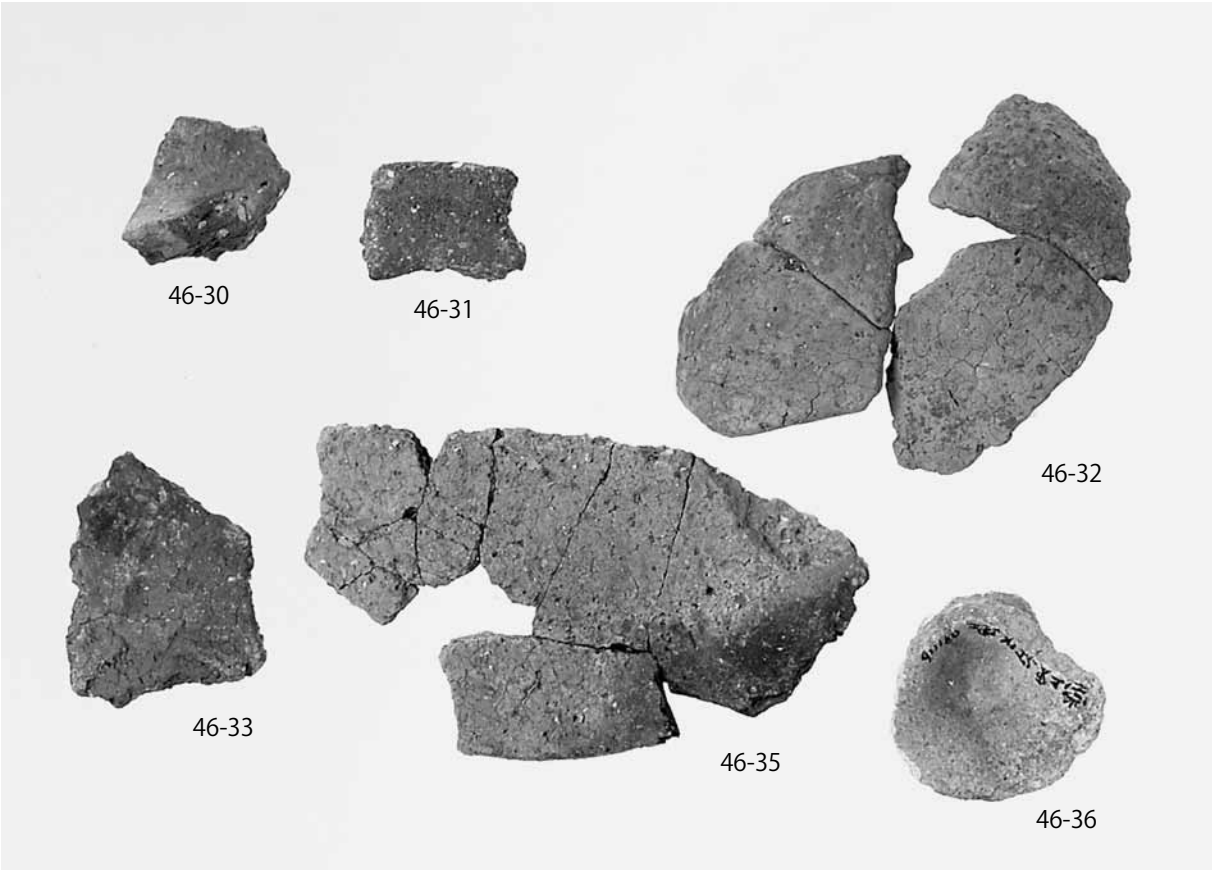
SI14 床面出土遺物（1）



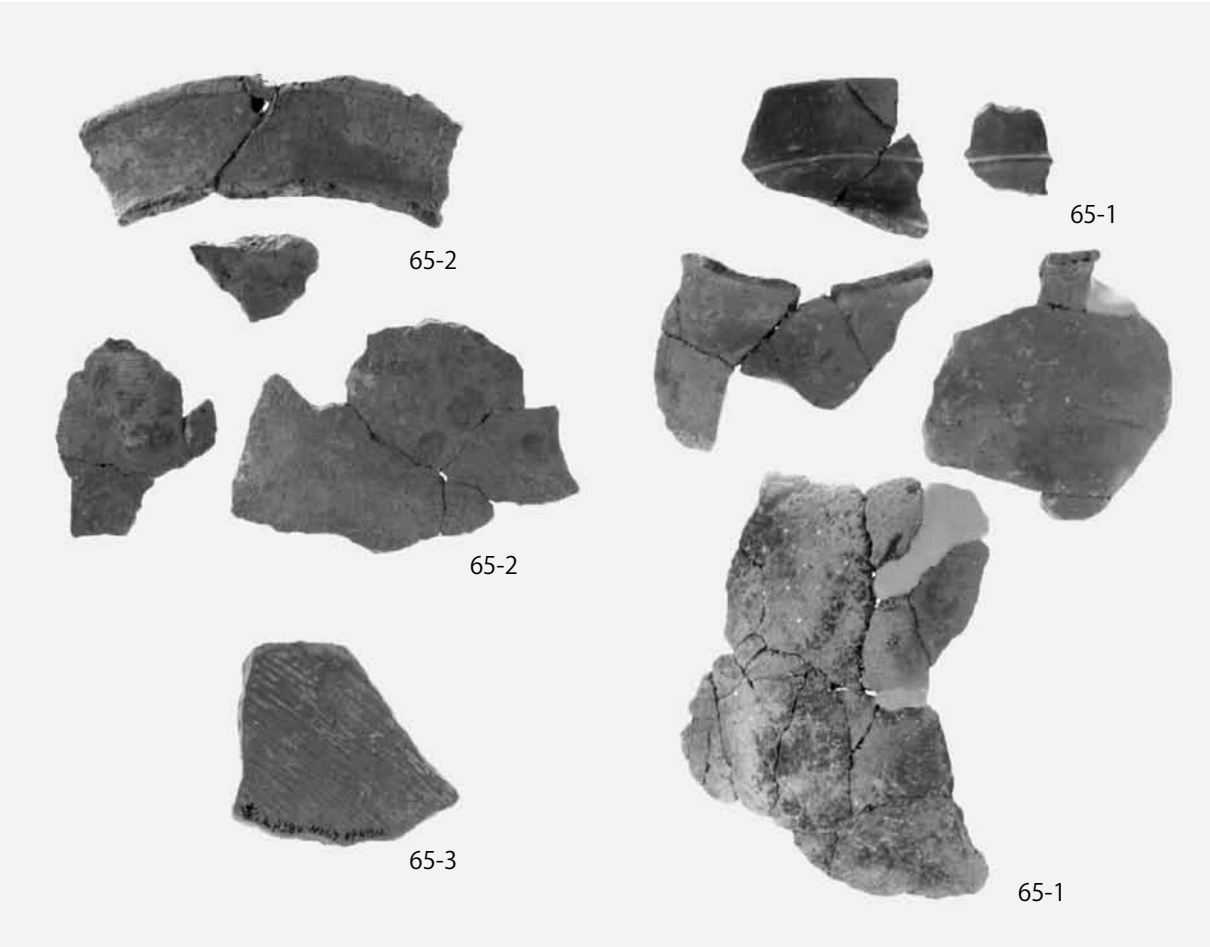
SI14 床面出土遺物（2）



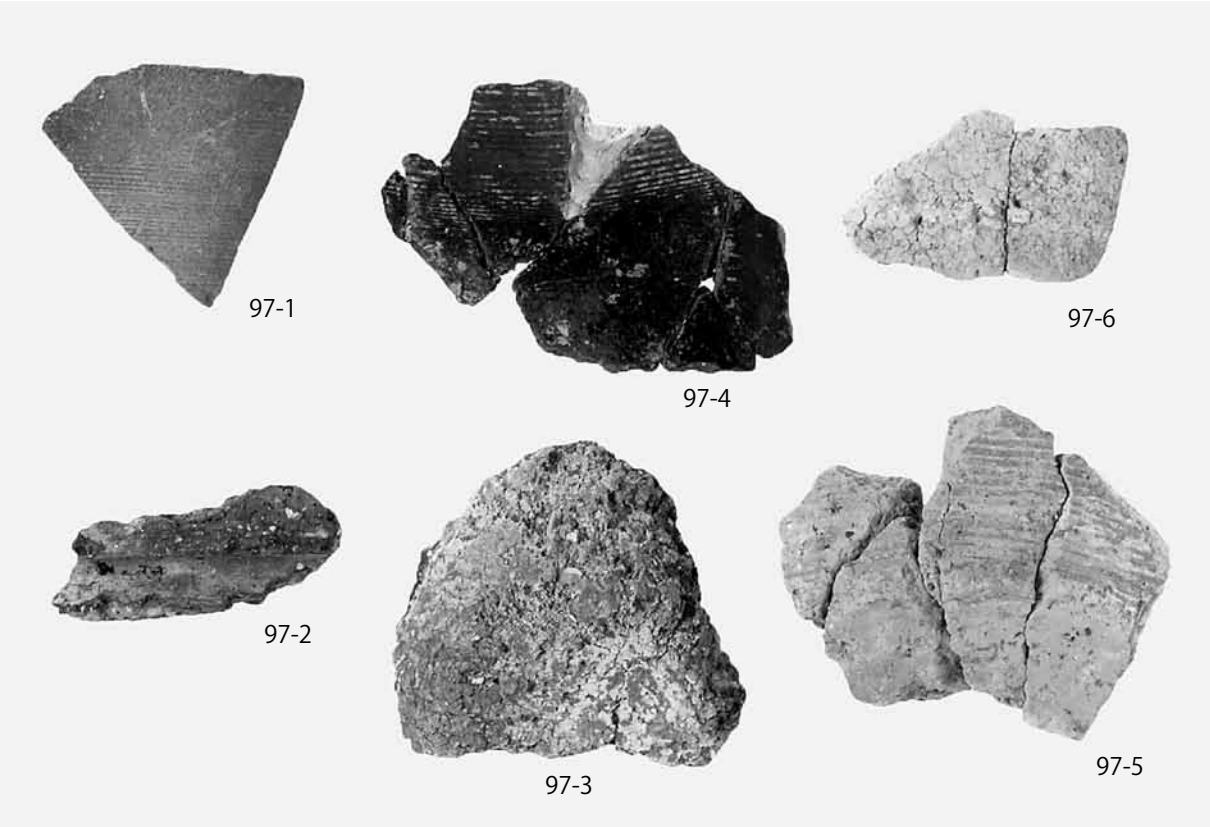
SI14 埋土出土遺物（1）



SI14 埋土出土遺物（2）



SB04 出土遺物



段状遺構 9・10 出土遺物

68-1

68-2

68-3

68-6

68-4

68-5

68-4

68-5

68-7

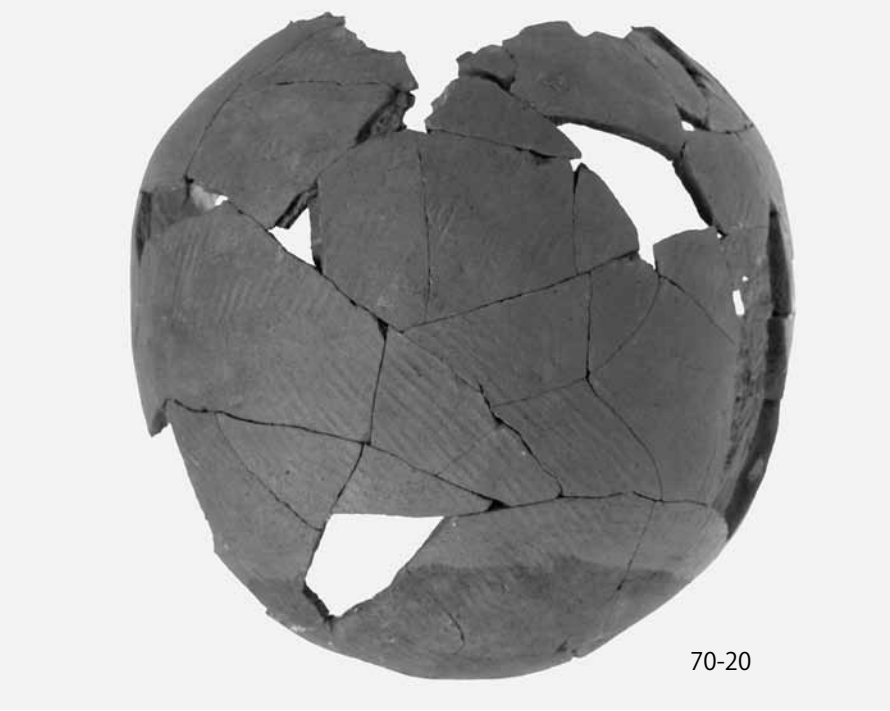
68-8

68-9

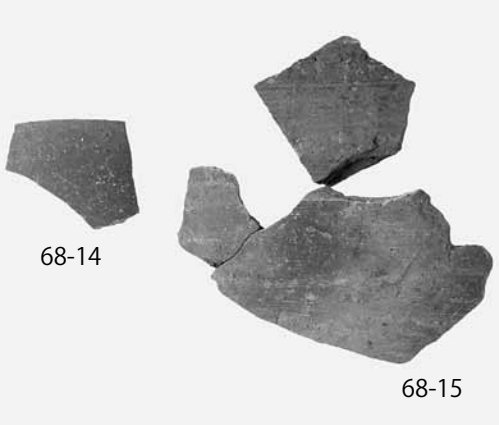
68-9

68-10

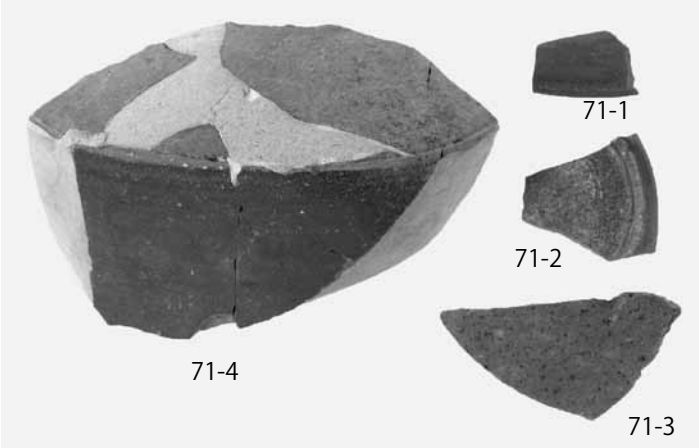
1 号墳出土須恵器



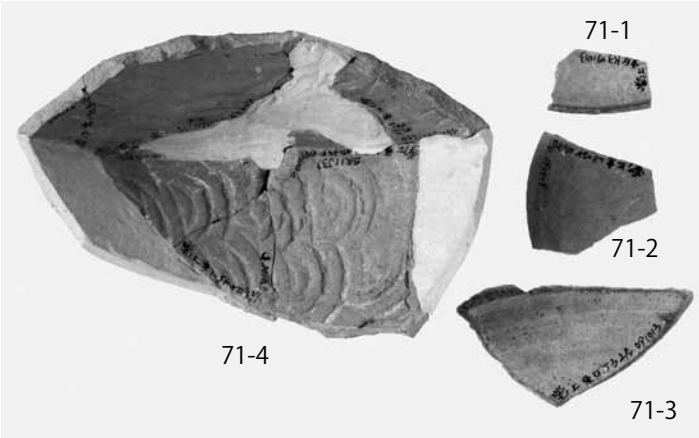
SR03 上層出土須恵器



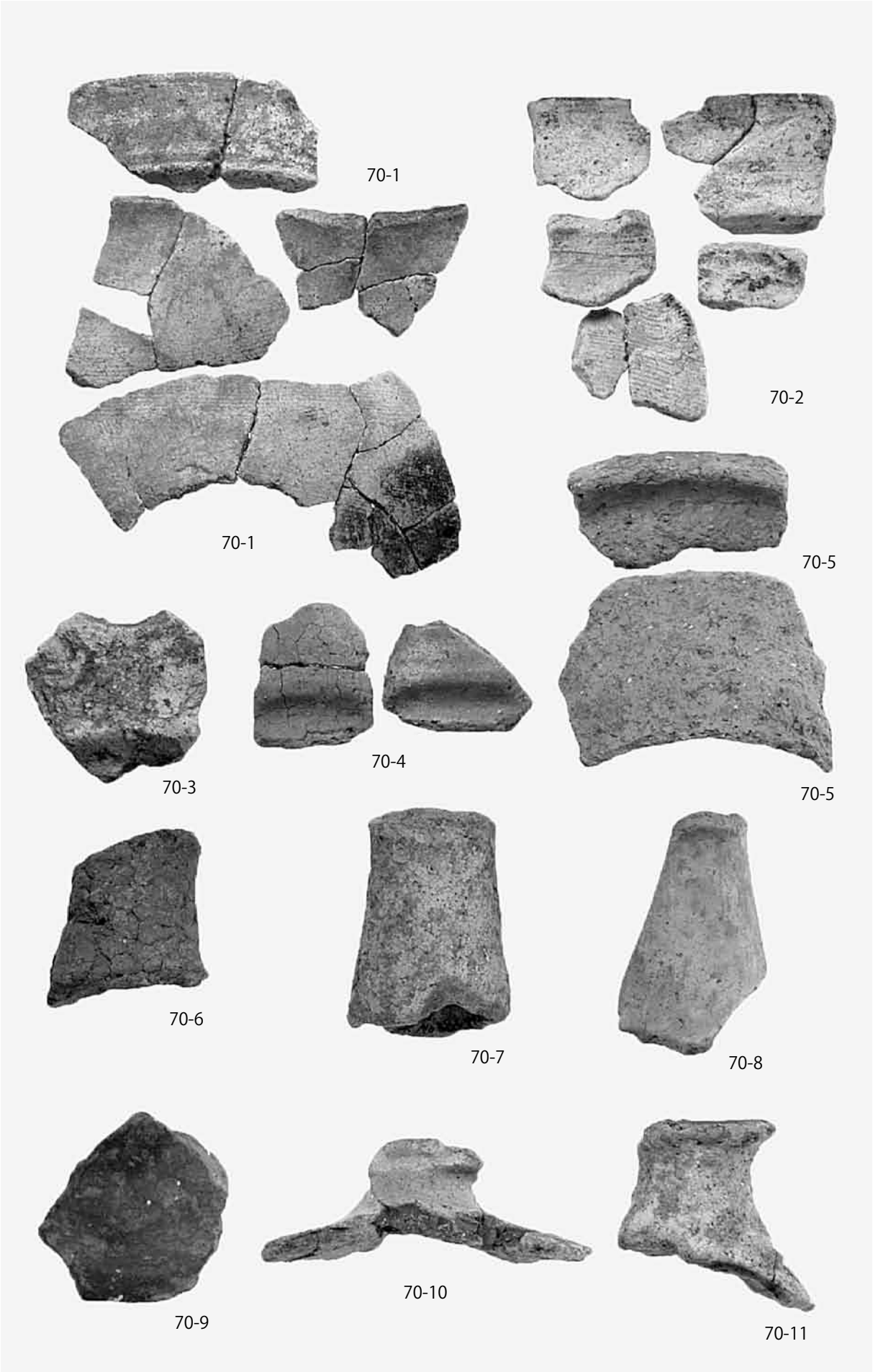
SD112 出土須恵器



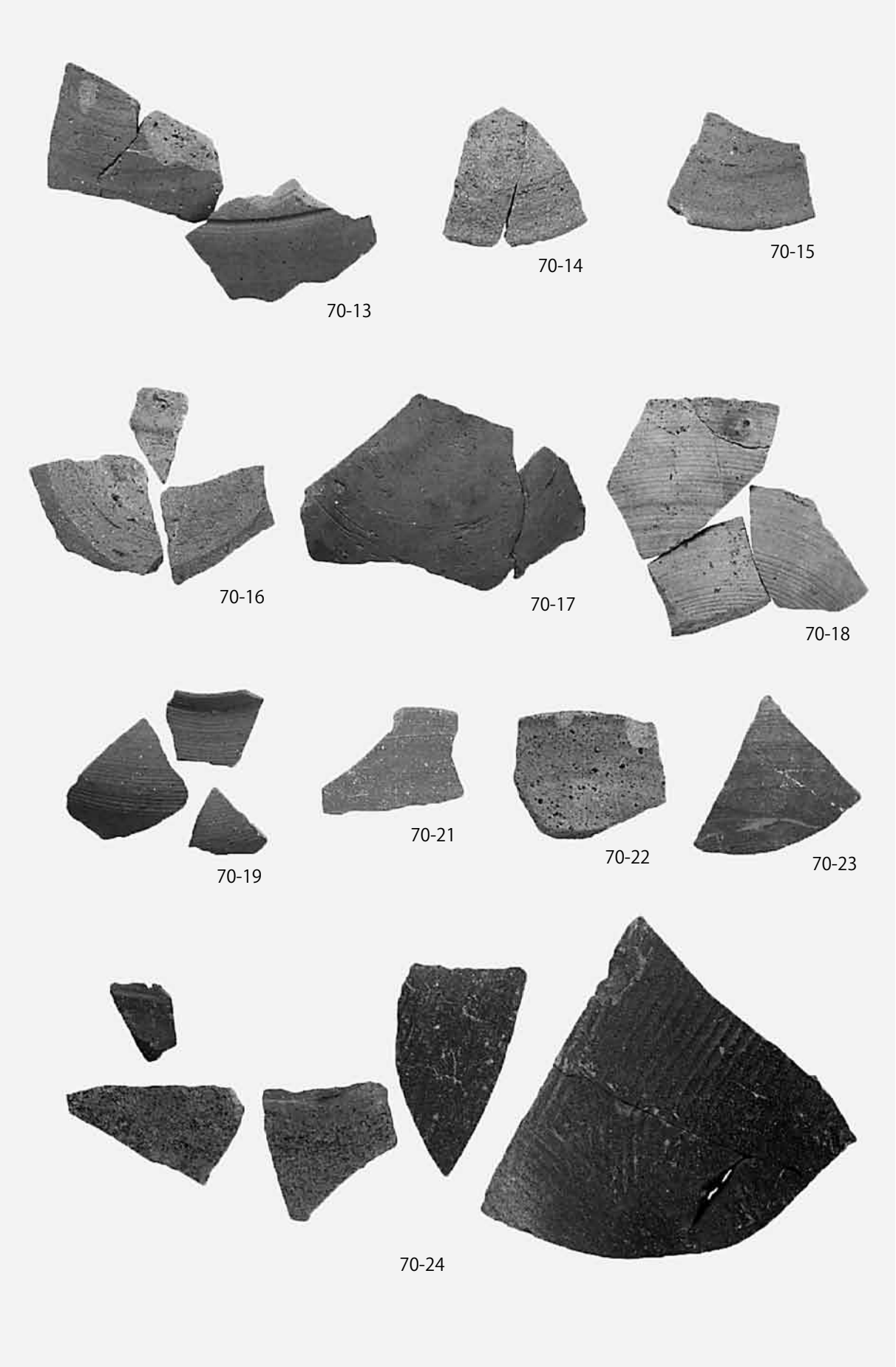
J6 グリッド出土土師器



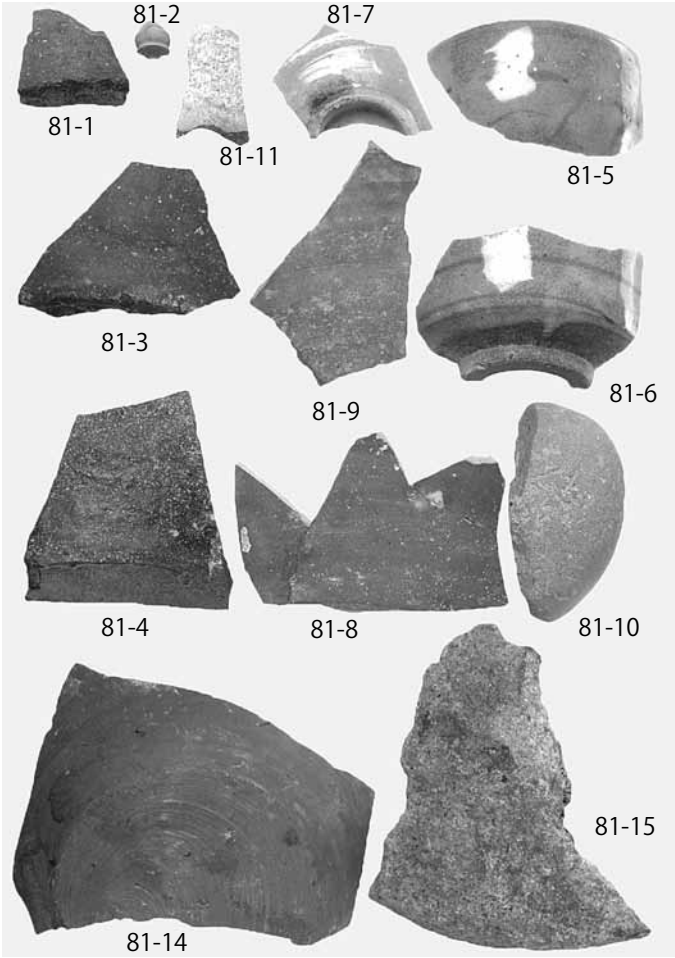
J3 グリッド出土須恵器

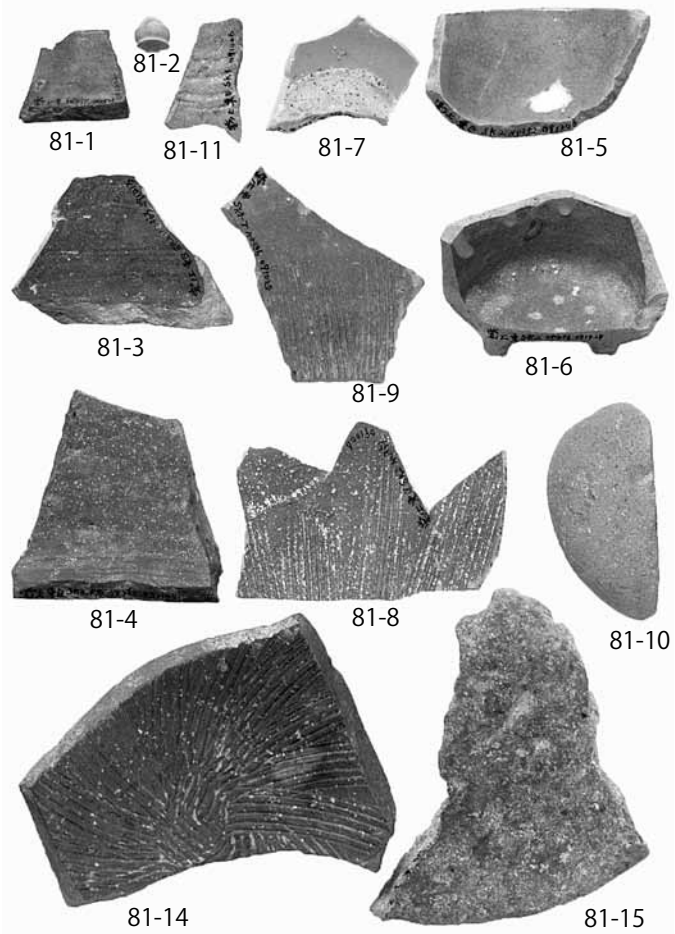


遺構外出土土師器



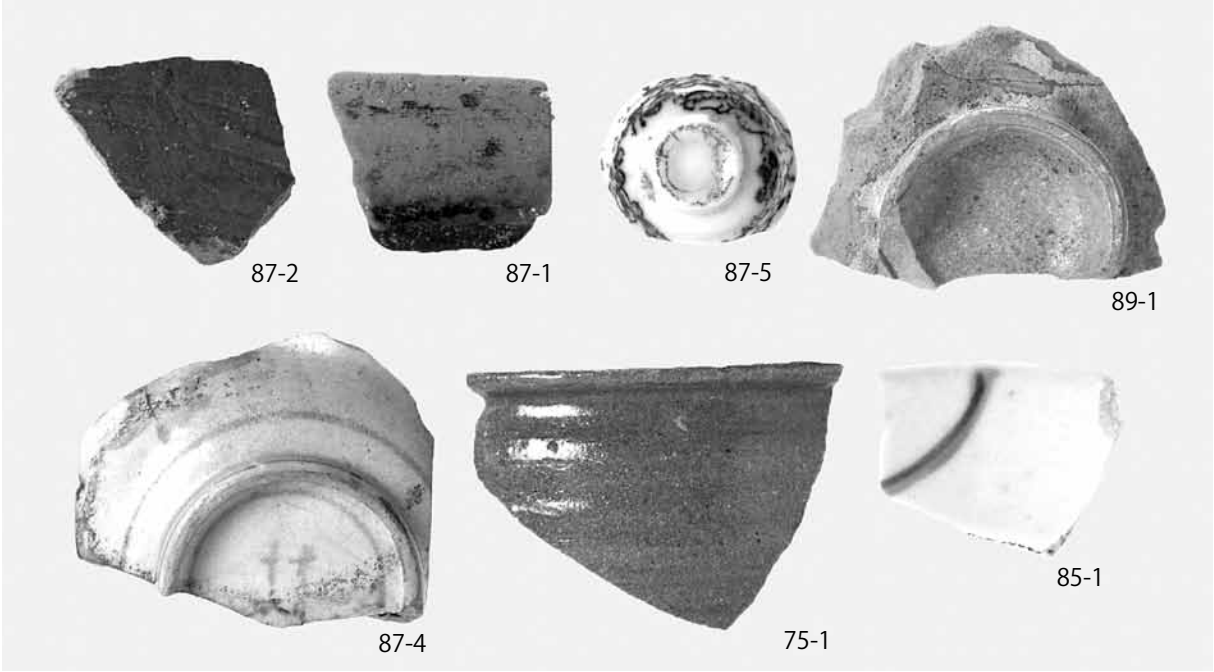
堂ノ上遺跡出土須恵器



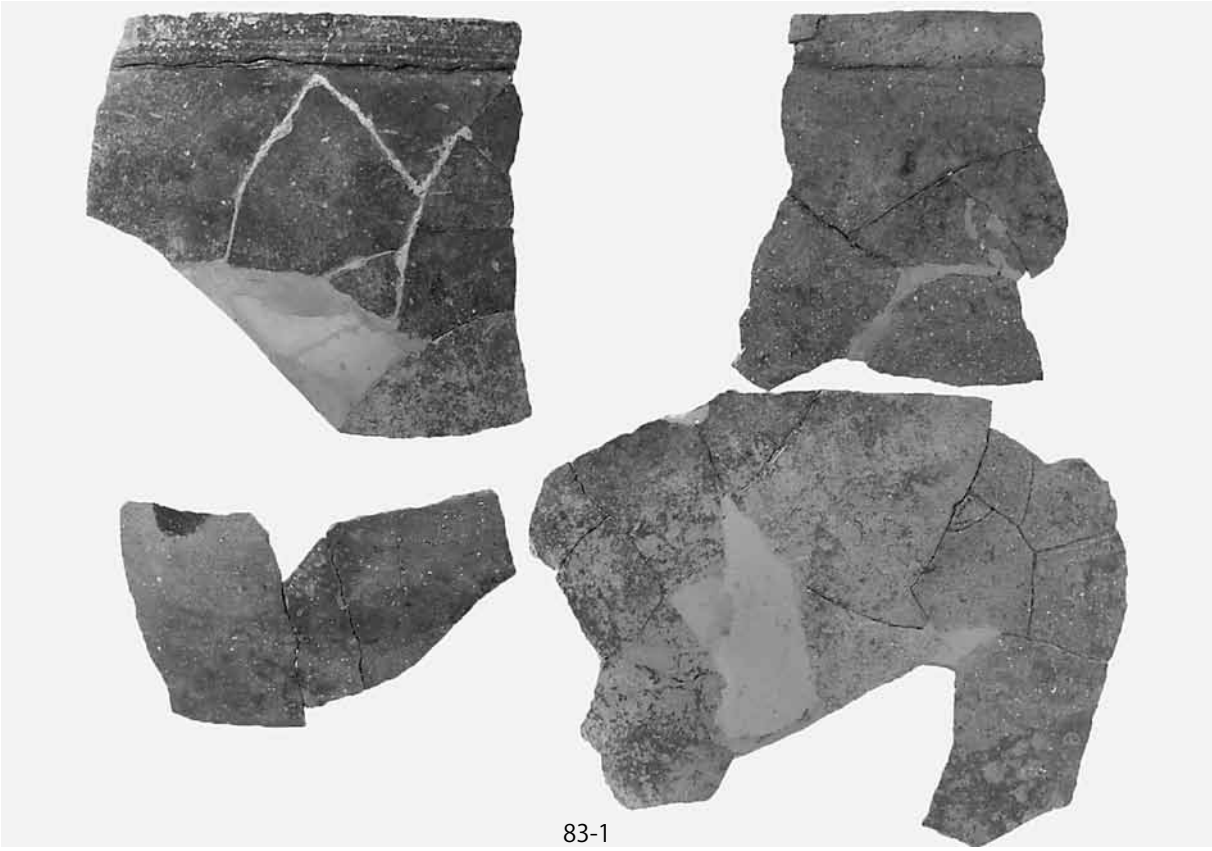


SK01・02・03・11 出土遺物

SK15 出土遺物



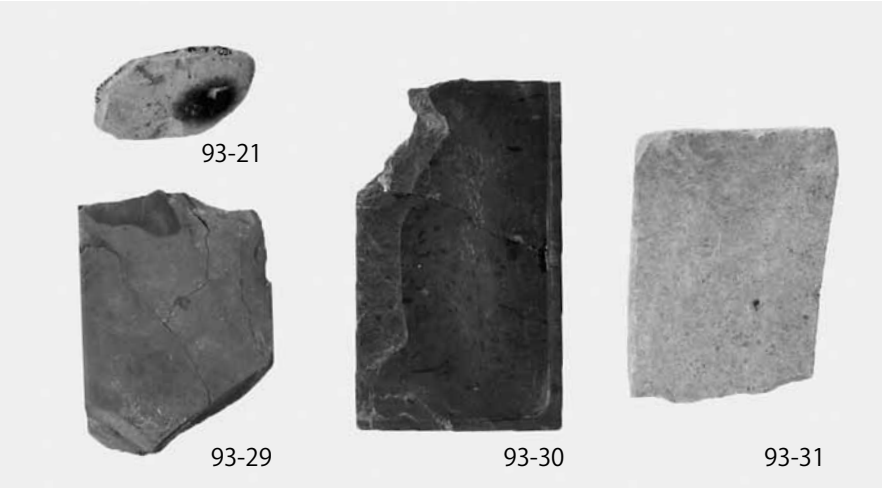
SB07、SK15、SD46・48・49・70、集石 1 出土遺物



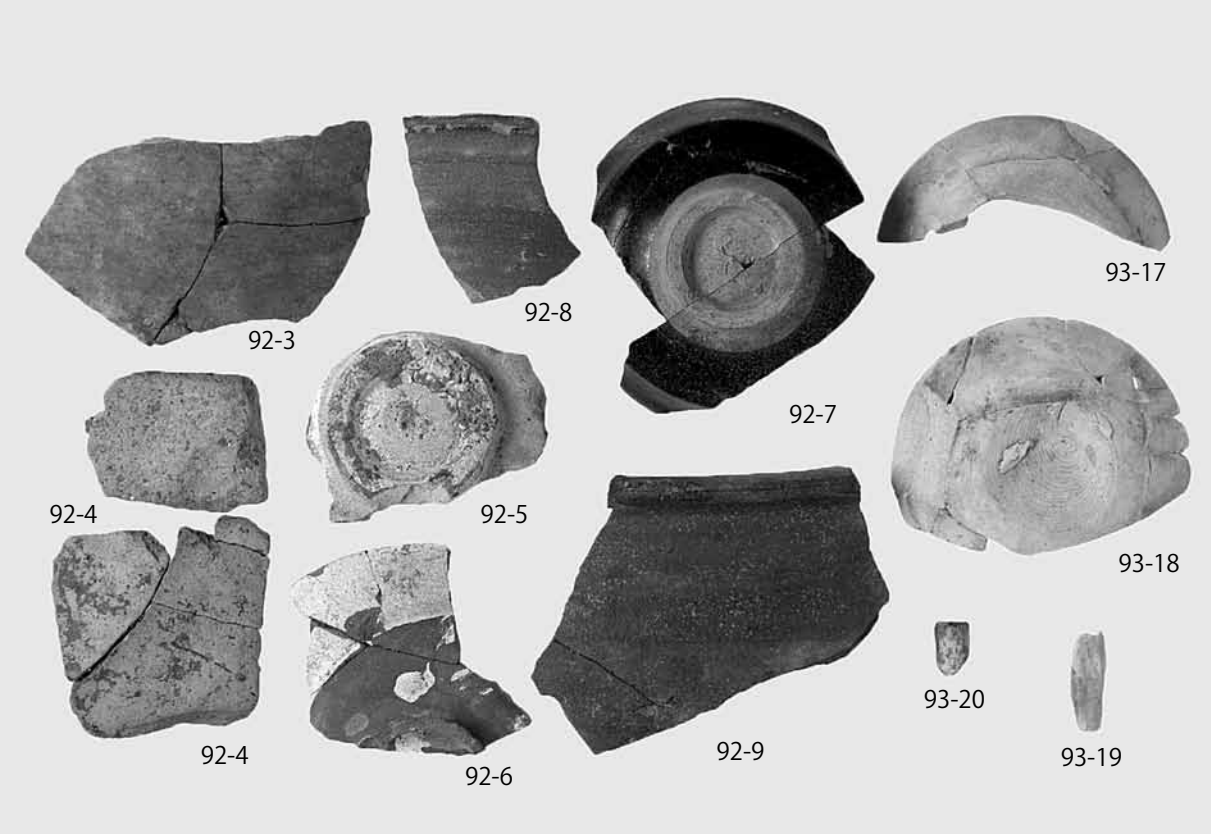
SK36 出土遺物

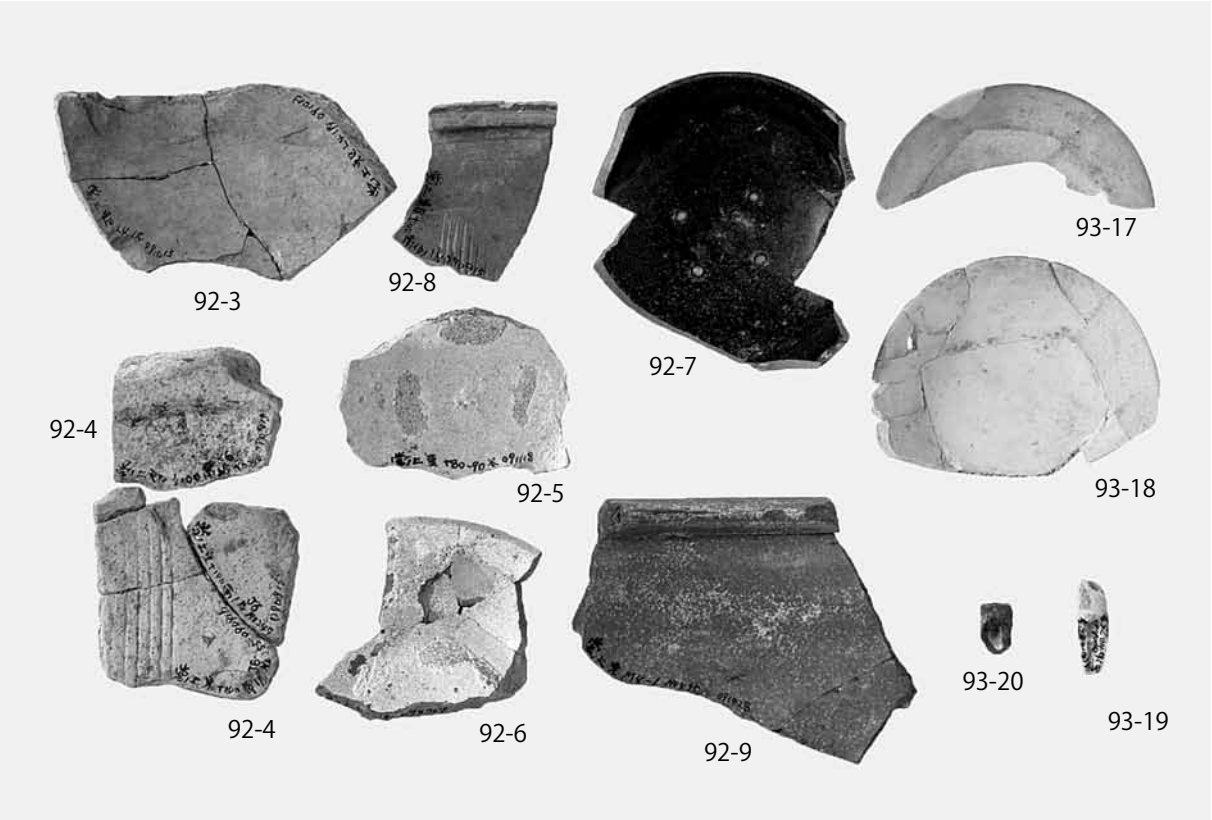
SD48 出土石器

P1044 出土陶器

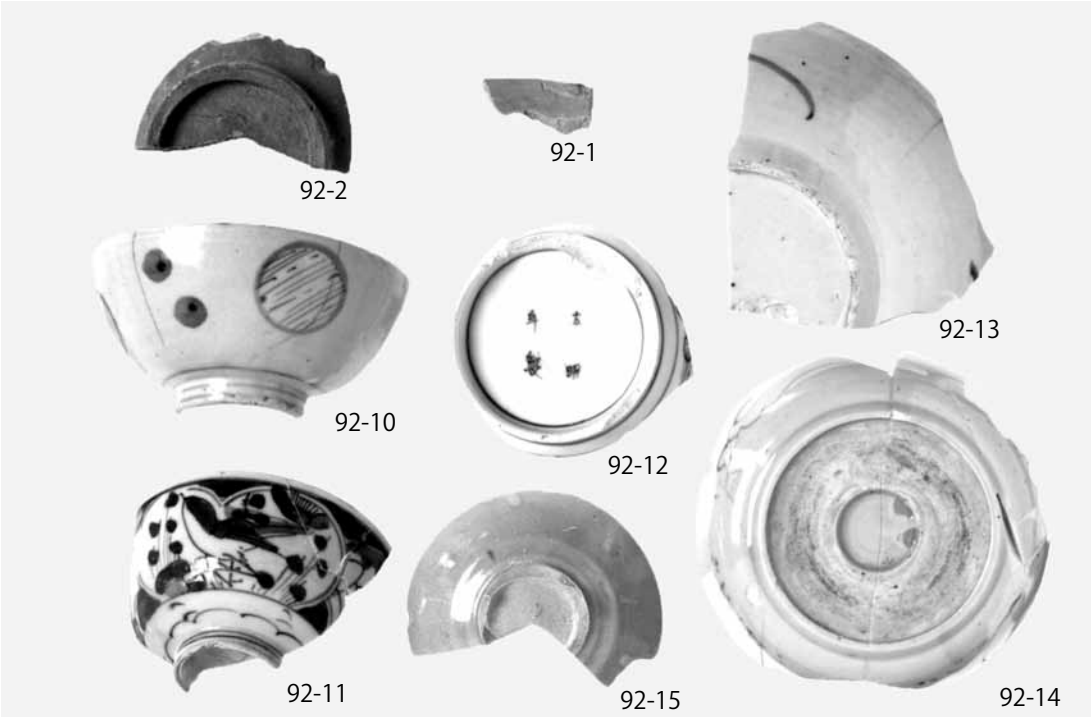


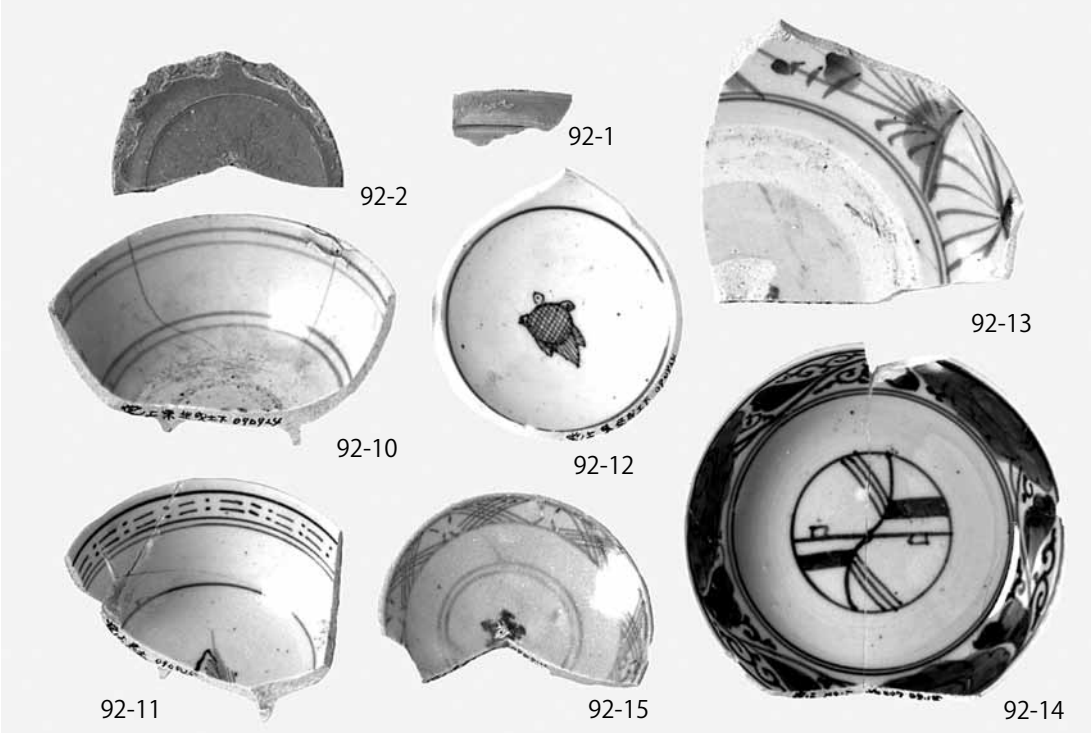
中世以降の硯・砥石


92-3
92-8
92-7
93-17
92-4
92-5
93-18
92-4
92-6
92-9
93-20
93-19


92-3
92-8
92-7
93-17
92-4
92-5
93-18
92-4
92-6
92-9
93-20
93-19

陶器・土器・瓦質土器

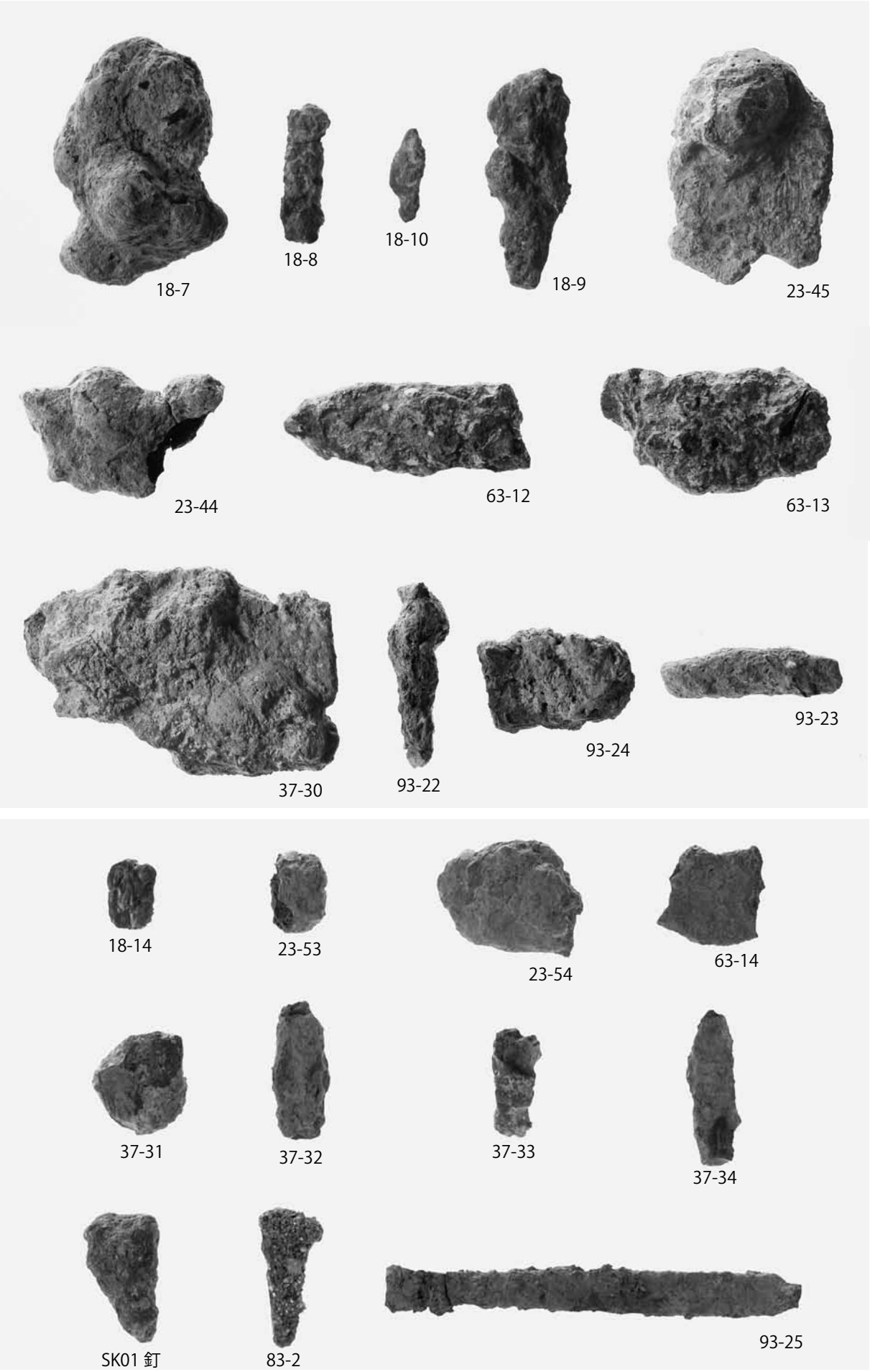

92-2
92-1
92-13
92-10
92-12
92-11
92-15
92-14


92-2
92-1
92-13
92-10
92-12
92-11
92-15
92-14

92-16

93-27
93-26
93-28

磁器・古銭


18-7
18-8
18-10
18-9
23-45
23-44
63-12
63-13
37-30
93-22
93-24
93-23
18-14
23-53
23-54
63-14
37-31
37-32
37-33
37-34
SK01 釘
83-2
93-25

堂ノ上遺跡出土鉄器

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ドウノウエイセキ
書 名	堂ノ上遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	7
編 集 者 名	丹羽野 裕、 東森 晋、 柴崎晶子、 渡辺正巳
編 集 機 関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒690－0131 島根県松江市打出町33番地 ℡0852－36－8608(代) E-mail maibun@pref.shimane.jp
発 行 年 月 日	西暦2011年3月18日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ドウノウエ 堂ノ上	シマネケンマスダシ 島根県益田市 クシロチョウ 久城町	32204	Q270	34° 41′ 40″	131° 50′ 45″	20090623 ～ 20101218	4,100㎡	道路建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂ノ上	集落	弥生時代 古墳時代 中世 ～ 近世	竪穴住居跡 11 掘立柱建物跡 6 竪穴住居跡 1 古墳 1 掘立柱建物跡 5 墓 40以上	弥生土器、金属器 石器 土師器、ガラス玉 須恵器、金属器 瓦質土器、輸入陶磁器 国産陶磁器、金属器 古銭	弥生時代後期の集落遺跡 竪穴住居のうち6棟が焼失住居

要約	弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての集落跡で、約300年間にわたる様々な形態の建物跡や遺物が見つかった。 また、1号墳は、横穴式石室を持つ7世紀前半に築造された古墳である。

一般国道9号(益田道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書7

島根県益田市久城町

堂ノ上遺跡

2011年3月　発行
発行　島根県教育委員会
編集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690－0131　島根県松江市打出町33
TEL0852－36－8608
http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/
印刷　有限会社　黒潮社